

日本共産党(革命左派) 基本文献集



人民独裁に向けて

編・日本共産党(革命左派) 神奈川県常任編集委員会

解 放 の 旗

昭和44年12月30日

- マルクス・レーニン主義
毛沢東思想真才ノ
- ソ連現代修正主義粉砕ノ
- 毛沢東思想で武装した革命党を再建しようノ

解放の旗

- 反米愛国統一戦線を結成しようノ
- アメリカ帝国主義・売国日本独占資本打倒ノ
- 宮本現代修正主義粉砕ノ

日本共産党(革命左派) 神奈川県常任委員会

佐藤訪米阻止斗争
十一月二十六、二十七
佐藤訪米阻止斗争
A、米日反動の「異常な
準備体制」
米日反動は、十一月佐藤訪
米を米日反動の政治的威信を
かけた日本人民への挑戦とし
て並々ならぬ決意で進行し
うとしていたし、七〇年安保
位置延長の重大な突破口とし
て位置づけていた。
米日反動にとって、七〇年
代を、日本人民を軍国主義文
脈の前に屈服させ、日本人民
をかりたてる侵略戦争の時代
とするためには、「過激派」
といわれる労働者、学生に示
される広範な日本人民の反安
保、佐藤訪米阻止の意志を統
りんしつくりすことなしには、
考えられないからである。
それは米日反動が、四・二
八沖縄選挙斗争に対する破防
法の適用、八月の二十回にも
及ぶ強行採決という常軌を逸
した国会での大学治安法強行
採決に始まり、十月以降は「
安保」非常体制をとって弾圧
体制を恒常化したこと、端
に示されていく。
十一月十日以後、羽田空港
周辺では機動隊による不当検
問が行なわれ、空港職員、関
保者には通行証を発行し、無
符者には「ハンドバッグの中
まで検査した。主要幹線、道
路において、通行人、トラ
ック等、不当検問が、厚顔
にも当然であるかのように行
なわれ、広範な人びとの激し
い怒りを呼び起こした。機動
隊はこうした当然の抗議を
一切無視し、暴力的に「文句ある
のか」と暴力的威圧を加える
あり様であった。
米日反動は、全警勢力を一
月佐藤訪米にむけた「過激
派」青年、学生狩りに動員し
、佐藤訪米前の五日間は、首都
二万五千、全国七万の警察官
を、連日わたって動員した。
このため、市民からは「警官
不在の派出所」について苦情
や威嚇令下の様である」と驚く

通帳があらってから一時間近く
も放置されるという事態まで
引き起こされ、警察当局は「
混雑、暴力団は、二の次」で
「佐藤訪米後まわす待ち下り
」などどふざけたことを公
言し、人民弾圧のためのみ
あるというその正体を露わに
した。
又、これまで、拠点大学等
に集中させていた先制攻撃も
不当検問が、個人宅まで及
ばされ、活動家という活動家
の家は自由にならぬ口実で
強制捜査され、その件数は
数十件にのぼった。そればかり
か、十一月一六斗争前後は
、命状も持たず、いきなり
数人で毎回強盗そこのけの家
宅捜査を行なうことすらした。
米日反動は、警視總監の桑
野に命じ、これまで乱暴罪の
適用は、「慎重を期す」とし
ていた態度から「直ちに適用
に踏み切る」という決意を
強硬使用について「一た
むらぎ使用せよ」との通達をだ
された。米日反動は、佐藤訪
米を、日本人民の血潮を流し
ても、その返り血を浴びたか
らでも強行するのだ、という
狂気の姿を露骨に示した。
検問の機動隊員は「暴徒でう
ち殺してやるからな、覚悟し
ろ」と強迫した。
首都を警力総力をあけて
守って、まだ安心でいられ
とした米日反動は、羽田空港
周辺の蒲田、狛木、三ツツ
地区五ヶ所に、アメリカ直輸入
のR10理論を結びつけ自警団
を組織し(ヘルムット、木刀
で武装させた。これは、米日
反動が、警察国家への歩みの
一歩で、日本の反革命の
側面に組み込み、治安体制を
ものとし、公然と持ちこんだ。
余りの人民は、事前検査、捜
索の目がいけり、検問を
突破して手に入れた火炎ビン、
ダバ、石を武器として、
佐藤訪米阻止斗争を、あ
げ、異常な警備体制となが、
機動隊は、車歩にも、好ん

七〇年「安保」
十一月佐藤訪米阻止斗

増刊臨時章序

佐藤訪米阻止斗争を、あ
げ、異常な警備体制となが、
機動隊は、車歩にも、好ん

佐藤訪米阻止斗争を、あ
げ、異常な警備体制となが、
機動隊は、車歩にも、好ん

佐藤訪米阻止斗争を、あ
げ、異常な警備体制となが、
機動隊は、車歩にも、好ん

序章

臨時増刊

人民独裁に向けて

—日本共産党(革命左派)基本文献集



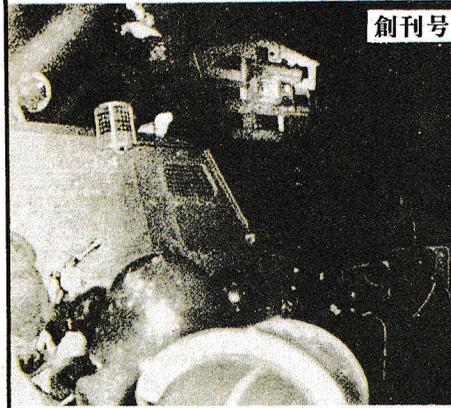
編集・日本共産党(革命左派)神奈川県常任編集委員会

発行・序章社

連合赤軍

公判通信

創刊号



連合赤軍公判対策委員会

創刊号内容

- はじめに(経過報告)…対策委事務局発足趣意書 /
- 獄中からの書簡
森恒夫 / 永田洋子 / 坂口弘 / 坂東国夫 / 岩田平治
- 弁護団メモ
公判にむけて / 角田弁護士談話
- 連合赤軍公判への我々の態度
…共産同赤軍派東京都委
- 連合赤軍公判対策委発足にあたって
…日共(革命左派)神奈川県常任委

連合赤軍公判対策委入会会費
1口・月額 500円

東京都新宿区新宿 2-17
TEL 03 (352) 5876
連絡 松本一美 気付
先 石川裕子
カンパ先 第一勧業銀行荻窪支店
口座番号 502-877



故柴野春彦同志(1970年12月18日土赤塚派出所にて虐殺さる)

人民独裁に向けて

—日本共産党(革命左派)基本文献集

目次

- 「人民独裁に向けて」発刊にあたって…日本共産党(革命左派)・
神奈川県常任委員会 7
- 声明文 / 銃撃戦と「肅清」問題についての
総括と自己批判・闘争宣言 ……神奈川県常任委 9
- 我々の基本路線について……………川島 豪 30
- 軍の統一問題について……………川島 豪 37
- 手記……………坂口 弘 40
- 武闘清算・軽視を粉碎せよ
- 武装闘争清算路線に断固反対する……………渡辺正則 47
- 反米愛国路線こそ勝利への保証である……………川島 豪 53
- 資料 / 無原則的「新党」建設を批判する……………神奈川県常任委 57
- 真の革命路線をかちとるために
——ブント系諸君を批判する……………川島 豪 67
- 革命的行動綱領をかちとるために……………渡辺正則 141

序章

臨時増刊

人民独裁に向けて

—日本共産党(革命左派)基本文献集

「人民独裁に向けて」 発刊にあたって

日本共産党（革命左派）

神奈川常任委員会

反米愛国闘争を闘っている労働者人民諸兄、「連合赤軍」、「あさま」銃撃戦以来、現在の日本革命において、何をなすべきか、どのような闘いをなすべきか、が根底的に問われている。

我々はこの混乱に対して、一条の光明を与え、これまでの我々のそして日本人民の反米愛国の闘いを、点検し、総括し、新しい闘いの糧としなければならない。

現在自らのかちとってきた地平まで否定し、具体的には武装闘争を否定するような傾向も一方にある。我々はこの傾向を断固として批判し、真の誤りは何であったのかを明確にして、日本人民の闘う方向を明らかにしてゆくものである。

アメリカ帝国主義は人民の闘いの前に一定程度の後退があるとはいえ、その狂気じみた、世界制覇の軍事路線は一層狂暴化しアジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放反米闘争に露骨な血の弾圧を加え、あらゆる所で、あらゆる方法で侵略政策を続行している。

そして世界人民を支配するために、更に日本人民を支配し、抑圧し、日本をアジアにおける重要な侵略拠点とし、日本軍国主義を育成、助長強化して、日本人民の反米愛国闘争を弾圧し、日本独占資本との矛盾を、「自衛隊」の米軍代行軍隊としての海外侵略あるいは経済侵略によってそらせようとしている。

しかし、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の反米武装闘争にアメリカ帝国主義は一步一歩後退しつつあり、ベトナムにおいてはアメリカは、汚い手を引かざるを得ない状況に追い込まれており、台湾封鎖などというあがきが続いている。カンボジア、ラオス等、インドシナ全域においてアメリカ帝国主義の「アジア人をしてアジア人と闘わせる」というニクソン・ドクトリンは決定的に破産している。又ラテンアメリカ、ボリビア、アルゼンチン、等でも反米闘争は確実に昂揚し、米帝のみにくい本質はますます明らかになっている。

日本においては、反米愛国の武装闘争は着実に発展しつつあり、日本人民の敵は誰なのかという問題を闘いの中で把えてきている。

我々は現在、これらの闘い、そしてその闘いの中でかちとってきた成果を更に発展させ日本人民の革命戦争を正しく展開し、その反米愛国の闘いを闘う中でその闘いを担う真の革命党、真の革命軍の建設を目指すものであり、同時にこの文獻集はその宣伝に大きく貢献するものである。

声明文

銃撃戦と「肅清」問題についての総括と自己批判・闘争宣言

はじめに

「自分のおかしたあやまりに対する政党的態度は、その党が真面目であるかどうか、また党が自分の階級、及び勤労大衆に対するその義務を実際に遂行するかどうかについての、もっとも重要な、もっとも確実な尺度のひとつである。あやまりを公然と認め、あやまりの原因をあばき、誤りを生んだ情勢を分析し、誤りを改める方法を検討すること、これこそ、真面目な党の目印であり、これこそ党がその義務を遂行することであり、これこそ大衆を教育し、訓練することである。」（ヘリーニン、「左翼」小児病）

同志、友人、人民のみなさん。

「米日反動派の侵略戦争を革命戦争でうち破る」べく闘われた、日本人民の偉大な建軍武装闘争の中で発生した「粛清」問題、銃撃戦について、わが党は基本的見解を明らかにすると共に、重大な誤りと敗北について徹底的な総括と自己批判を行ない、更に闘争宣言を發するものです。革命左派は健在であります。

なによりもまず、我々は米日反動派を断固糾弾する！武装闘争の偉大な高まりの前に悲鳴をあげていたファシスト共は、武闘派の誤

りにつけこみ、ベテンとデツチ上げを行ない、武闘派、革命的人民にありとあらゆる悪罵を投げかけ、「狂気の殺人集団」の一大キャンペーン攻撃をなしている。このブタ共はその資格はあるのか！ベトナム人民の頭上に「史上最大」の爆弾の雨を降らしているのは誰か！ソシミ村虐殺をやつたのは誰だ！アメリカ虐殺者に基地を提供し、ベトナム人民の血を吸って肥え太つているのは誰だ！日本人民をアメリカの肉弾にしようとして謀っているのは誰だ！第一、お前らは第二次大戦で数千万人のアジア人民を虐殺し、二百万人の日本人民を殺したファシストの生き残りじゃないか。お前らが騒ぎたてればたてるほど、お前らの虐殺者としての本性は丸見えになるのだ！ファシスト共には人民のことに口を出す権利が全くない。従って不当弾圧であり、不当逮捕である。

革命なのか反革命なのか、確固とした革命派なのか動揺している革命派なのか、この問題は現在、実にはつきりしている。宮本修正主義集団―彼らは、その本性をむきだし、ファシスト以上のキャンペーンをはつてゐる。革命的左翼を襲撃し、ファシストに協力しているお前らに何の権利があるのだ！お前らはその通り、米日反動派の真正正銘の手に他ならない。動揺分子はあわてふためき、マルクス・レーニン主義者としての原則的対応さえ忘れ、一部はファシストに迎合してしまっている。しかし、真の革命派は敵と味方をしっかり区別し、ファシストとの闘いを第一として、この問題を科学的に分析し、革命闘争の前進のための貴重な教訓にしようとしている。我々はこのような同志と固く連帯する。

ファシスト、御用評論家、ブルジョアマスコミ、修正主義者の誹謗、中傷は、決して犠牲者を悼むものではなく、恥ずかしめるものであり、何よりもマルクス・レーニン主義の魂（暴力革命、プロレタリア独裁）に水をかけ、人民を裸にし、精神的思想的奴隷にせんとするものである。武装闘争と革命的人民を搾取せんとするものである。

我々は断じて彼らに気を許してはならず、そのキャンペーンに対しては一から十まで徹底的に反対すべきであります。この誤りと敗北は重大なものであるが、始めて銃をとり、米日反動派と銃をもつて闘おうとした中で生じた誤りであり、我々は敵の攻撃は自分自身への攻撃であると考え、第一に反撃しなければならぬのです。

一「粛清」問題と銃撃戦の総括

と自己批判

現在知りうる限りにおいて、この問題は建党、建軍の武装闘争を闘う中でおきた革命戦士内部の矛盾でしかありません。明らかに敵味方の矛盾ではなく、人民内部の矛盾です。我々は、人民内部の矛盾をこのような形で処理することに断固として反対します。犠牲となつた同志は革命烈士であり、我々は心からその死を悼みます。我々は必ず彼らの汚名をそそぐだろう。

米日反動派、軍、官僚、およびその手先（スパイ）地下体制から逃亡して確実に敵に通謀するもの、それが確固とした事実によって立証されているものに対しては、断固として敵、味方の矛盾の処理の仕方暴力によって解決すべきであり、これを否定しては地下体制の確立はありません。しかし、このやり方を人民内部の矛盾にあてはめることは許されません。毛沢東同志が教えているように、人民内部の政治、思想、作風（規律）上の問題は、政治、思想的教育と説得によって、政治的自覚を高めることによって解決すべきであり、これが唯一の正しいやり方です。現在においては、建軍武装闘争に対して実践的に敵対し、破壊するものが敵であり、敵の手先で

す。理論的、政治的に敵対していても、実践的に敵対し、破壊してこない限り、敵の手先として扱うべきではありません。「粛清」は重大な誤りです。

こうした重大な誤りが行なわれた根源は、政治抜き「軍事路線」にあると考えます。「粛清」問題と、一月二日の政治無視「統一赤軍・新党」結成（これが事実とすれば）を切り離して考えることはできません。現象的にも、「新党」結成とその後「粛清」が行なわれていきます。「新党」結成がなければ、かかる「粛清」はなかったでしょう。（脱落者に対する誤まった処置は続いたかもしれないが）我々は「新党」結成しすなわち、革命左派、赤軍派の解消と「粛清」を切り離す考え方に反対します。政治抜き「軍事路線」を推進すれば失敗は必然です。

第一に、正しい政治路線を放棄すればすなわち、敵は誰か、味方は誰か、その力量、動向はどうかを無視すれば、必ず「左」右の日和見軍路線・盲動主義や合法主義が発生します。マスコミによれば、今回は「蜂起」が目指されていたさうであるが、この真偽はともかくとしても、水ぶくれ軍、一ヶ所に集中する半合法主義、戦闘主義は歴然としてあり、これは人民遊撃戦路線からは決して出てこない「一か八かの蜂起」主義です。

第二に、正しい政治路線の放棄は、必ず軍の規律を失なわしめ、同志への制裁を発生させます。軍の規律、決意、戦闘性の基礎は正しい政治路線と政治的自覚の高まりにあるのであって、これを失なえば規律は失なわれます。そして、この規律をなんとか守るため、

情勢を無視した史的唯心論による「決意」を迫り、「とにかく、やる気があるのかないのか」をどうしても個々人に迫ることになり、あげくのはてに肉体的制裁というやり方を使うようになるのです。

この「粛清」問題が、銃の質を要求されていた地下体制で発生したことを抜かすべきではありません。武装闘争に背を向け、合法闘争のみに専念している部隊には、この問題の眞の解明は不可能です。銃の質の地下体制、完全非合法体制においては、敵、味方の問題とは「殺すか、殺されるか」という問題です。そして、極めて疑心暗鬼が起りやすくなります。こうした地下体制にあって、敵、味方の区別を忘れ、敵対矛盾と人民内部の矛盾の区別を忘れて、政治抜き「軍事路線」に陥り、個人的、技術的な点を重視してしまつた結果、米日反動派に対する激しい憎しみの刃が同志に向けられ、合法的部隊では想像もつかない凄惨な「内ゲバ」が発生したのであります。このような、極めて緊張した、過酷な地下体制にあっては、合法闘争の何倍も政治的指導が優先されねばならず、政治ですべてを統帥しなければならぬのです。

我々は、この誤りをもって建軍武装闘争そのものが破産したなどという反革命的批判や、銃の質の地下体制であつたからこそかかる誤りがなされたというまぎれもない事実を無視した単なる罵倒には断固反対します。この誤りは、政治抜き「軍事路線」の破産を何ものにもまして示しているものであり、この誤りこそ、政治第一の軍事路線の正しさを何ものにもまして示しているのです。こうした「左」翼日 and 見主義の誤りに対し、右翼的に「批判」するのは全く問

違つています。右からの「批判」に反対する！

我々は、今回の重大な誤りを犯した一部旧指導部と、とりわけ、昨年の八月以来、政治放棄について激しく闘って来ました。昨年七月一日に「統一赤軍」が結成されたことをマスコミにより知らされた時（八月八日）、一部旧指導部が独断専行の下で、我々の生命である反米愛国路線を放棄し、「日帝自立」路線に拝跪し、「統一赤軍」として人民革命軍を解消した決定的誤りに対し、我々は脱党通告を含めて断固反対しました。一部旧指導部は、これに対し形式的には我々の反対意見を取り入れ、彼らだけの独断専行を二度としないと言明すると共に、「統一赤軍」（中央軍と人民革命の実質的合従）を「連合赤軍」（両者の共闘）に、言葉上では改め、反米愛国路線を決して放棄しないことを我々にはつきり誓いました。しかし、彼らは依然として反米愛国路線による軍事の統帥を理解せず、相変わらず政治抜き「軍事路線」をおし進めたため、我々は再三再四の脱党通告を含め（単なるおどしではなく、実際に脱党する覚悟だった）、今回の事態になるまで警告を発して来ました。反米愛国路線を放棄して軍事を進めれば必ず失敗すると真剣に、同志的に主張し続けてきました。ところが今回の事態の後に判明したのですが、一部旧指導部はこの警告、忠告を一切無視し、獄中の者を中心とする我々の批判を握りつぶし、教対には圧力を加え、再三理田のない「処分」を加え、我々の批判について全体の同志に討論させなかったのです。その反面においては、党を私物化し、獄中の者を中心とした我々に対しては、一貫して偽りの報告で終始し、いつも「批判

を受け入れている」と伝えてきていました。そして一部旧指導部は、獄中の者を中心とする我々と、政治抜き「新党」「合流」「統一赤軍」に反対する者の全ての闘争に対し、「右翼日和見主義」なる驚くべきレッテルをはって否定し、明確な政治路線の一致を第一として党建設を準備すべきだという意見に対し、「統一戦線党」を主張しているというデタラメきまりない批判を行ない、政治抜き「新党」に対する全ての同志を「分派」と宣言したといわれます。

この傾向は時がたつにつれて、ますますひどくなつていったものと思われまふ。昨年十二月には、分裂もやむをえないという極限にまで両者（政治抜き「新党」に賛成するか、革命左派を敢然と守るか）の対立は激しくなつていったものと思われまふ。

こうした中で、一部旧指導部によつて強権的に、とうとう「統一赤軍・新党」なるものが結成されてしまいました。同時に制裁も発生しました。結成にあつて、我々の建軍遊撃戦の路線（これは柴野同志の戦死の教訓です）が「激しく批判され」、革命左派、人民革命軍の生命である反米愛国路線、毛沢東思想、人民遊撃戦路線が批判されたと伝えられています。そしてこの「新党」は政治路線も規約もなく、敵は誰か、味方は誰かさ全く問題にされないものだったそうです。そして、政治を抜きにした抽象的「共產主義化」を各人に強要するに至つたということです。ここで肉体的制裁が必然的に発生したのであり、この「新党」結成こそ、政治抜き「軍事路線」のいきついたところなのでした。

ところが、このようなことがやられているのに、あろうことか、

川島豪同志のところには、一月十一日づけで自筆、署名入りの手紙が届き、そこでは、「軍の合同はしない」、「統一赤軍は作らない」、「反米愛国路線は守る」、「人民遊撃戦路線は守る」、「反米愛国統一戦線戦術は守る」という内容が書かれており、こうした手紙をうけとつていた我々にとっては「統一赤軍・新党」「蜂起主義」など、まさに晴天の霹靂だったのです。我々はこのようにブルジョア政治がなされていようとは予想もしていませんでした。

政治抜き「軍事路線」の結果が、「肅清」問題という極めていたましい形であらわれようとは我々は想像もできませんでしたが、我が「統一赤軍」問題ではつきり断言してきた通り、必然的な敗北に終つたのです。我々は、「肅清」、「新党」結成をもつて、政治抜き「軍事路線」の破産をはつきりと宣言します！

誤ちはくり返すまい。

「統一赤軍・新党」は、獄中を中心とする我々の意見と存在を無視し、革命左派を解消し、私物化し、独断専行で結成されたものである。「統一赤軍・新党」は獄中を中心とする我々の闘争（柴野同志の闘争も含まれる）を宣言の武装、右翼日和見主義ときめつけ、我々を「分派」と宣言して結成されたものである。「統一赤軍・新党」は、我々の主張に対して「統一戦線党」なる全くマルクス主義のイロハさえわきまえない「批判」をして結成されたものである。「統一赤軍・新党」は、これに反対する同志を「分派」ときめつけ、銃口を向け、制裁を行なう中で結成されたものである。「統一赤軍・新党」は、毛沢東思想、反米愛国路線、人民遊撃戦路線を放棄

して結成されたものである。「統一赤軍・新党」は、政治を欠落させた誤り故、結成後しばらくして必然的に破産し、今は実質的に存在していない。

革命左派は、一部旧指導部による解党行為にもかかわらず、依然として健在していることを確認する。

我々はこの陰謀を画策した一部旧指導部の解党行為に対し、事実を確かめて、嚴重に、正当な処分をするものであります。

犠牲になつた同志達が、いつまでも革命烈士として人民の間で追悼され、追憶されんことを！我々は事実を確かめ、必ず彼らの名誉を回復する！

名目的には「新党」の下にある同志達が、正しい路線にたち帰つて今までの誤りを正しく自己批判し、米日反動派に不屈の闘いを推し進めるよう、強く強く呼びかける。

二、あさま山荘銃撃戦について

すでに述べたように、「統一赤軍・新党」結成の時点で、革命左派、人民革命軍は解消されており、連合赤軍も解消されており、銃撃戦は主に、かつて革命左派に属していた同志達と赤軍派の同志によって闘われたものです。また、この銃撃戦は、「左」翼日和見主義・水ぶくれ軍、一ヶ所に集中させる合法主義、「蜂起」主義の破産するなかで、自然発生的な遊撃戦として闘われたものであり、人民遊撃戦争路線とは相容れないものです。

しかしながら、あさま山荘銃撃戦は日本階級闘争史上初めてといえる銃撃戦であり、我々はこの闘いを断固高く評価します。この銃撃戦が日本階級闘争に対してもつ意味は極めて重大であります。彼らは、フアンションの機動隊の重囲と発砲の中で、長期にわたって闘いを堅持し、十数名の敵を死傷させ、何よりも銃の武装闘争の威力を全人民に提起し、銃撃戦の地平を切り拓き、「敵消滅」の思想を表現しました。この英雄的な銃撃戦は、銃こそ武器の中心であり、銃を使いこなせば確実に米日反動派をうち破れることを証明し、敵の気狂いじみたキャンペーンの中でさえ、広範な人民の支持と共に

鳴を得ました。

我々は、色々と不利な状況下でありながら、彼らが断固として銃撃戦を貫徹したことを最も高く評価しなければなりません。そして、この闘いに付随して起きた様々の欠陥を指摘するあまり、銃撃戦の意義を過少評価したり、抹殺するようなことは絶対に許すこととはできません。

我々は、とりわけ、次の点を断固高く評価します。

- (一) 敵に発見されても断固として銃撃戦で応え、足場を求め続け、ついに確保したこと。
- 敵に発見され、長時間追撃されていたにもかかわらず、包囲網を突破し、疲労をのりこえ、共産主義者の不屈の革命精神をもつて敵に銃撃戦で応え続けて、闘う足場を確保したこと。
- (二) 自分達の動きを一切敵に把ませず、闘争の主導権を握り続けたこと。

「敵を知り、己を知らば百戦危うからず」(孫子)

敵の動き、力量とこちらの力量を考えて行動し、自らの戦術を敵に見せることなく先手をとり続け、敵を混乱に陥し入れ、敵の作戦の意図を人民の前に暴露したこと。

- (三) 敵のあらゆる挑発、「説得」(母親まで利用して)等のブルジョアの策動を断固粉碎し、不屈の革命精神によつて頑張り抜き、一貫して銃撃戦をもって応えたこと。

- (四) 本格的革命軍として成長しうる質を全人民の前に示したこと。「この軍隊が強力なのは、この軍隊に参加しているすべての人

が、皆、自覚的な規律を備えていたからである」(毛沢東)

「この軍隊は、勇往邁進の精神を備えている。この軍隊は全ゆる敵を圧倒するのであり、決して敵に屈服するようなことはない。いかなる艱難辛苦の状態にあつても、生き残っている者が一人でもいる限り、闘い続けるのである。」(同)

この軍の質を有していたからこそ、あのように英雄的な闘いができたのです。

我々は以上のような成果を断固高く評価し、このような質の軍の巨大化、大衆化こそが真の革命戦争を勝利させるものであることをしっかりと把握しなければなりません。銃撃戦は我々に、このような質の軍を建設しなければならぬということを、実践をもって提起したのであります。

しかし、残念ながら、この銃撃戦は人民遊撃戦争路線からはずれ、自然発生的なものであったため結局敗北に終わりました。もし、政治抜き「軍事路線」が清算され、反米愛国路線で軍事が統帥され、人民遊撃戦争路線が堅持されていたら、この闘いは何倍も偉大な闘いとなつたに違いありません。犠牲になつた同志達が参加していたらどんな偉大な闘いが勝ちとられたことだろうか！ そうしたら、このように追いつめられた形にならず、「人質」問題などおこらず、敗北に終ることもなかったでしょう。主体的で持続的な、銃を軸とした建軍遊撃戦が必ず勝ちとられ、人民遊撃戦争の地平が広々と切り拓かれたに違いありません。

この銃撃戦に対し、「テロリスト」などとレッテルを貼り、銃の

武装闘争に敵対している一部のものに対しては、我々は断固として反論する。革命家としての原則的立場さえ持つていないそのようなものは、革命闘争に対する裏切りものではない。何よりも、敵と人民の区別をはっきりつけるよう我々は忠告するものである。

三、「肅清」問題と銃撃戦の総括と自己批判

1 総括

「肅清」問題と銃撃戦の総括を行なうということは、この問題のみでなく、現在までの我々の党建設の闘い、我々が狙ってきた革命闘争を総括することでもあります。我々は一方では一部旧指導部がさまざまな山荘の闘いにおいて、銃撃戦の地平を切り開くのを促してきました。しかし他方において、我々の多くは獄中におかれ、おまけに偽りの報告ばかりうけて状況が全くわからなかったといえ、銃撃戦の敗北、「山岳」における敗北、そして「肅清」問題という大きな誤りを犯してしまふのを許してしまつたのも事実です。このことを真剣に総括し、正しく自己批判して党再建に向かわねばならないと考えます。

我々が銃撃戦という偉大な闘いを切り拓くのを促してくれた理由は、我々がマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の「三つの宝」、すなわち武装闘争、統一戦線、党再建の三つの観点の一つである武

このうち、第一点と第二点については、一の基本見解のところ述べており、繰り返しません。ただし、この第一点、第二点は総括の中心です。あとの三点は誤つたとしても、この二点で誤りを犯さなければ、「肅清」などといったことはおこりえないからです。

★第三点について。「山岳」での大量逮捕と銃撃戦の敗北を軍事面から総括すると、地下革命戦争の具体的法則を解決しえてなかつたということです。日本人民の建軍武装闘争は次のように一步一步発展してきました。

▲大菩薩闘争▽ 武装闘争一般を提起。しかし、闘争形態、闘争方法の問題については解決できず敗北。

▲十二・一八闘争▽ 遊撃戦一般を提起。これで武装闘争の一般的闘争形態の問題は解決されたが、具体的闘争方法の問題を解決できず敗北。「敵の消滅」という武装闘争の思想を獲得した。

▲二・一七闘争▽ 遊撃戦の一般法則、「敵消滅、味方保存」の法則、革命軍建設一般を提起。しかし、地下革命戦争の具体的、特殊の法則、及び建軍の具体的特殊の法則の問題を解決しえず、不当逮捕をこうむり、十分に建軍遊撃戦を闘いえなかつた。

この他にも、政治ゲリラ闘争（ダイナマイト闘争）、ハイジャック闘争、M闘争、爆弾闘争の貴重な教訓があります。

これらの貴重な血の教訓から、遊撃戦、少数精鋭の軍（敵消滅戦を闘つたもののみを正式の軍人に）、分裂したピラミッド型の地下体制、などの原則はすでに常識ともいえるほど明らかになっていました。ところが榛名アジトでは、政治的レベルを無視した水ぶくれ

歩闘争の観点を全体的に把握していたからです。勿論これを十二分に把握していたとはいえませんが、比較的把握していたといえます。建軍武装闘争は明らかにマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の「三つの宝」、三つの観点の一つであります。この観点を抜かしては革命闘争を勝利に導くことは絶対にできないし、これなくして勝利への道は保証されません。この間の敗北によって、この観点を放棄するのは「あつものにこりて、なますをふく」という完全な誤りであります。これは十四名の同志達の死を「大死」となし、柴野同志の死を「大死」となし、日本人民、世界人民の革命闘争の前途を妨げる裏切り行為に他ならない！このことをまず、しっかりと確認しておきます。

他方における「肅清」問題、「山岳」と銃撃戦の敗北という、一部旧指導部の歴然たる誤りと敗北の因については、我々は次のように考えます。

第一に、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別できず、人民内部の矛盾を正しく処理できなかったこと。

第二に、プロレタリア政治によって、軍事を統帥しなかつたこと。

第三に、建軍武装闘争を、建軍遊撃戦として徹底して闘わなかつたこと。

第四に、建軍武装闘争のみを単一的に推進し、大衆運動を放棄したこと。

第五に、政治抜き「新党」を典型とする戦闘団的「党建設」を推進したこと。

軍を作り、それを一ヶ所に集中させる半合法「軍団」を作り、その「軍団」を使って「蜂起」まで目指されていたといわれます。すなわち、一部旧指導部は、「敵消滅、味方保存」「勝てるなら闘い、勝てないなら去る」「少しづつ敵をかじり、味方を拡大する」という建軍遊撃戦に敵さず、逆にこの鉄則を放棄して、大衆闘争主義的に「建軍武装闘争」を闘おうとしてしまったのです。そして現在の量的には武装闘争の主体である爆弾闘争も放棄してしまつていました。これは明らかに人民遊撃戦戦略戦術に反しており、日本人民が聞いたった血の教訓に反しています。

マスコミによれば、「統一赤軍」結成（昨年七月）と同じ頃、すでに水ぶくれ軍主義、集中する半合法主義が行なわれているそうです。すなわち、反米愛国路線の放棄と人民遊撃戦路線の放棄は同じ時期に始まつていたのです。反米愛国路線と人民遊撃戦が不可分のものであることを考えれば、反米愛国路線の放棄が即座に人民遊撃戦路線の放棄につながったことは全く必然なことでした。

一部旧指導部は自分のことを大したものだと思ひこみ、狭い経験主義を何よりも尊び、自然発生性へ拜跪（理論、政治の軽視）してしまつたのです。実践的にも理論的にも、我々の生命であり、血と汗と涙の結晶である我々の路線は一步一步放棄されてきました。

このような、「蜂起」主義（形は「左」だが、実際は右）により、本来軍のレベルにない同志達を決意一般で参加させることから、規律が乱れ、逃亡者を出し、官憲に発見されたら一網打尽に全員逮捕という敗北がもたらされたのです。二・一七以来闘えなかつたのも

この「左」翼日和見主義が原因です。まったく形は左、実際は右なのです。

★第四点について。現在の日本の情勢では、建軍武装闘争は確実に燃えており、その条件は存在しているが、北アイルランドのように急速に建軍武装闘争が燃え広がり、大衆化する条件はありません。革命闘争は何千万の人民大衆の闘争である以上、建軍武装闘争が現在のところ急速に大衆化しない以上、闘争形態を建軍武装闘争に単一化し、組織形態を軍に単一化して推し進めるのは誤りです。我々は建軍武装闘争を進めると共に、大衆闘争を大胆に展開し、米日反動派に反対するあらゆる党派、団体、個人、あらゆる闘争を結集して広範な統一戦線をかちとるべきです。本来、人民遊撃戦争とはこのように単一化されたものではなく、武装闘争、大衆闘争（政治、経済闘争）、救済闘争を三本の柱とし、統一戦線の重要性を強調したものでした。建軍武装闘争を闘争の中心すると共に、これを一步一步大衆化していかなばならず（水ぶくれ軍団にするということではない。少数精鋭は鉄則）、一方では大衆闘争（非合法、合法）をできるだけ大胆に展開していくべきであること。これこそ現段階での人民遊撃戦争の正しい方針です。「解放の旗」十二号の柴野春彦同志の文章、十五号ではこの観点が示されており、十七号以降単一化してしまつたのです。

人民遊撃戦争と不可分一体の関係になつてゐる反米愛国統一戦線は、従来一つの独立した項目としてありました。ところが武闘重視のあまり、この統一戦線戦術、そして大衆闘争の観点はしだいに軽

視されてきました。我々は絶対にこれを重視しなければならず、大胆に、極めて大胆に人民の団結をかちとり、大衆闘争を展開すべき

なので。一部旧指導部の、軍以外の大衆闘争を実質的に否定する方針―これは水ぶくれ軍団主義と不可分一体―が、彼らによる私党化、「東清」に結びつく一因を構成しています。なぜなら、大衆闘争を軽視し、そのうえ革命理論を軽視すれば、同志、人民を正しく民主集中制の下に導きえなくなり、その結果、独断専行の官僚主義が必ず発生するからです。一部旧指導部の昨年七月以来の私党化、独断専行、官僚主義の根源はここにも求められるのです。

統一戦線の観点（大衆闘争の観点）はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の「三つの宝」のうちの一つです。絶対にこれを忘れたら、軽視したりしてはならないのです。建軍武装闘争を建軍遊撃戦として徹しなかつたことと同時に、大衆闘争を事実上放棄したが故に、単一化され、水ぶくれ軍がつくられ、軍と合法部門の区別さえはっきりつけられなくなったのだと思われれます。彼らが追いつめられていった過程は、外因が内因を通じて作用していった過程であり、「左」翼日和見主義の当然の結果といえます。

★第五点について。我々は、米日反動派に反対するあらゆる闘争を建軍武装闘争を中心として闘い、これを反米愛国路線で強力に統帥する党を建設すべきでした。

ところが実際には、一部旧指導部は水ぶくれ軍団的、大衆闘争主義的「武闘」を政治抜きで推し進め、これのみを「指導」という、いわば戦闘団的「党建設」に陥つてしまいました。これは明らか

かに自然発生性への拜跪です。狭い経験主義に陥り、毛沢東思想、反米愛国路線（＝理論、政治）を軽視し、実践と結びつけえなかつた結果です。現在における自然発生的武装闘争とは、大衆闘争主義的、水ぶくれ軍団的、半合法主義的、戦闘団主義的「武装闘争」です。これの政治路線上への反映が「日帝自立」路線であり、軍事路線上への反映は「蜂起」主義となります。最もいい例として、昨年七月の「統一赤軍」では明確に「日帝自立」路線への拜跪があらわれています（「銃火」など）。

政治抜き「新党」結成は、この自然発生性への拜跪の典型であり、理論・政治軽視、狭い経験主義（一切の成果と教訓を無視した）第一の必然の結果でした。反米愛国路線から導き出される党建設は、このような政治抜きの、敵味方の規定さえもない反マルクス主義の「党建設」では断じてありません。

（注）「軍」と「戦闘団」の区別について。

「軍」―プロレタリアートの党（正しい政治路線）の絶対的指導をうけ、政治的には党と同じレベルにあり、銃火器を中心とする武器で武装し、革命的規律をもち、他の大衆組織とは明確に区別され、敵軍を消滅する組織である。

「戦闘団」―大衆実力闘争の延長線上に自然発生的に生まれ、正しい政治路線の指導をうけず、さまざまなレベルのもので構成され、規律を重視せず、大衆組織との区別がなく、しかし、武器をもって敵と闘おうとするものである。

2 革命左派総体としての自己批判

かかる重大な誤りと敗北の因となつた以上の五つの点について、わが党総体として十分に闘い、とていなかつたことを明らかにします。我々ははっきり自らの不十分性を認めるものです。我々は、自分達は全く正しかった、一部旧指導部が一から十まで責任をとらねばならない、などということはできません。一部旧指導部の誤りは、わが党がもつていた不十分性の典型なのであり、我々はこれを徹底的に批判しつつ、我々の不十分性を全てさらけ出し、自己批判を深め、徹底的に克服していく決意です。

「革命的政党、革命的人民は、正反両面の教育をくり返さうけ、比較と対照を通じて初めて、成熟したものに鍛えあげられ、勝利をかちとる保証が得られるものである。反面教師の役割を軽視する人は、徹底した弁証法的唯物論者ではない」（毛沢東）

獄中を中心とする我々はすでに、一、で述べたように、第一点から第五点についての基本的な観点を闘いとしていたし、誤りに対しては激しく闘つたし、また一貫して偽りの報告をうけるなどして、実際の状況を把握していませんでした。従つて今回の事態を阻止しえなかつたことについては、限界があつたといえると思います。しかし、我々がこの観点をはっきり闘いとつたのは、昨年七月の「統一赤軍」結成を知つた後なのでした。その際、多くの同志もこれに賛成してしまつたことで明らかのように、我々も同じ不十分性を持つていたので。そして、我々が闘いとおつた時には、もはや一部旧

指導部を説得して正しい路線に戻すのが不可能となってしまったのであり、あまりに遅すぎたのです。さらに我々が、政治を重視するかどうかは、マルクス主義か否かの根本問題である、とはっきり理解したのは今回の誤りを知った後でした。我々には自己批判しなければならぬ責任が十分あります。

★第一に、人民内部の矛盾の処理について

我々はかつて第二山口左派や木下一派に対しても、又脱落していく者に対しても、決して暴力的に対処することはしませんでした。これは、毛沢東思想を学び、反米愛国路線によって敵味方をしっかりと区別すると共に、人民内部の矛盾の解決の仕方が教育と説得の方法であることを理解していたからです。実力闘争、政治ゲリラ闘争の段階ではこの原則はしっかりと守られていました。

しかし残念ながら、この理解は統の質の地下体制に耐えられなくらい確固としたものではありませんでした。この原則が革命左派の良き作風としてしか理解されておらず、反米愛国路線と切り離せない組織原則として理解されていなかったのです。従って、統の質の地下体制の中ではこの作風が吹きとんでしまったのです。我々自身、党内、軍内、党派間の問題を正しく解決する生きた政治として反米愛国路線を応用しえてこなかったわけであり、これらの問題については死んだ政治でしかなかったと言えます。

★第二に、政治による統帥について

政治路線の重要性について、我々自身、「統一赤軍」問題までしっかりと理解することができます。政治を重視するか否かはマルクス主

義か修正主義かの根本問題である、と全体的に理解しえていず、このため一部旧指導部の政治無視を許してしまいました。闘い始めた時にはもう手遅れだったのです。

そもそも我々がこうした風潮を招いたのは、六九年四月の第二山口左派（反実力闘争派）、同年春の木下一派（反武闘派）との闘争の不徹底さに求められます。この闘争において実践を強調し、彼らのデタラメな理論を批判するあまり、実践と理論を対立させてしまふ風潮を招き、革命理論まで軽視する傾向を招いてしまったのです。これははっきり自己批判しなければなりません。革命理論には革命的実践が対応し、日和見理論には日和見の実践が対応する、として闘うべきでした。実は両者が実力闘争、武装闘争に反対したのは、他にもなく毛沢東思想、反米愛国路線を軽視し、「お題目」としてあがめ奉るのみだったからなのです。我々自身、意識的に反米愛国路線と実践を結びつけてきませんでした。こうした不十分性をもっているも、政治ゲリラ闘争の段階では誤りは犯さなかったのですが、統の質の軍、地下体制が問題となり、赤軍派との具体的団結が問題となったとき、「一が分かれて二となり」、一部旧指導部はどうとう自然発生性に拝跪し、政治理論を放棄するに至ったのです。反米愛国路線の重視こそ勝利への保証でした。我々は「分かれ」たもう一方でしたが、徹底さが足りませんでした。

★第三に、軍事路線について

獄中を中心とする我々は、実際にどのような軍事が行なわれていくかについて、まったくわかりにくい状態にあります。それに偽り

の報告が重なり、今回まで、人民遊撃戦争路線から全くはずれた水ぶくれ軍、集中「蜂起」主義が行なわれていようとは思ってもみませんでした。常識と置いていました。ただ、多少、半合法主義の不十分性があると思っていたくらいでした。

しかし、一部旧指導部によるこうした「左」翼日和見主義の責任の一端は我々にもあります。革命左派総体として、二・一八、二・一七の教訓を十分に把握せず、政治路線を重視して建軍遊撃戦に徹することを十分理解できず、水ぶくれ軍の半合法主義を徹底的に批判して遊撃戦争の軍事法則を堅持することを十分に闘いとしていかなかったといえます。我々は軍事面の誤りと断固闘ったことは事実ですが、もっともとあいまいさを許さず、「勝利か死か」の問題として、全体のものとしてよく闘うべきでした。二・一七以来、なぜ十分聞えないのか厳密に分析すべきでした。

都市ゲリラ的な建軍武装闘争には大概三つの発展段階があります。

- (a) アメリカに代表されるもので、爆弾闘争が主体となり、銃撃戦も聞かれるもの。
- (b) 中南米に代表されるもので、銃撃戦が主のもの。
- (c) 北アイルランドに代表されるもので、銃撃戦が主体で爆弾闘争も聞かれるもの。

(a)、(b)、(c)、と発展すればするほど地下革命軍の役割は重視されることとなります。ところが、日本革命闘争では二・一八、二・一七、M闘争は(b)の萌芽であり、爆弾闘争は(a)の萌芽といえます。日本は「警察国家」であり、警察力が異常に強く、こうした力関係

においては当面は爆弾闘争が量的には主体とならざるをえません。勿論、軍は統の質の軍でなければならず、銃撃戦も聞えるし、銃は武器の中心です。日本の建軍武闘の現段階では、武器の面では主として爆弾です。爆弾闘争は大衆化しうるし、一定程度大衆化しており、大胆に発展させるべきです。我々は統の武闘の強調のあまり、爆弾闘争の意義を過少評価する傾向にもありました。

★第四に、統一戦線について

我々は大衆闘争の観点が不十分であったことを認めるものです。具体的にほとんどわからなかったのですが、実際の闘争がどうも単一的に推し進められているように思われてならなかったことに対して、多くの同志から疑問が提起されていました。我々の影響下にあってた大衆闘争が放棄されてしまったことに批判はなされていました。又、武闘派を中心としてあらゆる闘争を結集した「反米反軍国主義の統一戦線」を結成するよう何度も指摘はなされました。しかし、我々はこの重要性の認識が不十分で理論面にまで高めえず、十分批判することができなかったのです。革命は何千万大衆の事業であり、何千万大衆に直接依拠し、決起させる観点と努力は絶対に必要です。我々は本格的武装闘争の以前から、大衆闘争を不十分にしか展開してこなかったと思います。このことは、我々が同志、大衆を十分信頼し、大衆に依拠し、大衆の中から大衆の中へという道をへて方針を出す作風を確立しえなかった一因でした。このように、我々全体が民主集中制の基礎である、同志、人民の意見をよく聞き、分析して方針を提起するという作風を確立しえなかったため、地下体制

にあって一部旧指導部の私党化、独断専行、官僚主義を発生させ、それを許してしまふことになつたと考えます。

我々は毛沢東思想の「三つの宝」の一つである統一戦線（大衆闘争）の観点がかきわめて不十分でした。今、我々は建軍武装闘争を中心とし、大衆闘争（政治、経済、支援闘争）に大胆に復帰します。そして、武闘派を中心とする、全人民を組織する広範な反米愛国統一戦線を必ず勝ちとるでしょう。建軍武装闘争自体も一歩一歩大衆化させていきます。

★第五に、党建設について

我々は、プロレタリアートの党とはあらゆる革命闘争を正しい政治路線の下に統帥し、領導するものであるという観点を全体のものとせませんでした。我々自身も、党の生命は正しい政治路線であり、これをいささかなりともおろそかにすることは、党を日和見主義の「党」に転落させるものであるという観点が不十分でした。又、武装闘争と統一戦線、そして党建設の弁証法的関係を、この日本の具体的条件の中で正しく解決できていませんでした。

従つて、一部旧指導部が水ぶくれ軍団的、大衆闘争主義的「武闘」を政治抜きで推し進め、これのみを「指導」する戦闘団的「党建設」に陥るのを許し、さらには、政治抜きの「新党」を結成するのを許してしまいました。

かくして我々は敗北しました。この敗北は、説得と忠告を無視し、自ら革命左派を解消し、逃走した一部旧指導部の必然的な敗北であると共に、それを許した革命左派総体の敗北です。以上の我々の自

己批判のうち中心は、党建設（理論、政治）と統一戦線の二つの観点の不十分性についての自己批判です。我々は武装闘争の観点、成果、教訓を決して手離すことなく、これを純化させると共に、革命理論と大衆闘争の観点をしっかりと把握せねばならない。

反米愛国路線を腫のように大切にし、重視し、建軍遊撃戦に徹し、これを中心として大胆に大衆闘争を闘い、全ての革命闘争、革命人民を反米愛国統一戦線に結集させ、あらゆる闘争を反米愛国路線で強力に統帥しうる「全国的範囲の、広い大衆性のある、思想的、政治的、組織的に完全に強固な、ポリシエヴィキ化された」（毛沢東）真の党を建設しなければならぬ。武装闘争は党建設の準備活動を促進させる決定的手段であり、統一戦線運動は党建設の準備を強固な大衆的基盤のうえで拡大強化する推進力である。

政治路線を重視する可否かは、マルクス主義党なのか修正主義党なのかの違いである。

四、新たな闘争宣言および党建設のよびかけ

すでに我々は、一部旧指導部の重大な解党行為にもかわらず、革命左派は健在していることを明らかにしました。革命左派は、犠牲になつた革命烈士の崇高な遺志をうけつぎ、総括と自己批判を深め、断固として米日反動派への新たな闘いを宣言します。我々は今後の実践によつて、我々の自己批判が口先だけのものではないことを示すでしょう。

「敢然と闘い、困難を恐れず、後から後へと身を挺してつき進んでいくべきであり、そうすれば、全世界は必ず人民のものである。全ての悪魔はのこらず一掃されるであろう」（毛沢東）

今回の敗北によつて気狂いのように喜び、ホッとしている米日反動派とその手先のブタ共に警告しておこう。せいぜい今のうちに休んでおくがよいのだ。しかし、お前達には大して時間はない。お前達の運命は他でもない人民に握られているのだ。そして反米愛国路線を甘く見ぬより言っておこう。今までも反米愛国路線は不屈の闘いを生み出してきた。敗北した我々はかつてなく反米愛国路線の重要性と正しさを認識している。敗北が重大であればあるほど我々は

大きく成長する／今ほど我々が決意を固めている時はないのだ！

「人民革命勢力は初めは常に弱少なものである。しかし、革命勢力が歴史発展の方向を代表しているゆえに、それは本質的に不敗である。敢然と闘い、巧妙に闘い、いかなる失敗にも屈せず、あくまで闘いぬきさえすれば、小さなものから大きなものに発展し、弱いものから強いものに変わることができ得るであろう。」（北京周報）

生命をかけて闘う思想をかちとっている我々は、誤りを認めることを恐れないし、如何なる困難も恐れない。貴重な教訓は絶対に無駄にしない。

我々は必ず党組織を再建し、全国党を闘いとる／必ず、米日反動派の侵略戦争を革命戦争でうち破る／必ず、人民民主主義革命に勝利する／我々の基本路線は、毛沢東思想、反米愛国路線、人民遊撃戦争路線、反米愛国統一戦線戦術、の四つであり、その内容を提起する。

★毛沢東思想こそ、我々の唯一の指導思想である。

(一) 毛沢東思想は、「帝国主義が全面的に崩壊し、社会主義が全世界的に勝利する時代」のマルクス・レーニン主義である。

(二) 毛沢東思想の真髄は、革命的能動的反映論であり、その核心は常にプロレタリア階級思想、政治を前面におし出し、これを原動力として、人民革命、建党、建軍、統一戦線構築、社会主義革命、社会主義建設をおしすすめるところにある。

(三) 毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の柱石である弁証法

的唯物論を豊かにし、発展させた。

四 毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の経済学説、社会主義理論を、現代帝国主義との闘争、批判の中で豊かにし、発展させた。

五 毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の眼目であるプロレタリア独裁の学説を豊富化し、発展させて人民民主主義独裁の理論を完成させ、さらには、社会主義社会における階級闘争の理論を全く新たな段階まで発展させ、共産主義社会に向って社会主義革命と社会主義建設を一層おしすすめるのが、プロレタリア文化大革命であることを史上始めて明らかにした。

六 毛沢東思想は、現代修正主義と最も根本的に対決し、それのうち破る世界人民の武器である。

七 世界においては勿論、日本においても、毛沢東思想の活学活用なくして党、軍、統一戦線をかちとることはできない。

八 従来我々の不十分性は、「毛教条主義」などにあるのではなく、あまりにも毛沢東思想を軽視したことである。

★反米愛国路線を我々の政治路線とする。

(一) 反米愛国路線は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の普遍的真理を日本革命に適用した、我々の唯一の正しい政治路線であり、我々の生命である。

(二) 反米愛国路線の基本問題は次の通りである。

・日本は、アメリカ帝国主義に支配された軍国主義国である。

・日本革命の対象は、アメリカ帝国主義と日本軍国主義である。

内戦、勝利をかちとるものである。

四 人民遊撃戦争路線の基本問題は次の通りである。

・米帝国主義、日本軍国主義、米軍（太平洋統合軍）、「自衛隊」、警察およびその手先をきれいさっぱり消滅する。これ以上は武装闘争の対象としない。

・異常に強大な敵に対し、確実に勝利を重ね、少しずつ敵をかじると共に、人民軍と統一戦線を拡大し、敵味方の力関係を持久的に変える。

・条件があれば遊撃的蜂起もかちとるが、「一か八かの武闘」「一か八かの蜂起」は如何なる場合にも許されない。敵味方関係が転化し、全人民蜂起の条件が整った時、全力を挙げて真の全人民蜂起をするのである。

・建軍武装闘争は一步一歩大衆化する以外なく、敵は大、味方は小であるから、武闘の形態は遊撃戦となり、人民軍は少数精鋭、分散の地下軍でなければならぬ。

・革命は何千万大衆の闘いであり、建軍武闘を中心としつつもこれ以外の大衆闘争を大胆に闘うことを前提とする。すなわち、人民遊撃戦争は、少数精鋭の建軍遊撃戦と広範な大衆闘争を一組として闘う人民の戦争である。

・現在の段階では武器の主体は爆弾であるが、人民軍は、毛沢東思想と反米愛国路線に依拠した「銃の質」の軍でなくてはならぬ。

(五) 「米日反動派の侵略戦争を人民遊撃戦争でうち破れ！」が中

・日本革命の任務は、民族革命と民主主義革命である。

・日本革命の原動力は、プロレタリア階級、農民階級、小ブルジョア階級、中小零細ブルジョア階級である。

・日本革命の性質、(当面の段階では)人民民主主義革命である(社会主義革命とは異なる)。

・日本革命の前途は、社会主義革命と社会主義建設である。

(二) 反米愛国路線は、米日反動派のアジア侵略戦争を阻止することが焦眉の任務であることを、日本人に明らかにしている。

(四) 反米愛国路線は、建軍、建軍、統一戦線、大衆闘争など、革命のすべての分野において常に第一位におかなければならず、全てを統帥しなければならぬ。

(五) 反米愛国路線を失ふことは、敵味方という革命の最も重要な問題を混乱させ、規律と革命的熱情を失なわせ、正しい指導を失なわせ、党を失なわせ、必然的に革命の流産をもたらす。

★人民遊撃戦争路線にそって建軍武装闘争を闘う。

(一) 人民遊撃戦争路線は、日本人、世界人民の闘争、とりわけ武装闘争の教訓と、反米愛国路線からかちとられたものであり、反米愛国路線と不可分である。

(二) 人民遊撃戦争路線は、米日反動派を打倒し、人民民主主義独裁権力を樹立する偉大な政治目的(人民民主主義革命)達成に奉仕するものである。

(三) 人民遊撃戦争路線は、人民に直接依拠するとともに、持久的に何百回、何千回も敵の弱点を攻撃して消耗させ、全人民蜂起、心スローガンである。

(六) 人民遊撃戦争路線を失ふことは、「蜂起」主義、合法主義など「左」右の日和見軍事路線を発生させ、軍を水ぶくれ戦闘団となし、人民との結びつきを失なわせ、戦闘力を失なわせ、必ず自滅又は敗北の結果をもたらす。

★反米愛国統一戦線戦術を具体化して、広範な人民の力を結集する。

(一) 反米愛国統一戦線戦術は、「矛盾を利用し、少数に反対し、多数を獲得し、各個に撃破する」という歴史の教訓と、反米愛国路線を結びつけた、極めて重要な戦術である。

(二) 反米愛国統一戦線戦術は、米日反動派を敵とし、プロレタリア階級、農民階級、小ブルジョア階級、中小零細ブルジョア階級を革命勢力とするものである。

(三) 反米愛国統一戦線戦術は、米日反動派、「安保」体制、侵略戦争、ファシズムに反対するあらゆる階級階層、党派、団体、個人を結集し、無条件に大同団結させ、力のあるものは力を出し、金のあるものは金を出し、技能のあるものは技能を出す、という具合に全人民の力を結集させるものである。

(四) 反米愛国統一戦線戦術は人民遊撃戦争路線と不可分であり、少数精鋭の建軍遊撃戦を中心とし、これを支援しつつ、これ以外の政治闘争(武闘も含む)、経済闘争、支援闘争を始め、あらゆる大衆闘争、大衆活動をできるだけ大胆に闘い、組織するものである。

(六) 反米愛国統一戦線の共同綱領における基本問題は次の通りである。

- ・ 日本人民を総動員し、広範な反米愛国統一戦線を実現することによって、米日反動派の支配をくつがえし、真の人民政府を樹立する。
- ・ アジア人民と固く団結し、米日反動派の侵略戦争を阻止し、「安保」体制を打破する。
- ・ 米軍、「自衛隊」、警察およびその手先の武装を解除し、日本の解放のために闘う真の革命軍隊を建設する（当面は、各党派の武装部隊の親密な連合）。
- ・ 米日反動派およびその手先のすべての銀行、企業……など全財産を没収して、革命闘争と人民のための費用とする。
- ・ ファッショ治安体制に反対し、民主的権利を闘いとり、一切の政治犯を釈放する。
- ・ 男女、民族、部落、地方、宗教などの差別を徹廃し、婦人の社会的地位を向上させる。
- ・ 日本人民の革命闘争に支持と支援を表明する国家、民族、人民と親密に連合し、善意と中立を表明する国家、民族、人民と親善を維持する。

(七) 統一戦線においては、各党派としっかり団結し、援助しあうと共に、政治路線を掲げることとする独自性を断固堅持しなければならない。

(八) 反米愛国統一戦線は、世界人民の反米反ソ統一戦線、アジア

人民の反米抗日統一戦線の一部、それも重要な一部を占めるものである。

(九) 反米愛国統一戦線戦術を失なうことは、広範な人民との結びつきを失ない、孤立を招き、官僚主義を発生させ、敗北を招く。我々は以上の基本路線を今こそしっかり確認する。これらの基本原則は、書齋の中にとじこもり、頭の中でまとめたようなものでは断じてない。柴野同志を始めとする多くの同志の犠牲、悪戦苦闘の中で、血と汗と涙の代償として一つ一つ勝ちとってきた我々の生命である。我々はこの思想、政治、軍事、統一戦線、大衆闘争の基本路線を決して放棄せず、決して軽視しないことを誓うものである。この基本路線を堅持し、発展させることこそ、再建と勝利の保証である。

以上の点において一致しうる全ての諸君！我々は真剣に党建設を呼びかけます！

赤軍派の同志諸君！徹底的に敗北と誤りを総括し、我々と固く、正しく団結し、正しい政治路線をからとって真の前衛党を建設しよう！

革命烈士の血の跡を踏みしめて前進せよ！

「これまでに滅亡した全ての革命党は、それらがうぬぼれて、自分の力がどこにあるかをみることができず、自分の弱点について語ることを恐れたため滅亡した。ところが、我々は、自分

の弱点を語ることを恐れず、弱点を克服することを学ぶので、滅亡しないだろう」(レーニン「ロシア共産党(ボ) 第十一回 大会中央委員会の政治報告の結語」)

我々の基本路線について

「解放の旗」21号より

(一) 我々は基本路線を確認するにあたって、反米愛国統一戦線の項目を独立させて扱うべきだと思います。これは今回の誤りの教訓から引き出したことです。

時においては、反米愛国統一戦線、大衆闘争は極めて重視されなくてはならないと思います。これは人民遊撃戦争の不可分の構成部分であり、これがなくては、人民遊撃戦争を発展させていくことは絶対できない。従って我々の基本路線は、①毛沢東思想、②反米愛国路線、③人民遊撃戦争戦略戦術、④反米愛国統一戦線戦術です。③の人民遊撃戦争戦略戦術のところにおいても、建軍遊撃戦と反米愛国統一戦線が不可分であることを述べ、軍事を扱うものが決して統一戦線、大衆闘争の観点を失なわぬよう是非とも歯止めをかけておく必要があります。また、④の反米愛国統一戦線戦術のところでは、この統一戦線が建軍遊撃戦と不可分であることを述べておき、大衆闘争を担うものが、決して武闘の観点を忘れぬよう歯止めをかけておく必要があります。

の条件の反映であることだけをのべたのである。社会的思想、理論、見解、政治的機関のもつ意義について、これらのものが歴史のうえて果す役割についていえば、史的唯物論は、これを否定しないばかりでなく、逆に、社会生活や社会史におけるこれらの極めて大きな役割とその意義を強調するものである。……「理論は大衆をとらえるやいなや、物質的な力となる」(マルクス)……「(ソ連共産党(ボ)歴史小教程)」

勿論ここでいわれている理論は、死んだ理論のことではない。

「我々の学説は教条ではなくて、行動の指針である」とマルクス、エンゲルスはいつもそういつていた。かれらが『公式』をそらんじ、それを単にくり返すことを嘲笑したのはもっともである。何故なら、『公式』は最もよい場合でも、一般的任務を提起することができるだけであるが、この任務は、歴史的過程のなかでの、それぞれの特殊な時期における具体的な経済的、政治的情勢によって形をかえるものだからである。……マルクス主義者は、生きた生活を、現実のなかの正確な事実を考慮すべきであり、きのうの理論にひきつづきながみつくべきでない、というあらゆる余地のない真理を会得すべきである。……」(レーニン、「戦術についての手紙」)

毛沢東の「実践論」を読む場合、実践が理論の源であることを認めるだけでは、この論文の半分しか読んでいないのであり、それ以上に大切な、この理論を導きとして実践するという最も重要な部分を見落しているのである。これを案外忘れている人がいる。

「弁証法的唯物論の認識運動を、もし理性的認識のところでとど

(二) 毛沢東思想の真髄は、革命的能動的反映論であり、その核心が、政治路線を重視して革命闘争を進めることだと思います。政治路線を統帥者として革命闘争を前進させることが核心と思う。これについて若干引用してみます。

「一定の文化(イデオロギーとしての文化)は、一定の社会と政治と経済の反映であり、また一定の社会の政治と経済に大きな影響を与え、作用をおよぼす。そして、経済が基礎であり、政治は経済の集中的表現である。これが、文化と政治、経済との関係、および政治と経済との関係についての我々の基本的観点である。そこで、一定の形態の政治と経済が、まずその一定の形態の文化を決定するのであり、それから、その一定の形態の文化がこんどは一定の形態の政治と経済に影響を与え、作用をおよぼすのである。マルクスは『人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する』といっている。彼はまた『哲学者たちは、世界をいろいろ解釈してきただけである。だが、かんじんなことは、それを変革することである』ともいっている。これは、人類の歴史はじまって以来、意識と存在との関係の問題をはじめとして正しく解決した科学的な規定であり、のちにレーニンがほりきって展開した、能動的革命的反映論の基本的観点である」(「新民主主義論」)

「『人間の意識が……』(マルクス)……我々はここで、まずさしあたりの問題として、社会的思想、理論、見解、政治的機関の起源とそれらの発生についてだけ、社会の精神生活が社会の物質生活めるならば、まだ問題の半分に分れたことにすぎない。しかもマルクス主義の哲学からいえば、それは非常に重要だとはいえない半分に分れたにすぎない。マルクス主義の哲学が非常に重要だと考えている問題は、客観世界の法則性がわかることによって、世界を説明できるといふ点にあるのではなく、この客観的法則性に対する認識を使って、能動的に世界を改造する点にある。マルクス主義からみれば、理論は重要であり、その重要性は『革命の理論がなければ革命運動もありえない』というレーニンの言葉で十分あらわされている。しかし、マルクス主義が理論を重視するのは、まさにそれが行動を指導できるからであり、またその点だけからである。」

「実践論」の核心は、革命理論の実践への飛躍、ここでの能動的飛躍であり、革命理論によって革命闘争を前進させることにあるのである。

革命理論の大切さは、レーニンが「何をなすべきか」でも明らかにしている。革命理論によって革命闘争を前進させること、領導することこそ、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の真髄である。能動的反映論に基づく革命理論によって同志、人民を導くことこそ毛沢東思想である。そして、この革命理論の集中的表現である政治路線によって全ての革命闘争を統帥し、領導すること、これが毛沢東思想の核心である。

「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践を結びつけること、これを正しくなし遂げさせれば、日本革命の勝利は間違いない」(毛沢東)

反米愛国路線の放棄とは、政治思想の転換のことです。

「『経済主義者』やメンシェヴィキの没落はとりわけ次のことで説明される。彼等が、先進的な理論や先進的思想の持つ、動員、組織改革上の役割を認めず、卑俗な唯物論に陥って、先進的な理論、先進的思想の役割を全く無視したために、党を消極的なものにし、無為無策のものにしようとしたことにある。マルクス・レーニン主義が強大な力を持ち、生氣はつらつとしていたのは、社会の物質生活の発展の要求を正しく反映した先進的理論に基づき、その理論をそれにふさわしい高さに引き上げ、この理論の持つ、動員、組織改革上の力を徹底的に利用することを自己の義務とみなしているところにある」(『歴史小教程』)

ここで、極めて注意しなければならないのは、政治と思想の関係です。

「この政治とは、いわゆる少数政治家の政治ではなくて、階級の政治、大衆の政治のことである。政治は、革命的であれ、反革命的であれ、すべて少数の個人の行事ではなく、階級対階級の闘争である。階級や大衆の要求は政治を通じてのみ集中的に表現されるものであるから、革命的な思想闘争と芸術闘争は政治の闘争に従わなければならない。革命的な政治家たち、革命的な政治科学もしくは政治芸術をこころえていた政治の専門家たちは、何千万もの大衆という政治家の指導者であるにすぎない。かれらの任務は、大衆という政治家の意見を集中して、ねりあげ、これをふたたび大衆の中へもちこんで、大衆にうけいられ、実践されるようにすることにあり

……」(『延安の文学・芸術座談会における講話』)

「革命的な思想闘争……は政治の闘争に従わなければならない」これは極めて重要である。もしこれを忘れて、政治と思想を切り離せば、それは劉少奇の「修養論」になったり、史的唯心論になります。政治を忘れた「思想」には絶対に気を許してはなりません。一部旧指導部は、政治に欠落させた「思想」を問題にしてそのような事態を招きました。

政治、政治路線こそ我々の力の源泉であり 原動力である

「軍隊の基礎は兵士であって、進歩的な政治精神を軍隊に注ぎこまなければ、それを注ぎこむの進歩的な政治工作がなければ、将校と兵士との間の真の一致は達成できず、将兵の抗戦の熱情を最大限に燃えさせたことはできず、全ての技術や戦術もそれにふさわしい効力を発揮する最良の基礎は得られない」(毛沢東)

この毛沢東の指摘は、人民解放の政治こそ我々の革命運動の進歩性、正義性、歴史的任務、勝利の確信などの基礎であり、精神的原爆は人民解放の政治から育まれてくるものであることを示すものです。人民解放の政治路線こそ、我々の活動の全ての統帥者であり、我々の魂であり、生命です。我々の革命運動を発展させるには、「政治による統帥に依拠する以外になく、先進的思想で武装した大衆に依拠する以外にないのである」(北京周報)

プロレタリア文化大革命は、我々に、我々の原動力は人民解放の政治であることを一層鮮明にしてくれたと思います。

「政治を前面に押し出すことを堅持してこそ、社会主義の経済的土台を絶えず強固にし、発展させることができ、生産力の高速度な発展を促すことができるのである。これは社会主義社会の発展法則である」(林彪)、「けんらんたる思想、政治の花は必然的に豊かな経済の果実を結ぶであろう」(毛沢東)、「政治工作は経済工作の生命線である」、「政治は経済に対して優位を占めざるをえない」(レーニン)、「どうすれば生産力の発展を促すことができるか、誰に依拠して生産力を発展させればよいのか。政治による統帥に依拠する以外になく、先進的思想で武装した人民大衆に依拠する以外にないのである」(北京周報)

我々は、人民解放の政治を原動力として、軍事、政治、経済、文化の全ゆる分野の建設を行わなくてはなりません。ブルジョア階級や修正主義者は、搾取、利潤を原動力として、軍事、政治、経済、文化の全ゆる分野の建設を行いません。従って、人民解放の政治を原動力とするか、搾取・利潤を原動力とするかは、二つの路線の闘争です。

「物質による刺激、利潤による統帥を行なうか、それとも政治による統帥、思想優先を実行するか」(北京周報)

この二つの路線の闘争は、社会主義社会における文化革命が始ってから存在するものではなく、現在の革命と反革命の闘争の中に厳然と存在しているのです。レーニンも指摘しているように、現在の世界にはブルジョア世界観とプロレタリア世界観の二つしか存在しておらず、この二つの世界観が激しく闘っているのです。革命を成

功に導こうとするなら、プロレタリアイデオロギーを前面に押し出さなければならず、プロレタリア政治を前面に押し出さなければなりません。これは「何をなすべきか」で全面的に解明されています。我々は人民解放の政治を前面に押し出し、これを原動力にしなければなりません。もし、これをおろそかにすれば、それだけブルジョア階級の搾取、利潤の精神に犯されることとなります。我々は米日反動派に反対する中小ブルジョア階級とは団結するが、ブルジョア思想、政治とは徹底的に闘うものである。我々はこの二つの路線の闘争をしっかり把握し、人民解放の政治を前面に押し出し、ブルジョア階級の搾取、利潤を原動力として立ち立てられている資本主義制度を、軍事、政治、経済、文化の全ゆる分野でうちこわさなければなりません。そして、人民解放の政治に基づいて、これを原動力として、軍事、政治、経済、文化の全ゆる分野の建設を押し進めて社会主義制度をうちたて、強固にしていかなければなりません。

「人民解放軍は、党の指導思想の理論的基礎であるマルクス・レーニン主義、毛沢東思想で自ら武装し、終止一貫、確固とした正しい政治方向を保持している」。「人民解放軍には、強力な革命的、政治、工作があり、政治、思想、組織の面から、党の軍隊に対する指導を保障している」(「八一建軍節を記念する」)

軍は、我々の政治路線を原動力とするべきであります。そうしてこそ、真の人民の軍隊は建設でき、今回の誤りと敗北も克服できるのです。

「ある政党が革命を勝利に導くには、どうしても自己の政治路線

の正しさと、組織の強固さに依存しなければならぬ」「政治路線については毎年語り、毎月語り、毎日語らなければならぬ」「思想と政治路線の面の教育を行なう」「政策は革命政党のあらゆる実際行動の出発点であり、同志に、行動の過程及び帰結となつてあらわれる。」(毛沢東)

我々は、我々の政治路線を毎日語り、これを豊富化し、これを原動力としなくてはならない。絶対に、我々の政治路線を少しでもおろそかにしてはならない。

進歩的な政治工作がなければ、将兵の抗戦の熱情を最大限に燃えさせたことはできない」(毛沢東)

この真理を、全党、全軍、全同志にしっかり入れることであります。政治路線こそ、我々の力の源泉であり、原動力である。

われわれの政治路線の重要な部分は武装闘争である

我々の政治路線と武装路線は不可分一体の関係にあります。

「武装闘争を離れ、遊撃戦争を離れて我々の政治路線はありえず、我々の政治路線の重要な部分は武装闘争である」「このような敵を前にしていることから、……革命の主要な方法、……主要な形態……平和的なものではなく、武装闘争のものでなければならぬこともまぎまぎしてくる。」(毛沢東)

我々が、「日帝」などというチャチなものを敵としているのではなく、正しく、米帝国主義と日本軍国主義を敵としているからこそ、武装路線、遊撃戦争路線は規定されているのである。更に我々は「

日帝自立」派と異なって、世界の革命闘争を、とりわけ武装闘争を正しく分析する政治路線の上に立っており、かつ、日本の革命闘争を正しく分析し、武装闘争を正しく評価できる政治路線の上に立っているからこそ、建軍武装路線、遊撃戦争路線を正しく評価できたのである。我々の武装路線は「侵略戦争を革命戦争で打ち破れ」という政治路線からもたらされたものである。

「あらゆる軍事行動の指導原則は自己の力を知り、敵の力を知るという基本原則であり、政治原則と直接つながっている」(毛沢東)

赤軍派は、十・八闘争を契機に、石、ゲバ権闘争を闘う中で、経済分析主義から石、ゲバ闘争を評価できる政治路線へと前進し、更に、武装路線を提起する中で、世界の革命闘争とりわけ武装闘争を評価しうる政治路線へと前進し、次にはハイ・ジャックを闘う中で、中国共産党、朝鮮労働党、ベトナム労働党を評価しうる政治路線へと進み、そして世界の革命闘争、武装闘争を正しく分析できる政治路線と、大菩薩闘争の総括からゲリラ路線を提起しているのである。赤軍派は今や、こうした世界革命闘争に敵対する頭目として米帝を分析し始めている。このように、政治路線と武闘は結びついているのである。赤軍派にあっては、自然発生的に結びつけられている。

だからこそ、我々は共闘することを強く主張したのである。我々は赤軍派の政治路線の誤まっている面のみを目を向けるのではなく、進んできている面を正しく見るべきである。赤軍派の中で、ゲリラ路線を唱えた同志が早く、反米のスローガンの必要性に気がついたのも、決して偶然ではない。「党の合同でなく軍の合同」一赤

軍派はこういっていた。彼らは一方では党と軍は不可分、といっているのに、これではわけがわからぬ」

能動的反映論に基いた革命理論は、革命闘争には必要不可欠のものである

我々は、政治路線のみでなく革命理論を重視しない傾向があるの心配している。木下のような死した教条は必要ではないが、能動的反映論に基いた革命理論は絶対に、革命闘争にとって必要不可欠である。「革命理論なくして革命的行動はない」これは真理です。我々はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の哲学、経済学、社会学説を、現在の革命闘争の必要に応じて学ばなければならぬのであって、これをおろそかにしてはならぬ。

「真面目にマルクス主義の本を読んで学習し、マルクス主義に通じなければならぬ」(毛沢東)

「党の歴史は、労働者階級の党が、労働運動の先進的な理論に精通せず、マルクス・レーニン主義の理論に精通していなかったら、自分の階級の指導者としての役割をはたすことができないし、プロレタリア革命の組織者、指導者としての役割をはたすこともできない」ということをおしえている」(「(ポ)歴史小教程」)

「俗流の事務主義者はそうではない。かれらは経験を尊重して理論を軽視するので、客観的過程の全体を見わたすことができず、明確な方針をもたず、遠大な見通しがなく、ちょっとした成功やわずかなばかりの見識で得意になる。このような人間が革命を指導したな

ら、革命は壁につきあたるところまで引きずられていくに違いない」(「実践論」)

我々の政治路線は、人民解放の思想とマルクス主義の理論に裏付けられているのであり、これによって現代社会と日本社会を分析し、打ち出されているのである。我々は唯物弁証法、マルクス主義経済学、社会学説を必要に応じて学習し、宣伝しなくてはならない。赤軍派もマルクス主義の唯物弁証法、経済学、社会学説の上に現在の政治路線と武闘路線を出しているが、我々は、武闘の前進の為に前述したものの学習は赤軍派にも必要と確信している。赤軍派とは多くの点で一致に近づいているが、少なくとも先の項目位での一致は必要なのであり、この一致のないうちは共闘を進展させる段階であって「新党」など問題にもならないのである。

「弁証法的唯物論の認識論は能動的革命的反映論であり、それはプロレタリア階級が世界を認識し、世界を改造するための先鋭な武器であり、我々がすべての活動の中で、プロレタリア階級の政治を前面に押し出し、毛沢東思想で統帥し、革命運動を盛んに展開するための理論的基礎である」(北京周报)

私は、この理論軽視の傾向が我々の活動の工業化を少なからず妨げ、我々の路線の宣伝を軽視させ(武装建軍党なら、地下党なら、なおさら新聞の役割は重要となるのであって、「宣伝の党」と称してこれを軽視するのは完全な誤り。レーニンの「何をなすべきか」は非合法党のために書かれたのであって、それ以外ではない)、大衆路線を思い切つてとらせない傾向を生みだしている、とみている。

もっと革命理論（生きた理論）を重視し、路線の宣伝を重視し、新聞、通達（一部旧指導部のように、獄中の者にだけ通達を回し、あとは隠すなどナンセンス極まりない）の重要性を認識すべきである。我々は、一般的な革命理論軽視の傾向を心配している。革命理論によってこそ全てを領導できるのであり、大衆路線をとることができるのである。そして組織を強固にできるのである。新聞、通達を軸に「認識を統一し、政策を統一し、指導を統一し、行動を統一」（毛沢東）しなくてはならない。我々は、現在のすばらしい武闘の高揚の前に拝跪するのでなく、これを革命理論によって、その理論による行動を見本として領導し、前進すべきである。全体を革命理論のもとに結集し、強固に組織し、主要な組織として軍をつくるべきであらう。革命理論なくして強固な軍はつくれない。そして、この強固な軍が建軍武装闘争を領導するのである。

侵略戦争を革命戦争で打ち破ろう！

「新しい世界大戦の危険は依然として存在しており、各国人民は必ず備えがなければならぬ。だが、当面の世界の主な傾向は革命である。「闘いの道は曲りくねっているとはいえず、中国人民の前途は光明にみちている」（毛沢東）「日本反動派が道理にもとる行動をとるのは、見かけ倒して実際には弱体というこの本質を物語るものであり、中国人民の革命勢力の成長と発展を反映するの他に他ならない」（人民中国）「アメリカを始め、帝国主義は今や衰退しつつあり、必ず破滅するであらう。世界人民の、進取し、勝利しつつあ

る態勢はとどまることなく発展している。世界の革命勢力は、進取戦略態勢をとって帝国主義を一步一步後退させ、部分ごとに打ち倒しつつ、その必然的な滅亡の過程を推し進めている」（ベトナム労働党）

我々は、(一)米日反動派がアジア全面侵略戦争の道へと進んでいるのを暴露すると共に、(二)これを打ち破れるのは革命戦争だけであり(三)かつ、この革命戦争は勝利するものであることを宣伝しなくてはなりません。「中国人民の前途は光明にみちている」ことを強調し、革命戦争は必ず勝利することを強調すべきです。

川島 豪 軍の統一問題について

朝日新聞八月八日朝刊によれば、我々が赤軍派と合流して赤軍ができたそうです。私はこれについて若干の意見を述べてみます。全党、全軍、全同志の皆さんが、早急にこの問題について検討されることを訴えます。討論の方向次第で、我々は分裂する恐れさえ秘めているからです。昨夜は不眠のため、よくまとまっていないかも知れませんが、基本的見解を短く述べます。

第一に、我々は武闘派と団結すべきであり、とりわけ赤軍派とは党、軍、統一戦線のあらゆる分野での合流をめざさなくてはなりません。これは我々の願望であり、赤軍の願望であり、中国人民の願望です。これは武闘の前進を大きく促すものです。

第二に、しかし、このために我々は、赤軍派との政治面での一致を勝ちとらねばなりません。日共（左派）神奈川県委結成にあたっては、政治路線の面での完全一致をかちとりながら、実践面での互いの検証がなかったために党建設で多くの誤りを犯しました。今、

我々は赤軍派と実践面ではお互いに検証しあっていつつあります。しかし、諸君も知っている通り、政治路線の面では明らかに異なっています。したがって、この面での一致を、何よりも一つ一つの実践の中で、お互いに団結して闘う中でかちとらなければなりません。だが、まだこの面での一致はかちとられていません。それ故に、党の次元での合流はまだできません。私はこのためには赤軍派が反米愛国路線をかちとることが主な条件だと信じています。

ところで、問題は軍の合流の条件は何なのかということですが、それは赤軍派が反米愛国路線をかちとるか、少なくとも反米反軍国主義をかちとることが条件です。この条件なくして軍の合流はありえません。もし、この条件を放棄したなら、とりもなおさず我々の政治路線を放棄することになります。党と軍は、革命にとってきわめて大切な組織であり、この両組織は明確な政治路線をかかげていなくてはなりません。ましてや、地下党と地下軍とは多くの点で一致しており、不可分の関係にあります。もし、これらが政治路線をあいまいにすれば、組織路線をあいまいにすることになり、小ブル無組織主義を軍内に持ちこみ、地下軍の危機をつくり出します。したがって、最底線、反米反軍国主義の政治路線が軍の合流の条件です。これらの条件が整うまでは合流すべきでなく、その条件をつくるべきです。そして、合流の一手手前の団結、共闘の強化、二つの組織を互いに保存させての連合軍の建設などです。それにはいろいろな形がありますが、基本的には人民革命軍を絶対に解消しないということです。合流の以前に解消すると、党が軍権（軍に対する絶対的

指導権)を放棄することになりかねません。

ところで、今回の合流はこの条件が満たされてのことでしょう。それとも人民革命軍を解消せずに統一したのでしょうか、まだ詳しいニュースがわかりませんが、私には両方共疑問に思われます。これは明らかに、目の利益を追いあまり、我々の輝やかしき反米愛国路線を放棄したのではないのでしょうか。政治路線がすべてを規定するのであるから、いそいで合流しても長い目でみれば決して益にはならないでしょう。我々はまだ人民革命軍を守って、そのうえで統一戦線組織をつくるべきの団結の方向をとるべきではないでしょうか。

現在の日本の状況では党と軍は不可分に結びついています。又、軍は本来、党に準ずる綱領を持つべきであり、どの国の人民軍も持っています。ところが我指導部は、反米愛国路線を放棄し、人民革命軍を解消して合流していると思います。私は無原則的な合流に断固反対します。反米愛国・反米反軍国主義は現在まで我々をばぐんできた源泉です。これを一時の利益のために放棄するのは断固反対します。私は、放棄しなくても赤軍派と団結できるし、何よりも日本人民と団結できると確信しています。反米反軍国主義のもとに合流してこそ真の合流といえるのであって、それ以外は「合流」ではありません。何をそんなに急ぐ必要がありません。一歩一歩団結を固めて合流してもよいはず。指導部は政治路線を軽視していると思うし、自らの軍の大切さを理解していないと思います。

第三に、これを決めるにあたっての指導部の独断専行です。党、

軍は我々の生命です。その生命の一つを他の組織の生命の一つと合流させようというのに、全党にも全軍にも何らわかっていません。現在の状況下では、多くの問題が、重要な問題であっても指導部の独断になるのは当然です。しかし、合流そのものについて位、全同志にはかってもよいのだが、全然それらをやらす独断で決定しました。我々の組織であり、全てのもので革命をやっているものであり、一部の人ではありません。皆を勇躍させるよう、こうした大きな問題はなるべく全員を討論に参加させ、基本方針を出しておくべきです。これをしなかつたため、私の条件についても聞こうとしませんでした。私はこの独断に断固反対です。

以上のような理由から、次の二点を指導部に要求します。

一、反米反軍国主義で合流すること。もう合流してしまったのなら、これを統一軍に掲げさせること。これが合流の条件にならないのであれば、これを連合軍としてその中に人民革命軍を保存する。

二、独断専行を自己批判すること。

以上二点が認められぬ時は、私は脱党する。現在頭苦になっていないかも知れないが、これは武闘において政治路線を重視するか否かの問題になると思う。こんな調子で党建設においても、共産同など作られたらたまったものではない。私は本来、反米愛国路線の日共(毛沢東思想)、人民解放軍、反米反軍国主義の統一戦線は可能と思っている。要するに、武闘を強調したので、政治路線の大切さ

を忘れていると思う。あくまで、政治路線軽視、独断をするなら、私はもう一度反米愛国のもとに党、軍、統一戦線を作るだろう。

私は何度も反米反軍国主義で団結するよう呼びかけたが、これを軽視している。私が革命軍を軽視しているのでは、という批判があったが、私は一貫して主張しており、ナンセンス。一時の利益を追えば必ず失敗する。

反米愛国は我々の生命。

一九七二年四月

いま我々に、あらゆるたぐいの誹謗、中傷、非難、恐怖の一大キヤンペーン攻撃がなされている。

反動のうじ虫や吸血鬼共がこぞとばかりのさばりだし、我々の犯した誤りや、失敗にへばり喰いつき、革命の魂を抜き去ろうとしている。

軍国主義者や御用評論家、そしてエセマルクス主義者、宮本現代修正主義集団の我々にむけた意図的な、悪意のこもった攻撃は、心ある人々の革命への情熱に水をかけている。

彼等の狙いは、マルクス主義の真髄であるプロレタリア独裁の思想、暴力革命の思想を狂乱の思想として烙印を押し、恐怖のキヤンペーンを張りめぐらし、そして、日本におけるベトナムの現実を人民の目からそらせることである。革命戦争を一部狂乱にかられた殺人集団のたわごとにし、広範な人民を武装闘争から隔離し、武装闘争、せん滅戦に政治的「死」を宣言し、その生命を抹殺することが

彼らの真の狙いである。

捕われて一ヶ月余、自分はいかにしたらこの荒れ狂う反動の逆流に抗すべがあるのか考えていた。敵に対して完然を貫くことは原則である。しかし、我々の犯した誤りが権力の手によって政治的に利用され、しかも、それへの反撃の手段が一切奪われた時、完然のみではもはや闘いえないことがはっきりした。

この手記を書く決心をしたのは、一刻でも早く、我々が犯した重大な誤りを人民の前に明らかにし、真摯な自己批判によって、反動の悪意ある攻撃から革命戦争の利益を守り、亡くなった多くの同志達の革命戦士としての名譽を回復しようとする願いの一心からである。

権力の手の中で自己批判を書くほど屈辱的なことはない。だが、いま我々が自己批判をしなければ革命戦争の利益は失われ、多くの革命人民に失意と落胆を残すのみである。

真にまじめな、真剣な自己批判なら、権力の手の中で書かれたものであっても人民に通用するはずである。

嘘やペテンが闊う人民の間には通用しない。宮本現代修正主義集団がプロレタリアート独裁の放棄を嘘とペテンで正当化した時、それは人民に真つ向から敵対する米日反動の別動隊としての役割を演じる反革命集団に墮落することであったことは、多くの革命的人民が、日々の反米愛国闘争の実践の中で見抜いている。歴然たる事実である。

科学を重んじ、真実を大切に、人民の利益に自らの利益を合致さ

せようと望むとき、一体我々に何を恐れるものがあるだろうか？

人間、革命の追憶だけで、真に人間として生きていけるだろうか。考え、悩み、苦闘し、もがき続け、あえぎあえぎでもいい、人間としての道を自分にあゆみたい。

軽井沢での十日間、我々は生きる限り敵との闘いを貫徹しようと確認してきた。同時に暗黙の了解であったが、そうする事が我々の犯した重大な誤りによって亡くなった同志達に対する我々自身の償いとしてあった。

いま再び我々は、この決意を新たな闘いに向けた決意として、思いを新たにしなければならぬ。胸の奥深く、息苦しく、暗く立ちふさがるとこの暗雲を払いのけなければならない。

今、権力に捕われている私は、けだし、権力に裁かれることには絶対にいさぎよしとしないことを云っておかなければならない。何故なら、我々が犯した誤りは、まさに我々を裁こうとしているこの権力とこそ闘おうとして犯した誤りであり、事実として軽井沢での闘いは、いくら彼等が消し去ろうとしても消し去れない事実として残っているのだから。我々を真に裁きうる人々は、革命を心から頼み、米日反動と闘い、又闘おうとしている、こういう人々である。米日反動が我々の犯した誤りに口をさしはさむ理由の一切はどこにもなければ、ましてや、我々を裁く権力はどこにもない。

今回、我々指導部の誤りはあまりにも重大であり、あまりにも多くの犠牲者を生みだしてしまった。いうまでもなく、この誤りの全ては指導部の指導の誤りに起因している。即ち、このよりの結果を

もたらす根本原因は、昨年七月の連合赤軍の結成にあったからである。連合赤軍の結成とは、即ち、新党建設を前提とした、明確な政治路線の一致抜き、軍事の統一のみに走った連合赤軍の結成だったのである。獄中同志（革命左派）を一切無視して行なった、この連合赤軍結成に対して多くの獄中同志からの、政治路線の反米愛国路線無視の原則逸脱、独断専行による正しい党内闘争の原則放棄という同志的批判があったにもかかわらず、我々は目先の軍事的要求に、党の利益の全てを解消させてしまったのである。そこには、唯統主義に基づく実践がすべてであるとすると獄外の我々のどう慢な態度が露骨にあらわれ、獄中、獄外の批判と自己批判の正常な往復を自ら妨げてしまった。

それは嘘、欺瞞の汚らしいブルジョア政治以外の何ものでもなかった。そして、政治路線の無視は我々の視野を自らせばめ、大局から闘争を見ることを忘れさせ、いたずらに目先の敵を過大に見ていたのである。このことは同志に対する信頼を次第に喪失させ（とりわけ獄中同志）、いたずらに不信をつのらせ、人民に対する信頼をも喪失させていった。ある時期には、獄中同志の批判を一時的に受けいれたものの（形式において）、唯統主義の一点論（注一）を根強くもっていた我々は、やがて獄中同志の批判を足下にし、逆に彼等の、とりわけ指導的同志の個人のブルジョア的欠陥（注二）にその批判を集中させていった。その欠陥があたかも指導者としての政治生命にかかわる重大なものごとくとりあげた我々は、自身の政治路線の放棄をこの批判によっておおい隠してしまったのであ

る。あまりにも大局観を逸した(注三)我々は、分別のつかぬ批判を獄中同志を中心に展開していったのである。同志達の反米愛國闘争に果した実績を個人のブルジョアの欠陥を理由に抹殺し、敵対していったのである。革命闘争の中で果した実績によって個人をみるのでなくして、個人の中に革命闘争の全てをみてしまったのである。又かつて脱落者に対して誤った処置を下した我々は、団結の方法において、とりわけ指導方法・建軍について正しい改革を行ないえず、脱落者個人へのみ批判を集中させた。その結果、目に見えぬところで組織の団結にひびがはいり、指導部と同志達の間で亀裂が生じていた。しかも政治路線を無視した結果、多くの同志達の革命性は萎縮していった。組織の力を新鮮な政治の導入による、同志の政治的自覚に基づく革命性に依拠して築きあげていくのではなく、指導部の唯統主義に基づく上からの押しつけは、指導部自らにお山の大将主義を形づけていった。そして追撃されるなかで、その小ブル急進主義は助長させられ、ごう慢、お山の大将が完成していったのである。政治路線の無視、党内闘争の原則放棄、脱落者に対する誤った処置は、指導部自らを腐敗させていったのである。

十二月の暮から始まった、いわゆる新党建設は、唯統主義の一点論と党の共産主義化を中心軸にした、小ブル急進主義者の指導する党として始まったのである。獄中の指導的同志に対する個人的なブルジョアの欠陥への非難の集中攻撃は、日共革命左派の築きあげてきた全遺産の否定に発展していった。同時にそれをもって、新党に反対するもの全てに分派の宣言、即ち反対者に銃口をむけること

あったのである。新党の指導的部分の、過去の闘争離反の事実(注四)は、一切の自己批判抜きに正当化され、逆に指導部の過去の闘争実績を中心軸に階級闘争が語られ始めたのである。

歴史は次から次へとぬりかえられていった。武装闘争を切り拓いた同志達の実績は、宣伝の武闘、右翼日和見主義のレッテルのもとに否定されていき、あたかも我々のみが革命闘争の主人公であるかの如き幻想にとりつかれたのであった。ただ唯統主義の一点論は獄中同志に対し、統一戦線党のレッテルを貼り、自ら広範な革命人民との結合を否定して武装闘争、せん滅戦を孤立させていったのである。そして党の共産主義化の中味は、我々は小ブル急進主義者指導部の、同志達に対する野蠻な個人への強制でしかなかった。同志達の個々の誤りや失敗はその同志個人との闘争という方式で行なわれたのであった。そして、その闘いにおいて野蠻な強制の手段がとられるや否や、それは脱走防止へとつながっていくのであった。人民内部の矛盾の処理について重大な原則の逸脱を行なった結果、そこには真の同志愛が生まれるはずはなく、固い組織の団結がはかれるはずがなかった。

憶測、推測が公然とまかり通り、科学を否定し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の原則無視・放棄が行なわれた結果、悲劇が始まったのである。ごう慢、おごりは指導者として敵にいましめなければならぬことである。しかし、そのいましめなければならぬことが、次第に我々指導部の中に形成されていったのである。真理の放棄が人間を墮落させていったのである。マルクス・レーニ

ン主義、毛沢東思想の国際プロレタリアートの血の教訓、築きあげられた普遍の原則を放棄した時、党は墮落し、腐敗し、敵を見失い、味方に弓矢をむけ、自壊していくのである。真理とは何だったのか。それは広範な被抑圧階級の利益と必ず一致しているはずのものではなかったか。尊い同志の生命に一体何がおきかえられたのだろうか。同志の生命にかわって、なぜ自分自身の生命を投げうつことができなかったのか、真実を公然と主張して。

私はいままで、党の政治路線・反米愛國路線を放棄し、唯統主義を主張し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の正しい党内闘争の原則を無視し、無原則的党建設を行ない、その結果多くの同志にとりかえしのつかない重大な犠牲を強いたことに対し、いかなる責任を負うべきかわからなかった。そのもたらした結果があまりにも多大な犠牲を同志に強い、又反米愛國闘争に対し、とりわけ武装闘争に対して与えた重大な損失について考えた時、唯ぼう然とするのみであった。だが、権力によって捕らわれた同志達が次から次へと崩されるのを見るにつけ、権力に対するくしみと我々自身の小ブル急進主義に対するくしみは増加していった。そうする中でいまま私がやらなければならないことは、反動派からあく迄革命闘争の利益を守り、その為には自己批判の第一号を指導部として責任ある自分自身がまず行いべきであると考えたのである。苦しみ、苦しみ抜いて、真理をつかむ迄は、この自己批判はくりかえし行なわなければならない。今は亡き多くの同志達の、革命戦士としての名譽を回復させるために。

(注一)「一点論」といっているのは、獄中から「大衆闘争を軽視している。武闘一点論である」と批判したためと、「統の武闘のみでなく、爆弾闘争も重視しなければダメだ」と批判されたことに対していっている。

(注二)「指導的同志のブルジョアの欠陥」といっているのは、具体的には、

(イ)「反米愛國路線・政治を軽視するなら脱党する」

(ロ)「今までN(一部旧指導部のうちの一人)あてに出していた手紙をKに回すようにいえ。今後はNでなくKあてに出す」

(ハ)「誤りを統けるならもう手紙は出さぬ」

などと手紙を出したことをさしている。一部旧指導部は面と向って何一つ「批判」などできなかったが、カゲでは「これは脱党をおどしに使っている。おどかして批判している。これは党を私物化した思想であり、ブルジョアの決定的誤りである」などと「批判」し、こじつけを行なったのである。

(注三)「大局観を逸した」といっているのは、獄中から「大局観をもって主要矛盾をおさえよ」と指摘されたことに対していっている。

(注四)「新党の指導部の部分の、過去の闘争離反の事実」とは「新党」の議長になったという。元赤軍派Mの過去の再三にわたる闘争離反のこと。

武闘清算・軽視を粉碎せよ！

武装闘争清算路線に断固反対する

渡辺正則

「山岳」の敗北、統率戦の敗北、「新党」結成の誤り、「肅清」の誤りは、すでに獄中声明文と革命左派の声明文で述べられているように、政治抜き「左」翼日和見「軍事路線」が必然的にもたらしたものであった。これについての総括と自己批判、闘争方針もすでに基本的に明らかにされている。

ところが現在、武闘派の一部の同志の中に、武装闘争を清算し、大衆闘争のみに専念すべきであるという主張があらわれている。この主張は断じて軽視できない。

内外の革命闘争の歴史をみれば、「左」右の日和見主義は交互にあらわれるものである。現在の我々にとつて、武闘派にとつて、「左」翼日和見主義の重大な誤りと敗北を克服しなければならぬ任務に直面しているが故に、そして武闘派がフアツシヨの弾圧にさらされているが故に、一部同志の武装闘争清算の右翼日和見主義は、きわめて危険な傾向であるといわねばならない。我々は、これには

断じて気を許すべきではない。

このような武闘清算路線が発生してきた背景はどこにあるのか。それは、「左」翼日和見主義と同じく、やはり政治路線の軽視である。

「左」翼日和見主義——今回の一部旧指導部の誤りと敗北

右翼日和見主義——第二山口派、木下派、武闘清算路線

この「左」右の日和見主義の根源は同じであり、それは政治路線の軽視である。政治路線を軽視すれば必ず「左」右にブレるのである。我々はすでに政治第一の観点から「左」翼日和見主義を批判したが、ここではこの右翼日和見主義を批判し、再度、政治第一の観点をしっかり確認したいと思う。反米愛国路線はこうした「左」右の日和見主義とは、はっきり一線を画すものである。

さて、武闘清算路線によれば建軍武装闘争は「冒険主義」だそうである。そうだとすると、山口左派、木下一派は基本的にずつと正しかつたことになる！ 柴野同志も、今回犠牲になつた同志達も「犬死」をしたことになり、獄中の同志はムダに逮捕されたことになる！ とんでもない！ 我々はこのような見解に一体どうして賛成できようか！ しかし、ここは感情をおさえて、建軍武装闘争そのものから冷静に分析して行くことにする。

我々の建軍武装闘争は間違っていたらどうか？ 情勢を無視した「冒険主義」だったらどうか？ 反米愛国路線から規定されるのは大衆闘争のみで、建軍武闘は規定されないのだからか？ 我々は断じて、否！とこたえる。幾多の血の教訓をどうひっくり返しても「冒険主義だ」などという結論は出てきはしない。

なぜ、「冒險主義」などといえるのだから!

もし現在の日本に建軍武闘が燃える条件がないのであれば、たしかに冒險主義に違いない。もし建軍武闘を闘うことが日本の革命闘争を破壊するものであれば、冒險主義に違いない。だが実際はどうなのか。「左」右の日和見主義は必ず事実を軽視するが、我々は事実を何よりも重視する。

建軍武闘は急速に燃え広がるという条件は今のところないが、確かに燃えるではないか。多くの先進的の人民の支持と共鳴を得ているではないか。建軍武闘こそ勝利を切り拓く道であることが明らかとなり、これに燃える部隊が登場してはならないか。爆弾闘争は一定程度、大衆化しているではないか。建軍武闘こそ日本人の革命闘争を領導してきたではないか。革命か反革命かは、他でもなく建軍武闘をめぐる明らかになっているではないか。これらは全て事実ではないのだろうか。

たしかに「蜂起」主義(水ぶくれ軍団主義、一箇所に集中する合法主義)は「左」翼日和見主義であり、盲動主義、冒險主義である。これ故、重大な誤りを犯し、敗北してしまった。しかし、このことは、建軍武闘そのものが冒險主義であるということを示すものでない。これは建軍武闘に徹しなかつた、すなわち大衆闘争主義、戦闘団主義に陥つた故の誤りに他ならない。建軍武闘に徹していたら、このような誤りも敗北もなかつたであらうし、着実に大きく発展したに違いないと我々は断言する。追いつめられていった過程は、まさに外因が内因を通じて作用していった過程であり、「蜂

起」に狂奔している。

第五に、同じく反米愛国路線によれば、日本人(革命の原動力)はプロレタリア階級を中心とした極めて広範な部隊であるが、反面、人民の武装はゼロに等しく、人民の内部に修正主義、社民の影響がかなり強い。

主にこの五つの条件から、建軍武装闘争の正しさが証明されるのである。すなわち、強大な軍事力をもつ敵であるが故に、人民も強大な軍隊を建設し、武装闘争を闘わねば勝利はないこと。しかし敵は大、味方は小であり、現在のところ敵が急速に崩壊し、味方が急速に強大となる条件がない以上、遊撃戦争戦略(「少しづつ敵をかじり味方を拡大する」「勝てるなら闘い勝てないなら去る」)をとらなければならぬこと。軍は少数精鋭、ピラミッド型の完全地下軍でなければならず、その闘争形態は遊撃戦であること。建軍武闘は一步一步大衆化していかなければならず、広範な統一戦線、大胆な大衆闘争と不可分一体のものであること。我々はこうした内容をもつものを建軍遊撃戦と呼ぶのであるが、これが前述の条件から必然的に規定されているのである。

建軍武闘を「冒險主義」といふのなら、そもそもこの点、すなわちマルクス・レーニン主義、毛沢東思想、反米愛国路線、現実の世界、日本の具体的情勢から、一体如何なる闘争形態、闘争方法が導き出されるかを述べねばならず、我々の以上の理論をまず批判しなければならぬはずである。そうでないと論争になりはしない。しかし、残念ながら、こうした点からの、あるいは実践的な点からの

「起」主義故に追いつめられてしまったのである。すなわち、水ぶくれ軍をつくり、政治による統帥をやらす、「決意」一般のみを要求したため、内部矛盾が次々と発生し、正しく解決できなかったためである。

以上の敗北の事実を分析する時、建軍武闘は情勢にかなっており正しい、と我々は一層深く確信する。これについて簡単に述べておこう。

第一に、建軍武闘は一部小ブル分子が頭の中でこねあげたものではなく、日本人が反米愛国闘争の中で生み出したものであり展開しているという事実である。

第二に、建軍武闘は日本のみの闘争形態、闘争方法ではなく、アメリカ、北アイルランド、西ドイツ、フランス、カナダ、メキシコ、の「先進国」においても広範に展開されている事実である。

第三に、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の立場にたてば、「現代は帝国主義が、全面的に崩壊し、社会主義が全世界的に勝利する時代」であり、帝国主義の侵略を革命でうち破る時代である。そして、社会主義国、被抑圧民族の革命闘争が帝国主義国内の武装闘争を促している時代である。

第四に、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を日本革命に適用した反米愛国路線によれば、日本革命の敵は米日反動派である。これは異常に強大(軍事力、警察力、経済力)な敵であるとともに、極めて奸智にたけた敵である。彼等は政治的、経済的に苦境に陥っており、アジア全面侵略戦争準備、ファッショ治安体制構築

批判はまるでなされていない。このことから、始めに述べた通り政治路線がまったく軽視されていることがわかるのである。

あの木下一派も本質的には同じであり、彼らは「労働人民が未だ決起していないから、日本革命の闘争形態はまだわからない。武闘には反対」などと、あれこれ難くせをつけて「批判」はするが——まともにはなく、カゲで——米日反動派をきれいさつぱり消滅するにはどうするのか、人民のどの部分(進んだ部分か、中間の部分か、遅れた部分か)に依拠するのか、という革命のもつとも根本的な問題には触れようとはしない。我々はどういう面からの批判を切に望むものである。木下一派は、すなわち、反米愛国路線を題目としてあがめたてまつっているのみで、それを実践に適用せず、生きた政治としていないのである。生きた反米愛国路線からは、建軍武闘反対なる立場など断じて出てはしない。また事実として、日本人の敗北した武装闘争は、以上の建軍遊撃戦の原則からはずれてきたため(ある場合は経験不足でわからず、ある場合はこれを否定したため)、敗北してしまったことは明らかである。こういうまきれもない事実を分析せず、無視して、「武闘の条件はない」「冒險主義」「川島路線の破産だ」などと、のしることを我々は断じて許さない!建軍武装闘争は理論面からも実践面からも、疑いもなく正しい!反米愛国路線と建軍武闘は不可分一体である!

これは当然のことであるのだが、武闘清算路線は必ず「一か八かの蜂起」路線(大衆闘争→蜂起)になってしまふ。主観的にどう考

えよりとこりなってしまう。もっともましな場合でも、少数精鋭、完全非合法の軍建設が否定され、大衆闘争として武装闘争（しかもゲリラ戦）をやる、ということになってしまふ。我々の血の教訓に真に向から反する驚くべき意見だが、これは現実にあらわれているのである。軍なしで武装闘争（しかもゲリラ戦）をやる、大衆闘争として武装闘争をやる。同志諸君！これこそ、冒険主義ではないだろうか。敵は銃をもって人民を殺そうとしているのであり、軍隊、警察として組織されているのである。これと闘うのに、人民の軍隊は必要不可欠ではないだろうか。我々は銃口を向けている敵に対して、裸でまともに闘うのはごめんだから。「敵以上に強固で戦闘性のある（その根源は政治路線）軍隊は絶対に必要である」と断言する。

ここで、この「武装大衆闘争」なるものと、我々の一歩一歩大衆化していく建軍武闘との違いにふれておこう。我々の、少数精鋭、完全非合法の軍（五人の場合もあり、千人の場合、それ以上の場合もある）をあぐまで断固堅持するのである。この軍自体は断じて最後まで水ぶくれ軍団とはしないが、この軍は広範な人民（統一戦線）の直接、間接の支援をうけるのであり、また、この軍以外の武装力も大いに建設し、武装闘争自体広範なものとしていく。一歩一歩このようにしていくのを我々は建軍武闘を大衆化していくというのである。ところが「武装大衆闘争」なるものは、水ぶくれ軍団さえもなしで、大衆組織のまま武装闘争をやるというのだ。従って、この二つは決定的に異なっている。しかし、軍なしで武闘を闘うこと

ができるであろうか。すでに何回も試みられて結果は明らかとなっているのではないだろうか。中核派などでさえ（実践はいざ知らず、言葉のうえで）、これより一歩進んでいるのではないだろうか。現在、少数精鋭の建軍遊撃戦と広範な大衆闘争は、どちらも必要（武闘が中心であるが）である。なぜなら、建軍武闘は確実に燃える条件はあるが、急速に大衆化する条件がないからである。一般的にいって、どこの国の革命闘争においても全人民蜂起が可能となるまでは、武装闘争と他の大衆闘争はどちらも必要であり不可分一体である。この二つを区別すると共に統一して闘うことは、毛沢東をはじめとしてマルクス・レーニン主義者であれば、皆言っていることである。

「武装闘争に重点を置くことは、他の形態の闘争を放棄してもよいという事ではない。反対に、武装闘争以外のさまざまな形態の闘争の呼応がなければ、武装闘争は勝利を得ることができない」（一九三九年一月、「中国革命と中国共産党」）

毛沢東は抗日戦争の真つ最中でさえも、このようにいっているのである。まして、現在の日本の条件下ではあくまで武闘が中心であるが、どちらも必要だということは論をまたなす。

もし、武装闘争の条件がないのなら平和的大衆闘争のみに専念すべきである。もし、全人民蜂起の条件があれば、あるいは決戦的段階（中核派などの「決戦」ではなく、敵を打倒するかどうかの決戦）であれば、全人民は銃をとり、全ての組織を武装闘争に投入しなければならぬ。しかし、今はそのどちらでもない。そして、これは

二者択一といった問題ではないのである。武装闘争と他の大衆闘争は互いに弁証法的な関係にあるのであつて、我々は弁証法的に発展させていくのである。

革命の隊列を政治的レベルや任務その他によって区別するのはあたりまえのことである。君は銃、君は爆弾、君はグバ棒、君はデモ、君はペン、君はレボ、君はオルグ、君はサークル、………これは全く当然であり、できるだけ厳密にこうしなければ（これは、合法部門と非合法部門をはっきりさせることでもある）、武装闘争、統一戦線、党建設などまったくの空文句にすぎなくなる。このように区別し、工業化し、そして全体を高い段階に引きあげていくのがプロレタリアートの大衆路線ではないのだろうか。どうしてこれが「ナンセンス」なのだろうか。我々は全く理解に苦しむ。全人民が武器をとらないのなら、武闘は「冒険主義」（すなわち、闘うべきでないということなる）なのだろうか。それなら「正しい武装闘争」など古今東西一つもなかったと断言しよう。なぜなら、真に全人民が組織されるのは革命権力（プロレタリア独裁）が樹立されたものであるから。革命家は客観条件があるのなら、少数であつても断固として立ちあがるべきなのである。闘いの中で（主観と客観が一致していれば）多数派となつていくのである。

最後に、我々の建軍武闘が「戦闘団主義だ」ということであるがこれについて述べよう。ここでいう「我々の建軍武闘」とは、昨年六月に集中し、半年後必然的に破産したあのような水ぶくれ軍団のことをさしているのではない。我々を「批判」して敗北したのであ

る。「軍」と「戦闘団」の違いは何か。普通、目的意識的に建設されるものと、大衆実力闘争の延長線上に自然発生的に生まれたものと区別されている。もう少し詳しく見よう。

軍とは、プロレタリア階級の党（正しい政治路線）の絶対的指導をうけ、政治的には党と同じレベルにあり、銃火器を中心とする武器で武装し、革命的規律をもち、他の大衆組織とは明確に区別され、敵軍を消滅する組織である。

戦闘団とは、正しい政治路線の指導をうけず、さまざまなレベルのもので構成され、規律を重視せず、大衆組織との区別がなく、しかし、武器をもって敵と闘おうとするものである。

我々がこのような戦闘団建設を一体いつ主張しただろうか。我々は断じて戦闘団ではだめだと何回も指摘し、誤りと激しく闘ってきたのである。そして軍なのか戦闘団なのかの違いは、何よりも正しい政治路線を重視するか軽視するかである、といってきたのである。それとも、大衆組織と明確に区別された軍は「戦闘団」にすぎないだろうか。それなら、中国人民解放軍も朝鮮人民軍もベトナム人民軍もすべて「戦闘団」であつて「軍」ではない。そして、全人民が軍で、軍とは人民そのものだ、ということになってしまふ。

ものごとはすべて「一が分かれて二となる」ものである。「左」翼日和見主義批判の中から、今度は右翼日和見主義が登場してきたからといって何の不思議もないことである。我々はこうした同志に對し、もっと反米愛国路線を学習し、血の教訓をけつして無駄にし

ないでくれるよう心から要請するものである。

我々自身は、こうした反面教師の役割を重視し、ますます反米愛国路線を第一とし、反米愛国路線を深め、発展させ、人民遊撃戦争戦略戦術、反米愛国統一戦線戦術を堅持し、創造的に発展させなければならぬ。この中でしか党建設は問題にならないのである。

柴野同志、犠牲になった同志達は決して「大死」したのではない！

偉大な建軍武装闘争のため、全てを捧げた革命烈士である。

さらに、彼等を「大死」としてしまいかどうかは、何よりも我々の闘いにかかっているのである。

我々は永久に思想・政治を第一とすることを誓う。

建軍武装闘争を堅持し、人民遊撃戦争戦略戦術を堅持することを誓う。

反米愛国統一戦線戦術を堅持し、発展させることを誓う。

反米愛国路線こそ勝利への保証である

川島 豪

理論、政治路線は意識的に革命運動の実践に持ち込まなければならぬ。

現在、京浜安保や赤軍派は建軍武闘を闘ったから、その必然的帰結として正しい政治的観点を失い敗北した。建軍武闘を闘うのではなく「大衆闘争」を闘ってれば正しい政治的観点を持つことが出来る。敗北することはない」とする反動的見解が「革命派」の中の一部の人達によって語られている。「建軍武闘を闘えば、その必然的帰結として正しい政治的観点を失う。「大衆闘争」を闘っておれば、正しい政治的観点を持つことが出来る」というこの見解は、全くマルクス・レーニン主義にそむくものであり、日本階級闘争の歴史的事実にも全く合致しないものである。

レーニンが教えているように、正しい政治路線、理論は決して革命的人民の自然発生的運動の中から生み出されるものではない。ましてや、この自然発生的運動から、わざわざ建軍武闘を排除したと

ころの「大衆闘争」の中からは、決して生み出されるものではない。一部の人達の見解は「社会主義的イデオロギーが労働者階級の自然発生的運動の中から生まれると主張して、労働者階級をあげむいた」（ソ連共産党（ボ）歴史小教程）「経済主義者」と全く同じ見解であり、現代「経済主義者」の見解である。「実際には、社会主義的イデオロギーは、自然発生的な運動のなからではなく、科学のなから生まれる」（同）のである。それ故、我々は「まじめにマルクス主義の本を読んで学習し、マルクス主義に通じなければならぬ」（毛沢東）のである。「建軍武闘を闘えば、その必然的帰結として、正しい政治的観点を失なう」のでもなければ、「大衆闘争」を闘っておれば正しい政治的観点を持つことができる」のでもない。建軍武闘を含めて、革命的人民の自然発生的運動に拝跪すれば、この運動に革命理論を持ち込む任務を、おろそかにすれば、その必然的帰結として正しい政治的観点を失なうのである。

一部の「新党」派の人達が正しい政治的観点を失ったのは主として、自然発生的運動の一部分（武闘）これは中心ではあるが）に拝跪してしまい、革命理論によってこれを統帥せず、革命理論によって建軍武闘を革命運動の全局の中に正しく位置づけることをせず、建軍武闘の意義を一面的に拡大解釈して武闘単一主義に陥り、もって建軍武闘の自然発生的性に完全に拝跪してしまつた結果である。要するに、建軍武闘の自然発生的性に拝跪して、革命理論を極度に軽視したためである。

日本階級闘争の歴史は、革命的人民の自然発生的運動に拝跪して

この運動に革命理論を持ち込む任務をおろそかにすれば、その必然的帰結として正しい政治的観点を失うことを証明している。とりわけ、六〇年安保以来の「新左翼」の歴史をみればこのことは、一目瞭然ではないか。六〇年以来、革命的諸党派が、正しい革命理論を、自然発生的運動の中に持ち込むことに成功していないため、日本革命運動の中に正しい政治路線が確立されておらず、従って党建設が未だにできず、内ゲバが絶えず発生し、この革命運動が勝利への軌道にのっていないことは誰もが承知のことではないか。これは他でもなく、革命的諸党派がマルクス・レーニン主義の理論を重視せず、自然発生的運動の前に拝跪してきたことに大きな原因があるのでないか。現実には建軍武闘を闘わずに「大衆闘争」を闘っている諸党派もまた分裂と内ゲバをくり返し、正しい政治的観点を失っているという歴然たる事実を見れば、武闘を闘ったからとか大衆闘争を闘ってればとかではなく、運動の自然発生的性への拝跪こそ、革命理論の軽視こそ正しい政治的観点を見失う主要な因であることはまったく明らかである。

「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践を結びつけること、これを真剣になしとげさえすれば、日本革命の勝利は疑いない」(毛沢東)

これは、この問題の核心を指摘しているのではないだろうか。我々は革命理論を革命実践の中に大胆に持ち込み、正しい政治的観点を絶対に見失わないようにしなければならない。

反米愛国路線こそ勝利への保証。反米愛国路線を大胆に革命闘争に持ち込もう！！

現在、「新党」派の敗北に対して政治路線の問題を不問にしたまま、あるいはこれを重視しないで総括する人が、一部革命派の中に見られる。これらの人達は、もっぱら闘争戦術の面からのみ総括している。すなわち、①前段階蜂起②ゲリラ単一—大衆闘争+(武闘?)、として①の前段階蜂起の闘争戦術は誤りだった。②のゲリラ単一も誤りだった。③の大衆闘争+(武闘)こそ正しい。ゲリラ単一主義だったので、必然的に「粛清」の誤りを犯した、大衆闘争+(武闘)ならこうした誤りは犯さないだろう、と。これは戦術「左翼」的思考を一步も抜け出していない見解であり、政治問題を全く抜きにした見解である。

前項で述べたように、「大衆闘争」に専念していても、内ゲバは発生するのであり、事実発生しているのであり、この見解は事実と反している。この見解は、「粛清」問題を正しく解決するものではなく、建軍武闘を否定的に総括することによって、現在の日本の階級闘争を一步後退させようとするものである。政治・理論を全く不問に付したまま、自然発生的運動に拝跪して「闘争戦術」をうち出す。まさしくこうしたやり方こそ、「新党」派の敗北の主要な因といえるのである。

正しく位置づけず、建軍武闘の意義を拡大解釈して武闘単一主義に陥った。そして建軍遊撃戦の鉄則(少数精鋭、分散)を投げ捨て、規律の鉄則(政治的自覚に依拠した規律)を投げ捨て、政治路線を無視して「統一赤軍」(七一年七月)を結成し、はては、「反米愛国教条主義」を「止揚」し、「イデオロギー」を「止揚」し、「毛教条主義」を「止揚」して、全く政治・理論を放棄した「新党」を結成し、とうとう「粛清」の誤りを犯した。彼等が建軍武闘の自然発生的性に拝跪せず、これを革命理論によって統帥し、全局の中にしっかり位置づけられていたら、「粛清」問題は起こらず、銃撃戦も勝利的に貫徹でき、建軍武闘に新たな地平を切り拓いていたことは全く間違いないところである。

一部「新党」派の人達は政治路線を無視して、不問に付して「統一赤軍」(七一年七月)を結成したが、そしてこれを「革命戦争統一戦線」の結成として高く評価したが、これこそ建軍武闘の自然発生的性への拝跪の産物である。革命派、革命的人民が団結するのは全く正しい。そして建軍武闘を闘っていた、即ち日本階級闘争の最先頭にたつて闘っていた、革命左派と赤軍派が団結するのは全く正しい。しかしながらこの「統一赤軍」は日本人民の広範な反米反軍国主義の統一戦線結成への第一歩としてその一環として、意識的に結成されたものではなかった。これは「革命戦争統一戦線」として結成されたのである。この反米反軍国主義の統一戦線を結成するのこそ、それとも「革命戦争統一戦線」を結成するのは根本的に異なる二つの路線の対立である。

前者は明らかに広汎な反米反軍国主義の日本人民諸階級・諸階級の革命的諸党派の統一戦線結成への第一歩としてその一環として革命左派と赤軍派の団結を位置づけているものである。そしてこの立場からすれば当然のこととして、軍の団結もこの統一戦線結成の一環、一部分(中心だが)として位置づけられるのである。なぜなら建軍武闘は日本人民の諸闘争のうち中心を占める闘争ではあるが全てではなくその一部分をなすものだからである。後者の「革命戦争統一戦線」は明らかに「革命戦争」のみによる軍のみによるであり政治目的を不問に付した建軍武闘のみによる軍のみによる「統一戦線」の結成である。

前者を主張していたものに対して後者を主張する人が昨年六月以降「軍を軽視している」という批判をしたが、これにもそれなりの理由がある。即ち軍の団結を統一戦線の総てとせず、軍の団結を広汎な統一戦線の一環として「しか」、「位置づけられていない」ということは後者の立場からは「軍を軽視している」ことになるからである。

前者は明らかに米帝国主義、日本軍国主義に反対する広範な日本人民の諸階級・諸階級の統一戦線をめざしており建軍武闘派の団結をその一環として位置づけるものである。後者は建軍武闘派のみの政治目的を不問にした、党派間「統一戦線」である。

前者の立場からは当然この統一戦線結成の過程において革命の性格の問題(人民民主主義革命か社会主義革命か)Ⅱ統一戦線の中(如何なる階級・階層を参加させるか)Ⅲ最小限綱領の問題が、問われ

るし政治路線の問題が強く問われるのである。後者の立場からは革命戦争を闘っている党派をかき集めることしか眼中にないのでこうした問題は一切問われることはない。ただ、建軍武闘の「実績」のみが問われることになるだけである。即ち、前者の立場に立っている者は当然その実践的立場から、この統一戦線結成の過程で統一戦線の中核革命の性格の問題を解決することを迫られるのに対し後者の立場に立っている者は、統一戦線の中核革命の性格の問題など到底理解出来ぬし問題にもならないのである。この二つの路線の対立こそ、勝利へ向うか、敗北へ向うかの根本的対立だったのである。

政治的問題を不問に付したままで①前段階蜂起→②ゲリラ単一→③大衆闘争+(武闘)として④⑤は誤り、③が正しいとする、戦術のみを問題にする総括は、七一年七月の「統一赤軍」結成の過程で問われていた問題e.t.c.、総じてこの間、日本階級闘争で問われていた問題に対して、何らこたえないものであり、「新党」派の敗北を正しく克服しないものである。

日本階級闘争は、建軍武闘を生み出すと共に、政治によって建軍武闘を統帥するという問題を強く問うたのであり、政治路線によって日本階級闘争の全局の中に建軍武闘を正しく位置づけることを問うたのであり、建軍武闘を含む(それを軸とする)広汎な反米反軍国主義の統一戦線結成の問題(プロ+労+小ブル+Q)なのか、プロ+半プロ+Q)なのか)革命の性格の問題を実践的に問うたのである。そして、この日本階級闘争を勝利に導く政治路線の問題を問うたのである。そして、これへ

の解答は不十分ながら反米愛国路線によって与えられていたし、反米反軍国主義の統一戦線を結成することを主張するものによって与えられていた。しかし、「革命戦争統一戦線」を主張するものが、この二つの路線の闘争において主導権を握り、反米愛国路線を放棄し、誤った路線をおし進めたため敗北してしまったのである。我々は反米愛国路線を大胆に革命闘争に持ち込まなくてはならない。反米愛国路線こそ勝利の保証。

無原則的「新党」建設を批判する

日本共産党(革命左派)
神奈川常任委員会

「革命的政党、革命的人民は正反両面の教育をくり返し、比較と対照を通じてはじめて、成熟したものに鍛えあげられ、勝利をかちとる保証が得られるものである。反面教員の役割を軽視する人は、徹底した弁証法的唯物論者ではない。」(毛沢東)

「比較しなければ識別することはできない。識別し闘争しなければ発展することはできない。」(毛沢東) 「徹底した唯物論者は、何ものをも恐れず、マルクス主義の真理は、攻撃や中傷を恐れない。我々が反面教員の反革命的言論を、あえて大衆に公開するのは、真理が我々の側にあるからである。それは、我々が自分の事業に対して、必勝の確信にあふれていることを示している。」(「紅旗」七二年第三号)

我々は如何なる苦勞もいとわず必ず党を再建するノ重大な誤りと敗北という非常に悪いことを非常によいことに変える。党再建を目指す我々にとって、一月一日の「新党」結成は絶対の反面教材であ

る。これは徹底的に批判しつくさなければならない。我々は、この誤りと激しく闘う中で自らを鍛え上げるであろう。またこれは、今はなき革命戦士に学ぶことである。

すでに我々は、「解放の旗」二号において「肅清」問題と「新党」結成は、断じて切り離すことのできないものであることを明らかにした。「新党」結成に集中的に表われている政治無視こそ、革命戦士内部の矛盾を暴力によって解決しようとした重大な誤りの根源である。さらに、マスコミで伝えられる起訴状の内容によれば「分派的言動をする……」なる理由で犠牲にされた同志が何人かいる。旧指導部Sの手記によればこの分派とは「新党」に反対するものことである。すなわち、これらの同志は全く正しくも「新党」に反対したため、我々の身変りとされたのであろう。したがって、「肅清」の重大な誤まりを克服するためには、その凄惨さのうちひしがれることなく、何よりも、無原則的な「新党」結成をこそ、徹底的に批判しなければならぬのである。

残念ながら、一部の論者はこれが理解できず、「肅清」問題と、「新党」結成を切り離し、「新党」結成を徹底的に批判していない。それどころか「より高次の団結……」などと評価する傾向さえ見られる。我々はどうした考えには賛成できず、はっきりと批判するものである。これでは誤りの根源がはっきりと理解できず、血の教訓を生じることができず、相変らず生きた政治を軽視する傾向が残るに違いないからである。

赤軍派の同志との団結—これはまったく正しい。両者で真の党を

かちとろうという決意—これはまったく正しい。我々は心からこれを望んでいたし、現在も同じである。しかし、党は科学的に建設するのであり、願望や決意一般、団結一般からは決してかちとられるものではない。「新党」結成では、この科学を無視し、マルクス・レーニン主義の原則を無視し、全く無原則的な「党建設」がなされたのである。

「統一するまえに、そして統一するためには、なによりもまず断固として、はっきりと境界線をひく必要がある。」(「なにをなすべきか」)とところが、両者の歴然とした違いは、自然発生的な闘争、実践上の一時的、部分的一致の前に無視されてしまった。

その結果は、両者とも党の解消でしかなかった。

政治路線のない(あるいは、いくつも存在する)党などありえない

マルクス主義の歴史上、はじめてプロレタリア階級の党についての学説をつくり上げたのはレーニンである。レーニンは経済主義者メンシエヴィキとの闘争の中で、党の原則を明らかにした。社会民主労働党第二回大会(一九〇三)において、レーニンが提起し、メンシエヴィキ、トロツキーの日和見主義者の気違いじみた反対を受けた、党規約草案の第一条は次のとおりである。「党の綱領を承認し、物質的手段によっても、また党組織の一つに自ら参加することによっても党を支持するものは、すべて党員とみなされる」すなわち、党の成員とは、第一に党の綱領を承認し、第二に党の一組織に

よって党に採用され、党の規律に従うものである。第一に綱領、第二に組織、規約—これは又、入党の条件である。ところで綱領とは、プロレタリア階級の闘争と任務を科学的に述べたものであり、革命闘争の最終目的と、この最終目的への途上で党がかちとるべき諸任務とを規定するものである。したがって綱領の眼目は、政治路線であり、政治路線とは(その国の)社会の性質、革命の対象(敵)、任務、原動力(味方)、性質、前途および世界的な敵と味方などの規定から成るものであり、その中で最も重要なのは、敵は誰か、味方は誰か、という問題である。現段階の我々にとっては、第一に政治路線、第二に組織規約の下に党は団結しているのであり、これを認めることが入党の条件である。この原則は、マルクス・レーニン主義者にとって、ボルシェヴィキ的党を目指すものにとつて、まったく常識のほずである。

ところが、「新党」はどうであったか。「新党」結成はどのような政治路線、規約の確立のうえでなされたのか。少くとも、敵は誰で、味方は誰か、ぐらい確認されたのであろうか。全く否である。驚くべき事に政治路線はまったくといっていいほど、問題にされなかったようである。すなわち、「新党」には政治路線などなかったのである。これがどうして党なのだろう/ここにマルクス主義のマの字もみつげだすことができようか。そのうえ、政治重視、政治第一、無原則的「新党」反対を繰り返してきた我々にたいし、なんと「統一戦線党」なるレッテルを貼っている。明確な政治路線と、それに規定される規約の下に建設される党が「統一戦線党」だと云うの

これでは、ポリシエウィキも、中国共産党も、朝鮮労働党も、ベトナム労働党も……みな「統一戦線党」にはかならない。こんなに、常識と思われぬ事も平気で無視されるのだから、「常識だ」では我々としても済す事は出来ない。なぜ、党は唯一の政治路線を高々と掲げ、その下に団結しなければならぬのか？　なぜ、党に政治路線がいくつも存在してはならないのか？　「誰が我々の敵か、誰が我々の友か、この問題は革命の一番重要な問題である。中国のこれまでの革命闘争は全て成果が非常にすくなかったが、その根本原因は、真の友と団結して真の敵を攻撃することが出来なかった事にある。革命の党は大衆の道案内であり、革命の中で革命の党が道案内を誤った場合、革命が成功したためしはない。我々の革命が道案内を誤らず、きつと成功するという確信をもつためには、我々の真の友と団結して真の敵を攻撃することに心を注がなければならぬ」(中国社会階級の分析) 現在の日本でも全く同じである。敵味方ははっきりせずどうして闘えよう。革命の任務がはっきりせずどうして大衆を決起させる事が出来よう。

政治路線がないという事は、一寸先も見えない真暗闇の中で全く手さぐりでしか進めないということである。いや階級闘争においては、その場にじつとどまっていることもあり得ないのであり、発展し得ねば後退するのみである。政治路線を無視しては、ほんの目先の方針さえ解決することは不可能である。合流してから、正しい政治路線をかちとればよいという人もいる。我々はこれにも全く反

対である。党と統一戦線を同じレベルで考えることは出来ない。「統一する前に、そして統一するためには、何よりもまず断固として、はっきりと境界線を引く必要がある。」レーニンのこの原則に反しているからである。そして「新党」の破産で「合流してから……」は全く間違っていることは火を見るよりも明らかである。

正しい政治路線は党建設の第一の必要条件であり、正しい政治路線における明確な一致ががちとれない限り、党建設など問題にもならないことを血の教訓としてしっかりと把握しなければならぬ。尙軍は党と同じ政治的レベルになければならず、軍の合同は党の合同に準ずるものである。

現在の日本に於ける、革命的左翼内部の二つの路線、反米愛国路線—米日反動派が敵、全人民が味方、「日帝自立路線」(修正「日帝自立」路線も含む)—「日帝」ブルジョアジーが敵、プロレタリアートが味方、この二つの路線の違いは歴然としており、この違いを断じて無視したり、軽視したりできない。我々が、ただ団結していれば、いずれ一致するなど考えるのはとんでもない誤りである。「日帝自立」路線とは激しく闘わねばならず、「日帝自立」路線のはびこり、及びその影響を断じて許してはならない。

この日和見主義路線をきれいさっぱり清算しない以上、政治路線の一致はありえない。そして、理論、思想の一致もありえない。この二つが混然一体となっていたり、どちらも無視されたのでは、それは党などではあり得ない。なぜこれが「より高次の団結」といえるのだろうか。「この政治とは、いわゆる少数政治家の政治ではなく

て、階級の政治、大衆の政治のことである。政治は革命的であれ、反革命的であれ、全て少数の個人の行為ではなく、階級対階級の闘争である。階級や大衆の要求は政治を通じてのみ集中的に表現されるものであるから、革命的な思想闘争と芸術闘争は政治の闘争に従わなければならない。」(毛沢東「文芸講話」)

思想闘争は政治闘争に従わなければならない。我々はこれを絶対に忘れてはならない。「新党」はどうであらう。彼らの「思想闘争」「共産主義」は全く政治を欠落させたものであった。敵味方を問題にせず、階級を問題にせず、革命の任務を問題にしない「共産主義化」であった。即ち、この「共産主義化」とは、階級苦(これがなくては革命は出来ぬ。また、これは政治と切り離せない)とも無関係であり、人民の階級の怒りに根ざした共産主義思想ではなく、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想とも無関係なものである。結局、この「共産主義化」とは、指導部に盲目的に従うロボットにするという事と同じである。つまり、修養論であり、史的唯心論である。これはいうまでもなく、ブルジョア階級の思想である。政治を欠落させた「思想」は必ずブルジョア思想になる。だから暴力のやり方がとられたのである。憎しみが敵に向わず、味方に向ってしまったのである。これこそ「統一戦線党」である。しかも、マルクス主義者同志の統一戦線ではなく、無政府主義者同志の「統一戦線」であり、野合にほかならない。思想・政治面で両者が一致していたのは、抽象的な「共産主義」でしかなかったのではないか。政治が一致していないのに、思想で一致することはありえな

いことである。尙、ここで云う政治とは、決して抽象的な「共産主義政治」などではない。我々の政治とは、「米日反動派の侵略戦争を革命戦争でうち破れ！」で代表される反米愛国路線である。抽象的な政治では、プロレタリア政治の役割を果すことは不可能であり、結局、「共産主義化」と同じ事になってしまうことは明らかである。かくして、「新党」はマルクス主義のイロハも放棄した、徹頭徹尾デタラメなものである。「新党」結成に集中的に扱われている政治無視こそ「肅清」の根源である。我々は、ほんの少しなりともこの「新党」を評価する意見とは非妥協的に闘うであろう。「新党」結成は、我々にとっても、赤軍派にとっても党の解消であり、断じて許せない行為である。

実践上の一時的、部分的な一致のみで党建設はできぬ

我々はすでに、正しい政治路線が党建設の第一の必要条件であると述べた。すなわち、正しい政治路線において一致することは決して必要十分条件ではないのである。

革命左派は六九年四月に、第二山口左派と分裂せざるをえなかったが、これは政治路線の一致(形式上の)のみで、実践上の検証(つまり、真に政治路線が一致しているかどうか)がなかったからである。革命的理論には革命的实践が対応し、日和見理論には日和見実践が対応するものである。従って、形式的に理論上、政治上で一致したからといって党は出来ない。必ず実践面でのかなり長い検証が必要である。これは、ある人間を入党させる場合、言葉のうえで

政治路線と規約を承認する事だけでなく、ある期間、その実践を観察しなければならぬと同様である。

正しい政治路線は口先だけでなく、本当に承認されなければならぬ。即ち、実践に比較的正しく適用し得なければ、本当に理解している、承認しているとは云えないのである。第二山口左派——彼らは、口先だけで反米愛国路線・暴力革命を承認しながらも、反米愛国路線をお題目として唱えることを主張し、実践の指針とせず、反米愛国路線が当然規定している実力闘争に反対した。木下一派——彼らは、口先では反米愛国路線、実力闘争を承認しながらも、反米愛国路線を死んだ「政治」とし、実践と切り離し、反米愛国路線が当然規定している政治ゲリラ闘争に敵対した。即ち、両者とも真に反米愛国路線を理解していないのである。例えば、彼らは人民遊撃戦争戦略戦術を否定して、どうやって強大な（全く異常に強大な）米日反動派を打倒しようというのだらう。こういうまともな主張は全くされていない。こういう核心的な観点が無い連中がどうして反米愛国路線を理解しているといえようか。彼らのいう「政治重視」は、お題目としての「政治」、死んだ「政治」、教条としての「政治」であり、右からの政治軽視である。

だからこそ、反武装闘争、大衆闘争一般という自然発生性に拝跪しているのである。「自然発生性にもいろいろあるというものではないか。」「なにをなすべきか」
ところで「新党」結成においては、この実践の検証という点はどうであつたらうか。

生性に征服されてしまったのである。これは、「新党」結成に至って、両者とも遊撃戦さえ放棄していたことでよく表われている。ただ、叫ばれたのは銃の武装の一点のみである。七月よりも数段後退してしまっていた。すなわち「新党」はマルクス・レーニン主義の党建設の原則を無視して結成されたものである、のみならず、実践の検証さえなして結成されたものである。

「革命的理論なくしては、革命的運動もありえない。…先進的理論に導かれる党だけが先進的理論の役割をはたすことができる。」（なにをなすべきか）実践上の「部分的な一致だけで党を建設しようとすることは、レーニンが「なにをなすべきか」で徹底的に批判した、経済主義者の「党建設」と同じものでしかないのである。実践は徹底的に検証されねばならず、何よりも革命理論、政治路線を真に把握し、正しく適用しているかどうかの問題として検証されねばならないのである。

「労働運動の自然発生性の前にひざまずく事はすべて、また『意識的要素』の役割を軽視する事はすべて、—軽視する人がのぞむとのぞまないとかかわらざらぬ労働者に対するブルジョア・イデオロギーの影響を強めるものである。」（同）
「問題はこうではない。ブルジョア・イデオロギーか、それとも社会主義イデオロギーかと。そこには中間の道などというものは無い。…だから、社会主義的イデオロギーに対するどのような軽視も、どのような離反も、ブルジョアのイデオロギーを強めるものである。」（同）

「新党」結成が可能と一部旧指導部が全く主観的に思い込んだのは、両者の実践上の部分的、一時的故であつた。まず七月段階においては、両者は「銃」を軸とした建軍遊撃戦で一致したのであつた。革命左派は宣伝の武装闘争を克服し、反米愛国路線をより深める中で人民遊撃戦をかちとり、「敵消滅、味方保存」の建軍遊撃戦を提起した。一方、共産主義者同盟赤軍派は、蜂起主義を自然発生的に克服し、建軍遊撃戦をうけ入れた。これは赤軍派にとって、自然発生的（何故なら、政治路線、革命理論の裏づけがない）であるため、人民遊撃戦戦略戦術としては一致せず、部分的かつ一時的な一致といわざるを得ないのである。何故なら、米日反動派を敵と規定するところから人民遊撃戦戦略戦術はかちとられたものであり、しつかり、米日反動派を敵とおさえない以上、いついかなる時に蜂起主義（「日帝自立」路線の反映）がぶり返すか予測がつかないからである。こんな状況の中で「新党」結成を「前提」にするなど、明らかに自然発生性への拝跪である。軍の合同、「統一赤軍」も同様、自然発生性への拝跪であつた。

更に、「統一赤軍」結成以後はどうなつたか。自然発生性への拝跪は増々ひどくなつていった。ミイラとりがミイラになつてしまつた。

「これは、意識性が自然発生性によって完全に克服されたものであつた」（レーニン「なにをなすべきか」より）まさに、「新党」は自然発生性に征服されてしまったのである。意識的に建軍遊撃戦を提起していた革命左派が、自ら意識性を放棄し、ズルズル自然発

真の党建設に向けて

それでは、正しい党建設の一般原則はどうなのであろうか。これは、すでに述べた事から明らかである。第一に、正しい政治路線を断固として掲げた革命闘争を闘い、第二に、この中で革命的同志達と実践上の一時的、部分的な一致をかちとり、第三に、さらにこれを政治路線の一致（実践の完全な一致）まで高めて、党を闘いとることである。「新党」結成を行なつた旧指導部は、第二の段階で政治路線を放棄し、自然発生性に拝跪して、マルクス主義からはずれてしまつたのである。

我々は、何よりも正しい政治路線を常に第一位として堅持する事を軽視してはならないのであり、さらにそれを教条としてはならず、あらゆる実践に適用し、実践上の問題を解決するものとして重視しなければならぬのである。したがって実践面においては、比較的長い期間、一時的部分的な一致（一時的部分的共闘）から、恒常的全体的一致（恒常的共闘）へと真剣な検証がなくてはならない。こうした革命理論を重視した検証の中でこそ、「認識を統一し、指導を統一し、行動を統一することができるようになる。」（毛沢東）

「新党」結成という重大な解党行為を絶好の反面教師とし、それを徹底して批判する中で、我々は以上の党建設の路線こそ、唯一正しいものである事をしつかりと知る事ができる。この党建設の路線は、すでに昨年、赤軍派との団結がcaちとられた時点で確認されているものである。しかし、これはしつかりと全体のものとはなつて

いなかっただのである、そのため一部旧指導者の独断専行、解党行為を許してしまったのである。

我々は、赤軍派の同志諸君に対して、かくてマルクス主義から逸脱し、かくもボルシェヴィキ的党建設からはなれた、無原則極まりない「新党」結成を容赦なく、徹底的に批判し、正しい党建設の路線を我々とともにかちとるよう熱烈に呼びかけるものである。党建設という問題には、決してあいまいは許されなければである。「新党」結成に少しでも妥協することは、「肅清」と敗北に妥協することであり、マルクス主義の放棄に妥協することである。

「およそあやまった思想であり、およそ毒草であり、およそ妖怪変化である限り、すべて批判しなければならず、それが思うままに及びこるのを絶体許してはいけない。」(毛沢東)

「新党」は、多くの同志を犠牲にし、一時的にせよ、革命闘争を流産させた大毒草である。今きれいさっぱりと刈り取らなければ、いずれまた必ず及びこるに違いない。今こそ刈り取って革命闘争の肥料にすべき絶好の時である。

なお現在の日本の状況下における党建設の具体的問題については「新党」指導者の誤りを反面教材として、「解放の旗」二一号で述べられている。ここでも若干述べておく必要があると考える。これは勿論、以上の一般原則をその骨子としている。

一部旧指導部の誤りは以下である。

第一、政治を無視したため、敵、味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別できず、人民内部の矛盾を正しく処理できなかった。

第二、プロレタリア政治を無視した軍事が一人歩きし、政治抜き「左」翼日和見「軍事路線」に陥ったこと。

第三、建軍武装闘争を、建軍遊撃戦として徹さず、水ぶくれ軍団、集中の「蜂起」主義に陥ったこと。

第四、建軍武装闘争のみを単一的におし進め、全人民を決起させ、指導する観点をもたない大衆闘争を放棄したこと。

第五、米日反動派に反対するあらゆる闘いを指導する党ではなく、水ぶくれ軍団のみを「指導」する、戦闘団的「党」建設に陥ったこと。

そして、これに対する我々の方針は以下である。

第一、反米愛国路線を生きた政治として把握して、組織原則をしっかりとちたて、党内、軍内、党派間、人民内部の矛盾を正しく解決すること。これはただ人民内部の矛盾に暴力を使うな、では済まない問題であり、生きた政治によって解決する能力をもたなければならぬのである。

第二、政治を無視するか否かは、マルクス主義か修正主義の根本問題である、しっかりと把握し、革命的理論には、革命的实践が対応し、日和見主義理論には日和見主義実践が対応することをはっきりと確認すること。そして実際に、反米愛国路線、毛沢東思想を實踐に正しく適用することに熟達しなければならぬ。

第三、人民遊撃戦戦略戦術をしっかりと把握し、日和見「軍事路線」をきれいさっぱり清算し、建軍遊撃戦に徹する。現在の状況下では、量的には爆弾闘争が武装の中心である。しかし、軍は少数精

鋭、ピラミッド型の鉄の軍でなければいけない。

第四、革命は、何千万大衆の事業であることを忘れず、建軍武闘を中心に、大胆に大衆闘争を展開し、広範な統一戦線をかちとる。

大衆を信頼し、大衆としっかり結びつき、大衆の中から大衆の中心へという道をへて、方針を出す作風を確立する。

第五、党の生命は正しい政治路線にあることをしっかりと把握し、建軍武装闘争を中心として米日反動派に反対するあらゆる闘争(政治、経済、支援闘争)を闘い、これを反米愛国路線で強力に統帥する党を建設する。

○ マルクス・レーニン主義万才ノ毛沢東思想万才ノ

○ 反米愛国路線を堅持しようノ人民遊撃戦戦略戦術を豊富化し、発展させようノ反米愛国統一戦線をかちとれノ

○ 米日反動派の侵略戦争を革命戦争でうち破れノ人民民主主義独裁樹立ノ

○ 米日反動派に反対するあらゆる闘争を、反米愛国路線で強力に統帥せよノ

○ 無原則的「新党」を徹底的に批判し、真の党建設に向かおうノ
○ 如何なる労苦もいとわず、断固として党を再建せよノ

川島豪

眞の革命路線をかちとるために

ブンド系諸君を批判する

この論文は、川島豪同志によって一九六七年に書かれ、一九六八年に発表されたものである。

当初、ブント系党派に属していた川島同志は、ブントの誤った理論、路線ときれいさっぱり別別しマルクス・レーニン主義、毛沢東思想にもとづく、まったく新たな党の建設をめざして、幾多の大衆闘争の実験とマルクス・レーニン主義の革命理論をしっかりと結びつけて、この論文を書いた。

川島同志はこの論文において、宮本一味の正体を鋭く暴き、宮本一味が「新左翼」諸君のいうような単なる日和見主義者などではなく、マルクス・レーニン主義の魂——プロレタリア独裁のカケラまで捨て去った、真っ黒な反革命修正主義集団であり、帝国主義者の真正正銘の手先であることを暴露した。そして、実力闘争の思想をもったまぎれもない革命派ではあるが、宮本一味の正体を見抜けないため、ブルジョア経済学にまどわされ、反革命トロツキーにまどわされて小ブルジョア階級の立場を抜け出せないでいるブント系諸君——「新左翼」「日帝自立派」の誤りを、その小ブルジョアの理論の全般的分野にわたって、とりわけプロレタリア独裁の学説の問題を中心として批判した。

川島同志は、「比較しなければ識別することはできない。識別し、闘争しなければ発展することはできない」(毛沢東)の原則を堅持し、宮本一味の反革命、ブント系諸君の誤りを徹底的に、全面的に批判することによってプロレタリア独裁の思想を復権し、史的唯物論と革命的弁証法を確立し、真の世界革命論を確立し、連統革命発展段階論を確立した。すなわち、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の革命理論を確立した。

この論文は革命左派の理論的基礎である。かかる革命理論をかちとったからこそ、我々は長い闘いの中で輝やかしい反米愛国路線を確立することができたのである。そして、人民遊撃戦争路線、反米愛国統一戦線戦術をかちとり、政治ゲリラ闘争、建軍遊撃戦をかちとり、柴野同志を生み出すとともに、日本革命闘争の発展に一定の役割を果たしてきたのである。

しかし、残念ながら我々はあまりにもこの重要な論文を軽視し、革命理論を軽視してきた。この我々全体の不十分性が集中して現われたのが、あの「新党」結成——革命左派の解消、「粛清」、統戦戦の敗北という極めて重大な誤りである。この誤りは一言でいえば、すばらしい武装闘争の高揚の前に拝跪してしまい、せまい経験主義に陥り、革命理論による統帥を放棄した必然的なものであった。

今、我々は再建と、人民遊撃戦争再開の任務に断固としてとりかかっているが、我々はきわめて革命理論を重視しなければならない。まじめに、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を学習しなければならぬ。「革命理論なくして革命の実践はない」(レーニン)、そして革命理論には革命の実践が対応し、日和見理論には日和見の実践が対応するものである。革命的能動的反映論に基いた革命理論なくして「統帥の質をもつ強固な軍を建設することはできず、建軍武装闘争を領導することはできず、大衆路線をとることはできず、統一戦線をかちとることはできず、党建設は不可能である。

『「経済主義者」やメンシェヴィキの没落はとりわけ次のことで説明される。彼等が、先進的な理論、先進的思想の役割を全く無視したために、党を消極的なものにし、無為無策のものにしようとしたことにある。

マルクス・レーニン主義が強大な力を持ち、生氣はつらつとして居るのは、社会の物質生活の発展の要求を正しく反映した先進的理論に基づき、その理論をそれにふさわしい高さに引き上げ、この理論をもつ、動員、組織改革上の力を徹底的に利用することを自己の義務とみなしているところにある」(「ソ連共産党(ボ)歴史小教程」)

「俗流の事務主義者はそうではない。かれらは経験を尊重して理論を軽視するので、客観的過程の全体を見わたすことができず、明確な方針をもたず、遠大な見通しがなく、ちよとした成功やわずかばかりの見識で得意になる。このような人間が革命を指導したなら、革命は壁につきあたりとまで引きづられていくにちがいない」(「実践論」)

川島同志のこの論文が書かれた頃は、まだ、石、ゲバ棒闘争の初期であったが、今では「敵消滅、味方保存」の武装闘争の段階である。しかし、この論文の重要性はますます増大している。武装闘争

において、革命理論を重視するか否かは、文字通り「勝利か死か」の問題である。

川島同志のこの論文は、人民遊撃戦争再開にあたって、反米愛国統一戦線結成にむけて、党組織の再建と全国党建設にむけて、我々の重要な理論的武器である。又、反米愛国路線を進展させる理論的基礎である。我々は決しておろそかにせず、真剣に深く学習しなければならない。

ここで再度、ブント系諸君はまぎれもない革命派であることをはっきり確認しておく。ブント系諸君は暴力革命の体現として実力闘争の思想を堅持し、「日帝打倒」をいいながら、自然発生的な反米愛国闘争を闘ってきた。一九六九年以来、赤軍派を先頭にブント系諸君の中から武闘派が生まれ、武闘闘争を進展させてきた。我々は断固として彼らに連帯を表明してきたし、赤軍派の同志とは親密な共闘をかちとっている。今、我々は武闘派を中心に、共同綱領と規約をかちとって、全人民を結集する。反米反軍国主義の統一戦線をかちとることを呼びかけるものである。我々は団結すべきであり、ともに発展すべきであり、その中で党をかちとっていくべきである。

しかし、我々は「日帝自立」に代表される誤った理論・政治路線を無視することはできない。そして、我々はブント系諸君の誤った理論とは決して妥協することはできない。我々は断固として自己の理論と政治路線を掲げ、宣伝しなければならない。現在、赤軍派の同志の中で我々の路線にきわめて近い意見をもつ同志が表われているように、武闘闘争の中でこそ我々の理論は人民のものとなっているのである。

なお、今日の発表に際して、若干の部分、私が修正したことをつけ加えておきます。

〔注〕 この論文でいう「ブント系諸君」には、ブント系のみでなく、いわゆる「新左翼」「日帝自立」派全てを含んでいる。

(一九七二年六月三日 渡辺正則)

序 章

「日本共産党」宮本一味と

ブント系諸君について

A ブント系諸君は宮本修正主義一味を
完全に克服してはいない。

現代は、帝国主義が全面的に崩壊に向い、社会主義が全世界的に勝利に向っている時代である。帝国主義が協福や災厄、空襲、野蠻化を生み出し、帝国主義に反対する全世界人民の闘争が烈火の如く燃えあがっている。民族民主革命と社会主義革命の時代である。全世界の革命的な共産主義者と革命的な人民が十月革命の道にそって、帝国主義の存在しない、搾取制度の存在しない新しい世界を作り出すため奮闘している時代である。したがって、こうした客観条件によって現代の日程には、この偉大な革命を勝利に導くため、如何にして権力を奪取し、プロレタリア独裁権力を樹立し、これをうち固めるかについての「具体的な措置や方策」がのぼされている。この具体的なプロレタリア独裁の問題は、「例外なくすべての資本主義国における労働運動の根本問題」となっており、革命運動の根本問

題となっている。そして、このプロレタリア独裁を理解しない者、つまり、「どんな革命的階級でも勝利をとげるためには独裁が必要であることを理解しない者は、革命の歴史について何も理解しない者であるか、または、この領域で何一つ知ろうとしない者である」（レーニン全集第二五巻 四三—四四頁）、「プロレタリア独裁の歴史は、革命的な社会主義の歴史、マルクス主義の歴史と一致している」（レーニン）、「階級闘争の承認をプロレタリア独裁の承認に拡張する人だけがマルクス主義者である。この点にマルクス主義者と月並みな小ブルジョア階級（並びに大ブルジョア階級）とのもつとも深刻な相違点がある。この試金石でマルクス主義者をほんちに理解し、承認しているかどうかを試さなければならぬ」（同）

現代日本におけるカウツキー、トロツキー、フルシチョフの流れをくむ現代修正主義集団宮本一味は、このマルクス・レーニン主義の魂——プロレタリア独裁思想を攻撃し、アメリカ帝国主義、日本独占資本（日本軍国主義の階級の基礎）を美化し、彼らに投降し、彼らの手先となり、日本人民の革命闘争を敗北に導こうとしている。一方、いわゆる「新左翼」諸潮流の諸君は宮本の本質を十分見抜かず、プロレタリア独裁思想への攻撃に対して「左」（形は左、実際は右）から応えてしまっており、プロレタリア独裁思想をきわめて自然発生的にしか把握していない。「新左翼」は「日帝自立」派諸君は、それが故に客観的諸条件（世界、日本の）によって現代の日程にのぼっている、プロレタリア階級・人民に政治権力の獲得の準備（蜂起の機関、反乱の権力の準備）を整えさせるといって極めて

重大な任務をしつかり認識できていない。

我々は反米愛国闘争を勝利に導くために、どうしても現代修正主義集團宮本一味によるプロレタリア独裁思想への攻撃を粉砕し、「新左翼」||「日帝自立」派の自然発生性を克服し、プロレタリア独裁思想を擁護、堅持し、プロレタリア階級・人民に政治権力の奪取の準備（蜂起の機関、反乱の権力の準備）を整えさせ、人民民主主義独裁権力樹立（本質的にはプロレタリア独裁）の準備を整えさせねばならない。

ブント系諸君は、彼らが信奉するトロツキーと同様に、プロレタリア独裁といえどプロレタリア階級だけが政権に参加することだと思ひこみ、労働独裁、人民民主主義独裁がプロレタリア（階級）独裁の具体的な形態であることを否定してしまっている。

「一、労働者代表ソヴェト、大衆的な政治的ストライキを基礎とし、広範な労働者大衆の非党員組織として自然に発生する。

二、このソヴェトは闘争の進行上に不可避的に変化して、その構成からいえば、小ブルジョアジーのもつとも革命的な分子をひきいれ、その活動内容からいえば、純粋なストライキ組織から変じて革命闘争の機関となる。三、このソヴェトが革命権力の芽であるかぎり、その力と意義は一にかかって叛乱の勢力と成功にある」（レーニン全集 第九巻 四四〇四五ページ）

ブント系諸君は、この権力が本質的にはプロレタリア独裁であることが理解できない。それ故に、プロレタリアートが社会主義運動のみならず、ブルジョア民主主義的運動（農民の土地革命運動

民族解放運動、etc.）を指導し、これを社会主義革命に転化させるといふ連統革命の本質を理解することができない。

レーニンはプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁が、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命へ転化させる具体的な形態であることを明らかにして、次のように言っている。

「大衆的農業と武装叛乱はおのづから革命権力の問題を、独裁の問題を日程にのぼせた。というのは、こうした闘争方法は必然的に——最初は地方的な規模で——旧権力の追放、プロレタリアートと革命的諸階級による権力の獲得、地主の追放、ときには工場の占拠等々を生み出したわけである。この時期の大衆的な革命闘争は、労働者代表ソヴェト、次には兵士代表ソヴェト、農民委員会というような、これまで世界史にかつて見なかつた組織を生み出した。目下、全世界の意識的な労働者の注目をひいている根本問題（ソヴェト権力とプロレタリア独裁）は一九〇五年の末に実際に提起されたのであった。」（レーニン全集 第二五巻 四三二ページ）

現代修正主義者宮本は、「純粹」プロレタリア独裁権力を樹立するのはまだ時期ではないとして、プロレタリア独裁を遠方に追いやり、投げ捨てる。彼らは反米反独占の人民独裁権力が本質的にはプロレタリア独裁権力であることを否認し、これをブルジョア独裁権力にしてしまふ。そして人民独裁権力とプロレタリア独裁権力の間に万里の長城を築く。要するにプロレタリアート・人民が蜂起の機関、反乱の権力を準備することを否定する。

これに対し、ブント系諸君は、プロレタリアート以外の被抑圧階

級がプロレタリアートと同盟して、プロレタリア独裁権力の政権に参加することを拒否する。具体的条件を無視して一挙に社会主義革命を実行しようとする。彼らは「純粹」プロレタリア独裁権力を一挙に樹立しようとする。反米反独占の人民独裁権力を否定する。人民独裁権力が本質的にはプロレタリア独裁権力であることがわからない。そして彼らは、このプロレタリア独裁下での階級闘争を否定してプロレタリア独裁を投げ捨てようとする。彼らの特徴は過渡期（資本主義から共産主義への）の階級闘争を否定して、実質的にプロレタリア独裁思想を放棄する点にある。彼らはトロツキーがそうであったように農民を始めとする急進小ブルジョアジーの革命的可能性を否定する。とどのつまり、ブント系諸君は、蜂起の機関、反乱の権力を準備することに、意識的になれないのである。

宮本一味には、史的唯物論の観点がなく、革命の連続性と段階性という革命的弁証法がまったくなくない。彼らはプロレタリア独裁を否定し、プロレタリア独裁下での階級闘争を否定し、世界革命（トロツキーの「世界革命」ではない）、連続革命発展段階論を否定し、農民の革命的可能性を否定し、マルクス主義経済学を否定し、史的唯物論を否定し、革命的弁証法を否定している。

ブント系諸君はこれを克服せんとしているが、自然発生性に拝跪しているため、形は「左」、実際には右の批判しかできていないのである。

ブント系諸君は、なぜ宮本一味の誤りを克服できないのか——「日帝自立論の発生の根源」

★ そもそも、ブント（共産主義者同盟）の登場は、宮本一味による党中央の乗っ取りに由来を発生している。すなわち、宮本一味によるプロレタリア独裁思想の否定の歴史に端を発しているのである。

「私達は、一九五八年晩秋、日本共産党と決別しました。そして社会党とは勿論、日本共産党とは別個の潮流として日本の階級闘争の一翼をになってきました。」（「われらの対立」）

「この綱領は、一九六一年七月の第八回大会で決定されたものですが、この綱領に規定されているような内容の是非をめぐる論争は、古く一九五七年頃から行なわれていました。私達はこの問題の討論の中で、党中央の現状規定及び革命路線にハッキリと反対の立場をとったのです。」（同）

彼らは日本共産党に加入し、六全協後も、砂川基地闘争、動評闘争、警職法闘争などの諸闘争を宮本修太郎一味の指導のもとに闘ってきた。「しかし、その闘いのつぼの中で、党中央の路線に疑問を感じ、反対し、遂に決別」した。彼らは宮本修太郎の日和見主義路線について疑問を感じ、この日和見主義路線を克服しようとしたのである。だが、残念ながら、彼らは党中央の路線の誤りを、宮本一味によるプロレタリア独裁の否定として受けとめなかつた。この

真理がわからず、彼らは日本の現状規定の仕方にも求め、敵の規定の仕方にもとめてしまい、とうとう、この誤りの主要な原因を経済学上の誤りにもとめてしまった。

「私達と共産党中央との対立の第一は、日本の現状規定とそこから導き出される革命路線に関してでした」(同)

★ 日本共産党中央が占拠した宮本修太郎一味は、アメリカ帝国主義と日本独占資本が日本人の敵であり、これが当面の革命の対象であるとしながらも、アメリカ帝国主義と日本独占資本との間は従属関係のみであり、超帝国主義的関係になつていゝとして、この二つの敵の間に矛盾が存在することを否定し、日本軍国主義のアジア侵略への野望を否定し、日本独占資本のプロレタリアート人民に対する一層の深化を否定し、実質的には日本独占資本を美化し、これとの闘争を回避してアメリカ帝国主義だけが日本人の敵であると実質上は規定した。

ブントはこれに反発して、宮本とはまったく逆に(鏡に左右が逆)に写る(ように)、アメリカ帝国主義と日本独占資本との間の矛盾、対立面を強調し、彼ら両者が従属同盟関係にあるという事実を否定し、「日本帝国主義」だけが日本人の敵であるとして、アメリカ帝国主義と日本民族との間の矛盾を抹殺してしまつた。そして、アメリカ帝国主義との闘争を回避して、アメリカ帝国主義を美化した。

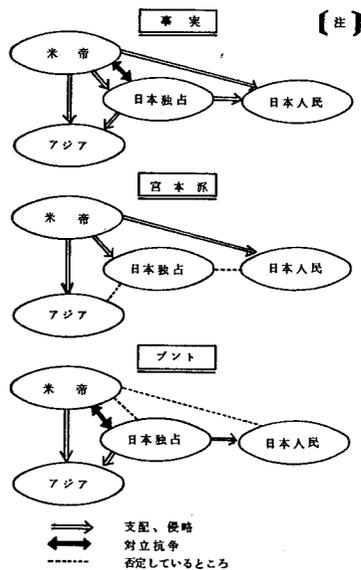
従属下にありました。しかし、以後、日本の資本家は再び地位を回復させ、徐々に一本立ちするようになっていゝと思ひます。一九五八年当時で、日本資本主義は、すでに粗鋼生産量において、資本主義国第四位に返り咲いていゝます。又、当時でも外国資本の導入率は全資本中2%弱というように減少していゝます」(「われらの対立」)

「私達は貿易自由化のうごきの中に、資本主義世界の新たな局面、資本間の競争開始をこそみななければいけません。日本に即していゝならば、日本資本主義の力量回復と国際競争戦への突入をこそ指摘しなければならぬのです。」(同)

同志諸君ノここでブントは、まったく経済しか問題にせず、しかも、きわめて一面的、部分的「経済」しか問題にしていゝないことをしっかりとみてとるべきだ。

★ この敵の規定のしかたについての論争は、同時に、春日(庄次郎)一派と宮本一味との論争でもあつた。この毛色の異なつた二組の修正主義者は次のようにいゝあつた。

「今日、アメリカ帝国主義とは、平和と民主主義と社会主義の最悪の敵であり、世界人民の共通の敵である。従つて、アメリカ帝国主義との闘争は、日本人民にとっては、世界平和のために、またみずからの民族独立のためにゆるがせにできない、重要な闘争である。このことをわれわれは少しも軽視しない。いや非常に重要な闘争であると考えゝる。しかし、アメリカ帝国主義が日本の主権を侵害し、一定の民族的支配をおこなつてゝいるのは、日本独占資本が進んで主



★ 彼らは互いに自己の敵の規定のしかたが正しいことを論証するために経済学論争へと入つていゝつた。すなわち、日本独占資本はアメリカ帝国主義に従属してゝおり、相互の間の矛盾は存在してゝいゝず、超帝国主義的関係であり、日本は帝国主義的復活はしてゝいないとする宮本一味と、否、「日本帝国主義」は復活し、相互の矛盾は激化してゝおり、米帝との民族矛盾はすでに解決して存在しないとするブントとの「経済学」での論争が始まつたのである。論争の中心点は「日本帝国主義が復活したか否か」になつてしまつた。

「党中央は『日本経済はアメリカに從属してゝいる』日本は從属国だ』『民族の危機が深まつてゝいる』といつてゝいるのですが、これは誤つてゝいると思ひます。たしかに終戦後は日本経済はアメリカの

権の一部をゆづり渡し、アメリカ帝国主義の特権を國家的に保障してゝいるからである。日本独占資本は、今日、アメリカ帝国主義との軍事同盟によつて極東、東南アジアにおいて膨張政策を実施し、独自の利益を追求しようとしてゝいる。また世界帝国主義体制のなかで、西ドイツと共に重要な位置をしめるに至つてゝいる。……草案のように階級闘争を民族闘争に解消することは、ブルジョア民主主義的誤りをおかすことにならぬ」(「春日意見書」)

「春日は、日本の国家権力は無限定的に、日本独占がにぎつてゝいるとし、アメリカ帝国主義の支配をわが国の支配力権力要因として事実上無視する考え方に立つてゝいるから、かれにとつてはアメリカ帝国主義に対する独立の闘争は、人民の権力の獲得とは関連のない、改良的な闘争になり、独立は革命の課題になりえないのである。要するに権力問題にかんする春日理論の誤りは、日本が基本的・本質的に独立してゝいるか、從属してゝいるか、すなわち、レーニンという『抑圧民族と被抑圧民族の区分』を明らかにし、このことと結びつけて権力問題を明確にすることをカウツキーとともに『回避』し、実際には、日本の現状を基本的には独立してゝいるとし、そのかざりて主権の一部の侵害をみとめるという考え方にたち、その範囲でアメリカ帝国主義との闘争を重要だとくり返してゝいる点にある」(「破産した修正主義の理論」アカハタ評論員)

★ この春日と宮本の「日本帝国主義」復活論争が、主として日本の国家権力の構造の分析をめぐつておこなわれてゝいることは明白であるが、ブントの諸君はこの基本的観点——「革命の問題は、国家権

力の問題である」(レーニン)——さえも忘れて、ますます経済学論争にあけくれてしまった。さらに、ブントはこの経済学論争を通じて、マルクスの資本論を「原理論」、レーニンの帝國主義論を「段階論」として考え、マルクス主義経済学の歴史的分析和論理的分析を切り離し、史的唯物論と革命的弁証法を否定する宇野ブルジョア経済学へと進んでいった。ブントは、すでに破産した労働派「経済学」にしがみついた。彼らは労働派経済学—ブルジョア経済学の立場に立ってしまつた。そして、このことは史的唯物論と革命的弁証法を否定する立場に立ってしまったということである。彼らはこの立場から宮本修太郎一味の革命路線を克服しようとした。そのため、彼らは一生懸命労働派「経済学」者を弁護した。これはマルクス・レーニン主義の魂を放棄し、プロレタリア階級の立場を放棄することであつたのだが。

「私達は新しい思想運動、理論運動をおこなわなければならないと確信しています。いま私達よりも早くすでにこのような運動を行っている人々が僅少ですがいました。哲学における梯明秀、黒田寛一……三浦つとむ、政治史における山西英一、経済学における宇野弘蔵氏が……それです」

★彼らはこうしてマルクス主義の階級分析の観点を放棄し、史的唯物論を放棄し、革命的弁証法を放棄して、ブルジョア経済学者の観点、小ブル急進主義の観点におち込んだ。それ故、「帝國主義」復活論争においてさえ、宮本一味の超帝國主義論も春日の民族闘争否定論、構造改革論も克服できず、ブントは宮本と春日が共同でし

かけた観念論のワナにたやすくひっかかってしまった。宮本は一代の大ベテンをかけていう。

「経済的特徴(それもまだ十分とはいえないが)だけでなく、政治・経済全体の特徴からみて、日本は依然として政治、軍事、外交経済のひろい分野で、全体としてアメリカ帝國主義への従属のもとにあり、アメリカ帝國主義の支配のもとで、帝國主義的復活がすめられています。したがって、主たる側面はいぜんとして被抑圧民族の立場であり、他民族への抑圧と侵略を主なる側面とする、帝國主義の地位、主たる側面が抑圧民族としての地位にたつているといえませんか。」(「現代日和見主義の特徴とゆくえ」)

「つぎに、日本のいわゆる帝國主義的自立、あるいは日本独占資本の軍國主義的帝國主義的復活の問題があります。この問題は以上のべた対米従属と関連して考えていく必要があります。……帝國主義的復活の完了とか、帝國主義的自立ということは、何を指標としていつているのでしょうか。さききのべたように、独占資本主義—帝國主義という意味なら日本は独占資本主義といえる段階だから帝國主義國といえます。しかし問題は、とくに世界を變革する革命の見地から、日本の現状をどう規定することがより正しいかという見地から出発するならば、独占資本主義の段階に達している日本で、自立的な帝國主義的侵略國という側面が主になっているのか、それとも事実上の従属國の状態がおもな側面になっているのかをはっきりさせることが重要です。日本の帝國主義的復活が完了したか否かの論議は、独占資本主義の段階にあるか否かと同じ意味の論議では

ありません。主たる側面が他民族を抑圧する侵略的な帝國主義として復活したか否かの論議であります」(「綱領草案について——全國都道府県委員長会議での報告」)

ここに宮本一味のベテンがあるのだ。すなわち

主たる側面||被抑圧民族の立場、米帝への従属國

従たる側面||他民族の抑圧と侵略を主とする帝國主義國

として、アメリカ帝國主義による日本民族の抑圧の問題と、日本独占資本のアジアの海外侵略の問題とを、絶対的に対立させたのである。対立するはずのないものを対立させた。

★ 事實はどうなのか。事實は、アメリカ帝國主義が日本民族を抑圧しながら、日本独占資本を援助してその帝國主義的復活を助けたということである。

「アメリカ帝國主義の支持のもとに日本帝國主義も世界市場における競争者としての地位を再びとりもどしてきた。……西ドイツ及日本の、この二つの帝國主義の再起は重大な戦争の危険をはらむ二つの策源地となつている。……西ドイツと日本はすでにアメリカの市場争奪の二つの強敵になつている」(「帝國主義が近代戦争の根源であることについて並びに各国人民の平和を闘い、とる道について」干兆力)

アメリカ帝國主義と日本軍國主義が従属同盟を結んで、アジアの海外侵略を行ない、反共軍事同盟を結成しているのがまぎれもない事實である。したがって、日本独占資本対アメリカ独占資本の階級同盟の問題、すなわち、アメリカ帝國主義による日本民族抑圧を日本

独占資本が積極的に支持し、対米従属關係にあるという問題は次のようになる。

主要側面||日本独占資本のアメリカ帝國主義に対する従属國
副次的側面||日本独占資本対アメリカ独占資本の対立抗争面
ところが、宮本一味はこの問題をすこしばかり手品を使って、副次的側面を入れさせた。

主要側面||日本独占資本のアメリカ帝國主義に対する従属國
副次的側面||日本独占資本の帝國主義的侵略(これは日本独占とアジア人民との關係なのだ)
すなわち、米日間の矛盾の分析が問題とされているのに、日本独占資本の帝國主義的侵略をもち込み、すりかえを行なつた。そして彼らは声高らかに叫ぶ。

「君は日本独占資本主義の侵略性を云々し、非難するのか。それならば、君は日本独占資本主義の対米従属を否定し、日本人民のアメリカ帝國主義に反対する民族独立闘争の課題を否定する春日(在)や志賀一派と同じ『復活完了』論者であり、反党分子である」と。だが事實は何よりも明らかである。アメリカ帝國主義は日本民族を抑圧しつつ、自らのアジアにおける手先、番犬、反共の番犬とするために、日本独占資本の帝國主義的復活を積極的に援助してきたのである。一方、日本独占資本もこのアメリカ帝國主義の日本民族支配を容認し、支持しつつ、軍國主義的復活を謀ってきたのである。アメリカ帝國主義による民族抑圧は、厳然とした事實であり、日本独

占資本のアジア・海外侵略も断然とした事実である。これを誰が否定できよう。そして、反中国とアジア侵略のための日本軍国主義の公然たる復活とその強行は米日反動派の当面一致した基本路線なのである。独占資本相互間の矛盾は敵対的であり、米日独占相互間の矛盾も敵対的である。断じて「超帝国主義」的關係などではない。だが、彼らはアジア人民の革命闘争の前にはどうしても米日反動派は、従属同盟は保持しなければならない。米日独占間の矛盾は日毎に激化している。米日反動派に反対するアジア人民の革命闘争も日毎に激化している。彼らは解けない矛盾におち入った。彼らは一層凶暴にならざるをえない。それ以外に道はない。

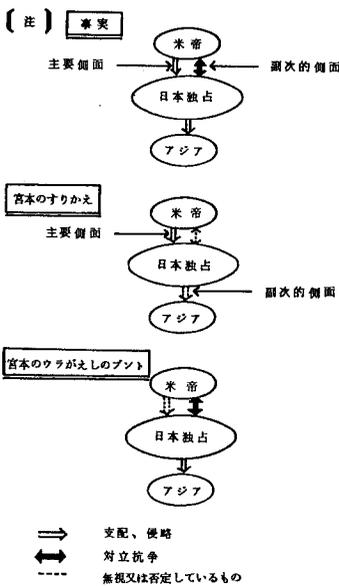
★ ところが、宮本修太郎一味は、こうした具体的歴史的事実を意図的に否定してねじ曲げた。現在では、従属同盟関係が主要側面であり、抗争の局面が副次的側面であるという米日独占資本の關係における事実を、宮本は、日本独占資本の対米従属が主要側面か、アジア侵略が主要側面かという問題にすりかえ、「民族抑圧」が主要側面か、「帝国主義的」地位が主要側面かという問題にすりかえた。このことは、日本独占資本のアジア侵略の事実を見ぬふりをすることであり、アジア侵略の野望を許し、これを美化したということである。それのみではなかった。彼らはアメリカ帝国主義と日本独占資本との間の矛盾をも、見て見ぬふりをし、彼らの先輩であるカウツキーと共に「回避」したのである。

ブントは春日一派と同様に、宮本一味のこの観念論、問題のすりかえに同調してしまつた。この点で宮本とブントが異なつていたの

は、陽面と陰面の違いでしかない。ブントは宮本と同じ土俵にあり、宮本に唱和してしまつた。「帝国主義的」地位が主要側面であり、民族闘争などナンセンスであると。「日本帝国主義」は復活しており、アメリカ帝国主義による民族抑圧の問題など大した問題でない。沖繩闘争など知つたことではない、帝国主義同士の対立抗争こそ現局面を規定しているものなのである。とうとうペテンにかけられてしまつた。

「世界階級闘争及び日本階級闘争の現局面を根柢から規定し、特徴づけているものは、アメリカを中心とする資本主義の戦後体制の全面的動揺によってひき起された。帝国主義の対立激化である」(「共産主義 八号」)

(注)



◎ 従属同盟というのは、米日間の関係。帝国主義的侵略とい

うのは日本独占とアジアとの関係。つまり別の関係のもの。主要側面、副次的側面というのは、米日間、および、日本とアジアの間のそれぞれにおいてそれぞれいえることであり、別々のものの片方から「主要側面」、もう一方から「副次的側面」を引っぱり出し、「比較」するなど全くバカげた話。問題は、米日間の關係において、主要側面は何か、副次的側面は何か、ということである。

★ 具体的事実を具体的に分析するもの、すなわちマルクス主義者であるならば、アメリカ帝国主義による日本民族支配という事実を決して抹殺できなかったであろう。日本独占資本のアジア・海外侵略という事実を決して抹殺できなかったであろう。日本独占資本が従属同盟しているという事実を決して抹殺できなかったであろう。従属同盟内における対立抗争という事実を決して抹殺できなかったであろう。ブントは具体的事実を無視し、観念論に陥つていたため、米帝の日本民族支配と、日本独占のアジア侵略を対立させ、一方を承認すれば、もう一方は否定しなければならぬと思ひこみ、宮本一味と白黒を逆にしただけになつてしまつた。

では、論理的に、米帝の日本支配と日本独占のアジア侵略は対立することであり、一方を承認すれば、一方を否定しなければならぬのだからか。アメリカ帝国主義に民族の抑圧をうけながら、日本独占資本が帝国主義としてアジアを侵略しているということは論理に反することであろうか。否、——否、断じて否である。レ——

ニンは次のように述べている。

「資本主義的帝国主義の時代の植民地政策について述べる以上：国家的従属の幾多の過渡的形態をつくりだすうということに注意しておかなければならない」(「帝国主義論」)

「列強の植民地領有とならべて……小国の小さな植民地」(同)の領有がありうるし、またある。

「イギリスは自分の対抗者であるスペインやフランスとの闘争での自分の立場を強化するために、ポルトガルとその植民地領土を擁護した。……個々の大国と小国とのあいだのこの種の間接的世にもあった。しかし資本主義的帝国主義の時代によるそれは一般的な体系となり、『世界の分割』の諸關係の総体のなかでその一部分をなし、そして世界金融資本のもろもろの活動の一環に転化している」(同)

「帝国主義にとって特徴的なのは、まさに農業地域だけでなく、もとも工業的な地域をも併合しようとする志向である」(同)とあり、この最後の言葉は、アメリカ帝国主義による日本民族抑圧の志向を否定する春日一派や、ブント系諸君(「日帝自立」派)に対する痛烈な批判となつてゐる。決してアメリカ帝国主義は、日本独占資本が進んで主権の一部をゆすり渡しているから、日本民族を抑圧しているのではない。アメリカ帝国主義が進んで日本民族抑圧をおこなつてゐるのであり、この志向は決してなくなりはない。たとえ、日本独占資本が従属に反対したところで(当面、ありえないが)、アメリカの日本民族抑圧の志向はなくなりはない。

★ プント系諸君は、そもそも宮本一味の闘わない路線（米帝とも日本独占とも闘わない）に反対し、真に闘う路線をかちとろうとしたのである。ところが、プントは宮本の裏切りの原因がプロレタリア独裁の否定にあることをわからず、敵の規定の誤り、帝国主義相互間の矛盾の抹殺（これは一面にすぎない）、経済学の誤りが原因であるとしかわからなかった。彼らは宮本一味が超帝国主義論のデタラメによって、米帝と日本独占の間の矛盾を抹殺し、日本独占のアジア侵略を抹殺していることに気がついた。これは正しかった。だが、プロレタリア独裁がわからないため、この現状規定論から宇野ブルジョア経済学の立場に移ってしまった。そして「原理論」「段階論」「現状分析論」などといったくだらぬものを持ち出してきて、マルクス経済学から階級的視点を抜き去り、歴史的分析と論理的分析の一致を否定してしまった。その典型は、渚論文（M.L.二号）の「商品から商品」で終わる「原理論」である。彼らは階級闘争の視点を捨て、マルクス主義経済学を捨て、史的唯物論を捨てた。革命的弁証法も捨てた。そして、宮本一味との経済論争も、実は権力構造分析をめぐって、おこなわれていることも忘れ去った。彼らは「経済学」にしがみついた。そして唯経済論者に転落した。彼らは宮本に対抗するために、帝国主義相互間の矛盾を過大視し、そのあまり、これをもって現局面の階級闘争を根本的に規定しているものとしてしまった。（この誤りについては、プントの情勢分析の項で指摘する）

もうこうなってしまうとはプントは正しい路線をかちとり、宮本らである。プント系諸君はまぎれもなく革命派であり革命的左翼である。

我々は、この誤まった理論、政治路線とは徹底的に闘うが、団結を求め、広範な反米反軍国主義の統一戦線を共にかちとることを呼びかけるものである。

を真に批判することなど出来ようはずがなかった。彼らはあげくの果に反革命トロッキーにすぎた。そして、ますます混乱に陥っていった。彼らはもはや宮本の右翼日和見主義路線の眼目はプロレタリア独裁の否定である、マルクス・レーニン主義の眼目はプロレタリア独裁であるという観点にまで到達しえなくなってしまう。プント系諸君は今では、マルクス・レーニン主義の魂プロレタリア独裁をきわめて自然発生的にしか理解しえず、プロレタリア独裁下での階級闘争を否定し、世界革命（トロッキーの「世界革命」ではない）を否定し、数国において又は一国においてさえも樹立されたプロレタリア独裁は断固守ることができると、このプロレタリア独裁国家は世界革命の根拠地であるというレーニン主義を否定し、連統革命論を否定し、革命発展段階論を否定し、農民の革命的可能性を否定し、マルクス主義経済学を否定し、史的唯物論を否定し、革命的弁証法を否定している。これはきわめて残念なことである。

★ しかし、我々はプント系諸君が理論面にかかる重大な誤りを犯しているとはいえず、宮本一味と決して同一視しない。それは、すでに見てきたように、プントの発生が宮本の闘わない路線（プロレタリア独裁の放棄の必然的結果）に自然発生的であるとはいえず、反対したことにあるからである。そして、現在まで、誤まった理論、政治路線（「日帝自立」論）を信奉しながらも、実質的には米日反動派と闘って、自然発生的な反米愛国闘争を闘ってきたからである。プロレタリア独裁の思想を意識的につかみえていないが、実力闘争を闘い、発展させ、自然発生的に暴力革命の思想を体现してきたか

第一章

プント系諸君とプロレタリア独裁

A 宮本一味によるプロレタリア独裁の否定

プントの発生が宮本修太郎一味によるプロレタリア独裁の放棄に由来していることはすでに述べたが、問題の核心が宮本一味のプロレタリア独裁放棄にある以上、プントを批判するにあたっては、まず宮本の裏切りについて最初に若干触れておく必要があるだろう。

宮本修太郎一味はプロレタリア独裁を完全に放棄し、「豚小屋」を礼賛して言う。

「党と統一戦線勢力が国会で絶対的多数を占め、その基礎のうえにアメリカ帝国主義および日本独占資本とたたかって人民の利益を守る統一戦線政府を適法的に樹立する」（「極左日和見主義者の中傷と挑発」）

「労働者、農民を中心とする人民の民主連合独裁の性格をもつこの権力（適法的に樹立した統一戦線政府）は世界の平和、民主主義、社会主義の勢力と連帯して独立と民主主義の任務をなし遂げ、独占

資本の政治的経済的支配の復活を阻止し、君主制を廃止して反動国家機構を根本的に変革して人民共和国をつくり、名実ともに国会を国の最高機関とする人民の民主主義国家体制を確立する」(宮本一味「党綱領」)

同志諸君、この宮本修太郎の「豚小屋」崇拜に驚かないでほしい。「豚小屋」で多数を占めて、「適法的」に「統一戦線政府」を樹立する。そしてこの「豚小屋」を「名実ともに国の最高機関とする人民の民主主義国家体制を確立する」これが宮本一味の至上最高のスローガンであり、願いである。「適法的」に「豚小屋」を改造する。これが宮本修太郎のスローガンであり、夢であり、希望である。宮本修太郎一味の夢と希望は、腹をわけてみれば、マルクス・レーニンによる議会制度批判を「わすれられたことば」にすることであり、日本の革命的人民にプロレタリア独裁を放棄させることである。ここで少し、この宮本一味が「わすれさせようとしている言葉」をここに再録してみよう。

「マルクスはこう書いている。『コミニューンは議会風の団体ではなくて、同時に執行府であり、立法府でもある行動的団体でなければならなかった』……『普通選挙権は支配階級のどの成員が議会で人民を代表し、ふみにじる(……)べきかを(人民をあやまり代表すべきかを)三年または六年に一度きめるのではなくて、ちょうど各雇主が自分の事業に労働者や監督や簿記係をもとめる場合に個人の選択権が役立つのと同じ仕方、コミニューンに組織された人民に役立つはずであった』(第四冊 二二〇、二二二ページ)一八

七一年にくだされたこの注目すべき議会制度批判も、また社会排外主義と日和見主義のおかげで、いまではマルクス主義の『わすれられたことば』の一つになっている」(「国家と革命」)

宮本修太郎先生、どうですか。議会、国会とコミニューン、ソヴェト、革命委員会の相違はわかりますかね!!

「『議会のような団体ではなく、行動的な団体』のことは、今日の国会議員や社会民主党的議会の議会的『狎』どもの急所についている!!」(同)

宮本修太郎先生がこんな言葉は日本の革命的人民に、忘れさせたのもよくわかりますよ。国会は「豚小屋」崇拜者・「狎」宮本修太郎先生の急所をつかれますからね!! 国会は「豚小屋」が、人民によってコミニューン、ソヴェト、革命委員会、etc. によってかえられてしまいますものね!! 「黒豚」や「狎」にとつては夢も、ぼくもなく、なつちやうものね!!

「大臣や職業的な国会議員やプロレタリアートの裏切り者や、今日の『功利主義的な』社会主義者は、議会主義制度の批判を無政府主義者に完全に一任して」(同)

ここはこうに読む。大臣や職業的な国会議員になりたがっており、プロレタリアートの裏切り者である、今日の『功利主義的な』宮本修太郎一味は、議会主義制度の批判を無政府主義者や、ブント、革マル、中核などの諸君に完全に一任して、

「このおどろくほど道理にかなった根拠から議会制度のあらゆる批判を『無政府主義』だと宣言した。議会制度の『先進』諸国のプ

ロレタリアートがシャイデマン……らの一派や『社会主義者』(や「宮本修太郎一味」)をみて嫌気がさして、アナルコ・サンディカリズムに(ブント、中核、革マルなどの諸君に)——それが日和見主義の裏の兄弟であるにもかかわらず——ますますひんばんに共鳴しているのは異とするにたりない。」

「マルクスは無政府主義者がブルジョア議会制度の『豚小屋』をえ利用する——とくに革命的情勢があきらかにないときば——能力がないというので、彼らと容赦なく手を切ることができた」(同)

宮本修太郎一味は、レーニンのこの「利用」という言葉を「改造」という言葉に入れかえ、革命的情勢も何も関係なく「豚小屋」改造を最終目標とした。議会制度を廃止し、コミニューンの組織を樹立するために、革命情勢を考慮に入れ、「豚小屋」を「利用」する

これが、マルクス・レーニンのいっていることである。「豚小屋」を改造すればよい、そうすればコミニューンの組織は不要である。宮本のこんなデタラメは、マルクス・レーニンも言っていない。逆にこれを痛烈に徹底的に粉砕しているのである。

「同時に彼(マルクス)は議会制度を真に革命的プロレタリア的に批判することもできた。支配階級のどの成員が議会で、人民を抑圧し、ふみにじるかを教年に一度きめること——議会主義的、立憲的君主制ばかりではなく、もっとも民主的な、共和制のばあいもブルジョア議会制度の真の本質はまさにここにある」(同)

宮本一味はこうした人民抑圧の議会制度を立憲的君主制から共和制にして、名実ともに人民抑圧の議会制度を確立する、というのだ、

マルクス・レーニン主義者であれば誰でも、このブルジョア議会制度の廃止、プロレタリア独裁権力の樹立を考えなければならぬ。これを否定するものは、間違いなくマルクス・レーニン主義者ではない。

「もしわれわれが国家の改造を提起し、議会制度を国家の一制度としてこの分野におけるプロレタリアートの任務という見地から見れば、議会制度からの活路はどこにあるか? どうすれば議会制度なしにやってゆけるであろうか?」(同)

レーニンはここで議会制度の廃止の問題を提起し、そして彼はこの問題にこたえて、コミニューン、ソヴェトを議会制度に對置したのである。ところが、宮本修太郎一味は、このマルクス・レーニン主義の議会制度批判、プロレタリア独裁の学説を、

「当時のヨーロッパ革命運動が当面していた歴史的情勢からひきだされた結論であった」(「極左日和見主義の中傷と挑発」)

とデタラメをいい、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を、「当時のヨーロッパ革命運動」のみの特殊性にしているのである。さらに反ファッショ統一戦線を持ち出してきて、ディミトロフが宮本一味と同じ見解であるとこじつける。だが、ディミトロフは決して君達修正主義者に加担するようなおろかなことはしなかった。ディミトロフは強調している。

「左翼日和見主義は、ブルジョアジーの独裁とプロレタリアートの独裁とのあいだに存在する特別の(民主主義的過渡的段階)を設けようとした。それはブルジョア独裁からプロレタリア独裁への

平和的、議会的転移の幻想を労働者に植えつける目的であった。このおとぎ話のごときへ過渡期段階Vを彼らはまたへ転化の形態Vと名づけ、あまつさえその論証にレーニンさえ引用したものである。しかしこの種の欺瞞を暴露するのはむずかしくはなかった。なぜならレーニンはへプロレタリア革命Vへの、すなわち、ブルジョワ独裁転覆への転化および接近の形態を語ったのであり、ブルジョア独裁とプロレタリア独裁のあいだに何が過渡的形態かなどについて語ったのではないからである」

議会制度をはじめとするブルジョア独裁の汎ゆる形態の「爆破」プロレタリア独裁権力の樹立、これはマルクス・レーニン主義の普遍的真理である。これは矛盾の普遍性による。そして、このプロレタリア独裁の権力の具体的形態がどのようなものになるかは、各々の国の歴史的具体的条件によって異なる。これは矛盾の特殊性による。だから、宮本一味のように勝手に「国会」を「名実ともに国の最高機関とする」などとして、ブルジョア議会制度を礼賛し、自らの手をしばるようなことは決してすべきではない。かつて、フランス人民がコミューンを、ソヴェト人民がソヴェトをつくりだしたように、日本の革命的人民がブルジョア独裁権力に代わるプロレタリア独裁権力の日本の具体的萌芽形態を、必ず闘いの中で創造するであろうから、マルクス・レーニン主義者はこの人民の闘いの歴史を学び、それを人民と共にプロレタリア独裁権力にまで発展させればよいのである。決して「国会」に手をしばられてはならない。

宮本一味は革命的人民の鋭い闘争の前に、この豚小屋で多数を占

めて「よりよい」豚小屋にするというベテンが暴露されると今度は手品を使っている。豚小屋で多数を占めて、豚小屋の手を借りて（適法的に）豚小屋をコミューンに改造するのだと。だが、このベテンもすぐばれてしまう。

「この機構は骨の髄まで官僚的であり、骨の髄まで非民主的であって、真剣な改良などは……実行する能力がないのである」（レーニン全集 第二五巻 三九六ページ）

「この機構は……ブルジョアジーに奉仕することはできるが、改良を実行すること、資本の権利『神聖な私的所有』の権利を掃することはさておき、せめて真剣にそれを削減し制限することは、このような機関には絶対できない」（同、三九七ページ）

「このような国家機関の手を借りて……改革を実行しようと試みるのはこのうえない幻想であり、このうえない自己欺瞞であり、人民への欺瞞である」（同、三九七ページ）

「とくにコミューンは『労働者階級はできあいの国家機関をたんにその手ににぎり、それをそれ自身の目的に使うことはできない』（『フランスにおける内乱』）（『共産党宣言』序文 マルクス・エンゲルス） そもそも、豚小屋で多数を獲得することを前提とすること自体が、プロレタリア独裁思想の否定なのである。

「プロレタリアートの独裁とは、ただ一つの階級、プロレタリアートによる、しかもはかならぬその革命的前衛によるブルジョアジーの打倒を意味する。この前衛はブルジョア議会へのブルジョア憲法制定議会等々の投票によって、すなわち賃金奴隷制が存在する

ところでの、搾取者が存在するところでの、彼らの抑圧のもとので、生産手段に対する私的所有が存在するところでの、投票によって、あらかじめ人民の多数者を獲得せよと要求すること、あるいはそういうことを前提とすることは実際にはプロレタリア独裁の立場をまったくすて去り、事実上ブルジョア民主主義の立場にうつることを意味する」（レーニン全集 第三〇巻 三四五ページ）

宮本修太郎一味がこのように真正正銘の裏切り者であり、背教者であり、修正主義者であり、プロレタリア独裁を完全に放棄しているということは、革命的人民の前に今や明白なことになっている。そしてこの裏切りは今にはじまったことではなく、悪名高い野坂理論を六全協以後、再び復活させてきただけなのである。これについては、ブンドが言うごとく「この綱領に規定されているような内容の是非をめぐる論争は古く一九五七年頃から行なわれていた」（「われらの対立」）のであった。

しかし、ブントはこの宮本一味の裏切りの本質がプロレタリア独裁の否定であることがわからなかった。彼らは宮本の裏切りを現状規定論争から、敵の規定の問題をめぐる経済学の誤りにもとめ、この帝国主義復活論争を通じて、宇野ブルジョア経済学の立場に移行し、完全にブルジョアの視点に立ってしまった。それ故に彼らが日共の宮本修正主義集団の誤りが、プロレタリア独裁の否定であると見分けられる段階にまで到達できなくなり、後退してしまっただけで、彼らは革命の問題は権力の問題であるという観点をすてて、トロツキに救いを求めた。彼らは一応口では、マルクス・レーニン主義の

眼目、プロレタリア独裁を認めるが、トロツキと同じように、このプロレタリア独裁を「純粋」プロレタリア独裁とし、プロレタリア独裁の多様な形態を否認する。従って彼らには、労働者独裁、人民民主主義独裁が本質的にはプロレタリア独裁であるということが理解できない。彼らは労働者以外の階級が一時的にでもプロレタリア独裁の政権に参加することを拒否し、一挙に「純粋」プロレタリア独裁、プロレタリアートだけの世界を作ろうとする。具体的条件も特殊性も無視して。彼らにはあせる// 彼らの階級が小ブルジョアジーであるために、それ故に彼らの特徴はトロツキと同様、過渡期社会での階級闘争を否認するところであらわれている。そして、プロレタリア独裁を投げ捨てる。彼らの「世界革命」論は、プロレタリア独裁下での階級闘争を否認し、この階級闘争におけるプロレタリアートの勝利を確信できないため、一国あるいは数ヶ国におけるプロレタリア独裁権力の維持、強化が不可能であるという結論から直接に引き出されているしるものである。

ブントのプロレタリア独裁否定の思想は、過渡期の階級闘争の見方に、すなわちプロレタリア独裁下での階級闘争の見方に典型的にあらわれているから、まず、ここから検討していくことにしよう。

B 過渡期の階級闘争に対するブント系諸君とレーニン

(1) ブントの過渡期の階級闘争論

「日和見主義は、階級闘争の承認をまさにもっとも主要な点までは、すなわち資本主義から共産主義への過渡期、ブルジョアジーの打倒と彼らの完全な絶滅の時期まではおしひろげない。現実には、その時期は不可避免的に階級闘争がかつてなかつたほど激しくその形態が、かつてなかつたほど鋭い時期である」(レーニン)

「ブルジョア権力がたおされたあとでも、ブルジョア国家が破壊されたあとでも、プロレタリア階級の独裁が樹立されたあとでも、(旧社会主義と、旧社会民主主義政党的の俗物どもが考えているように)階級闘争はなくなりはない。それはその形態を変えるだけで多くの点でかえって激しくなる」(同)

過渡期の階級闘争を承認するの可否かは、とどのつまりプロレタリア独裁を承認するの可否か、マルクス主義者なのか日和見主義者なのかの分水嶺をなすものである。では、プントの諸君は過渡期における階級闘争を真に承認しているのだろうか。プロレタリア独裁を承認し、真に理解しているのだろうか。彼らは真のマルクス・レーニン主義者なのであるか。プントは次のように論じている。

「それでは社会主義社会における階級闘争とは何か。現在の中国では『プロレタリアートとブルジョアジーの闘争』といっている。はたして過渡期社会の階級闘争は『プロレタリアートとブルジョアジーの闘争』だろうか。レーニンの『国家と革命』ではまず第一に『搾取者—資本家の反抗をうちくたく』ものとしてプロレタリア独裁権力が規定されている。つまりここでも過渡期社会における階級闘争は『残存する』ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘

争という規定が出てくる。しかしこれと併行して商品経済的原理に對する社会主義共同体的原理の闘争という見方も述べられている。後者は過渡期社会の性格——商品経済的性格を残していること——に根拠をもつものである。はたして、これら二つの過渡期社会の階級闘争のうちで、どちらが基本的な問題だろうか」(共産主義 十号 一二〇ページ 「文化革命か社会大革命か」)

「過渡期の階級闘争の基本は『残存するブルジョアジー』に對するプロレタリアートの闘争というよりも、むしろ商品経済的原理に對する共同体的原理の闘争と見るべきだろう」(同)

同志諸君!! プントはここでウツをつけている。そうでなければレーニンの著作など全くまじめに読んでいないのだ。第一のウツ——プロレタリアートとブルジョアジーの闘争を、レーニンはプロレタリアートと「残存する」ブルジョアジーのみとの闘争に限定したという見解。第二のウツ——「二つの階級闘争」があり、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争と併行して「商品経済的原理に對する社会主義共同体的原理の闘争」があるとレーニンが言っているという見解。この二つのウツ、デタラメの根源は一つであり、それは、プロレタリアートとブルジョアジーが経済戦線、思想戦線、政治戦線で、激しく対立していることを無視し、上部構造と下部構造を全く分離し、階級闘争と生産様式を全く切りはなしている点である。プントは実質的にプロレタリア独裁を否定しており、無政府主義者となんして変わりが無い。プントの「論拠」はレーニンの次の文である。

「共産主義はその第一段階……ではまだ、経済的に完全に成熟したものの、資本主義の伝統または痕跡から完全に自由なものではありえない。第一段階の共産主義のもとでは『ブルジョアの権利の狭い視野』が残存しているというような興味ある現象はここから起こってくるのである。消費手段の分配についてのブルジョアの権利はもちろん、不可避的にブルジョア国家の存在をも予想する。そこで共産主義のもとでは一定期間、ブルジョア権利が残存するばかりでなく、ブルジョア国家——ブルジョアジーのいない——さえ残存するということになる」(「国家と革命」)

「プロレタリアートには国家権力、すなわち中央集権的な権力組織、暴力組織が必要であるが、それは搾取者の反抗を抑圧するためにも、社会主義経済を『組織』する事業においても、膨大な住民大衆、すなわち農民、小ブルジョアジー、半プロレタリアートを指導するために必要なのである」(同)

これを「論拠」として、プントは二つのウツを言っている。そしてレーニンは、過渡期社会においては、プロレタリアートとブルジョアジーの、経済戦線、政治戦線、思想戦線における全面的な、鋭い階級闘争が存在するなどは、毛頭述べたことはない、とプントはいう。

(9) レーニンの過渡期の階級闘争

では本当に、レーニンはプント諸君のおっしゃる通りに言っている

るのであるか。すなわち、過渡期社会のプロレタリアートとブルジョアジーの闘争を、プロレタリアートと「残存する」ブルジョアジーとの闘争に限定したのであるか。過渡期社会には「二つの階級闘争」があって、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争と並行して「商品経済的原理に對する社会主義共同体的原理の闘争」があると、レーニンは言っているのであるか。レーニンは、過渡期社会において「資本主義の伝統または痕跡」から、すなわち小規模生産や習慣の力から、ブルジョアジーが新たに自然発生的に、大量に生み出されることを否定したのであるか。プロレタリアートとブルジョアジー(「残存する」ものと、新たに発生したもの)の、経済、政治、思想戦線での全面的な階級闘争を否定したのであるか。レーニンは、プントのように、上部構造と下部構造と全く切りはなし、上部構造での闘争と下部構造での闘争を全く切りはなし、階級闘争と生産様式を全く切りはなしたのであるか。

とんでもない!! まったくとんでもない!! 少しでもまじめに学習しようとする人であれば、レーニンが次のように言っていることを無視しないであろう。

「このブルジョアジーの反抗は、かれらが打倒される(たとえ一国内であれ)ことよって十倍にもなるし、またその力は国家資本の力、ブルジョアジーの国際的連繋の力と強固さにあるばかりではなく、習慣の力、小規模生産の力にもある。なぜならば小規模生産は残念ながら、まだこの世におびただしく残っていて、この小規模生

産が、資本主義とブルジョアジーをたえず、毎日、毎時間、自然発生的に大規模に生み出しているからである。すべてこうした理由から、プロレタリアートの独裁は必要である」(「共産主義内の『左翼主義』小児病」)

レーニンは、ブルジョア経済学を信奉する俗物どものように、「経済原理論」を生産様式よりも重視する俗物どものように、すなわちブントのように過渡期の階級闘争を分析しはしなかった。レーニンは、階級闘争をその生産様式と決してきりはしなかった。上部構造と下部構造(経済的基礎)とを切りはなさなかった。ただでなく、上部構造の経済的基礎に対する反作用もきわめて重視しているのである。レーニンは、過渡期社会において、自然発生的に新たなブルジョアジーが発生していることを分析した。決して経済戦線での闘争と、思想、政治戦線での闘争を切りはなさなかった。

レーニンは史的唯物論の立場を断固として堅持し、社会主義社会は資本主義社会から生まれてきたものであるため、「経済的に完全に成熟したもの」とはなっておらず、そこで依然として、ブルジョアジーの発生と反抗の基礎、小規模生産が存在することを明らかにしているのである。もう少し詳しく社会主義社会の経済的基礎についていえば、

「すべての社会主義国には、なんの例外もなく、全人民所有制と集団所有制の差違が存在しており、また個人所有制も存在」(「国際共産主義運動の総路線」)しているのである。さらには又、分業制も確固として存在しているのである。これが経済面における「資

本主義の伝統または痕跡」なのである。

このように、過渡期社会に小規模生産や個人所有制が存在し、これが新たに資本主義とブルジョアジーを毎日、毎時間、自然発生的に大量に生み出していることを、はっきり分析していたレーニンが、どうしてブントのように、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争をプロレタリアートと「残存する」ブルジョアジーとの闘争に限定できようか。新たに発生するブルジョアジーとは闘わなくてもいいのか。国際資本に対してのみではなく、新たに発生するブルジョアジーとの闘争のためにもプロレタリア独裁が必要だといっているレーニンが、どうしてブントのように、経済戦線での統一をプロレタリアートとブルジョアジーの全面的闘争から切りはなすだろうか。どうしてブントのように、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争を切りはなし、並行させて「商品経済的原理と社会主義共同体原理の闘争」が存在するなどといえよう。

レーニンは、階級闘争を生産様式から、経済的基礎から決して切りはなさなかったため、レーニンはブントのように、思想戦線での闘争を階級闘争とは見なさない観点には立っていないのである。レーニンは「技術」をも、階級闘争(勿論、プロレタリアートとブルジョアジーの)の観点から観察しているのである。

「搾取者、地主と資本家階級は、プロレタリアートの独裁のもとでも消滅しなかったし、また一挙に消失することはできない。搾取者はずち破られたが絶滅されてはいない、かれらには国際的な基礎が、国際資本が残っており、かれらはこの国際資本の一支店である。

かれらには部分的にいくらかの生産手段が残っており、金がこのっており、巨大な社会的なつながりが残っている。かれらの反抗力はまさに、かれらが敗北したために百倍にも千倍にも増大した。国家行政や軍事行政や経済行政の『技術』はかれらにきわめて大きい優勢を与えており、そのためにかれらの役割は人口総数のうちに、かれらが占める割合とは比べものにならないほど大きい。倒された搾取者と、勝利した被搾取者の前衛、すなわちプロレタリアートとの階級闘争は、はるかに激しいものとなった」(「プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治」)

★レーニンは思想戦線での闘争を階級闘争の一部であると見なしただけではない。レーニンは、上部構造の下部構造に対する反作用を非常に重視しているのである。政治戦線、思想戦線でのプロレタリアートとブルジョアジーの闘争が、その経済的基礎に重大な反作用をおよぼし、プロレタリアートが上部構造での闘争で敗北したならば、社会主義の経済的基礎が突きずされ、ブルジョアジーの反抗の経済的基礎が拡大することを指摘しているのである。それ故、レーニンは社会主義社会では、ブルジョアジーの反抗の経済的基礎国家資本、小規模生産、分業など——を克服することは非常に困難な闘争であるとともに、上部構造での階級闘争が非常に激しいものとなることを指摘したのである。したがって、レーニンは次のように言っている。

「われわれの任務は、資本家のあらゆる反抗、軍事のおよび政治的な反抗だけでなく、思想的な、もっとも深刻な、もっとも強力な

反抗をも克服することである。」このように、思想戦線でのブルジョアジーとの闘争をきわめて強調したのであった。

いずれにせよ、レーニンはブント諸君の如く、生産様式をその上部構造から切りはなすようなことは決してやらなかったし、プロレタリアートとブルジョアジーの経済戦線での闘争と、思想、政治戦線での闘争とを、互いに「併行」するものとみなしたり、切りはなして分析したりは決してやらなかったのである。そして、「商品経済的原理に対する社会主義共同体的原理の闘争」などといった、珍奇な、またまた例によって、ブント諸君によって「発明」「発見」された「闘争」など、レーニンは毛頭述べておらず、問題にもしていないのである。レーニンは過渡期の階級闘争について、

「倒された搾取者と勝利した被搾取者の前衛、すなわちプロレタリアートとの階級闘争は、はるかに激しいものとなった」

「資本主義から共産主義への移行は、歴史的な一時代である。この時代が終らない間は、搾取者には必然的な再興の望みが残されていて、この望みは再興のすべてに転化する」(「プロレタリア革命と背教者カウツキー」)と述べている。すなわち、プロレタリアとブルジョアジーの階級闘争である。とはっきり規定しているのである。「二つの階級闘争」などでもないデータラメである。経済的基礎での闘争とは、社会主義建設が資本主義の復活か、集団所有制か私的所有制か、ブルジョアの権利の制限か反制限か、をめぐっての、プロレタリアートとブルジョアジーの激烈な階級闘争である。

★ブント諸君によれば、過渡期の階級闘争は「商品経済的原理に対

する社会主義共同体原理の闘争」だということであるが、しからばお聞きしよう。君達は「プロレタリアートの独裁ではなくして、社会主義共同体原理」の独裁が、過渡期の国家であると主張されるのか？ レーニンが、ブルジョアジーのいない「ブルジョア国家」という時、君達は「商品経済の原理の国家」がこれであると主張されるのか？ 社会主義建設に反対する階級がブルジョアジーなどの搾取者以外に存在するというのか？ 君達は何のため、プロレタリア独裁が必要というのだ？ 君達の論理では必要ではないか？ 君達には、革命的弁証法、史的唯物論の「一かからもわかっていない。君達にわかっていないのは、ブルジョア経済学——しかも生産様式を忘れた——だけであり、唯経済論だけである。レーニンが、「プロレタリアートには、国家権力、すなわち中央集権的な権力組織、暴力組織が必要であるが、それは搾取者の反抗を抑圧するためにも、社会主義を『組織』する事業においても、膨大な住民大衆、すなわち農民、小ブルジョアジー、半プロレタリアートを指導するために必要である」という時、レーニンはブント諸君が勝手に解釈したように、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争とは全く別に「商品経済の原理に対する社会主義共同体原理の闘争」が存在する、などというような見解を述べたものでは決してない。よく見てほしい。レーニンはここではっきりと、プロレタリアートが農民、小ブルジョアジー、半プロレタリアートを指導して、社会主義経済を組織すると述べており、ブントの如く、この「プロレタリアート」という言葉を決して忘れてはいなかった。ひとつブント諸君にお伺いした

いのですが、この「プロレタリアート」という言葉は無用なのですか？ 誰が、どの階級が社会主義経済を組織するのですか？ そして、誰が、どの階級がこれに反対するのですか？ 「社会主義共同体原理」とはどの階級の「原理」なのですか？ 「商品経済の原理」とはどの階級の「原理」なのですか？ そうだ！ 「階級闘争」というのだから、是非この「階級」を明らかにしてもらいたい！ 勿論、私共はこの二つの「……」原理は君達独自のものであり、小ブルのものであり、君達が勝手に創造したものであると、しっかり確信しております。

★前述のレーニンの言葉は、「商品経済の原理に対する社会主義共同体原理の闘争」という見解をレーニンが述べたなどと解すべきではなく、プロレタリアートはブルジョアジーのあらゆる反抗、政治軍事、思想面での「抑圧」するためにもプロレタリア独裁を必要とするし、ブルジョアジーの反抗の経済的基礎を消滅させ、プロレタリアートの経済的基礎をうち固め、社会主義経済を「組織」するために、プロレタリアートが必要であると解すべきである。社会主義革命と社会主義建設をどうして切りはなすことができよう！ 両方ともプロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争なのだ。

「プロレタリアート独裁の歴史的任務は、敵対階級を弾圧するほか、社会主義建設の過程で、労働者と農民の関係を正しく処理し、労働者階級と農民の政治上、経済上の同盟をつよめ、労働者と農民の階級的差異をしいなくなりす条件をつくつていかなければなりません」(「総路線」)

社会主義社会の経済戦線において、社会主義的要素を發展させ、資本主義的要素を減少させる闘いも、紛れもなくプロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争なのである。資本主義的要素——小規模生産、個人所有制、分業、労働者と農民の差違——は、必ずブルジョアジーを大量に発生させ、これは政治、思想戦線での階級闘争に必ず反映する。そして、政治、思想戦線——上部構造——での闘いに勝利するか否かは、経済戦線での闘争に勝利するか否かに直接かわってくるのである。これに勝利しない以上、経済戦線での勝利はない。

このように、ブント諸君は過渡期の階級闘争を、プロレタリアートとブルジョアの闘争とせず、「商品経済の原理に対する社会主義共同体原理の闘争」として、実質的にプロレタリア独裁下での階級闘争を否定し、プロレタリア独裁を否定するのである。彼らはこれによって、史的唯物論の観点も、革命的弁証法の観点も、階級分析の観点も、一かからもないことを、自ら見事に暴露しているわけである。彼らの「ブルジョア的観点」であり、生産様式(社会主義か資本主義か)から切りはなされた。歴史から切りはなされたブルジョア経済学——宇野経済学であり、「経済原理論」であり、「経済原理階級闘争論」である。彼らによれば、過渡期の国家はプロレタリア独裁国家ではなく、実質的には「社会主義共同体原理論」独裁の国家であるということになるらしい。それ故に、中国のプロレタリア文化大革命は「社会大革命」とは位置づけられていないから悪無限的に闘争が行なわれるのだ、としか評価できないのである。

C 中国のプロレタリア文化大革命

過渡期の階級闘争論の偉大な発展

ブントの諸君によれば、中国の文化大革命は「共産主義への過渡期社会としての中国社会の社会経済的性格や、それに由来する階級闘争の性格を明確にしていけないのだ。すなわち、過渡期社会の階級闘争を「商品経済の原理に対する社会主義共同体原理の闘争」として把握しておらず、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争としてとらえているのだ。「だから自分たちの目指す方向や自分たちが何と闘っているかを明確にしたいのだ。だからこそ、矛盾の生み出す結果的現象にたいして、無限に闘争し、その悪の根源を『ブルジョア精神』にもとめることにはないか。その意味で問題を『社会大革命』として真正面から提起しないで『文化大革命』としているところに「限界があるとされている。(「共産主義」一〇号 一三〇ページ)

中国の文化大革命はブント諸君のおっしゃる通りに「共産主義への過渡期社会としての中国社会の社会経済的性格や、それに由来する階級闘争の性格を明確にしていけない」のであろうか。ここで、中国共産党がプロレタリア文化大革命について出した資料によって、少しばかり検討してみよう。

「プロレタリア独裁のもとで、革命を統行することについての毛沢東同志の理論の要点はつぎのとおりである。

一、マルクス・レーニン主義の対立面の統一の法則で社会主義社会を観察しなければならぬ。毛沢東同志は、つぎのように指摘している。「対立面の統一の法則を宇宙の根本法則とみる」「矛盾は普遍的に存在するのであり」「事物の内部の二つの矛盾性は事物の発展の根本原因である」「社会主義社会のなかには、『二種類の社会的矛盾がある。つまり、敵、味方のあいだの矛盾と、人民内部の矛盾である。』」「敵、味方のあいだの矛盾は敵対性の矛盾である。人民内部の矛盾は動労人民のあいだでは非敵対性の矛盾である。毛沢東同志はまたわれわれに『敵、味方の矛盾と人民内部の矛盾という二種類の矛盾の境界線を区分し』、『人民内部の矛盾を正しく処理しなければならず、そうしてはじめてプロレタリア独裁は日まじしに強固になり、強化され、社会主義制度は日まじしに発展すると教えている』（「プロレタリア独裁とプロレタリア文化大革命」北京外文社）

中国共産党は明らかに、マルクス・レーニン主義の革命的弁証法を断固として守り、これによって社会主義社会を分析しなければならぬと指摘しているのである。中国共産党は、決してブントの諸君のように「唯経済論」によって社会主義社会を分析しはしなかつた。彼らの分析の方法論は史的唯物論であり、革命的弁証法である。上部構造と下部構造を切りはなすこと、階級闘争とその経済的基礎と生産様式を切りはなすこと、上部構造が下部構造に反作用を及ぼすことを忘れること、階級闘争がその経済的基礎——生産様式に反作用を及ぼすことを忘れること、こうしたブント諸君が陥つてしまっている「唯経済原理論」とは、中国共産党は縁もゆかりもないのである。

すことを忘れること、階級闘争がその経済的基礎——生産様式に反作用を及ぼすことを忘れること、こうしたブント諸君が陥つてしまっている「唯経済原理論」とは、中国共産党は縁もゆかりもないのである。

「十月革命のあと、レーニンはいくども次のように指摘している。す。

- 1、打倒された搾取者は、つねにあらゆる手をつくして、奪いとられた「天国」を復活させようとするものである。
- 2 小ブルジョアジーの自然発生的な勢力はたえず新しい資本主義分子を生み出す。
- 3 ブルジョアジーの影響と、小ブルジョアジーの自然発生的な勢力の包囲と腐蝕の作用によって、労働者階級の隊列のなかや国家機構の職員の内にも、墮落変質した分子や、新しいブルジョア分子がうまれる。

4 国際資本主義の包囲と帝国主義の武力干渉の脅威および平和的瓦解の陰謀活動は、社会主義国の中で、階級闘争がひきつづき存在する外部条件である」（「総路線」）

中国共産党は又、ブント諸君のように、ブルジョア経済学によって社会主義社会の経済的基礎を分析しているのではない。

「社会主義社会の経済的基礎からみれば、すべての社会主義国にはなんの例外もなく、全人民所有制と集団所有制の差異が存在しており、また個人所有制も存在しています。全人民所有制と集団所有制は、社会主義社会の二種類の所有制で、社会主義社会の二種類の

生産関係であります。全人民所有制の企業ではたらく労働者と集団所有制の農場ではたらく農民は社会主義社会の二種類の勤労者です（同）

中国共産党は、レーニンのように、社会主義社会は資本主義社会から生まれてきたものであり、「経済的に完全に成熟していず」、小規模生産が存在し、国際資本の力ブルジョアジーの反抗の経済的基礎——が存在していることを分析したばかりでなく、労働者と農民の階級的差異の経済的基礎をも分析しているのである。商品経済的原理Vと八社会主義共同体原理Vの闘争だつて？ これが八階級闘争Vだつて？ こんなマルクス主義など聞いたことがない。ブルジョア経済学にはこういう代物が時々流行として出てくるのでしょね！！

「二、『社会主義社会は、かなり長い歴史的段階である。社会主義という、この歴史的段階においては、なお階級、階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在している。……（生産手段所有制にたいする社会主義的改造が基本的に達成されたのちにおいても）階級闘争はまだ終わっていない。プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、なお長期にわたる曲折したたかいであり、ときには非常に激しいものでさえある』……資本主義の復活を防ぎ、『平和的転化』を防ぐためには、政治戦線と思想戦線での社会主義革命をあくまでやり

ぬかなければならない」（「プロレタリア独裁とプロレタリア文化大革命」）

中国共産党はブントのような唯経済論者ではなかつた。彼らはブントのように、プロレタリアートが権力を手にしたあとは権力の問題はすでに解決され、革命の主要な任務は、ふるい経済を改造して新しい経済を組織し、建設をすすめることだけだとは決してしなかつた。主要な任務は八商品経済的原理Vと八社会主義共同体原理Vの矛盾を解決することだなどは教えなかつた。中国共産党は、プロレタリア独裁の歴史的経験を総括して、上部構造の下部構造に対する反作用を認めた。生産手段所有制に対する社会主義的改造が基本的に達成すれば、これで階級、階級矛盾、階級闘争が終結してしまふなどとは分析しなかつた。彼らはレーニンと同じく、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、長期にわたる激しいものであり、もし政治戦線と思想戦線での階級闘争にプロレタリアートが敗れば、ブルジョアジーの経済的基礎が増大し、プロレタリア独裁国家がブルジョア独裁国家に変質してしまふ、ということ进行分析したのである。

「三、プロレタリア独裁のもとでの階級闘争は本質的には、依然として権力の問題である。……プロレタリア階級はさまざまな文化領域を含む上部構造で、ブルジョア階級に全面的な独裁をおこなわなければならない。『かれらに対するわれわれの関係は絶対に平等な

関係などというのではなく、一つの階級がもう一つの階級を抑圧する関係、つまりプロレタリア階級がブルジョア階級にたいして独裁または専制をおこなう関係であり、なにかこれとちがった関係、たとえばいわゆる平等の関係、被搾取階級と搾取階級の平和共存の関係、仁義、道徳の関係などというものではありえない」(同)

中国共産党と毛沢東主席は、ブントのように、革命の問題は経済学の問題である、などとは理解していなかった。彼らはレーニンの規定した革命の問題は権力の問題であるということをしつかりと把握し、これを過渡期社会の階級闘争にも応用したのである。そして、ブントのように経済戦線での闘いを思想戦線、政治戦線での闘いと切りはなしたりはしなかった。彼らは、各戦線での闘いを権力の問題にしつかりと結びつけ、プロレタリア独裁権力をめぐっての闘い、すなわちプロレタリア独裁権力を各戦線においてうち固めようとする。プロレタリアートと、プロレタリア独裁権力を各戦線においてうち破ろうとするブルジョアジーの闘争こそ、過渡期の階級闘争であると分析したのである。

再度、ブント諸君にお聞きしたい。商品経済的原理Ⅴに対する社会主義共同体的原理Ⅵの階級闘争は、一体どの階級とどの階級の階級闘争ですか？ 革命の問題は経済の問題なのですか、権力の問題なのですか？ 過渡期においては、どうい階級が、どうい権力をうち固めようとしているのですか？ 又どうい階級がどうい権力をうち破ろうとしているのですか？ 商品経済的原理Ⅵの階級が社会主義共同体的原理Ⅵの階級と闘っているのでは

に対する社会主義共同体的原理Ⅵの闘争だ、などとして闘争の方向を見失なわせるようなことはしなかったのである。ブントのように闘争を、それこそ「悪無限的に」分化させるようなことはしなかったのである。

「五、プロレタリア独裁のもとの革命を統行するうえで、もっとも重要なことは、プロレタリア文化大革命を展開することである。

『プロレタリア文化大革命では、大衆が自分で自分を解放するしかない』、『大衆がこの大革命運動のなかで、自分で自分を教育するようにならなければならない』。つまり、このプロレタリア文化大革命では、プロレタリア独裁のもとの大民主の方法を運用して、下から上へと大衆を思いきり立ち上げさせ、同時にまた、プロレタリア革命派の大連合をおこない、革命的大衆、人民解放軍および革命的幹部の革命的三結合をおこなうことである」(同)

中国共産党はブントのように、とにかく何でも「社会主義革命」「社会主義革命」などと空文句を並べたりはしなかった。彼らは、マルクス・レーニン主義の革命的段階性と連続性の観点にもとづいて、社会主義革命の各段階を位置づけた。そして、プロレタリア独裁のもとで、生産手段所有制に対する社会主義的改造が基本的に達成された後において(これが社会主義社会)、ブルジョアジーと封建残余勢力が保持しているすべての腐敗した思想の陣地と文化の陣地に力強い衝撃をあたえる文化大革命を展開することが、革命を連続させることである、と規定したのである。

又、ブントのように、商品経済的原理Ⅴに対する社会主義共

か？ 社会主義共同体的原理Ⅵの階級が社会主義共同体的原理Ⅵ独裁権力をうち固めようとしているのですか？ そして、それを商品経済的原理Ⅵの階級がうち破ろうとしているのですか？ 同志諸君！ これこそ真正正銘の、ブルジョア俗物連中の階級分析である。

「四、社会の二つの階級、二つの道の闘争は、必然的に党内に反映してくるものである。資本主義の道を歩む党内のひとにぎりの実権派は、党内におけるブルジョア階級の代表者にはかならない。かれらは「反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取してプロレタリア独裁をブルジョア独裁に変えようとするものである」われわれがプロレタリア階級をうち固めるためには、『われわれの身辺に眠っている』『フルシチョフ式の人物』を見破ることに十分気をくばらなければならない。そして、かれらをあますところなく暴露し、批判し、たたき倒し、かれらが再起できないようにし、かれらにのつとられた権力を断固として、プロレタリア階級の手に取り返さなければならない。」(同)

中国共産党は、革命の問題は権力の問題である、というマルクス・レーニン主義の観点に基づいて社会主義社会を分析した。そして、社会主義社会において、ブルジョアジーの代弁をし、代表となり、各戦線にわたってプロレタリア独裁権力をくつがえそうとする主要な反革命勢力は、資本主義の道を歩む党内の実権派であることを分析した。そして、闘争の大方向を党内にひそむ実権派との闘争に向けたのである。中国共産党は、ブントのように商品経済的原理Ⅵ

同体的原理Ⅵの闘争だなどとして、敵、味方(革命の最も大切な問題)を、あいまいにし、こうすることによって、『広範な労働、兵大衆とプロレタリアートの文化戦士とを思い切って立ち上げさせる』ことを拒否するような犯罪的な裏切り行為を、中国共産党は許さなかったのである。彼らは「労働者階級の解放は、労働者自身の事業でなければならない」というレーニンの原則を断固として守っているのである。

「六、思想の分野におけるプロレタリア文化大革命の根本的綱領は、『私心とたたかい修正主義を批判することである。』プロレタリア階級は自己の世界観にもとづいて、世界を改造しようとするし、ブルジョア階級も自己の世界観に基づいて世界を改造しようとする。したがって、プロレタリア文化大革命は人びとの魂にふれる大革命であり、人びとの世界観の問題を解決するものである。政治、思想、理論のうえで修正主義を批判し、ブルジョア階級の思想にうち勝ち、教育を改革し、文学、芸術を改革し、社会主義の経済的土台に照応しない、すべての上部構造を改革し、修正主義の根をとり除かなければならない」(同)

ここに中国共産党の史的唯物論の観点がいかんなく発揮されている。「プロレタリア階級は自己の世界観に基づいて、世界を改造しようとするし、ブルジョア階級も自己の世界観にもとづいて、世界を改造しようとする」。上部構造の下部構造に対する反作用がここに見事に述べられている。中国共産党はブント諸君のように、ブルジョア階級(「残存する」ブルジョア階級も、自然発生的に新たに

生まれたブルジョア階級も)が自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとする志向を決して見落しはしなかったのである。中国共産党は、一応社会主義の経済的土台が基本的に出来たら、これに照応しない上部構造を改革し、次にその上部構造の改革によって、更に社会主義の経済的土台をうち固めようとしているのである。

「わが国のプロレタリア文化大革命は、わが国の社会的生産力を発展させる強大な推進力である。……毛沢東同志は、つぎのように指摘している。「人間の社会的存在は、人間の思想を決定する。そして、先進的な階級を代表する正しい思想は、ひとたび大衆ににぎられると社会を改造し、世界を改造する物質的な力となる」。物質は精神に変わり、精神は物質に変わる。プロレタリア文化大革命は、人間の思想の革命化を力強く促進し、不合理なすべてのあまいワタをつき破り、すべての古いしきたりや悪習をとりのぞき、社会の生産力をいちだんと解放し、労働大衆と科学、技術、研究要員の積極性、創意性をいちだんと発揮させ、工、農業と科学研究事業の大発展のために新しい有利な条件をつくりあげている。

『革命に力を入れ、生産を促そう』というスローガンのもとに、工場と農村のプロレタリア文化大革命がまきおこりつつある」(同)

こうして検討してみると、文化大革命は「共産主義への過渡期社会としての中国社会の経済的性格や、それに由来する階級闘争の性格を明確にしていけないのだ」というブント諸君の主張はとんでもないたわごとといわねばならぬことがはっきりする。ブント諸君の小ブル的俗物的頭をもってしては、中国共産党の過渡期社会に関する

深いマルクス・レーニン主義の階級分析と、それを新たな階段に発展させた偉大な実践を理解しえなかったということが、どうもことの本質のようである。そして、△商品経済的原理▽に対する△社会主義共同体的原理▽の闘争が過渡期の階級闘争だという彼らの規定が如何にデタラメなものか、あらためて確認せざるをえないのである。「だから自分たちの目指す方向や、自分たちが何と闘っているかを明確にしえないのだ。だからこそ、矛盾の生み出す結果的現象にたいして無限に闘争」しているのは、中国共産党ではなく、まさにブント諸君自身であることを我々ははっきり確認できるのである。そして、△文化大革命▽ではなく△社会大革命▽なる空語を、またまた、つくりあげたその観念的、坊主主義的やり方も、ブント諸君なら……とうなづけるわけである。

第二章

ブント系諸君と史的唯物論

A ブント系諸君の情勢分析の観点

ブント諸君がマルクス・レーニン主義の眼目、プロレタリア独裁思想を自然発生的にしか把握していないことは、すでに前章で検討した。それでは何故、彼らはこのプロレタリア独裁の学説をしつかり把握しえないのだろうか。それは彼らが、宮本一味の裏切りの主要な原因を、プロレタリア独裁の否定とはうけとらず、現状規定論争、敵の規定論争を通じて、経済学の誤りに原因をもとめ、やがてブルジョア経済学の立場へ移行したためである。そして実践的には小ブルジョア運動(学生運動)のみに立脚し、労働運動、労働者階級と結びつくことをさげ、自己の出身階級の立場——小ブルジョア階級の立場を頑強に堅持していたからに他ならない。

★それ故に、ブント諸君の情勢分析の観点と方法は、唯経済論の観点であり、上部構造と下部構造とをきりはなし、上部構造の下部構造に対する反作用を認めない観点であり、階級闘争を「経済原理の

闘争」と「経済原理階級闘争」とする観点であり、要するに階級闘争の観点がなく、マルクス主義の情勢分析の観点、史的唯物論と革命的弁証法の観点がなく、これに真向うから対立する小ブルジョア観点で一貫している。

ところでブント諸君は、たまたま過渡期の階級闘争を分析するときのみ、階級闘争を「経済学原理」の闘争とし、上部構造を下部構造と切りはなし、その反作用を否定し、結局、階級闘争の観点を放棄したのだろうか。いやいや、決してそうではない。ブントは次のように言っている。

「すなわち現代の日本は、どのような問題を中心に激しくうずまいているのでしょうか? アメリカ帝国主義対日本民族という民族問題を中心にしているのでしょうか? それとも資本対賃労働という階級問題を中心にしてうずまいていのでしょうか? もちろん民族問題も存在しています。しかし私達が解明しなければならぬのは、どちらが全体を規制している中心問題であるかということである。階級問題こそがそれだと思えます。」

△資本対賃労働▽という階級問題、これがブント諸君のいう階級闘争なのです。ブント諸君によれば、ブルジョア独裁国家における階級闘争は、やはり△商品経済的原理▽に対する△社会主義共同体的原理▽に帰するのです。そして彼らの「経済学原理闘争」によると、現代の世界の階級闘争は△帝国主義対立の激化▽——もつとあからさまに言えば△ドル・ポンド対円・リラ・マルク・フラン▽の闘争に規定される、ということになるらしいのである。

「(イ) 世界階級闘争および、日本階級闘争の現局面を根底から規定し、特徴づけているものは、アメリカを中心とする資本主義の戦後体制の全面的動揺によってひきおこされた、帝国主義対立の激化である。六〇年代に入ってから後進国支配体制の動揺の深化、中ソ対立の激化、中国の国内危機の進展は、この帝国主義対立の激化から生じた世界的緊張を根本原因としている。」

「(ロ) この対立の激化は、各国帝国主義ブルジョアジーの国内、人民大衆に対する政治的、経済的攻撃を、その主要な条件たらしめている。」

「(ハ) 今日の帝国主義諸国内部における階級闘争の激化、ブルジョア体制の動揺はこれにもとづいている。」

このブント諸君による世界階級闘争分析は正しいであろうか。本当に、「世界階級闘争および日本階級闘争の現局面を根底から規定し、特徴づけているものは……帝国主義対立の激化」なのであるか。その他の矛盾、すなわち帝国主義と被抑圧民族との間の矛盾、資本主義国におけるプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾、社会主義陣営と帝国主義陣営の間の矛盾は、彼らの言うように帝国主義相互間の矛盾を根本原因としているのであろうか。

★現在の世界の階級闘争の根源をなす主要な経済的基礎が、生産手段の私的所有にもとづく資本主義の最高の段階、独占資本主義の段階としての、帝国主義の経済制度の存在であることはいうまでもない。だが、このことは決して社会主義の経済制度が確固として存在していること、この経済制度が日毎に発展していることを否定していること、この階級闘争の根源をなす主要な経済的基礎が、生産手段の私的所有にもとづく資本主義の最高の段階、独占資本主義の段階としての、帝国主義の経済制度の存在であることはいうまでもない。だが、このことは決して社会主義の経済制度が確固として存在していること、この階級闘争の根源をなす主要な経済的基礎が、生産手段の私的所有にもとづく資本主義の最高の段階、独占資本主義の段階としての、帝国主義の経済制度の存在であることはいうまでもない。

寡頭制がつくりだされたこと。(3) 商品輸出とは異なる資本の輸出がとくに重要な意義を獲得していること。(4) 資本家の国際的独占団体が形成されて、世界を分割していること。(5) 最大の資本主義列強による地球の領土的分割が完了していること」

帝国主義の経済的基礎がこのようであるということ、別な言葉で言えば「独占体と金融資本との支配が形成されて、資本の輸出が顕著な意義を獲得し、国際トラストによる世界の分割がはじまり」――最大の資本主義諸国による地球の領土の（勿論、現在では社会主義陣営は一応除くが、これを分割しようとする傾向はつねに存在する）……分割が完了した、そういう発展段階の資本主義」であるということ、ブント諸君のいうように、世界階級闘争が帝国主義対立の激化のみによって根本的に規定されているということを決して示してはいないのである。ブント諸君の規定は、レーニンの定義に明らかに反している。どうして、帝国主義対立の激化のみに限定しうるのか。

★生産手段の私的所有にもとづく資本主義が独占段階に入り、帝国主義に転化したということ、すなわち「独占体と金融資本との支配を形成した」ということ、帝国主義の経済的基礎がこうなっているということは、資本主義国における独占ブルジョアジーとプロレタリアートの人民の間の矛盾をますます激しいものにするということであり、ブルジョアジーとプロレタリアートの矛盾をますます激化させるということである。「独占体と金融資本との支配」の維持・強化の過程は、これの形成過程がそうであったように、ブルジョア

しない。決して世界階級情勢において、帝国主義が主要側面であり、プロレタリアート・人民の社会主義運動が副次的側面であることを意味しはしない。決して現段階の世界情勢を規定している主要矛盾が帝国主義対立の激化であることを意味しはしない。そして、帝国主義とプロレタリアート・人民の社会主義運動との矛盾こそ、現段階の世界情勢を規定している主要な矛盾であることを、決して否定しないのである。

又、世界階級情勢を分析するときに、社会主義陣営と帝国主義陣営の間の矛盾、資本主義国のプロレタリアートとブルジョアジーの間の矛盾、被抑圧民族と帝国主義の間の矛盾を帝国主義の経済的基礎から切りはなし、帝国主義相互間の矛盾に解消してもよいということにはならない。これら三つの基本矛盾は、帝国主義相互間の矛盾によって規定されていることと共に、これら三つの基本矛盾が逆に帝国主義相互間の矛盾を規定していることを認めなくてもよいということにはならないのである。

よく知られているように、レーニンはその著作「帝国主義論」のなかで、「一般に、すべての定義のもつ条件的で相対的な定義をわすれることなしに」と前置きして、純経済的概念での帝国主義の定義をつぎのように与えている。

「つぎの五つの基本的標識をふくむような帝国主義の定義を与えなければならぬ。(1) 生産と資本との集積が、経済生活で決定的な役割を演ずる独占をつくりだすほど高い発展段階に達したこと。

(2) 銀行資本と産業資本が融合し、この金融資本を基礎にして金融

「資本の輸出が顕著な意義を獲得し、国際トラストによる世界分割がはじまり」「最大の資本主義国による地球の全領土の分割が完了した」ということは、帝国主義と被抑圧民族の間の矛盾をますます激しいものとし、さらに帝国主義相互間の、独占資本相互間の領土の再分割をめぐる闘争をますます激しくさせているのである。すなわちこの過程は、帝国主義と被抑圧民族の間の矛盾を激化させていく過程であると同時に、帝国主義相互、独占資本相互の矛盾を激化させていく過程でもあるのである。

そして、こうした過程は同時に、帝国主義のくびきをうち破って樹立されたプロレタリア独裁国家群||社会主義陣営と帝国主義陣営の間の矛盾をますます激化させているということにもなるのである。決して、帝国主義相互間の矛盾の激化だけではないのである。一言でいえば、独占資本、国際金融資本の世界支配体制を一層強化しようとする帝国主義と、これを打倒しようとする世界のプロレタリアート・人民との間の矛盾がますます激化しているということである。これこそレーニンの帝国主義の経済的基礎分析からもたらされたところの世界階級闘争の現局面を規定している主要矛盾なのである。

「世界資本主義はこんにち――およそ二〇世紀の初頭に 帝国主義の段階に到達した。帝国主義は、または金融資本の時代は、独

占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラスト——が決定的な意義を獲得し、途方もなく集積された銀行資本が産業資本と融合し、外国への資本の輸出がきわめて大規模に発展し、全世界がもつとも富裕な諸国のあいだに、すでに地域的に分割されつくし、国際トラストによる世界の経済的分割がはじまった、そういう非常に高度に発展した資本主義経済である。こういう事態のもとでは、帝国主義戦争、すなわち世界支配をめぐる銀行資本のための市場獲得をめぐる、また弱小民族の圧殺をめぐる戦争は避けられない。そして一九一四年—一九一七年の最初の帝国主義大戦争こそまさにそういう戦争である。

世界資本主義一般がきわめて高い発展段階に達していること、独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと、銀行ならびに資本家団体によって物資の生産とか分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して物資騰貴と労働者階級に対するシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級の経済闘争と政治闘争に巨大な障害があること、帝国主義が惨禍や災厄や零落や野蠻化を生み出していること——すべてこれらのことからして、資本主義が、こんにち到達している発展段階は、プロレタリア社会主義革命の時代となっている。この時代ははじまった。帝国主義と帝国主義諸戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、プロレタリア社会主義革命だけである。革命の困難がどんなであらうと、革命が一時失敗することがあろうと、また反革命の波がどんなであらうと、プロレタリアートの

人民の革命だけがこれらの矛盾を解決することができるのである。現代の世界の矛盾については、次のような誤った観点が批判されるべきです。

- 1 社会主義陣営と帝国主義陣営との矛盾の階級的内容を抹殺し、この種の矛盾をプロレタリアート独裁の国家と独占ブルジョアジーの独裁の国家との矛盾としてみようとしなない観点。
- 2 社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾だけを認めて、資本主義世界におけるプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾、被抑圧民族と帝国主義の矛盾、帝国主義国と帝国主義国、独占資本グループと独占資本グループのあいだの矛盾、さらにはこれらの矛盾からひきおこされる闘争を軽視したり、過小評価したりする観点。
- 3 資本主義世界におけるプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾は自国のプロレタリアートの革命を経なくても解決でき、また被抑圧民族と帝国主義の矛盾は被抑圧民族の革命を経なくても解決できると考える観点。
- 4 現代の資本主義世界の固有の矛盾が発展すれば、必ず帝国主義諸国間の緊迫した闘争という新しい局面をひきおこすことを否定し、また『各大独占資本のあいだに国際協定が成立』すれば、帝国主義諸国間の矛盾を調和させ、さらには解消することさえできると考える観点。
- 5 社会主義と資本主義という二つの世界体制の矛盾は『経済闘争』のなかで自然になくなり、世界のその他の基本矛盾もすべ

終局の勝利は避けられない」(レーニン「党綱領改定資料」)

では、現代の世界の基本矛盾はなにか。マルクス・レーニン主義は、ゆらぎこらした基本矛盾をつぎのように考えています。

社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾

資本主義国内部のプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾

被抑圧民族と帝国主義の矛盾

帝国主義国と帝国主義国、独占資本グループと独占資本グループのあいだの矛盾

社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾は、社会主義と資本主義という二つの根本的にことなる社会制度の矛盾であり、この種の矛盾はなんらの疑いもなく非常に鋭いものであります。しかし、マルクス・レーニン主義は、世界的規模の矛盾を、単純に社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾であるとみなすわけにはいきません。世界の力関係はかわりました。その変化は、社会主義にとつて、ますます有利になり、全世界の被抑圧人民と被抑圧民族にとつて、ますます有利になつて、一方、帝国主義と各国の反動派にとつては非常に不利になつていきます。それにもかかわらず、以上に述べたこれらの矛盾はやはり客観的に存在しています。

これらの矛盾と、それによつてひきおこされる闘争はたがいに結びついており、たがいに影響しあっています。人びとは、これらの基本矛盾のうちどれひとつも抹殺することはできませんし、また主観的にそのうちひとつの矛盾におさえることもできません。これらの矛盾は、かならず各国人民の革命をひきおこしますし、また、各国らすことはあきらかです。(「総路線」)

て二つの体制の矛盾がなくなるにつれて自然になくなり、いわゆる『戦争のない世界』とか『全面的な協力』の新しい世界とかいうものがあらわれると考える観点。

★ブント諸君が「世界階級闘争と日本階級闘争の現局面を根底から規定しているものは、帝国主義対立の激化である」として、世界の四つの基本矛盾のうち、帝国主義の対立のみしか把握しえなかつたのは、彼らの「経済学原理闘争」の観点からいって至極当然のことであつた。なぜなら、「経済学原理」闘争の観点からは、その四つの基本矛盾のうち、どうしても帝国主義相互間の矛盾——ドドル・ポンド体制、IMF体制の矛盾、ハドル・ポンドV対八円・マルク・フラン・リラVの闘争——しか把握できないからである。

彼らは「経済学原理」闘争による分析によつて、世界階級闘争を規定している基本矛盾を△帝国主義対立の激化V 勿論、これさえ経済面でのその、もつと適当な言葉でいえばハドル・ポンドVと△フラン・マルク・リラ・円Vとの闘争に彼らは矮小化した。決してそれだけではないのである。これに加えて、彼らは上部構造と下部構造との関係をきわめて機械的関係にしてしまつたのである。△帝国主義対立の激化Vが資本主義国のプロレタリアートとブルジョアジーの間の矛盾、帝国主義と被抑圧民族との間の矛盾を根本的に規定しており、逆にまた、この二つの矛盾が△帝国主義の対立の

激化√を根本的に規定しているという弁証法的関係を、プロント諸君は否定してしまふ。この結果彼らは、資本主義國のプロレタリアートとブルジョアジーの間の矛盾の経済的基礎の存在を否定し、「独占体と金融資本」の支配と搾取を否定し、帝國主義と被抑圧民族との間の矛盾の経済的基礎の存在を否定し、「國際金融資本」の人民に対する搾取と搾取を否定してしまふ。彼らは、國際金融資本のプロレタリアート・人民に対する支配体制確立の過程における、もろもろの活動を一面的にしか把握できないために、上部構造と下部構造との弁証法的関係を機械的關係にしてしまふのである。

彼らはこうすることによって、帝國主義の経済的基礎についてのレーニンの階級分析をブルジョア経済学分析に墮落させてしまつたのである。レーニンは決してプロントのように、帝國主義の経済的基礎を(帝國主義の激化√のみに限定しはしなかつた。レーニンはこの分析において、生産手段の私的所有制に基礎をおく資本主義の最高の段階、独占資本の段階が、独占資本、國際金融資本によるプロレタリアート・人民の搾取と搾取の制度であり、プロレタリアート・人民を支配する制度に他ならないこと、又、この独占資本、國際金融資本によるプロレタリアート・人民の搾取と支配の過程は同時に、必然的に資本主義列強相互、独占体相互の矛盾を激化させるものに他ならないことを暴露したのであり、そして、この帝國主義が自らの墓掘り人を、自ら大量に生み出し、死滅に近づいていくことを証明したのである。

帝國主義の対立の激化が帝國主義を死滅させるのではない。これ

際金融資本自身が必然的に生み出したものであることを見落している。だから、彼らが、世界階級闘争の主要矛盾を、帝國主義とプロレタリアート・人民の闘争と見ず、帝國主義の対立の激化に求めたのも、当然のことといへば当然のことだったのである。プロントのこういう観点は、プロレタリアート・人民の立場に立つたものではなく、ブルジョアジーの立場に立つたものである。人民の闘争を抜かしているのだ。

帝國主義とはプロントのいうように帝國主義の対立の激化の過程のみではないのである。何よりも、國際金融資本による、独占体による、プロレタリアート・人民の搾取と搾取と支配の過程なのである。そして、帝國主義の対立は、この過程の中で生じた、基本的ではあるが、一つの過程にすぎないのである。

★プロントは又、上部構造の弁証法的関係を正しくつかむことができないため、世界階級闘争の現局面は、帝國主義とプロレタリアート・人民の闘争という主要矛盾によって規定されているとわからず、帝國主義がヘゲモニーを握っており、帝國主義の動向が現状を規定していると判断してしまつてしまふ。だから、プロントは次のようにしか分析しえない。

「(三) こうしたブルジョア反革命の世界的介入をとおして、アメリカの資本主義世界に対する政治的軍事的指揮権が確立し、アメリカを中心とする帝國主義諸國の中ソ包囲体制が成立した。これが戦後資本主義の政治的体制にほかならない。

(四) これによって、中ソ兩國は封じこめられ、軍事的防衛に追い

は一つの要因ではあるが根本的なものでない。帝國主義を死滅させるのはプロレタリアート・人民の闘争のみである。

プロントのように、帝國主義の対立の激化が現段階の世界階級闘争を根底において規定しているとするのは、帝國主義の経済的基礎が何よりもプロレタリアート・人民の搾取と搾取の制度であることを否定してしまふことになる。この体制が國際金融資本、独占体の支配の過程であり、これによるプロレタリアート・人民の搾取の体制であることを否定してしまふ。そして、この搾取と搾取をめぐって必然的に生じる世界市場分割の帝國主義列強の過程であることを否定してしまふことになるのである。

このように、プロント諸君の帝國主義の経済分析は、階級闘争の経済的基礎を明らかにしてはいない。プロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争の経済的基礎を分析しない。こうした階級が発生し、成長し、消滅する経済的ゆえんを明瞭にしていない。帝國主義と被抑圧民族の間の矛盾が何故に存在するかを明確にしていない。帝國主義相互の間の矛盾が何をめぐって、何故に存在するかを明確にしていない。帝國主義陣営と社会主義陣営の間の矛盾が何故に存在するかを明らかにしてはいない。要するに、プロント諸君は、経済的基礎の分析を階級的視点でもって分析してはいないのである。それ故、彼らは最も肝心なこと、帝國主義が、独占体と國際金融資本の、プロレタリアート・人民に対する搾取と搾取と支配の過程であることを忘れさせている。そして、帝國主義の間の矛盾は、こうしたプロレタリアート・人民の搾取と搾取と支配の中で、独占体と國

こまれ、国内経済に苛酷な軍事的負担を課せられることになつた。

(五) こうして後進國の階級闘争は帝國主義諸國の階級闘争から孤立させられ、勝利への展望を失つた。」

事實は、プロントのこの分析とは全く逆である。帝國主義はその内部矛盾を日毎に深めており、全面的崩壊に向つており、プロレタリアート・人民の革命闘争は「勝利への展望を失つた」どころか、勝利への大いなる展望をもつて前進しているのである。プロントの「経済原理闘争」論では、この生きた現実を少しも理解できないのである。彼らの機械的唯物論では、帝國主義の経済が「後進國」の経済よりも進んでいるということしか理解できないのである。彼らの帝國主義の経済制度の存在が世界階級闘争の主要な根源となつていから、その世界階級闘争の主導権は帝國主義が握つているとしか理解できないのである。

「第二次世界大戦のあと、帝國主義と社会主義の力関係には根本的な変化がうまれました。この変化の目じるしのおもなものは、つぎの通りです。つまり、世界にはもはやただひとつの社会主義國しかないのではなく、一連の社会主義國が生まれ、強大な社会主義陣営を形づくつたこと、社会主義の道へ歩みを進めた人民は、もはや二億ちかくの人口にとどまらず、世界人口の三分の一を占める十億の人口を擁していることがそれでありました。

社会主義陣営は國際プロレタリアートと勤労者の闘争の産物であります。社会主義陣営はたんに社会主義諸國の人民のものであるば

かりでなく、それはまた、国際プロレタリアートと勤労者のものでもありません」(「総路線」)

これこそ、マルクス・レーニン主義の情勢分析である。プントの情勢分析は以上のように、唯経済論であり、機械的唯物論であり、経済原理闘争論であって、階級分析の観点が全然ないことは明瞭となつてはいるが、もう少し、その階級分析の観点のなさを証明してみよう。

★(一) 日本帝国主義の戦後体制の特徴的な出発点は、戦争を遂行した、同じブルジョア国家権力——天皇制ブルジョア執行権力——が自らのイニシアティブによって戦争を終結し、アメリカ占領軍を迎え入れたことにある。こうした敗戦と共に、日本のブルジョア権力(官僚・警察)とアメリカ占領軍の絶対的軍事権力の二重権力が成立した。

(二) アメリカ占領軍の当初の改革は、日本帝国主義の軍事経済の基礎の一部、天皇制ブルジョア権力の一部——その軍事機構——を解体するとともに、それへの日本人民大衆のイデオロギイ的結集を破壊し、自己の占領体制に彼らをひきつけるために、ブルジョア民主主義議会体制を強制することにあつた。だが、占領体制の維持機構として、旧天皇制ブルジョア執行権力の官僚、警察機構はそのまま維持温存せざるをえなかつた。

(三) 日本の帝国主義ブルジョアジーと彼らの天皇制権力は、こうした占領軍の政策(民主化政策)に部分的には抵抗しながらも、基本的にはむしろそれを逆手にとつて、資本の下への国民

の新たな結集政策の手段として利用した。さらにまた、占領軍の軍事権力とその権威を、動揺しつつある自己のブルジョア権力機構の一部として利用した。」

これはプント諸君による戦後の階級闘争の分析の書き出しである。この分析においても、全体をとらして階級分析の観点が全然ないということにすぐ気がつく。このことについて、ひとつ引用文を検討する前に若干ふれておこう。

プントが第六回大会の政治報告の中で日本の現状分析を行ったところ「三、日本階級闘争の現局面」において、出てくる階級はプロレタリアートとブルジョアジーだけである。時々「人民大衆」と「学生」がでてくるにすぎない。プロレタリアートとブルジョアジー以外の各階級の動向分析など全然されていない。そのみではない。ブルジョアジー一般について述べられているだけで、独占ブルジョアジーと中小ブルジョアジーの区別さえもつけられていない。彼らはどうやら、帝国主義段階と自由主義段階の区別が何であるかさえ全然おわかりにならぬらしい。「独占体と金融資本の支配」が形成され、これが国家権力を握っているのだとは見えぬらしい。勿論、このことは前述のように、彼らが帝国主義の対立激化しか見られず、資本主義国のプロレタリアートとブルジョアジーの闘争の経済的基礎を無視したことに対応している。

階級分析といえは、彼らはプロレタリアートとブルジョアジーの二語を使えばことが足りると思つていららしい。帝国主義という言葉を使えば足りると思つていららしい。これはマルクス主義者とは

いわず、帝国主義的経済学者である。少し、階級分析についてのレーニンの見解を引用しておくのも、あなたがち無駄ではあるまい。

「一定の社会の、例外なくすべての階級の、相互関係の総体を客観的につかむこと、従つてその社会の客観的な発展段階をつかむこと、又この社会と他の諸社会との相互関係をつかむこと、これだけが、先進的な階級の正しい戦術の土台となりうる。しかもすべての階級のすべての国が、静態においてでなく動態において、即ち静止の状態においてでなく、運動(この運動の諸条件は、それぞれの階級の経済的生存条件から生まれる)において観察される」(「カール・マルクス」)

プント諸君が、このレーニンの階級分析の観点をもつと日本階級闘争の現局面を分析してしたのであるならば、プロレタリアートとブルジョアジー以外の階級の動向をもう少し具体的に描きえたらうに。いずれにせよ、彼らには帝国主義、ブルジョアジー、プロレタリアートの三語しかないのである。全く単純ですね。自分たちがプロレタリアートではなく、小ブルジョアジーであることをおおいにかくし、自分たちがプロレタリアートである、プロレタリアートと同一の階級であるということを言いたいために、こうしているのではないか、と我々が本気で疑いたくなったとしても、これは我々の責任ではない。彼らは小ブルジョアジーとプロレタリアートの明確な区別をすることをいやがっているのだ。

★さて、立ち返つて、先程引用したプントの敗戦直後の権力構造の分析を少し検討してみよう。

プントは、日本帝国主義が戦争に破れ、自らの延命をはかる唯一の道として米帝に屈服し、日本人民を売り渡したことを抜き、米帝の完全な占領体制(日本政府はかゝらぬにすぎなかつた)を「二重権力」だといつて米帝を美化し、日本独占資本と軍国主義勢力を温存して自らの手先として育成した米帝の政策を否定し、米帝の手先となり、米帝に従属することによつて復活をもくろんだ日本独占の意図を否定し、アメリカ占領軍を「自己のブルジョア権力機構の一部として利用した」とデタラメを言っている。すなわち、あたかも日本独占のヘゲモニーが貫徹(一定程度)していたかのようにい、米帝の日本占領、侵略基地化、軍需工場化、勢力圏化、手先の育成、の凶暴な意図を否定して米帝を美化し、こういうデタラメをいうことによつて、「日帝自立」論を証明しようとしているわけである。米帝は「迎え入れ」られたから日本を占領したのか!! 「二重権力」を許すほど米軍の力は弱く、日本独占の力は残っていたのか!! 「官僚、警察機構はそのまま維持温存せざるをえ」なかつたほど、米軍の力は弱かつたのか!! 「ブルジョア権力機構の一部として利用」されるほど米帝はお人好しなのか!! それなら米は帝国主義ではない!! 事実はずべて、米帝の完全なヘゲモニーで行なわれたことなのだ!!

以上のデタラメさ、歪曲、米帝の美化については序章でも述べてあるが、詳しくは別の論文に回すとして、ここでは階級分析のなさに ついて述べておこう。プントの国家権力構造分析によると、日本

の戦前の国家権力と戦後の国家権力の相違は、天皇制がブルジョア民主主義に代っただけであり、どちらも国家権力を構成している階級はブルジョア階級だけであるということになる。戦争直後は、このブルジョア階級（天皇制から民主制に転化）と占領軍の「二重権力」であったということである。

まず、戦前の日本帝国主義の権力構造が、本質的にはブルジョア独裁であったことはいままでもない。だがこのことをもって、戦前の国家権力についていた階級がブルジョア階級一般であったとは、ブルジョア階級のみであったとは言えないのである。少しでも、具体的事実を具体的に考察するものであるならば、戦前には地主階級と農民との階級闘争が厳然として存在していたという事実を無視するわけにはいかない。そして、ブルジョア一般ではなく、独占ブルジョア階級のみが国家権力についていたことを見ないわけにはいかない。帝国主義の時代には、中小のブルジョア階級でさえ、独占ブルジョア階級によって支配されているという真実さえブントは忘却している。すなわち、戦前の天皇制国家権力は独占ブルジョア階級と地主階級の独裁なのである。これが鉄の事実というものである。ブントは日本に農民が存在することを忘れてしまった。戦前には地主階級が存在していたことも忘れてしまった。戦後の農地改革が日本の階級闘争に対してどういう役割を果たしたか忘れてしまった。ブルジョア階級に農地改革の「ヘゲモニー」を奪われることは階級闘争にとって何を意味するか忘れてしまった。

戦前と戦後の相違は、国家権力の支配形態が単なる天皇制からブ

ルジョア議会制に転化されたのみではない。それは、支配階級の座にあって——国家権力に参加していた——地主階級が戦後にはほとんど消滅したということである。そして、アメリカ帝国主義が国家権力の中枢を掌握し日本民族の抑圧をしていることである。「二重権力」などんでもない。アメリカ帝国主義の主権の侵犯が地主階級にとってかわったということである。（勿論、戦前地主が握っていた国家権力より米帝の握っている国家権力の方がずっと大きい）

ブントはブルジョア独裁の内容を教条的にしか理解していない。ブルジョア独裁といえ、ブルジョア独裁しか頭がない。「純粹」ブルジョア独裁は帝国主義以前のイギリスがそうであったが、あとはほとんど存在していない。現実には△ブルジョア階級と地主△独裁、△独占ブルジョア階級△独裁、△独占ブルジョア階級△地主△独裁、△外国独占ブルジョア階級と独占ブルジョア階級△独裁……なのである。これがわからないことには、レーニンの労働独裁、中国の人民民主主義独裁が本質的にプロレタリア独裁であるということを理解できないのと同じことである。ブントはブルジョア独裁といえブルジョア階級のみが政権に参加することだと思いい、プロレタリア独裁といえプロレタリアートだけが政権に参加することだと思ふ。彼らには、現実の複雑な過程は見えないのであり、又見ようとしないのであり、彼らの世界は純粹な、しかも帝国主義段階以前のモデル的な世界なのである。

我々はこのように、ブントの諸君には如何に階級分析の観点がないかということを知ることができるのである。

B ブントの永続革命論による中国の新民民主主義革命批判

ブント諸君に階級分析の観点がないことは述べた。しかし多分、ブント諸君は自分達の情勢分析の観点が首尾一貫してプロレタリア的のものであり、（これのみが一貫している）階級分析の観点がない（勿論、君達はあるというだろうが、プロレタリア的とその前につけたまえ）という指摘にご満足なさらないであろうと思う。それで君達の身上である「二段階革命論」批判や、レーニンに「ばかばかしく左翼的な」といわしめたトロツキー流「永続革命論」なども、やはり階級分析の観点、史的唯物論の観点がなく、小ブルジョアの観点で貫かれているということを示し明らかにしてみよう。次の文章はブントの、中国共産党の「二段階革命論」中国共産党では特別に「二段階」とは言っていない。彼らは連続革命論者であり、革命発展段階論者であるから、革命を一段階や二段階で終らせることなど毛頭考えていない）批判である。

「A」として、中国の革命の性格はどうなるのか。『社会主義革命論』か『民主主義革命論』か。はじめ国際的には『人民民主主義革命論』は社会主義革命ではないと規定されていた。ところがマールシャル・ブランでしあげられたとき『人民民主主義革命論』はプロレタリア革命の新たな形態である」と言いだした。それを中共が輸入したというわけだ。

C 五六年九月の中共八全大会の政治報告では劉少奇は正式に『中共政権はプロレタリア独裁である』と述べている。

A また土地分配についても、のちの集団化からふりかえってみると、ブルジョアの土地所有の確立というよりも集団化の前提としての、直接生産者への土地の分配であるといえる。従来の地主的土地所有——私的財産的私有関係——を否定して水平主義的に分配し、さらに集団化したのであって、これは結果的にみれば『社会主義化の前段階』としての分配だからである。

F 結局、中共は『民主主義革命』の看板をかかげながら、実際にはプロレタリア社会主義革命をやっている。看板と実質がちがうわけだ。

A 大衆扇動のための戦術的スローガンとして民主主義の諸問題を掲げるならば、それで理解できる。その場合には、戦術スローガン||プロレタリア社会主義革命、そのための過渡的戦術||民主主義的闘争（独立）という関係になる。ロシヤ革命のさい、レーニンが二月から十月の間に掲げた『平和・土地・パン』はそれ自体としては、社会主義のスローガンではない。そこへの大衆扇動のための戦術スローガンだ。中共はそのように、戦術目標と過渡的戦術スローガンを目的意識的に区別しているとはいえない。中共のばあいには、プロレタリア革命と民主主義革命とも戦術と戦術の関係ではなく『二段階革命』の関係においている。つまり二段階革命戦略だ。したがって中共は意識の上では、二段階戦略をもちながらも実際には、民主主義闘争

を戦略（プロレタリア社会主義革命）に対する戦術の関係として処理したわけだ。こうした看板と実践のズレがのちの社会主義化の過程に大きく影響している。これまでみたような中共の不断のジグザグの源泉は、中共の党主体のこのような欠陥に求められなければならないだろう。そしてその中心問題は、農民の土地分配の要求をブルジョア的なものとみなすか、ということにある。これは国際的な論争でもある。ロシアではナロードニキ的な土地の分配の要求に社会民主党は賛成すべきか、反対すべきか問われた。『土地分配の要求は農民の旧来からの共同体観念に基づくものであり、したがって歴史の車輪を逆転させるつもりだ』と一般には認識されていた。だから『社会的進歩を旗印とする社会民主党はこうした反動的な要求を支持できない。だが支持しなければ農民を獲得できない』というジレンマにおちいった。レーニンが『支持する。だが農民の反動に味方するからではなく、農民のブルジョアの発展のコースだから支持する』とした。これは一種の言いがたれだ。農業生産はもともと村落共同体的であり、農民にはもともと共同体性がある。農民の土地分配の要求は私的の所有の要求という点ではブルジョアのだが、土地の水平主義的分配という点では、旧来の共同体観念にもとづく反ブルジョアの要求である。したがって、農民の共同体性に依拠すれば、土地分配の要求を社会主義的集団化に高めていくことができる。それ故、革命党の立場からは、土地分配は社会主義の前段階として位置づけられるべきだ』（「共産

主義」第一〇号 一三二ページ）

少々長く引用したが、この中にブント諸君の情勢分析の小ブル性史的唯物論の否定、プロレタリア独裁思想の欠如、革命の連続性と段階性に対する無理解、レーニン主義の無理解、農民問題に対するばかばかしくこっけいな分析など、端的にあらわれているのである。このようなこっけいな分析こそ、ブントの「永続革命論」の真隨を如何なく發揮したいわゆる「二段階革命ナンセンス」論なのである。これで「批判」したつもりになっているのだから、大したものです。我々にはとてもこのような「度胸」はございません。

革命の性格——社会主義革命か、民主主義革命か——を規定する中心問題は農民問題にあり、このことはブントは気がついていない。ただし、内容はデタラメである。一口でいえば、農民について何も知っていない。プロレタリアートと農民の区別がわかっていない。ブントは農民の土地分配の要求は、農民の共同体性に依拠すればブルジョア的なものではなく、反ブルジョア的なものであり、社会主義の前段階として位置づけられる。それ故、農民の地主に対する土地革命は、民主主義革命ではなく実際にはプロレタリア社会主義革命である。だから、中共は民主主義革命の看板を掲げながら、実際にはプロレタリア社会主義革命をやったのであり、中共の二段階革命戦略は実践的には破算しているということになるらしい。

だが、まずこれへの反論として、第一に土地革命はブントのいうように反ブルジョア的なものかどうか、社会主義の前段階として位

置づけられるかどうか、レーニンの見解を引用してみよう。

C レーニンの農民運動・土地革命に対する見解

「つぎの三つの命題は、社会民主主義者が、その党の出現以来人々にいたるまでつねに擁護してきたものである。第一、土地変革は不可避的にロシアの民主主義的変革の一部をなすであろう。農村の農奴制的債務奴隷制的関係から解放することは、この変革の一部をなすであろう。第二に、来たるべき土地変革は、その社会経済的意義からすればブルジョア民主主義的変革であるだろう。それは資本主義の発展と資本主義的な階級的矛盾の発展をよわめず、むしろそれをつよめるであろう。第三、社会民主党はこの変革を断固として支持するあらゆる理由をもっている。その際、党はあれこれの当面の任務をさだめはするが、しかし自分の手をしばるようなこととはしない……」（「労働者党の農業綱領」）

「ここに提案している定式は農民による土地の奪取といったような方策の、虚偽のあたかも社会主義的であるかのような外観と、その方策の現実の民主主義的な内容とのあいだに、境界をはっきり引いている……土地のための農民戦争、土地の追求（半農奴制的な国や植民地での）を否定しようとするものは、だれもいない。われわれは、その適法性および進歩性を完全にみとめるが、それとともに、その民主主義的な、すなわち、結局のところはブルジョア

民主主義的な内容をわれわれは暴露していく。だから、われわれはこの内容を支持しながらもわれわれとしての特別の『保留条件』を持ちこみ、プロレタリア民主主義の『独自』の役割を、また社会主義革命をめざして突進している階級政党としての社会民主党の特別の目的を指摘するものである。」（「われわれの農業綱領」）

「農民運動の発展は、この運動の革命的 성격についても、農奴制の残存物を破壊し、農村に自由なブルジョアの諸関係をづくりだすこの運動の眞の社会経済的本質についても、革命的マルクス主義の基本的、原則的な見解を完全に確証している」（「タンメルフォルスにおける『多数派』協議会の農業問題についての決議」）

「自治体と自治体的土地所有は、全国民よりも土地の国有化よりも、疑いもなくずっと狭い階級闘争の舞台である。民主的共和制のもとの土地国有化は階級闘争にとつて、もっとも広範な——総じて資本主義が存続しているさいに可能なかぎりの、また考えられるかぎりのもっとも広範な——活動舞台を無条件につくりだす。国有化は絶対地代の廃絶、穀物価格の引下げを意味し、競争の最大限の自由と農業への資本の自由とを保障することを意味する。これに反して公有化は、農業における生産関係から絶対地代を一掃せず、われわれの全般的要求を部分的ないろいろの要求に細かくして、全国的な階級闘争をせばめる」（「ロシア社会民主労働党統一大会」）

「すなわち資本主義国における生産力の発展は、次の二通りの形態でおこりうるといふことである。一つは、巨大所有化がひきつづき維持され、それがしだいに資本主義的農業経営の基礎となる。こ

それは農業資本主義のプロシヤ型である。情勢の支配者はユンケルである。……生産力の発達は非常にのろりと前進する。……：それともう一つの場合には、革命が地主的土地所有を一掃する。自由な土地、つまりすべての中世的ながらくたを一掃した土地における自由な農業企業家が、資本主義的農業の基礎となる。これは農業資本主義のアメリカ型であり、資本主義のもとで可能なあらゆる条件のなかで人民大衆にとってもっとも有利な諸条件のもとで生産力のもっとも急速な発展がおこなわれる。事実、ロシア革命では、闘争はナロードニキがとなえる『社会化』その他のばかげたこと——それは小市民的イデオロギー、小ブルジョアの空文句にはかならない——のためではなくて、ロシアの資本主義的発展がどのような道をとってすすむか、『プロシヤ型』の道か、『アメリカ型』の道か、という点についておこなわれているのである」（『ロシア革命における社会民主党の農業綱領』）

「では、なぜ農民は国有化を支持したのか？ なぜなら彼らは本能的にいっさいの中世的土地所有の廃止が必要であることを、近視眼のエセマルクス主義者よりもずっとよく理解しているからである。中世的土地所有は、農業における資本主義に道をひらくために廃止されなければならない」（同）

「これが、中世的諸形態をもっとも自由に発展させる条件である。すなわち、すべての古い土地所有の廃止であり、資本の障害としての私的・土地所有の廃止である。ロシアにおいて中世的土地所有のこのような革命的な『清算』が不可避である。問題はただ、この『清

算』が地主的なものとなるか、それとも農民のものとなるかという点を唯一の原因として闘争がおこなわれている点にある」（同）

「『社会化』や『均等化』などという小市民的言いまわしのおかげに、きわめて現実的な内容——古い中世的土地所有のブルジョア革命的清掃——がかくされていることを理解するだろう。土地の公有化はブルジョア革命では反動的な方策である」（同）

以上のように、レーニンが水平主義的分配だの、社会化だの、均等化などという小市民的言いまわしに、ブント諸君のようにごまかされはしなかった。レーニンは、この言いまわしのおかげに、地主的土地所有の廃止、古い中世的土地所有のブルジョア的清掃がかくされているのをちゃんと理解していたのである。すなわち、土地の水平主義的分配であろうが、均等化であろうが、不均等分配であろうが、いわゆる社会化であろうが、公有化であろうが、国有化であろうが、地主的土地所有制の一掃は、決してプロレタリア社会主義革命ではなく、ブルジョア革命以外の何物でもないのである。なぜなら、これはすべて資本主義の発展のコースを切り開くもの以外の何物でもないからである。その中でも最も徹底して資本主義の発展のコースを切り開くものが土地の国有化なのである。

「もし農民経営がさらに発展することができるとすれば……もっとも収益の少ない、もっともおくれた、規模の小さな分散した農民経営が、しだいに連合し、共同の大規模の農業経営を組織することである」（『レーニン』）

「農民大衆についていえば、かれらのあいだで何千年来つづいてきたのは、一家族一世帯を一つの生産単位とする小私有経済であった。このような分散的な小生産こそ封建支配の経済的基礎であって農民を永遠の貧困におとしめてきたのである。このような状態を克服する唯一の方法は、しだいに集団化することであり、集団化を達成する唯一の道は、レーニンが言っているように、協同組合の道をへることである」（毛沢東「組織せよ」）

ブント諸君はこの真理がおわかりだろうか？ プロレタリアートと農民は違うのである。銀行、企業などの国有化は（プロレタリア独裁下での）疑いもなく社会主義的なものである。しかし、土地（および農具など）の国有化は、均分化は、決して社会主義的なものではない。なぜなら、土地を国有化しても「一家族一世帯を一つの生産単位とする小私有経済」という階級の本質は少しもかわらないからである。そして、プロレタリアートと貧農の同盟、プロレタリアートの指導、プロレタリアートの援助なくして、農民の自然発生性に依拠して集団化ができると思つたら、大間違いなのである。土地の小口の賃借しになるだけなのである。地主的土地所有の完全な一掃——土地国有化を農民の自然発生性に依拠したままで行つたら（つまりブルジョアジーのヘゲモニーで行なわれれば）、これは「アメリカ型」の農業資本主義を生み出すだけなのである。「農民の共同性」のヘゲモニーは、富農が握っているからである。

だからこそ、レーニンは「だから、この内容を支持しながらも、われわれとしての特別の『保留条件』を持ちこむ」といっているの

である。なぜなら、ロシアの当面した革命が封建地主制（ツァーリズム）打倒のブルジョア民主主義革命に他ならず、農民は反地主の強固な同盟者だからである。だから、封建性の完全な一掃をプロレタリアートは断固支持した。しかし、そこでとどまるわけにはいかず、休むことなく社会主義へ前進しなければならぬから、ここに「特別の『保留条件』を持ちこみ、『アメリカ型』農業資本主義の道を阻止し、協同組合の道をへて、農業集団化の社会主義農業へ進むことを提起したのである。

ブント諸君はこれがとんとおわかりにならない。彼らはブルジョア革命は全て反動的だと思ひこみ、封建性の一掃という進歩性が見えないのである。封建性の一掃——これは資本主義の発展の逆であると共に、社会主義への道でもあるのである。問題はブルジョアジーのヘゲモニーか、プロレタリアートのヘゲモニーか、なのである。ブントは史的唯物論の観点がてんでおわかりにならない。彼らは農民がプロレタリアートではなく、急進ブルジョアジーであることがおわかりにならない。

「大地主、農業賃金労働者、および農民——これがロシアを含めてあらゆる資本主義国における農村住民の三つの主要な構成部分である」（『ロシア社会民主党の農業綱領』）

彼らには農業賃金労働者と農民の区別さえもつかぬらしい。彼らには、農民が小ブルジョアジーであり、農民運動がブルジョア革命運動であること、断じて認めたくないものである。なぜなら、ブルジョア革命だとすると、彼らは農民運動を支持できなくなるからであ

る。何故って？ブント諸君によれば、ブルジョア革命はすべて反動的であるから。ところが、現実には農民運動を支持しなくてはならない。矛盾に陥ったのはレーニンではなく、ブント諸君であり、一種の言いのがれを言ったのはレーニンではなく、君達なのである。君達の言うことは、あのカウツキーの言っていたことと驚くほどそっくりである。レーニンは名著「プロレタリア革命と背教者カウツキー」（一九一八年）の中で、農業問題に対するカウツキーの自由主義的デタラメを徹底的に批判している。

「……カウツキーは、どうやって土地のコン・ミューンの耕作と協同組合的耕作へ移るかという、ソヴェト権力の提起した問題にはふれなかった。しかし、いちばん奇妙なのは、カウツキーが土地を小口にして賃借しすることを『いくらか社会主義的なもの』と考えたがっていることである。実際には、これは小ブルジョアのスローガンであって、ここには『社会主義的なもの』はなにもない。もし土地を賃借する『国家』がコン・ミューン型の国家ではなくて、議會制のブルジョア共和国（……）なら、土地の小口貸付けは、典型的な自由主義的改革であろう」

「理論的に重要な根本問題を、カウツキーは提起することさえできなかつた。その問題とは、次のようなものである。

- 一、平等な土地用益、および
- 二、土地の国有化——一般に社会主義に対する、とくに資本主義から共産主義への移行にたいする、この二方策の關係。
- 三、分散した小規模農業から大規模の集団農業への過渡としての

レタリア国家にあたえた」

カウツキーはブルジョア革命から社会主義革命へ転化させることに反対する。ブントはブルジョア革命を認めず社会主義革命のみをいう。これは、右と「左」の違いであるが、平等な土地用益、土地国有化というブルジョア革命を「社会主義的なもの」と考えている点は同じである。そして、「土地のコン・ミューンの耕作と協同組合的耕作」（これが社会主義的農業なのだ）に向ってプロレタリアートが農民を指導することを否定するのも同じである。

レーニンは農民のブルジョア革命運動を「保留条件」をつけて支持し、地主制の完全な一掃の後、休むことなく社会主義革命に発展・転化させるよう、農民を指導しているのである。ブント諸君には「われわれは現存の国家、社会体制に反対するあらゆる革命運動を支持することを、社会民主主義派の義務と教え、労働者階級による政治権力の獲得……」というレーニンの名言が理解できない。彼らは現実から出発せず、観念から出発する。社会主義者は何も純粋なプロレタリアートの社会主義運動だけを支持するのではないのである。小ブルジョアジーの反体制運動を支持するだつて？ これはけしからん、などと言わないでくれたまえ！ 農民の土地革命運動はブルジョア革命運動を支持するだつて？ まあ、驚かないでくれたまえ、我々は断固支持するのであるから。だが「保留条件」つきの支持であることも忘れないでくれたまえ！ これが指導するということなのだ。レーニンはツチャーリズムに対する農民の革命運動をブルジョア革命としてはっきり規定し、これを社会主義運動とは一線

土地の共同耕作、ソヴェト立法におけるこの問題の提起のしかたは、社会主義の要求に応じているかどうか？」

「ツチャーリズムと地主を倒した農民は、平等な土地用益を夢みる。そして、どんな力も、地主とブルジョア議會制的共和主義国家とから解放された農民を妨げることはできないだろう。プロレタリアは、農民にむかつてこう言う。——われわれは、君達が『理想的な』資本主義に到達するのを助けよう。なぜなら、平等な土地用益は、小生産者の見地から資本主義を理想化したものであるから。しかしそれと同時に、われわれは、これでは不十分なこと、土地の共同耕作に移る必要があると君達に示そうと。

カウツキーが農民の闘争にたいするプロレタリアートのこのような指導の正しさを否定しようとするなら、それを拝見するのもおもしろからう。だが、カウツキーは問題を避けるほうを選んだ。……」

「カウツキーにはきりがない混乱が生じている。注意したまえ。カウツキー——（一九一八年の）——はロシア革命のブルジョア的性格を主張している。カウツキー（一九一八年の）はこのわくから越えてはならないと要求する。しかも同じカウツキーが、貧農に対する小口の土地貸付けという小ブルジョアの改革を（すなわち平等な土地用益への接近を）『いくらかの社会主義』（ブルジョア革命としては）と考えている。これではわけがわからない！」

「プロレタリアート独裁がロシアで実行した土地国有は、ブルジョア民主主義革命の徹底的遂行をもっとよく保障した……」さらに、土地の国有化は、農業で社会主義へ移る最大の可能性をプロレタリアートに成長・転化させる方針を提起したのである。

「左」翼的な仮面をかぶったものは、実際には必ず右の立場である。ブントがいい例を示してくれている。彼らは「二段階革命」を否定し、とにかくプロレタリア社会主義革命をいい、勇ましくも「左」翼的である。だが実際はどうか。「二段階革命」を否定し、民主主義革命を否定するあまり、農民の土地革命を「反ブルジョア的なもの」といい出し、「農民の共同体性に依拠すれば、土地分配の要求を社会主義集団化に高めていくことができる」といい出した。そうすると、農民はプロレタリアートと本質的に同じであり、社会主義革命の原動力になるといふことになる。

「農民とともにブルジョア民主主義革命を最後まで遂行し——農民のうちのもっとも貧しいプロレタリアのおよび半プロレタリア的な部分とともに、社会主義革命へむかつて前進する。これがポリシェヴィキの政策であつた。そしてこれが、唯一のマルクス主義的政策であつた」（「背教者カウツキー」）

ブント諸君はこれが理解できない。農民はブルジョア民主主義革命の原動力なのであり、社会主義革命の原動力ではないのだ。農民の中の「プロレタリアのおよび半プロレタリア的部分」のみが、社会主義革命の原動力になりうるのである。ブントは農民の「共同体性」を天まで持ち上げ、これを社会主義的なものだという。たしかに、中国革命においてもこの「共同体性」は、農業社会主義化の端緒をつくり出すにあたって一定程度利用されたし、ある場合には利

用しないのは正しくない。しかし、これは決して反ブルジョア的なものではないし、これに依拠などできない。プロレタリアートの指導がなければ、この「共同体性」は「アメリカ型」農業資本主義がうみ出すのである。プロレタリアートと同盟し、集団化の原動力をなれるのは、資本主義的搾取をうけている「プロレタリアのおよび半プロレタリア的」農民なのである。これが農村におけるプロレタリア独裁の基礎なのである。いわゆる農民——中農は集団化にあたっては中立としかなりえないのである。集団化にあたって依拠するのは、「農民の共同体性」ではなく、貧農の半プロレタリアート性である。

ブントは、「共同体性」を社会主義的なものだとし、貧農、中農富農の区別も否定し、プロレタリアートの指導も否定する。実際にこのブントの農民政策が実行されたらどうなるだろうか？ 明らかに、ブルジョア民主主義革命から一歩も進むことはできない。それどころか、民主主義革命の徹底化すら不可能である。御覧の通り右なのである。

レーニンのこうした理論は、労働独裁論として明確にされており、これはブントのいう如く「一種の言いがれ」ではないことは、ロシア十月革命の勝利で明らかになっている。(後述)では、ブントの信奉するトロツキー流「永続革命」、トロツキー流「世界革命」理論は、ロシア革命とその後の世界革命に対して、正しい方針を提したたであらうか。

D トロツキーの農民不信の永続革命論と世界革命論

「のちに永久革命とよばれたロシアの革命的発展の性格に対する見解を筆者が抱くにいたったのは、一九〇五年の一月九日と一〇日ストライキとの間の時期である。この永久革命という名称に表現された思想は、ロシア革命は直接にはブルジョアの目標に当面しているが、しかしこのみとどまってはならないことである。革命はプロレタリアを政権につける以外には、次にくる革命的課題を解決することはできないが、しかし政権をにぎったプロレタリアートは革命においてブルジョアのわくにとどまっていることはできない。むしろ反対にプロレタリア前衛がその勝利を確保するためには、その支配の初期に封建的財産のみならず、ブルジョアの財産にも、深刻な侵害を加えねばならぬ。このさい、プロレタリア前衛は、革命的闘争の初期にかれらを支持したブルジョアジーのあらゆる集団と反目衝突するばかりでなく、広範な農民大衆、プロレタリア前衛がその援助によって政権をにぎった農民大衆とも反目衝突する。農民大衆が圧倒的多数を占める後進国における労働者政府の状態に存在する矛盾は、国際的規模においてのみ、プロレタリアートの世界革命の舞台においてのみ解決される」(トロツキー「一九〇五年」序文)すなわち、トロツキーの「永続革命論」の見解によれば、(1)農民大衆は社会主義革命に対して絶対的に反動勢力である。その未来の

地位のために革命の側に移行する可能性はない。従って労働者政府はかならず農民大衆と衝突する。(2)農村人口が大多数を占める後進国では、プロレタリアートは農民を指導して社会主義革命をおしすすめる、労働独裁権力を守り、うち固め、世界革命の根拠地にする

ことは絶対に不可能である。(3)後進国の労働独裁権力は労働者と農民の問題を正しく処理することはできず、世界革命が成功しなければ、この権力を守ることはできない。と、こうなるというのである。

トロツキーの「永久革命論」「世界革命論」には、プロレタリアートの革命的エネルギーと指導性に対する確信のなさと、農民の革命的可能性に対する否定の思想が歴然と流れている。又、ここにこそ、この「永久革命論」「世界革命論」の本質——反革命の本質があるのである。「経済学者」トロツキーは、ロシアの後進性をなげき悲しみ、プロレタリアートの革命的エネルギーに対する不信をのぞかせ、農民の革命的可能性を否定して言う。

「欧州のプロレタリアートの直接の支援がなければ、ロシアの労働者階級は権力をもちろん、その一時的支配を長期の社会主義的独裁へと転ずることはできない。これには一点の疑いもない」

このトロツキーの「労働者対立」労働独裁維持不可能世界革命といった「永続革命論」「世界革命論」は正しい方針を提起しえず、ロシア革命の現実の中でみじめにも破算したばかりか、中国、朝鮮、ヴェトナム、アルバニア、キューバ等々の「後進国」の革命の中でも、特にみごとにその反革命性を暴露されている。「世界革命」と

か「永久革命」といった言葉に酔わずに、歴史的意義を具体的に見るものにとつては、トロツキーの農民不信の理論の反革命性をはつきりと見てとることができるだろう。

トロツキーは、ツァーリズム打倒のブルジョア民主主義革命においては、プロレタリアートの同盟者としての農民一般の役割を否定して労働独裁を否定し、十月社会主義社会以降においては半プロレタリアートである貧農をも小所有者としか見ず、プロレタリアートの同盟者を否定して「純粹」プロレタリア独裁をわめいた。これに対し、レーニンは次のように批判している。

「トロツキーの独創的な理論は、ボリシエヴィキからはプロレタリアートの断固たる革命的闘争への呼びかけと、プロレタリアートによる政治権力の獲得への呼びかけ、をとり、メンシエヴィキからは農民の役割の『否定』をとってきている。かれによると、農民は階層的にわかれ分化した。農民の革命的役割の可能性はますます減退した。ロシアでは『国民的』革命はありえない。『われわれは帝国主義に生きています。』ところが、『帝国主義はブルジョアの国民を旧制度に対立させず、プロレタリア階級をブルジョアの国民に対立させる』と。

これこそ帝国主義という『言葉をもてあそぶ』こっけいな一例である。ロシアですでにプロレタリアートが『ブルジョアの国民』に対立しているとすれば、ロシアは直接に社会主義革命に当面していることになる。そうすれば『地主の土地没収……』というスローガンは正しくない。そうすれば『革命的労働者』の政府ではなくて、

『社会主義的労働者』の政府を問題としなければならない。トロツキーの混乱がどんなにひどいかは、かれの次の言葉からわかる。プロレタリア階級は「非プロレタリア（人民大衆をも断固として引きつづける）」と。トロツキーはプロレタリアートが地主の土地を没収し、君主制を打倒するために、農村の非プロレタリア大衆をひきつけるなら、これこそ、ロシアにおける『国民的ブルジョア革命』の完成であり、これこそプロレタリア階級と農民の革命的民主主義的独裁であることを考えなかったのだ。（一九一五年「革命の二つの方向について」）

このように、形は左、実際は右の反革命理論を、ボルシェヴィキとメンシェヴィキの中間にいてわめいているだけなら、見捨てられるだけで大した害も与えなかった。しかし、一九一七年七月ボリシェヴィキ第六回大会で入党を認められ、ボリシェヴィキにまぎれこんだトロツキーは、その反革命理論をいかに発揮して、ソヴェト権力を危機に陥し入れた。

一九一七年十月ロシア社会主義大革命は勝利した。だが、帝国主義戦争によって疲弊、混乱したロシアは、それに加えて、外国帝国主義の支援を受けたソヴェト権力の転覆を狙うブルジョア残党分子の反乱に直面していた。これが史上始めてのプロレタリア独裁権力のおかれていた、争う余地のない客観情勢であった。

「一日で社会主義が勝利し、隣りの国々で資本主義が存在している場合には革命戦争を準備しなければならない」だが「わが十月革命後にこの準備は実際にはどうしてやられてきたであろうか？」

「つぎりするであろう」（「革命的空文句について」）

レーニンは講和が必要、革命の息づきが必要であるとして、ブレスト・リトフスクに臨もうとした。ところが、一九一八年二月一日、講和会議にソヴェト代表団の団長として出席していたトロツキーは、ボリシェヴィキを裏切り、レーニンの直接の訓令にそむき「平和でもない。戦争でもない。しかし、軍隊の復員をひきつづき実行する」として交渉を決裂させてしまった。これこそ、トロツキーの「永続革命論」「世界革命論」の反革命性、「ヨーロッパ革命に賭けた」なる空文句の本性をいかに発揮したものである。このことがどういふことなのか、その後のドイツの行動が示している。

一九一八年二月一六日、ドイツは休戦協定の無効を宣言し、二月一八日には全面的進撃に転じ、ベトログラードを脅やかした。かかる事態となっても、トロツキーはこの追撃がドイツ国民に与える「心理的効果」を見極める必要があると主張して、即時交渉再開を要求するレーニンに反対した。これまた、トロツキーの反革命理論の当然の結果であった。レーニンは、「社会主義の祖国は危機にひんしている」と呼びかけを行い、赤軍部隊の編成をいそいだ。二月二三日、ブスコフ・ナルバの線で、生れたばかりの赤軍はドイツ軍に反撃し、ベトログラード進撃を阻止した。この日はじめてドイツは、ソヴェトの電報（二月一八日の即時講和要求）に回答をよせてきたが、それには四八時間の期限つきで、さらに新しい苛酷な条件が追加されていた。中央委員会は白熱の論争をくり返していた。レーニン、スターリン、スヴェルドルフはトロツキー、ブハーリンと激し

この準備の進み具合は次のようなものであった。即ち、われわれは軍隊の動員を解除しなければならず、そうすることを余儀なくされていた。「となりの帝国主義国家との戦争を終えていなかったソヴェト権力が、軍隊の動員を解除しなければならなかった」「何百万という軍隊の動員を解除し、義勇制によって赤軍を建設しなければならなかった。ソヴェト政権は、革命の息づきを必要としていた。これがソヴェト権力の置かれていた客観情勢であった。

ソヴェト権力を死守するためには、まず帝国主義者の残した足かせをロシア人民の名において、取り除くことを第一の任務としていた。一九一七年十一月九日、ソヴェト政府は平和に関する布告に基づいて、交戦諸国による講和を無電で呼びかけた。十一月二十六日、ドヴィンスタから派遣された軍使は、ドイツ軍の東部戦線司令部へ停戦を申し入れ、翌二七日、応諾の回答をうけた。一月二十八日、ソヴェト政府は、連合国政府が講和提案に応じないことを非難した。三〇日、連合国にブレスト・リトフスクにおける講和会議に参加する意志があるのか否か、最終的の回答を求めた。こうして、ブレスト・リトフスクにおける単独講和会議を、一月三日から、ソヴェト政府とドイツ、オーストリア、ブルガリアの間で進めた。

レーニンはソヴェト政府がおかれていた客観的条件を正しく分析していた。レーニンは、革命的な空文句を唱えたり、「世界革命に賭ける」などといったばかげたことを毛頭考えていなかった。

「これらの事実と一九一八年一月から二月に革命戦争を云々していることと対比してみたまえ。そうすれば革命的な空文句の本質は

く斗っていた。そして、中央委員会は講和条約調印を決定した。

トロツキーが「ビートル、ベトログラード、モスクワの陥落も辞せず」といい、ブハーリンが「世界革命のためには、ソヴェト権力の消滅もやむをえない」と述べ、レーニンの即時講和に反対したのも偶然ではなかった。これらの事実を、彼らの観念論的「世界革命論」の一端をのぞかせたにすぎなかったのである。レーニンに言わせれば、こうした「革命戦争論」や、こうした「世界革命に賭けた」理論は、革命的な空文句以外の何物でもないのであり、それこそ世界革命を放棄する理論なのであり、「われわれは、世界革命に賭けた」という偉大なスローガンを全くの空文句に変えるのである。レーニンは、トロツキー、ブハーリン等のこうした「一足とびの」「ヨーロッパにおける社会主義の勝利にかける」観念的世界革命論を非難して言う。

「われわれはヨーロッパにおける社会主義の勝利に賭ける」という偉大なスローガンを空文句に変えてはならない。社会主義の徹底的な勝利という長期の困難な道は考慮するならば、このことは真理である。しかしあらゆる抽象的真理は、これをどれであれ、具体的情勢にあてはめようとするならば、空文句となってしまう。』どのストライキ中にも、社会革命の怪蛇がひそんでいる』というのは、争う余地のないことである。だが、どのストライキからでも、一足とびに革命へ移るとか、できるかのようにのはばかりかっている。もし、われわれがヨーロッパ革命は、かならずここ数週間のうちには、必ずドイツ軍がベトログラードに、モスクワに、キエフに到

着しうるまえに、われわれの鉄道、輸送を『たたきこわす』まえに燃えあがって勝利するであろうと保証するという意味で、『ヨーロッパにおける社会主義の勝利に賭ける』ならば、われわれは、まじめな国際主義的革命家としてではなく、冒険家として行動しているのである。もし、リープクネヒトが二―三週間内でブルジョアジーに打ち勝つならば（それは不可能ではない）、彼はわれわれをあらゆる困難から解放してくれるであろう。それは争う余地がない。しかしもし、われわれが今日の帝国主義との闘争におけるわれわれの今日の戦術を、リープクネヒトがまさにここ数週間内にきつと勝利するにちがいないという期待によって決定するならば、われわれは嘲笑を買うにすぎないであろう。われわれは、今日のもっとも偉大なスローガン、革命的スローガンを革命的空文句に変えてしまおう（「きびしいが必要な教訓」）

現在、ブント諸君がもっとも崇拜しているトロツキー流の「一足とび」永久革命、世界革命論とは、こうした革命的空文句の反革命以外の何物でもない、願望主義的、観念論的代物なのである。

レーニンが労働者問題（プロレタリアートと貧農の同盟）が、労働者と農民の問題を正しく処理し、社会主義革命をおし進めてこの権力を強化し、世界革命の根拠地になることができるし、又こうすることがロシアプロレタリアートの国際主義的義務であると考え、トロツキーのようにこれを否定しはしなかつた。レーニンは、帝国主義時代の資本主義を事実にもついで分析し、まったく新たな社会主義革命理論をうちたてた。そして、ソヴェト権力の勝利がその

「もし、搾取者が、ただ一国だけで撃破されたとしても——」連の国に同時に革命が起こるといふことは、まれな例外であるから、これがもちろん典型的なばあいである……」（「背教者カウツキー」）

このように、トロツキー流「一足とび」「永続革命論」は正しい方針を提起するどころか、レーニン主義（帝国主義時代のマルクス主義）と歴史の事実の前にも破算を宣告されたのであった。だが、ブント諸君はまだこの反革命理論にしがみついている。しかし、すでに歴史が「労働対立激化論」を否定してしまっている。ブントはこれをそのまま使うわけにはいかなかった。それで今度は、労働者と農民の区別を否定し、農民の土地革命運動は社会主義革命運動である、レーニンのように、農民の土地革命運動に「保留条件」をつけるのは「一種の言いがれ」であるとし、いわば「経済原理」「永続革命論」に改造したのである。しかし、トロツキーの反革命理論をどのように改造しても、決してその反革命の本性を隠すことはできないし、その破産の運命を救うことはできない。

E ブントの「経済原理」世界革命論、永続革命論

「(三) プロレタリア日本革命の国内的任務は、日本ブルジョアジーの打倒、アメリカの軍事力の一掃によるプロレタリア独裁の樹立である。このようなプロレタリア日本革命は極めて困難な国際的条

正しさを示した。

「経済的、政治的發展の不均等は、資本主義の絶対的法則である。ここから、まず最初に少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国においてさえ、社会主義が勝利することは可能であるという結論が出てくる。この国の勝利したプロレタリア階級は、資本家を奪奪し、自国の社会主義生産を組織し、他の資本主義世界に対抗して他の国々への被抑圧階級を自分の側に引きつけ、かれらのあいだに資本家に対する反乱をおこし、必要とあれば武力に訴えてさえ、かれらの国家の搾取階級にあたることのできる」（一九一五年「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」）

「資本主義の発展は、それぞれの国で、きわめて不均等にすむ。商品生産のもとでは、それ以外ではありえないのである。ここから、社会主義はすべての国で同時に勝利をおさめることはできないという動かすことのできない結論がえられる。社会主義は、はじめ一カ国または数カ国で勝利するが、他の国々はなおしばらくブルジョア的あるいは前ブルジョアのな国にとどまるであろう」（一九一六年「プロレタリア革命の軍事綱領」）

「ソヴェト権力を保持することによって、われわれは万国のプロレタリアートの、自国ブルジョアジーに対する信じがたいほど困難で苦しい闘争を、もっともよく、もっとも強く支援する。今、社会主義の事業にとつては、ロシアにおけるソヴェト権力の崩壊以上に、大きな打撃はないし、またありえない」（一九一八年「併合主義的単独講和について」）

件の下におかれている。すなわち、(イ)アメリカ帝国主義の軍事力が日本のブルジョア反革命の直接の予備軍を形成している。(ロ)現在の国際的勢力配置からみて、日本のプロレタリアートは独力で勝利を闘いとり、国際帝国主義の軍事力に抗して、当面独力でそれを維持しなければならぬ。(ハ)この場合、日本資本主義の現在の弱点は、巨大な再生産を維持する原料、燃料の大半を海外輸入に依存しており、この輸入資金を調達できなければ日本の再生産は危機に落ち入るといふ弱点は、日本のプロレタリア権力の最大の弱点に転化せざるをえないこと。

(四) 従って、日本革命のこのような国際的条件は、それに徹底した峻烈なプロレタリア的性格を与えざるをえないであろう。何故なら、日本のプロレタリア権力は、政治的にはプロレタリア大衆、半プロレタリア大衆自身の革命的エネルギー、ダイナミズム、自発性、献身に全面的に依存する以外になく、これはプロレタリア人民大衆自身の革命的平等主義、革命的自己防衛主義にうたえらるることによつてのみ、可能だからであり、また経済的には原料、燃料、食料その他基礎資料、生活必需品の「管理わりあて制」によつてのみ、再生産を維持し、人民大衆の生活を保障しうるからである。

(五) ここから、日本プロレタリア権力の直ちに着手しなければならぬ革命的諸政策は、(イ)一切のブルジョア国家機関、武装組織の即時かつ無条件の解体、全人民大衆の武装、プロレタリア赤衛軍の組織化。(ロ)一切の企業、半企業の即時かつ無条件の没収、それを組織された労働者、人民大衆の手にゆだねること。(ハ)ブルジョアジー

及びその手先の所有する土地、家屋その他一切の動産、不動産の即時かつ無条件の没収、それを組織された労働者人民大衆の手にゆだねること。

(5) だが、このような日本のプロレタリア権力の諸政策は、革命の当面の一时的な維持策にすぎない。何故なら、それによつては巨大な日本の再生産を維持、拡大し、革命にとつてはなされた、人民大衆の経済的文化向上への熱望を実現することができないからである。

(7) それ故、プロレタリア日本革命の生存は、日本革命のアジア革命への拡大と、同時にまたその革命的衝撃力による中ソプロレタリアートの革命的管理とに依存している。

(8) それ故に、日本プロレタリアートは日本革命を世界革命のあらたな突破口に転化すること、それを世界革命の怒濤の時代へと「永続」させること、ただこれによつてのみ、日本革命を維持することができ…… (「共産主義」八号)

ブントのこの「一足とび」「経済原理」永続革命論、世界革命論を要約すると、(1)日本は、巨大な再生産を維持、拡大する原料、燃料の大半を海外に依存しているから、「純粹」プロレタリア独裁権力は、人民大衆の経済的熱望を実現することができない。それ故、人民大衆とプロレタリア独裁権力とは対立する。(2)原料、燃料を貿易に依存している工業国日本においては、プロレタリアートは人民を指導して社会主義革命をおし進め、プロレタリア独裁権力を守り、強固にして、世界革命の根拠地とすることは絶対不可能である。

民の代りに人民の「経済的熱望」を置き替えたものである。この「経済原理」永続革命論は、トロツキーの永続革命論を一層みじめなものにしたにすぎない。

ブントの「経済原理」永続革命論は人民の「経済的熱望」不可能論というしるものは、結局のところ、アメリカ帝国主義、日本独占資本美化論であり、労働者・人民の革命性否定論であり、願望主義、敗北主義、悲観主義の小ブル観念論である。これには何ら、疑問の余地はない。ブントは、アメリカ帝国主義、日本独占資本を打倒した人民独裁権力(ブントにあって「純粹」プロレタリア独裁)は、「革命にとつてときはなされた」「人民の経済的熱望」を実現できず、これを守ることが不可能であり、ロシア革命に賭けなければならぬと言ふ。ブントのこうした問題のたて方——「革命によつてときはなされた人民の経済的熱望を実現しなければ云々」——そのもの自体の中に、彼らの史的唯物論否定の思想がのぞいている。このような考え方は、ブルジョアジーのものであり、プロレタリアート人民のものではない。なぜなら、ブントは現実のアメリカ帝国主義と日本独占資本の支配のもとでの、労働者・人民の破局的経済状態のことを、労働者・人民をこの破局から脱出させ、発展させることを問題にしないからである。これこそ何よりの問題なのに!! こここそ革命の必然性があるのに!! ブントは人民の立場に立っていない。彼らは人民の立場から革命を考えず、小ブルジョアジーの立場、中間者の立場から考へているのみである。そう!! 何よりも「経済的熱望」にこりかたまっている小ブルとして。

(3)原料、燃料を貿易に依存している工業国日本のプロレタリア独裁権力は、「人民の経済的熱望」(?)を実現できず(?)、「経済問題を正しく解決することはできず、アジア革命、世界革命(彼らの理想的な)が成功しなければ、この権力を守ることができない」ということになる。

勿論、何よりも敵の規定、革命勢力の規定においてブントは間違つており、当然ながら革命の性格においても間違っている。ブルジョアジー一般としか分析しておらず、農民について一言も触れておらず、実に観念的な理論に他ならない。しかし、これに対する批判はここでは省略しておく。

同志諸君ノ このブント諸君の「永続革命論」と、前述のトロツキーの「永久革命論」と対比していただきたい。トロツキーのは、労働者政府対農民の対立であった。ブントはどうか。かれらは労働者政府対人民の「経済的熱望」の対立である。以下は兩名とも同じで、この対立は激化せざるをえないから、プロレタリア独裁権力は守ることができず、世界革命の根拠地となることができず、プロレタリア国際主義の義務は果せないというのである。

ブントは始祖としているトロツキーと同様に、労働者、人民の革命的可能性、革命性に対する不信から、革命的空白句に終始し、日本プロレタリア独裁権力をアジア革命に、中ソプロレタリアートの革命的覚醒に賭ける!! というのである。要するに、この「経済原理」永続革命論とは、トロツキーの農民不信の「永続革命論」が破算し、そのままでは持ち出せないで、新たな粧いをこらし、農

問題は、「革命によつてときはなされた」「プロレタリアート・人民の」(ここは「強欲主義者ブントの」と読む)「経済的熱望」なるものを実現し、満たしてやれるか否か、にあるのではないのだ。問題は、現実の(これが常にブントに欠けている)、米日反動派の支配のもとでの、労働者・人民の抑圧、隸属、貧困の経済生活を、プロレタリア独裁権力が、この破局的状況から救い出し、新たな経済を確立し、この経済基礎をしいにうち固め、発展させることができるか否か、にあるのだ。ブント諸君が「原料、燃料」を確保できないとするプロレタリア独裁(人民独裁)権力が、現実の破局から人民を脱出させるか否か、ここにこの問題の核心がある。

同志諸君!! 我々は労働者・人民に対し、樹立された人民独裁(プロレタリア独裁権力)は、「革命によつてときはなされた」「プロレタリアート・人民の」「経済的熱望」を実現できる!! などと保障する必要は毛頭ない。労働者・人民は、こんなブルジョア政治家の唱える空手形の保障など全く必要とはしていない。人民独裁権力が、現実の、アメリカ帝国主義の民族圧迫のもとでの独占資本制度のもとでの、労働者・人民の破局的経済状態に対して、「原料、燃料」問題を解決して、労働者・人民をこの破局から脱出させ、新経済を発展させて、この権力を守り、日本を世界革命の根拠地とすることは、ブント諸君のいうように不可能なことであろうか。プロレタリアートの党は、これを指導することができないのであろうか。ブント諸君が、「経済的熱望」をうんぬんすることは、日本独占資本を賛美することに他ならない。日本独占資本の巨大な再生産力

とその高度成長を賛美し、国民総生産の高さを鼻にかけ、先進工業国「ぶりを賛美し、これを礼賛して、日本の労働者・人民の経済状態がどんなに「貧困」であるかを、米日反動派のためにおおいかくすことに他ならない。君達は善意であろうが実質的にはこうなってしまうのだ。見たまえノ 独占ブルジョア自身でさえ、日本の労働者・人民の「経済的文化」の状態が（かれらのデータメな統計によっても）世界で二十数番目の状態であることを、おおいをかしめてはいないではないかノ プント諸君、君らは独占資本の搾取度が欧米の独占資本家をうらやましがるほど「高度」であるということ、労働者・人民からおおいかくそうとしているのだ。プントのいう「経済的熱望」——はつきり言えばこれはブルジョアの享楽以外の何物でもない。

プント諸君は言う。「巨大な再生産」（これは誰のだノ）を維持する燃料、原料を海外輸入に依存している「日本独占資本主義」の弱点は、同時に日本プロレタリアートの権力の弱点であり、アジア革命がなければ、この「燃料」「原料」は確保できぬから、革命は成功しないと。これは日本人に対するおどしであり、革命闘争に水をかけることである。独占資本家の言い分と同じである。そして間違っている。彼らは労働者・人民の現在の経済状態がどんなに貧困なものであるかわかっていない。彼らは、日本独占資本の原料、燃料不足の原因が自然条件のみならず、独占資本自らが「採算がとれない」などという理由で日本の農業、石炭業、鉱業、水産業、林業等々の第一次産業を停滞させ、零落させ、破壊してきた事実を

高で七分の一という低水準におち込み、生活必需品も極度に不足するという、恐るべき困難の中で、ソヴェト権力は国内戦争に勝利したばかりか、プロレタリアと貧農の同盟はますます固くなり、人民の革命性は比類なくうちたえられたではないか。プント諸君、君らはブルジョアジーや富農の立場に立っているのだ。

以上のように、プントは人民の革命性を否定し、その創造的精神を否定し、結局、マルクス・レーニン主義の偉大な力を否定するのである。そして、アメリカ帝国主義を美化し、日本独占資本を美化する。彼らはプロレタリアート・人民に悲観主義、敗北主義のブルジョア思想をふりまく。これこそ、彼らの酔いしれている「世界革命」「永続革命」論の主体なのである。

もう一度、くり返そう。プロレタリアートの党の指導さえあれば、すなわち、マルクス・レーニン主義が真に人民の手に握られた時、人民は如何なる奇跡でも創り出すことができる。日本の人民独裁権力は、現在の労働者・人民の破局的経済状態を必ず解決することができる。必ず、労働者・人民を破局から脱出させることができる。必ず、人民権力を守り、うち固めて日本を世界革命の根拠地とすることができる。そして、ブルジョアの享楽とは全く違った意味で、必ず、人民に繁栄を与えることができる。

プント諸君のこうした、トロツキー流「永続革命論」の改訂版「経済原理」「永続革命論」では、とてもレーニンの労働独裁論を正しく理解できているはずがなかった。（それ故、彼らはレーニンの農民問題に関する史的唯物論の観点を「一種の言いのがれ」にして

も、起因していることを忘れていた。そればかりではない。最も大切なのは、彼らが「巨大な再生産」を維持している独占資本家（米帝に従属した）の政治能力を崇拜し、礼賛して、プロレタリアートの革命的政治能力を否定していることである。彼らはプロレタリアート・人民が独占資本家と全く違ったやり方で経済問題（原料、燃料）を解決するのだ、ということをおどす。プロレタリアートの党の指導さえあれば、人民大衆は如何なる奇跡でも成しとげることができるという真理を否定する。彼らはプロレタリアート・人民の革命性を否定し、日本のプロレタリアート・人民は目先の「経済的熱望」（ブルジョアの享楽、物質による刺激）のみで動き、経済的困難の前にすぐ革命性を喪失するという。何と人民をバカにしていることかノ ヴェトナム人民の英雄的、犠牲的精神は日本人とは無縁なものかノ 中国人民は欧米、日本などのブルジョアの繁栄、物質「文明」は歯牙にもかけていない。毛沢東思想、プロレタリア思想、政治を第一とし、これを原動力としている。これは日本人には無縁のものなのかノ 日本人は政治・思想を第一にできず、プロレタリア思想を革命の原動力にできず、物質による刺激でしか革命をやらせないというのかノ そうだとしたら、君達は真正正銘のブルジョアジーであり、真正正銘の修正主義者である。政治・思想を革命の原動力とするか、物質による刺激を原動力とするか、これはマルクス主義か、修正主義かの根本的相違である。

ロシア人民はどうだったか。農業総生産高で約50%、工業総生産高で七分の一という低水準におち込み、生活必需品も極度に不足するという、恐るべき困難の中で、ソヴェト権力は国内戦争に勝利したばかりか、プロレタリアと貧農の同盟はますます固くなり、人民の革命性は比類なくうちたえられたではないか。プント諸君、君らはブルジョアジーや富農の立場に立っているのだ。

F 新民主主義革命と永久革命論

中国の新民主主義革命は、プントの言うごとく「民主主義の看板」を掲げて「社会主義革命」をやったものではない。

「毛沢東同志の新民主主義革命にかんする理論は、マルクス・レーニン主義の連続革命でもある」（林彪「人民戦争の勝利万才」）

「毛沢東同志はこうのべている。民主主義と社会主義という「上下二編からなる論文は、前編をうまく書かないと後編もうまく書けない。民主主義を断固として指導することは、社会主義の勝利をかもとる条件である」（同）

「毛沢東同志は、民族民主革命と社会主義革命の二つの段階を正しく区別すると同時に、両者を正しく密接に結合させた。民族民主革命は社会主義革命のための必要な装備であり、社会主義革命は民主主義革命の発展の必然的ななりゆきである。この二つの革命の段階のあいだには決して万里の長城が横たわっているのではない」（同）

「ブルジョア独裁の資本主義の道をあゆまないとすれば、プロレタリア独裁の社会主義の道をあゆんでよいだろうか。それもできない

疑いもなく、いまの革命は第一歩であって、将来は第二歩に発展し、社会主義に発展する。中国が真の幸福な時代になるには、やはり社会主義の時代にはいる以外にない。だが、今はまだ社会主義を実行するときではない。中国のいまの革命の任務は反帝・反封建であり、この任務が達成されないうちは、社会主義など問題にならない。中国革命は二歩にわけてあゆまなくてはならず、その第一歩は新民主主義であって、社会主義は第二歩である。……われわれは思想家ではなく、当面している実際の条件からはなれることはできない。」（「新民主主義論」）

「プロレタリア階級の指導する労働同盟を基礎とした人民民主主義独裁は、わが党の全労働者階級、全農民階級、広範な革命的知識層と真剣に団結することを要求している。……同時に、この独裁はまた、わが党が、できるだけ多くの、われわれと協力しうる都市ブルジョア階級と民族ブルジョア階級の中の代表的人物や知識人、政治グループと団結することを要求している。それは、革命の時期には、反革命勢力を孤立におとし、国内の反革命勢力と帝国主義勢力を徹底的に打倒するためであり、革命の勝利したのちには、急速に生産を回復し発展させ、国外の帝国主義に立ち向かい、中国を著実に農業国から工業国に変えていき、中国を偉大な社会主義国にきざきあげるためである。」（「中共第七期中央第二回総会での報告」）

このように、半植民地・半封建の中国においては、中国革命は人

民主主義独裁——プロレタリア階級の指導する、農民、都市小ブル、民族ブルの連合独裁——という、民主主義革命を完全に勝利させ、社会主義革命に転化させる具体的形態をみつけ出し、レーニンの道を守り、プロレタリア独裁と連続革命発展段階論をしっかりと結びつけたのである。

中国共産党は、実際の条件（如何なる性質の社会か、敵は誰か、革命勢力は誰か）を無視して、社会主義革命を「一挙に成功させる」とわめく礼つきのトロツキー流——小ブル急進主義ではなかった。他民族の抑圧をうけていない資本主義国においてであれば、社会主義革命は当面の目標となるのは当然である。しかし、中国は半植民地・半封建の国であった。（ロシアは、封建地主が支配する国であった）中国共産党は、トロツキーの「一国革命論」が帝国主義に投降するものであり、人民を敗北に導びくものであることを見抜いていたのである。そして、歴史的事実はみごとにこのことを証明した。中国のトロツキストは抗日戦争の中で、みな帝国主義の手先になり下がったのである。

「民族民主革命と社会主義革命というこの二つの段階を混同することは、このうえもなく有害である。毛沢東同志は、いわゆる「一挙に成功させる」というあやまった観点を批判して、こういった空想は、当時もつともさしせまっていた。帝国主義とその手先に反対する闘争を弱めるだけであると指摘した。抗日戦争の時期における国民党反動派とかれらのおかえのトロツキストはいうまでもなく、中国の二つの段階を故意に混同させ、「一国革命論」なるものをさ

かに宣伝し、共産党のない「社会主義」を実行しようとした。かれらはこうしたデタラメな論調で、共産党をほろぼし、すべての革命を根底から絶滅し、民族民主革命の前進を妨げようとたくらみ、そのうえ、それを帝国主義とたたかわず帝国主義に降伏する口実にした。こうした反動的な論調は、とっくの昔に中国革命の歴史によって葬り去られてしまった」（「人民戦争の勝利万才」）

結局、「中共は『民主主義革命』の看板を掲げながら、実際にはプロレタリア社会主義革命をやった」のでは断じてない。半植民地・半封建の中国において、中共はプロレタリアートの指導の下に、反帝反封建の民主主義革命（新民主主義革命）——民族解放革命、土地革命——をおし進め、人民民主主義独裁を樹立（一九四九）することによって、これを完成させると共に、これを社会主義革命に成長転化させたのである。現在は、プロレタリア独裁——プロレタリアートと半プロレタリアート（貧農・下層中農）の独裁——の社会主義国である。したがって、中国は本物とは違う「看板」を掲げたのではなく、レーニンの道歩み、豊富にし、発展させたのみなのである。毛沢東の人民民主主義独裁論は、ロシア十月革命の新しい世界革命（プロレタリア社会主義世界革命）の時代において、植民地、半植民地の国で、プロレタリアートの指導の下、新しい民主主義革命（プロレタリア世界革命の一部）をおし進め、人民民主主義独裁樹立をもって完成させ、直ちに社会主義革命に転化する、という偉大な理論である。これは明らかに、マルクス・レーニン主義の革命発展段階論と連続革命論を発展させたものである。

以上、みてきたように、看板に偽りがあるのはブント諸君の方である。ブント諸君こそ、「社会主義革命」の看板を掲げて、実は「民主主義革命」をやろうとしているにすぎない。なぜって、彼らが「反ブルジョアのなもの」と言っている土地の水平主義的分配も固有化も、民主主義革命に他ならないから。「反ブルジョアのもの」と言っている、「農民の共同性」とは富農のヘゲモニーの下にあるものでしかなく、これは「アメリカ型」農業資本主義を志向するところの、全くブルジョアのものに他ならないから。農民をだまして（戦術でつって）革命をやろうとしている。共産主義者にあるまじき集団はブント諸君である。これが彼らのいう「戦略」と「戦術」の本性なのである。

農民諸君、気をつけたまえ!! ブントは社会主義革命をやるといつて民主主義革命をやリ、しかしそこに永久にとどまろうとするから。富農にヘゲモニーを与えてしまおうから。

これこそ、ブントのいう「経済原理」永続革命論であり、「二段階革命論批判」なのであり、「一段階革命論」なのである。

では、同志諸君、マルクス・レーニン主義の眼目、プロレタリア独裁の学説と不可分に結びついている、真の水統革命論とは、連続革命論と革命発展段階論とは、どういふものであろうか。

G 連続革命論と革命発展段階論

(イ) 連続革命発展段階論と革命的弁証法

「具体的な歴史の環境のなかにおいては、過去と将来の成分は一緒にまじりあっているし、前後のふたすじの道は相互に交錯している。……しかしこのことは、我々が論理上および歴史上において、発展過程のいくつかの段階を区分することを少しも妨げない。我々は皆、資本階級の革命と社会主義革命は全く異なるものであるとみなしている。我々は皆、この二種類の革命を厳密に区別しなければならぬことを無条件に断固として主張する。しかしながら、前後ふたつの種類の革命のそれぞれ、構成要素は、歴史上では相互に交錯している事実を、まさか否認できるであろうか？ 欧州は将来の社会主義革命を最終的完成にもたらすに必要な、多くの民主主義的性質の事柄を未だもっていないと言えるだろうか？」（レーニン全集 第九巻 一七〇ページ）

「プロレタリア革命の一般的な任務は、偉大な共産主義的理想を実現することであり、この一般的な目的に到達するためには、一連の相互に連続する革命の発展段階をへなければなりません。プロレタリアートの党が革命を指導するにあたっては、それぞれの革命の段階のことなる性質を明確に区別し、前の段階の革命闘争をおこなうときには、はやまって、つぎの革命段階の任務を履行してはなりません。同時にまた、前後二つの革命段階をしっかりと結びつけるようにつとめ、革命の前段階では、その段階の闘争が勝利したのちに

革命を停滞させることなく、つぎの段階に発展させるために、客観的な可能性にもとづいて積極的に、つぎの革命の段階のための条件を準備しなければなりません」（思奇「史的唯物論」）

この連続革命論と革命発展段階論は、プロレタリア独裁の学説と不可分の関係にあり、革命的弁証法の世界観であり、プロレタリア世界革命の戦略と戦術の理論的基礎である。我々はこの連続革命発展段階論を、マルクス主義の眼目、プロレタリア独裁とその理論的基礎、革命的弁証法としっかりと結びつけて学ばなければならない。

マルクス・レーニン主義の革命的弁証法によれば、世界の一切の事物は不断の運動の変化、不断の革新過程であり、対立物の統一としての、矛盾としての発展過程である。矛盾は、あらゆる事物の発展過程に存在しており、どの事物の発展過程にも初めから終りまで矛盾の運動は存在している。矛盾は事物発展の原動力であり、矛盾の存在は普遍的であり、絶対的である。世界がこうなっているという事、弁証法的発展過程であるということは、勿論人間社会も例外ではない。人間社会においても、この矛盾の法則、弁証法の法則はつらぬかれており、不断の発展過程の中にあり、新しい過程が発生し、古い過程にとってかわる過程として存在しているのである。この新しい過程が古い過程にとってかわる社会の過程は、ほかでもなく、社会革命の交替である。すなわち、不断革命であり、連続革命であり永続革命なのである。

「不断革命、これこそ、マルクス・レーニン主義の魂である。マルクス・レーニン主義者の見るところでは、世界における一切の事

物はいずれも不断の運動、不断の変化、不断の革新、不断の発展である。マルクスは言った。『生産力の増大、社会関係の破壊、思想

の生産はいずれも不断の変動である。ただ運動の抽象、すなわち不死の死のみが停滞不動であるにすぎない』（『哲学の貧困』（エンゲルスは説く。『弁証法哲学は、一切の、そしていかなる事物

もすべて免がれることの出来ぬ滅亡の印跡を有する、とみなしている。それから見ると、不断の発生と消滅の過程を除けば、無限に低級から高級への上昇の過程を除けば、いかなるものも永続的ではない』（『フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終末』）毛沢東同志も指摘している。『新陳代謝は宇宙間の普遍的で永遠に抵抗しえない法則である。事物そのものの性質と条件によって異なる飛躍形式を経て、ひとつの事物が他の事物に転化すること、これこそ新陳代謝の過程である』（『矛盾論』）社会生活においては、このような新陳代謝はほかでもなく、社会革命の交替である。即ち、不断革命なのである』（『世界政治資料 一九六〇年、遅瀟湘「マルクス・レーニン主義の不断革命論と革命発展段階論」）

又、マルクス・レーニン主義の革命的弁証法の見解によれば、不断の運動、不断の変化の過程の中にある事物は、それぞれ異なる発展段階を有しているのである。すなわち、事物のさまざまな運動形態のなかの矛盾は、いずれも特殊性をもっているのである。

「物質の一つ一つの大きな体系をなす運動形態がもつ、特殊な矛盾性（注、例えば、機械運動、音、光、熱、電流、etc）それによって規定された本質を研究しなければならぬばかりでなく、物質

の一つ一つの運動形態の、長い発展の途上での一つ一つの過程の特殊な矛盾（注、生産力と生産関係に対する原始共産、奴隷、封建、資本、共産、etc）および、その本質をも研究しなければならない。あらゆる運動形態の憶測でない実在の一つ一つの発展過程は、すべて質を異にしている。われわれの研究活動は、この点に力を入れ、またこの点からはじめなければならない」（『矛盾論』）

「われわれは事物発展の全過程にある、矛盾の運動の特徴をその相互の結びつきにおいて、またそれぞれの側面の状況において、注意しなければならないばかりでなく、過程発展のそれぞれの段階にも特徴があるので、それにも注意しなければならない」（同）

「事物の発展過程にある根本矛盾およびこの根本的矛盾によって規定される過程の本質は、その過程が完了するときでなければ消滅しない。しかし事物の発展する長い過程のなかのそれぞれの発展段階は、その状況がしばしば相互に区別される」（同）

「事物の発展過程のなかの段階性に注意しないものがあるとしたら、そういう人々は事物の矛盾を適切に処理することはできない。たとえば、自由競争時代の資本主義は発展して帝国主義となったが、このときにもプロレタリアートとブルジョアジーという根本的に矛盾する二つの階級の性質および、この社会の資本主義の本質は変化していない。だが、二つの階級の矛盾が激化し、独占資本と非独占資本とのあいだの矛盾が発生し、植民地所有国と植民地との矛盾が激化し、資本主義諸国間の矛盾、すなわち発展の不均衡状態によってひきおこされた各国間の矛盾がとくに鋭くあらわれてきたので、

資本主義の特殊な段階、すなわち帝国主義の段階が形成されたのである。」(同)

各々の事物は、特殊な事情を有しており、質的規定性を有しており、質の相対的安定性を有している。

「事物の量的変化が一定の程度に達し始めて、事物の質的変化が起り、ある事物が他の事物に転化するものである。このように量変を経て質変に至るそれぞれの過程がまさしくひとつの段階を形成するのであって、(即ち量から質への転化、及びその逆の法則)そのことによって、前の段階と後の段階の区別がたてられるのである。同時に、事物が量変過程のなかにおいて、また部分的質変が包含されているのであって、多くの質変的小段階が形成されるのである」(前記、世界政治資料、一九六〇)

このように、事物が発展するということは、すなわち、量より質への転化、及びその逆の法則、対立物の統一の法則、否定の否定の法則が事物の発展過程に貫かれているということは、社会革命においては、必然的に、革命に段階性をおびせるといふことである。これがすなわち、革命発展段階論である。ブント諸君には、このことがてんでおわかりにならない。連続革命論と革命発展段階論は、対立物の統一であることにお気づきにならない。彼らは矛盾の普遍性が、特殊性のなかに存在していることにお気づきにならない。革命の段階性に注意を払うものだけが、連続革命論者になることができるのだということが、てんでおわかりにならない。一回革命論は、明らかに革命の連続性を否定してしまおうということがおわかり

条である。

中国の新民主主義革命の段階にも、いくつかの小さな段階があるではないか。第一次国内革命戦争(北伐戦争)へ帝国主義、地主、軍閥、労働、農、小ブル、ブル、第二次国内革命戦争(土地革命戦争)へ帝、地主、ブル、労働、農、小ブル。抗日戦争へ日帝かいらい、労働、農、小ブル、反日ブル、反日地主。第三次国内革命戦争(人民解放戦争)へ帝国主義、封建主義、官僚資本主義、労働、農、小ブル、民族ブル。ブント諸君、なぜこんな小段階ができたのか、わかりますか？

ブント諸君は、中国の新民主主義が人民民主主義独裁(本質的にプロレタリア独裁)権力を樹立し、社会主義革命へ転化させた、ということがてんでおわかりにならない。事実が鼻の先にぶら下がっているのがおわかりにならない。民主主義革命を徹底して人民民主主義独裁を樹立したのだから、民族ブルジョアまで参加する人民民主主義独裁が本質的にプロレタリア独裁だ。人民民主主義独裁の下で社会主義革命に転化したのだから、君達は目を白黒させる。そうだ、君達にはこのことは理解に苦しむことなのだろう。だが残念ながらこれが事実であり、現実の世界は君達のよろうに「純粋」(小ブル的に純粋)ではない、ということなのだ。君達が、社会主義革命とはプロレタリアートとブルジョア間の矛盾を解決するものであるというきわめて常識的な真理を理解されるならば、このことは直ちにわかるであろう。君達が、農民と地主階級との間の矛盾を解決するのはブルジョア人民民主主義革命であり、

にならない。ブント諸君、一回で革命を終結させたら、あとは、革命は不要なのですか？

「質の異なる矛盾は、質の異なる方法でしか解決できない。たとえば、プロレタリアートとブルジョア間の矛盾は社会主義革命の方法によって解決され、植民地と帝国主義との矛盾は民族革命戦争の方法によって解決され、社会主義社会における労働者階級と農民階級との矛盾は、農業の集団化と農業の機械化の方法によって解決され、共産党内の矛盾は批判と自己批判の方法によって解決され、社会と自然との矛盾は生産力を発展させる方法によって解決され、過程が変化し、ふるい過程とふるい矛盾がなくなり、新しい過程と新しい矛盾が生まれれば、矛盾を解決する方法も、またそれによってちがってくる」(「矛盾論」)

ブント諸君はこの道理さえ、おわかりにならない。彼らは、理想的な資本主義国(プロレタリアートとブルジョア間しかない)しか考えられない。そして、何を解決するにも「社会主義革命」だけなのである。それ故に、農民の土地革命をブルジョア革命と見られず、「社会主義革命」などというのである。彼らには、過程の中に段階が存在するという真理がおわかりにならない。各段階の特殊矛盾を分析しようとすることさえしない。特殊矛盾があるだつて//とんでもない、これは許せない。これがブント諸君の合言葉である。特殊な矛盾のうちに普遍的矛盾が存在するのだつて//これは断じて許せない。これがブント諸君のスローガンである。段階性などどうでもよいのだ。社会主義革命、これが全てだ。これがブントの教

プロレタリアートが農民を指導してブルジョア民主主義革命を徹底してやる、ということは何ら矛盾していないということが理解できたらこのことは直ちにわかるであろう。

「革命の性質を決定する力は、主要な敵と主要な革命勢力である。こんにち、われわれの主要な敵は帝国主義、封建主義、官僚資本主義であり、敵とたたかっているわれわれの主要な力は、全国の人口の九〇パーセントを占め、肉体労働と頭脳労働に従事するすべての人民である。このことが、われわれの現段階の革命の性質を、十月革命のような社会主義革命とは異なる、新民主主義の人民民主主義革命として決定づけているのである」(毛沢東、一九四七年「民族ブルジョア階級と開明紳士の問題について」)

ブント諸君はこの真理をまるっきりわかっていない。具体的に、敵と革命勢力を分析しなければ、社会主義革命が否かについて、何んにもいふ権利がないことを全くわかっていない。具体的な敵、革命勢力など全く問題にせず、とにかく社会主義革命をやるんだ、とわめくのみである。とんでもない、全く、とんでもない、具体的な分析がなければ、何もガタガタ言えないのだ。ロシアのツァーリズム打倒の革命は敵は封建地主、革命勢力は労働者、農民一般、だから、ブルジョア民主主義革命なのである。ロシア十月革命は敵はブルジョア、革命勢力は、労働者、半プロレタリアート(貧農中心)だから、プロレタリア社会主義革命なのである。中国革命は、敵は帝国主義、封建主義、官僚資本主義、革命勢力は、労働者、農民一般、都市小ブル、民族ブルだから、

ブルジョア民主主義革命で、これは、プロレタリア世界革命の一部であるから、新民主主義の人民民主主義革命。新民主主義革命の勝利後すなわち、人民民主主義独裁の樹立後は、**敵はブルジョア**。ⅠⅧ革命勢力は、労働者、半プロレタリアート（貧農・下層中農）ⅡⅧだから、社会主義革命。すなわち**敵が資本主義一般ⅢⅧ革命勢力が、プロレタリアート、半プロレタリアートⅣⅧの時、社会主義革命であり、敵が資本主義一般でなく（外国帝国主義、封建主義など）ⅤⅧ革命勢力が、プロレタリアート、農民一般、小ブルジョア、アジール一般、etc.Ⅵの時、人民民主主義革命なのである。**

この真理がおわかりになれば、日本革命の現段階においては、**敵は米帝国主義、日本独占資本ⅦⅧ革命勢力は労働者、農民一般、小ブル、中小零細ブルⅧⅧであり、樹立する革命権力は、プロレタリアートの指導する、労働者、小ブル、中ブルの連合独裁ⅡⅡ人民民主主義独裁**であり、この革命は人民民主主義革命であることがすぐおわかりになるであろう。そして、この人民民主主義独裁の下で、社会主義革命を最後までおこなう（人民独はプロ独に発展）という道理がおわかりになるであろう。

我々は過程全体をつらぬいている主要矛盾をしっかりと把握すると同時に、各段階での主要矛盾をしっかりと把握しなければならぬ。又、段階の主要矛盾を解決する時には過程での主要矛盾を決して忘れてはならない。具体的にいうなら、資本主義社会、社会主義社会の過程全体をつらぬいている主要矛盾が、プロレタリアートとブルジョアジーの間の矛盾であるということをお忘れはならない。

は区別をもつが互いを分離することはできない。弁証法は、我々に事物の変動は絶対的であり、安定は相対的であること、革命の側面は絶対的であり、保守の側面は相対的であることを告げる。従って、不断革命は絶対的であり、革命段階は相対的である。この思想を完全に把握して始めて闘争の前列に永遠に立つことができるのであるが、そうしてこそ一個のマルクス主義者となるのである」

我々、マルクス・レーニン主義者たらんとする者は、プロレタリア独裁の思想とその理論的基礎、革命的弁証法とを固くむすびつけて、この革命の連続性と段階性をしっかりと把握しなければならぬ。

(四) マルクス、レーニンの永続革命論と
革命発展段階論に対する見解

一八五〇年一月、マルクスとエンゲルスは、ドイツの小ブルジョア民主主義派の、民主主義革命における改良主義的要求を批判したさい、永続革命の思想の古典的定式をおこなった。

「民主主義的小ブルジョアが革命をできるだけすみやかに、せいぜい前記の諸要求の実現をもって終らせたいと望んでいるのに対して、われわれの利益とわれわれの任務は、多少とも財産を所有するすべての階級が支配的地位から追いのけられ、プロレタリアートが国家権力を掌握し、一國だけでなく、全世界のすべての主要国のプロレタリアの結合がいちじるしく進んで、その結果、これらの国々で、プロレタリアどうしの競争がやみ、すくなくとも決定的な生産

と同時に、帝国主義段階の主要矛盾が独占資本を中心とする帝国主義と、プロレタリアートを中心とする人民の間の矛盾であるということも忘れてはならないのである。

ブント諸君、農民一般は急進ブルジョアジーですよ。だが、日本の現段階の革命では、農民一般はプロレタリアートの同盟軍ですよ。ブルジョアジーが同盟軍だって？ まあ、驚かないでくれ給え。我々は彼と同盟する。そして、現段階の革命を執行する。その後で、我々は労働者と農民の間、労働者その他の革命勢力の間の矛盾を敵対的方法によってではなく、人民内部の矛盾として解決する。これが社会主義革命と社会主義建設なのである。ブント諸君、社会主義社会にもブルジョアジーとプロレタリアートの矛盾は存在するものですよ。忘れないでくれ給え！

ブントには、過程の中心段階を認めること、革命に段階が存在することを認めることは、彼らの「一挙に革命をやる」理論からしても出来ない相談なのである。ブント諸君、マルクスのこの言葉の意味がわかりますか。

「ひとつの社会は、すでに運動の自然法則を現わしているものである。それもやはり、自然の発展段階をとり越すこと、或いは法令でもって廃止することはできない」

では、革命の連続性と段階性の相互関係はどうなっているのだろうか。これについて前述の「世界政治資料」（暹羅洲）からももう少し引用してみよう。

「不断革命論と革命発展段階論は、対立物の統一である。それら

力がプロレタリアの手に集中されるまで、革命を永続させることである。われわれにとって必要なのは、私的所有を変更することではなく、まさにそれを廃絶することであり、階級対立をごまかすことではなくて、階級を廃止することであり、現存の社会を改善することではなく、新しい社会を建設することである」（一八五〇年三月の中央委員会の共産主義者同盟員への呼びかけ）

マルクスとエンゲルスはこの古典的定式のなかにおいて、ブントのように、永続革命の問題をプロレタリア独裁の問題と切りはなすようなことは決してやらなかった。彼らにあっては、永続革命はプロレタリア独裁権力を樹立し、これを徹底的にうち固め、私的所有を廃止し、階級を廃止することと不可分に結びつけられていた。

「プロレタリアートは、革命的社會主義の周囲、ブルジョア自身はブランキーの名を冠した共産主義の周囲にますます集まっている。この社会主義とは一つの永久革命、プロレタリアートの階級的独裁にはかならず、いっさいの階級的差別的廃止への、この階級的差別的基礎をなす生産関係の廃止への、この生産関係に照応するいっさいの社会関係の廃止への、この社会関係から生ずるいっさいの思想の転換への必然的な過渡段階にはかならない」（注、マルクスはすでにここで、プロ文革の必然性を見通しているのである。マルクスは生産関係と思想を切りはなしなどしていない）

「本協会の目的は、特権階級をたおすこと、人類がいっさいの組織形態となるべき共産主義の実現にいたるまで、永久革命をつづけることによつて、これらの特権階級をプロレタリアートの独裁に従属せ

しめることである」

又、マルクスとエンゲルスは、既にこの古典的定式化のなかにおいて、ブントのように、小ブルジョアの民主主義革命運動とプロレタリア革命運動とを混同するようなことは決してやっていない。彼らは又、ブントのように、客観条件を考慮することなしに、小ブルジョアの民主主義革命運動を支持しないような態度もとらなかった。彼らは小ブルジョアジーが民主主義革命で足を止めることを見ぬいていたのである。それ故に、プロレタリアートは小ブルジョアジーのように民主主義革命で足を止めることなく、断固として革命を永続させて、全世界でプロレタリア独裁権力が樹立され、打ち固められるまでやりぬかなければならないと規定したのである。まさに、マルクスがここで言っているように、共産主義者の終局目標は、ブントのように私的所有を変更すること——地主的土地所有を水平主義的分配すること——ではなくて、これを廃絶することであり、(社会主義的集団農業の組織)、農民と労働者、小ブルジョアジーと労働者の階級的差異、対立(トロツキー流の敵対ではない)をごまかすことではなくて、階級を廃止することなのである。

だがこのことは、農民の土地革命運動等のブルジョア革命運動をいつでも、どこでも、如何なる場合でも支持しないということではない。未だ、社会主義革命が当面の課題となりえず、民主主義革命の任務が残っている場合には、プロレタリアートは小ブルジョアジーなどの革命運動を支持し、同盟し、これを指導して徹底的におし進め、社会主義革命に転化させなければならないのである。

「共産主義者は、労働者階級の直接当面の目的と利益とをもたらすためにたたかうが、しかし、現在の運動のなかにあって、同時に運動の未来を代表する」(「共産党宣言」)

まさしく、こうでなければならぬのである。ブント諸君は、この、現在の運動と未来の運動との弁証法的関係がとんとおわかりにならないのである。マルクスとエンゲルスはこのように、現在の運動と未来の運動との弁証法的関係を明らかにして、プロレタリアートのときの声は、永続革命、連続革命でなければならないと指摘した。

レーニンは、このマルクス、エンゲルスの永続革命の理論を守り、一層発展させて民主主義革命を社会主義革命へ転化させる原理を明確に提起した。

「なぜなら、われわれは民主主義革命からただちに社会主義革命に移行しはじめる。しかしまさに、われわれの力に応じて、自覚した、組織されたプロレタリアートの力に応じて移行しはじめるだろうからである。われわれは永続革命を支持する。われわれは中途で立ちどまりはしないであろう」(「農民運動にたいする社会民主党の態度」)

「(民主主義革命を実行することは)社会主義を遅延させることではなく、唯一の可能な方法、唯一の正確で可能な道、すなわち民主共和制度を通じて、社会主義の第一歩へ向って歩くことを実行することなのである」(「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」)

レーニンは労働独裁権力が、民主主義革命を社会主義革命に転化させる具体的な形態であることを見いだした。すなわち、レーニンは、マルクス、エンゲルスと同様、永久革命論とプロレタリア独裁論とを密接に結びつけている。ここが、ブントにも、宮本一味にも全く理解できない。(序章のレーニンの引用をされたし。)

レーニンは、民主主義革命の段階と社会主義革命の段階の間に万里の長城を築くことに反対し、この区別、すなわち段階性と関連性——弁証法的関係を明らかにした。

「具体的な歴史の環境のなかにおいては、過去と将来の成分は一緒にまじりあっているし(注、ブントの諸君、おわかりかな)前後のふたすじの道は相互に交錯している……しかしこのことは、我々は論理上、および歴史上において、発展過程のいくつかの段階を区分することを少しも妨げない。(段階があるはずですよ)我々は皆、資産階級の革命と社会主義革命は、全く異なるものと見なしている。我々は皆、この二種の革命を厳格に区別しなければならぬことを、無条件に、断固として主張する。しかしながら、前後ふたつの種類の革命のそれぞれの構成要素は歴史上では、相互に交錯している事実をまさか否認できるであろうか。欧州は将来の社会主義革命を最終的に完成にいたらすに必要な、多くの民主主義的性質の事柄をまだもっていないと言えらるだろうか」(レーニン全集、第九卷 一七〇ページ)

レーニンは発展過程に段階性が存在することを認めることを恐れなかったし、ブント諸君の如く、民主主義革命を恐れなかった。ロ

シアにおいてのみではなく、ヨーロッパにおいても、民主主義的要求があることを認めていたのである。それのみではない。レーニンは帝国主義を、民主主義のための闘争と正しく結びつけることを要求した。帝国主義の段階においては、民主主義のための闘争はきわめて重大な意義をもっていることを指摘したのである。

「彼はやって来た。帝国主義を、改良のための闘争や民主主義のための闘争とどう結びつけるか、という問題が皆目わからないのだ。

——近きませる『経済主義』がやって来た。資本主義を民主主義のための闘争と結びつけることができなかつたのと同様に」(レーニン全集 第二巻「ベ・キエフスキーへの回答」)

レーニンは、あらゆる民族闘争、あらゆる祖国擁護、あらゆる民主主義闘争を否定する帝国主義的「経済主義」を批判して言う。

「彼のあらゆる珍妙な論理的誤り、すべての混乱——自決の問題についてはかりでなく、祖国擁護の問題、分離の問題、『権利』一般の問題について生じている 真の根源は、彼の考えが戦争によっておさえつけられてしまい、そして、このおさえつけられた結果、民主主義一般にたいするマルクス主義の態度が根本的にゆがめられている点にある。

帝国主義は高度に発展した資本主義である。帝国主義は進歩的である。帝国主義は民主主義の否定である。『したがって』民主主義は、資本主義のもとでは『実現不可能』である。帝国主義戦争は、おくれた君主国でも、すすんだ共和国でも一様に、あらゆる民主主義のはなはだしい破壊である。『したがって』『権利』のことを)

すなわち民主主義のことを(いろいろな言ってもなんの役にたたない。帝国主義戦争に『対置』することが出来るのは、『ただ』社会主義だけである。『活路』は社会主義のなかだけにある。『したがって』最小限綱領のなかで、すなわち資本主義のもとで民主主義のスローガンを掲げることは、欺瞞または幻想であるか、社会主義革命のスローガンをあいまいにしたり、遠ざけたりすることである。

—これがベ・キエフスキーのあらゆる不幸の原因である」(同) こうした、帝国主義的「経済主義」の論議が、ブントの論理——空文句主義、経済原理至上主義の論理——と全く同じものであると見抜くのは、たいして骨の折れることではありません。

レーニンは民主主義闘争を社会主義への闘争と正しく結びつけ、この階級闘争の範囲と内容を拡大し、徹底化して、社会主義革命に転化させる問題を提起したのである。それ故、「われわれは永続革命を支持する。われわれは中途で立ちどまりはしない」のである。それ故、民主主義革命において「一分間たりとも、自己の社会主義の目的を忘れてはならない」「一分間たりとも、自己の社会主義の目的を忘れてはならない」「一分間たりとも、新しい闘争を忘れてはならない」のである。

「民主革命の実現がますます完全になることができるにつれて、この新しい闘争はますます早く、ますます広く、ますます純粋に、ますます牢固に展開することができるようになる」(レーニン全集、第九巻、一一五ページ)

倒す。ここにブルジョア民主主義革命とは違った社会主義革命がある(……一九〇五年の私の小冊子『二つの戦術』を見よ)」「(「背教者カウツキー」)

「結果は、われわれの言ったとおりになった。革命の進行過程はわれわれの考え方が正しかったことを確認した。はじめは『すべての農民とともに君主制に反対し、地主に反対し、中世的制度に反対する。』(そして、このかぎりでは革命はなおブルジョア革命、ブルジョア民主主義革命である)つぎに、貧農とともに、半プロレタリアートとともに、すべての被搾取者とともに、農村の金持、富農、投機者をふくむ資本主義に反対する。そして、このかぎりでは、革命は社会主義革命となる。前者と後者のあいだに人為的な万里の長城を築き、プロレタリアートの準備の程度と、プロレタリアートと貧農との団結以外のものによって両者を区別しようとするのは、マルクス主義をなはだしく歪曲し、俗悪化し、自由主義とすりかえることである」(同)

「農民一般とともにブルジョア民主主義革命をなしとげたのち、ロシアのプロレタリアートは、社会主義革命へ最後のに移行した。そのとき彼らは、農村を分裂させ、農村のプロレタリアートと半プロレタリアを味方にひきいれ、富農とブルジョアジー——農村ブルジョアジーをふくめた——に對抗して、農村のプロレタリアと半プロレタリアを団結させることに成功したのである」(同) ブント諸君//これがレーニン主義ですよ!! 農民一般とプロレタリアートの同盟する革命はブルジョア革命ですよ。半プロレタリア

レーニンはブントのように、発展過程に段階性が存在することを認めることを恐れなかったので、「一挙に」「一躍して」革命を實行しようとはしなかった。レーニンは、革命の段階性ということに十分な注意をはらって言う。

「国粋主義者と無政府主義者が言うには、ロシアのような国は資本主義の発展を避けることができるし、資本主義の基礎の上を、及び範囲内を経過することなく、階級闘争の道を進むことができるし、しかし、その他の道を経過することによって、この資本主義をとり出したたり、とび越したりできるのである。これは反動的な大間違いの結論だ」(レーニン全集 第九巻 三三三ページ)

そして、ロシア十月革命の勝利の後、一九一八年一月、レーニンは以下にはっきりと断言しているのである。

「プロレタリアートは、ブルジョアジーの改良主義に『しばらくはないで、ブルジョア民主主義革命を最後まで遂行しなければならぬ。ブルジョア革命のさいの諸勢力の階級的相互関係を、ボリシエヴィキはこう定式化した。すなわち、プロレタリアートは、農民を味方につけて、自由主義的ブルジョアジーを中立化し、君主制、中世的制度、地主的土地所有を徹底的に破壊すると。

農民一般とプロレタリアートの同盟にこそ、革命のブルジョアの性格が現われている。なぜなら、農民一般は商品生産を基礎とする生産者だからである。さらに当時、ボリシエヴィキは補足して言った。——プロレタリアートは半プロレタリアート全体(すべての被搾取労働者)を味方につけて、中農を中立化し、ブルジョアジーを

アート(貧農など)とプロレタリアートの同盟する革命が社会主義革命なのですよ。なぜって、「農民一般は、商品生産を基礎とする小生産者」だから。社会主義革命の際には、中農は中立にかなりえないのですよ。ブント諸君、君らは農民を、貧農、中農、富農とわけることも忘れている。「農民の共同性」のヘゲモニーは富農が握っている事実を無視している。農民一般が社会主義革命の原動力になるとデタラメを言う。君らは絶対に革命を勝利させることはできないが、やったと仮定してみよう。すると、名目上は「社会主義革命」実際には農村では富農にヘゲモニーを握らせ、「アメリカ型」農業資本主義が始まるわけだ。そして、立派なブルジョア独裁国家が樹立される。民主主義革命の徹底化さえできない。——これは火を見るよりも明らかである。

レーニンは、このように革命の段階性をしっかりおさえ、民主主義革命を社会主義革命に発展転化させる問題においても、一層、マルクス主義の連続革命発展段階論を豊富にし、発展させたのである。ブントは、レーニンによるマルクス主義の発展を全く見ることができない。

レーニンはまた、世界革命においても連続革命発展段階論を展開させた。レーニンは、一国において樹立されたプロレタリア独裁権力は、同時に世界革命が起こるのだから守れなければならないと悲観主義的、敗北的思想を粉砕するとともに、このプロレタリア独裁権力を世界革命から切り離し、孤立したものとみなす思想をも粉砕した。数国ないし、一国で樹立されたプロレタリア独裁権力は、強固

にうち固められ、帝国主義の侵略を粉碎することができるし、ひきつづいて世界革命を行う根拠地となることができる。この真理は、ロシア十月革命の勝利で完全に証明された。

「一国内で実現しようとする一切のことを最大限に実現し、以って世界革命を進展させ、援助し、惹起することに資することにある」(レーニン全集 第二一卷 三八一ページ)

「ロシアの無産階級の任務は、ロシアの資産階級の民主革命を徹底的に進行させ、もって欧州の社会主義革命を惹起することである」(同)

(ハ) 毛沢東による連続革命発展段階論の一層の発展

毛沢東は、プロレタリア独裁と連続革命発展段階論とをしっかりと結びつけ、中国革命の具体的実践の中で、人民民主主義独裁論を完成させ、さらに中国におけるプロレタリア独裁の歴史的経験と十月革命以降の国際共産主義運動の歴史的経験を総括し、プロレタリア独裁の下で革命を統行する理論を進展させ、まったく新たな段階にまで高めた。毛沢東思想は、現代のマルクス・レーニン主義である。

毛沢東は、ロシア十月革命の後、新しい世界革命の時代に入ったことを明らかにし、プロレタリア世界革命の中で、植民地、反植民地の革命のもつ意義を明らかにした。

「……ふたとおりの世界革命がある。一つはブルジョア階級と資本主義の範ちゅうにぞくする世界革命である。この世界革命の時期はとくに過ぎぎあっており、はやくも一九一四年、第一次帝国主義

世界大戦がおこったとき、とりわけ一九一七年のロシア十月革命のときに終わりを告げた。それ以後、もう一つの世界革命、すなわちプロレタリア階級の社会主義世界革命がはじまった。この革命は、資本主義国のプロレタリア階級を主力軍とし、植民地、半植民地の被抑圧民族を同盟軍としている。被抑圧民族の中で革命に参加する階級、政党、個人がどんな階級、政党、個人であろうと、またかれらがその点を意識しているかどうか、主観的にその点を理解しているかどうかにかかわらず、かれらが帝国主義に反対するかが、その革命はプロレタリア社会主義世界革命の一部分となり、かれらはプロレタリア社会主義世界革命の同盟軍となる」(「新民主主義論」)

そして、中国革命において、プロレタリアートの指導の下、民主主義革命を社会主義革命に転化する道を明らかにした。

「この中国革命の第一段階(それはまた多くの小段階にわかれる)は、その社会的性質からいうと、新しい型のブルジョア民主主義革命であって、まだプロレタリア社会主義革命ではないが、それは、とくにプロレタリア社会主義世界革命の一部分となっており、いまだではなおさらこの世界革命の偉大な一部分となり、この世界革命の偉大な同盟軍となっている。この革命の第一歩、第一段階は、けっして中国のブルジョア階級の独裁する資本主義社会を樹立するものではなく、また樹立できるものではない。それは、中国のプロレタリア階級を指導階級とする中国の革命的諸階級の連合独裁の新民主主義社会を樹立するものであり、これによってこの第一段階を終

えるのである。それから、さらにこれを第二の段階に発展させて、中国の社会主義社会を樹立するものである」(同)

半植民地、半封建の国、すなわち敵は帝国主義、封建主義、官僚資本主義、革命勢力は労働、農民一般、小ブル、民族ブルの国においては、人民民主主義独裁こそ、社会主義に向けての唯一の道なのである。そして、勝利への保証はプロレタリアートの指導である。毛沢東はブントのように、民主主義革命を社会主義革命だといいくるめはしなかった。両者をはっきり区別——帝国主義、封建主義、その手先の掃蕩——新民主主義革命、ブルジョアジー一般の打倒——社会主義革命——すると共に、しっかりと両者を関連づけた。

「中国のブルジョア民主主義革命(新民主主義革命)を達成するとともに、すべての必要条件がそなわったとき、それを社会主義革命の段階に転化させること、これが中国共産党の光栄ある偉大な革命的任務の全部である。……一部の未熟な共産党員は、われわれには現在の段階の民主主義革命の任務があるだけで、将来の段階の社会主義革命の任務はないと考えたり、現在の革命や土地革命は社会主義革命であると考えたりしている(ブント諸君、君達みたいなのは中国にもいたのだよ)これらの観点はあやまりであることを、とくに指摘しなければならない。……中国共産党の指導する中国の革命運動全体が民主主義革命と社会主義革命という二つの段階をふくむ革命運動の全部であること、これは性質の異なる二つの革命の過程であり、まえの革命の過程を完結させないかぎり、あとの革命の過程を完結できないことを、知らなければならない。民主主義革

命は社会主義革命の必要な準備であり、社会主義革命は民主主義革命の必然の趨勢である。そして、すべての共産主義者の最終目的は社会主義社会と共産主義社会の最終的な達成をたたくことである。民主主義革命と社会主義革命の区別および両者の連係をはっきり認識しないかぎり、中国革命を正しく指導することはできない」(中国革命と中国共産党)

「現在では、疑いもなく共産主義思想の宣伝を拡大し、マルクス・レーニン主義の学習を強化すべきであり、こうした宣伝と学習がなければ、中国革命を将来の社会主義の段階に導くことができないばかりか、現在の民主主義革命を勝利にみちびくこともできない。だが、われわれは、共産主義の思想体系と社会制度についての宣伝を、新民主主義の行動綱領についての実践から区別すべきであり、また、問題を観察し、学問を研究し、仕事を処理し、幹部を訓練するものとして共産主義の理論と方法を、国民文化全体としての新民主主義の方針から区別すべきである。この両者を混同することは、疑いもなく適切でない」(「新民主主義論」)

毛沢東は連続革命発展段階論とプロレタリア独裁の学説をしつかり結びつけた。プロレタリア独裁の学説を豊富化させた。

「一部の人は、共産党が権力を得たのち、ロシアにならってプロレタリア独裁と一党制度をうちたてるのではないかと疑っている。われわれは、いくつもの民主的階級の同盟による新民主主義国家はプロレタリア独裁の社会主義国家とは原則的にちがったものであると答える。われわれのこの新民主主義制度は、プロレタリア階級の

指導のもとに、共産党の指導のもとに樹立されるものであるが、新民主主義制度の全期間をつうじて、中国は一階級の独裁および一党による政府機構独占の制度ではありえないし、したがってそうあるべきでないことは、少しも疑問の余地がない。共産党以外のどんな政党、どんな社会集団あるいは個人でも、共産党にたいして敵対的ではなく、協力的な態度をとるかぎり、われわれにはそれと協力しない理由はない。」（「連合政府について」）

すなわち、狭義のプロレタリア独裁と人民民主主義独裁との違いは、プロレタリアートと半プロレタリアートの独裁なのか、労働同盟を中心とする革命的諸階級の連合独裁なのか、である。しかし、本質的にプロレタリア独裁なのは、プロレタリアート（共産党を通じて）の指導の下にあるからである。革命的諸階級の統一戦線（これが発展して人民独裁になる）に対する共産党の指導、革命軍に対する共産党の絶対的指導権、そして、経済面における社会主義的要素（官僚ブルジョアジーの資本の没収）——これらの新民主主義制度における社会主義的要素が、指導的な地位を占めることから、社会主義への転化は必然なのである。ブルジョアジーの反抗も恐れることはなかった。世界革命がプロレタリア世界革命の時代に入ったこと、プロレタリアートのヘゲモニーが確立されたことにより、ロシア革命のように二月と十月の二回の蜂起をへることなく、中国革命は人民民主主義独裁のもとで社会主義革命に転化したのである。毛沢東のこの人民民主主義独裁の学説は、十月革命後の、植民地半植民地の国々の革命の勝利の道をしっかき示した。それだけ

でなく、現在の日本のように、当面、直接に社会主義革命をめざすことができず、まず民主主義革命を達成しなければならぬ資本主義国の革命にとっても、疑いもなく勝利の唯一の道である。

「われわれの経験をしくくって、一つの点にまとめると労働者階級（共産党をつうじて）の指導する労働同盟を基礎とした人民民主主義独裁ということになる」（「人民民主主義独裁について」）

毛沢東はこうして、中国革命において、プロレタリア独裁の学説と連統革命発展段階論とを固く結合させ、これを堅持し、豊富化し、発展させた。更に毛沢東は、プロレタリア独裁の下で、新民主主義社会を社会主義社会へ発展させる（一九五六年に基本的に達成）理論を完成した。そして、毛沢東は、中国におけるプロレタリア独裁の歴史的経験と十月革命以降の国際共産主義運動とプロレタリア独裁の歴史的経験を系統的に総括し、とりわけソ連におけるフルンチョフによる資本主義の全面的復活の教訓を総括して、プロレタリア独裁の下での資本主義の復活の危険性を見抜いた。

「社会主義社会は、かなり長い歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階においては、なお、階級、階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義の復活の危険性が存在している。」

そして、プロレタリア独裁の下で、資本主義の復活を防止し、プロレタリア独裁を純化してうち固め、共産主義社会まで革命を統行するうえで、決定的な手段は、プロレタリア文化大革命であること
を明確にしたのである。これは、マルクス・レーニン主義の立場を

堅持したばかりでなく、史上初めてプロレタリア文化大革命を提起し、勝利するという、まったく新たな段階にまで、プロレタリア独裁の学説と連統革命発展段階論を発展させたということである。

なお、共産主義社会にまで革命を統行することについての毛沢東の理論については、第一章の(c)「中国のプロレタリア文化大革命」で述べたので、ここでは省略する。

人民、ただ人民のみが、世界の歴史を創造する原動力である

毛沢東

渡辺正則

革命的行動綱領をかちとるために

——日本革命の基本問題について——

はじめに

「ひとりの政党が成功するか失敗するかは、路線が正しいかどうかにかかっている。路線が正しくなければ、たとえ国家権力を奪取しても、ふたたびそれを失ってしまう危険がある。路線が正しければ、国家権力がなくてもそれをかちとることができる。しかし、正しい路線は天からふってくるものでもなければ、自然に平穩裡に生まれ、発展するものでもなく、あやまった路線との比較において存在し、闘争の中で発展するものである。」（「北京周报」）

六〇年安保以来の日本「新左翼」の苦闘の歴史は、つきつめていえば、正しい革命路線をかちとるための苦闘の歴史である。

「だがわれわれの敵か。だがわれわれの友か。この問題は革命のいちばん重要な問題である。」（「中国社会各階級の分析」）

しかしながら、日本の革命的左翼はこの「いちばん重要な問題」さえも解決していない。それ故、革命闘争は未だ勝利の軌道にのっておらず、分裂と内ゲバは絶えず、党建設は未だかちとれていないのである。それではなぜ、正しい政治路線をかちとれないのであるのか。

「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本革命の具体的実践とを結びつけること、これを真剣にしとげさえすれば、日本革命の勝利はまったく疑いない」

一九六二年に毛沢東が指摘していることが、未だなしとげられていないからである。日本の革命的左翼は、革命闘争の自然発生性の前に拝跪してしまっており、ブルジョア経済学、反革命トロツキー主義にまどわされて、革命闘争の中に正しい革命理論を持ち込みえないでいる。

我々は、宮本修正主義集団との闘い、「日帝自立」主義者との闘いの中で、川島豪同志の「真の革命路線をかちとるために——ブント系諸君を批判する」（一九六七年）に代表される、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の革命理論をかちとってきた。そして、これを日本革命の実践の中に持ち込んで、輝やかしい反米愛国路線をかちとり、第二山口左派の右翼日和見主義との闘いの中で、反米愛国路線を一層深めると共に、これを原動力として、人民遊撃戦争路線と反米愛国統一戦線戦術をかちとってきた。このような正しい路線をかちとっていたからこそ、我々は日本の革命闘争、武装闘争に一定の貢献をなしてきたのである。あの柴野同志を生み出したきたのである。

しかしながら、我々の革命路線が最も要求され、我々の革命路線によって統帥された飛躍が要求されていたまさにその時、こともあろうに一部旧指導部は、これを放棄することによって飛躍をはかるうとしてしまった。それがあの重大な誤りと敗北の結果を招いたの

である。一部諸君は、「反米愛国路線の破産だ」といい、又一部諸君は「建軍武闘の破産だ」という。我々は聞きたい。「君らは一体何を見ているのだ？」と。具体的事実もともに分析せず何の的はずれなことをいっているのか。そんなやり方はファースト共や修正主義者だけで沢山なはずである。事実は、「新党」派が反米愛国路線を放棄し、誤った路線をおし進めたために敗北したことをはっきり示しているのである。「新党」派の敗北は、まぎれもなく、反米愛国路線の正しさを示す反面教師なのである。

日本階級闘争はすでに建軍武闘争を生み出すとともに、階級闘争を勝利に導く政治路線の問題を解決することを要求している。

「新党」派の誤りで明らかかなように、武装闘争の段階において少しでも政治路線をあいまいにすれば、たちまちのうちに壊滅的敗北を招くのである。我々は政治によって建軍武闘を統帥しなければならず、これを全局の中に正しく位置づけねばならず、建軍武闘を中心とする広範な統一戦線をかちとっていかねばならない。我々の反米愛国路線を大胆に革命闘争の中に持ち込まなければならぬ。反米愛国路線こそ勝利の保証である。

人民遊撃戦争の再開にむけて、広範な反米反軍国主義統一戦線の結成にむけて、党組織の再建と全国党建設にむけて、反米愛国路線を堅持し、全てを統帥し、革命的行動綱領をかちとろう。

「思想面、政治面での路線が正しいかどうかすべてを決定する」(毛沢東) 「路線はカナメであって、カナメをつかむことがすべてを決定する」(同)

「日帝自立」を唱える諸氏は、日本は高度に発展した先進資本主義国→社会主義革命→敵はブルジョアジー、味方はプロレタリアート」という「分析」しかしておらず、ここには弁証法的唯物論と史的唯物論の観点は一カケラもない。分析になっておらず、考え方が逆転しており、ブルジョア経済学者やトロツキーのふりまいた毒薬に影響された偏見に満ちたものである。我々はこのような「分析」とは、はっきり一線を画す。

日本が独占資本主義に経済的基盤をもった帝国主義国であることこれは革命的左翼であれば皆言っていることである。勿論、これには我々もまったく異論を持たない。我々がこのことを承認していないかのように「批判」する人もいるが、勝手な言いがかりはマルクス主義とは無縁のものである。我々は「軍国主義国」だとはっきり言っている。

したがって、ここでは日本社会の分析の問題を、米帝の問題にしろることにする。すなわち、米帝が支配する軍国主義なのか、それとも米帝は「日帝」の同盟者であるというだけなのか、「日帝」が第一の支配者で米帝は第二なのか、あるいは「日帝」だけが支配者で米帝はそうではないのか、という点に問題をしぼることにする。

軍事面の対米従属について

「革命の中心任務と最高形態は、武力で政権を奪取することであり、戦争で問題を解決することである」(「戦争と戦略の問題」一九三八年)

第一章

日本は米帝国主義に支配された軍国主義国である

「中国革命の対象、中国革命の任務、中国革命の原動力、中国革命の性質、中国革命の前途と転化をはっきりさせるには中国社会の性質をはっきり理解する以外にない。したがって、中国社会の性質をはっきり理解すること、つまり、中国の国情をはっきり理解することは、革命のすべての問題をはっきり理解する基本的なよりどころである」(毛沢東、「中国革命と中国共産党」、一九三九年)

日本革命においても全く同じである。日本革命の政治路線(軍事も含む)をはっきりさせる「基本的なよりどころ」は、他でもなく日本社会の性質を分析することである。日本の共産主義者は「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の普遍的真理と日本革命の具体的実践とを結びつける」ことに全力を挙げなければならないのであり、日本社会の特殊性を分析せずこれ言うものはマルクス主義者ではない。ただし、分析するにもいろいろある。例えば、宮本一味の「分析」はひとえに選挙の得票数をふやす観点からのものであり、人民に統を握らせない観点からの「分析」である。一方、いわゆる

「鉄砲から国家権力が生まれる」(同)

「マルクス主義の国家学説にかんする観点からみれば、軍隊は国家権力の主要な構成要素である」(同)

すなわち、マルクス・レーニン主義の眼目はプロレタリア独裁の学説であり、「プロレタリア階級独裁の第一条件はプロレタリア階級の軍隊である」(マルクス)。このことは、とりもなおさず、反革命の「鉄砲」、反革命の軍隊を握っているものこそ、反革命の国家権力を握っているものであることを示すものである。誰が日本人民に「鉄砲」を向けているかの分析なくして、日本の国家権力を分析することはできない。そして、「武力で政権を奪取することなどできるはずがない」。

「日帝自立」諸君は、この分析がまったくなくない。したがって、「日帝打倒」では武装闘争を闘えぬし、ましてや正しい軍事路線などかちとれない。実際、赤軍派の同志の中で、ゲリラ戦をいいたたものが一早く反米のスローガンの必要性に気付き、赤軍派全体が反米を言っていることを見れば明らかであろう。反米のスローガンを承認せぬものは「武力で政権を奪取する」観点がなく、プロレタリア独裁の観点がなく、武装闘争の観点がなく、又はきわめて自然発生的なのである。

さて、誰でもわかるように、日本人民に対する反革命の武装力は、米軍、「自衛隊」、警察であるが、これについて分析してみよう。

(1) 沖縄を含む日本全土に米軍基地がおかれ、米軍が駐留してい

る事実。米軍は「直接及び間接の侵略」に備えているのであり、アジア侵略の基地として駐留しているだけでなく、何よりも日本人の革命闘争に備えているのである。ベトナム人民に対する米軍も、日本人人民に対する米軍も同じ侵略軍にほかならない。六〇年安保闘争の高揚の時には、沖縄の米軍は出動準備をしていたといわれる。

(2) 米軍はただ駐留しているだけではなく、日本国内における軍事力を移動させる権限をもち、情報を統括し、戦争を發動させる権限を一手に握っている事実。「キューバ危機」「プエブロ号事件」の際は、総理大臣や防衛庁長官がまったく何も知らないうちに、日本国内の軍隊、すなわち米軍と「自衛隊」は米太平洋統合軍（ハワイ）の指令によって第一級警戒体制に入った。赤軍派のハイ・ジャックの際は、米空軍の指令で「自衛隊」機がスクランブルし、機長に指示を与えていた。すなわち、日本がアメリカの侵略戦争に巻き込まれたり、内戦状態に入る場合、それを左右できる権限は、全く米軍（太平洋統合軍）が掌握しているということである。「事前協議」などベテソのもの。

(3) 以上の事実からわかるように、「自衛隊」は「文民統制」されているのではなく、太平洋統合軍の指揮下におかれているという事実。「自衛隊」は独自の戦略を持っておらず、米の極東戦略の中に組み込まれている。「自衛隊」が戦争をするかどうかは米軍の決めることであり、日本反動派はこの範囲内で治安出動させる。

〔注〕 一部諸君は、在日米軍と「自衛隊」をワン・セットにして「安保軍」といっている。実際、NATO軍というのは存

場合のことも十分考慮していることを示している。

以上の五つの事実は何を示すものだろうか。我々は事実には忠実であるから、日本の反革命の軍事力は米帝の圧倒的な支配下にあるという結論をうる。すなわち、日本軍国主義は軍事的に米帝国主義に従属しているということである。これが「安保」（今では、アジア核「安保」）体制である。日本人人民はアメリカの戦車に縛りつけられている。

「日帝自立」をいう諸君は、あたかも「日帝」の主権権で、「安保」体制が成立しているかのようにいう。「日帝」が米軍を利用しているのだ。「日帝」が認められているから米軍が駐留しているのだ、米軍は「日帝」権力の一要素だ、などと。これはまったく米帝を美化し、實質的に米帝を帝國主義ではない、というに等しい。米軍は「日帝」に利用されるほどお人好しで、しかもそんな余裕があるというのか？ そんなに「日帝」は米帝に対して力を持っているのか？ 米軍が「組み込まれている」という「日帝」権力というのは一体何か、具体的に言ってもらおうじゃないか！ 冗談ではない。「日帝」が認めようと認めまいと米軍は駐留するのである。米軍は「日帝」の意向に関係なく、日本支配とアジア侵略のため駐留しているのである。彼らのいう「日帝権力」の中核をなすのは多分「自衛隊」だと思いが、これは米軍の指揮下におかれているのだ。事実をネジ曲げるにもほどがあるというものだ。

ある人は、米軍の削減、「自衛隊」の強大化をもって、「日帝」は米帝を「圧倒」しつつあり、軍事的に「自立」してきているとい

在している。しかし、これはNATO統合司令部があって、その下にNATO統合軍としてあるのである。日本の場合、「安保統合司令部」などといったものは存在せず、米太平洋統合軍の下に「自衛隊」がおかれているのである。在日米軍を切り離して「安保軍」などというのは間違っている。「自衛隊」は本質的に、米太平洋統合軍の一部なのである。

(4) そもそも「自衛隊」は、朝鮮侵略戦争に際して、米軍基地を日本人民の反米闘争から「防衛」するため、マッカーサー命令によって作られたものであり、MSA協定による一六億ドルの無償軍事援助をうけ、教官は米で訓練をうけ、米軍の諸施設をうけ継いで強大化してきたものである。「自衛隊」の装備補充は常に、米の政策が決った後、それを補充するものとして計画されている。近くは、サンクレメンテ会談と四次防を見よ。「自衛隊」の現在の主要任務は、米軍基地及び日本における米の権益を日本人、アジア人民から「防衛」することである。沖縄進駐は米の核基地を「防衛」するためであり、さらに極東全域において米の権益を守るための海外派兵が準備されている。勿論、日本軍国主義の独自の侵略の意図もあるが、これは米の勢力権「防衛」を肩代りさせるのと交換で与えられる米からのエサに他ならない。

(5) 日本はアメリカの「核のカサ」に入れられている事実。また、日本に備えられている兵器のうち、核を始めとする最重要兵器は全て米軍が掌握している事実。これは軍事の中核を米が握っていることを示すと共に、「自衛隊」が革命闘争の影響をうけて反米化した

う。これはまもなく米日反動派のベテソにせられてしまった人である。一体、米帝は米軍の増強を主張し、「日帝」は「自衛隊」の増強を主張して対立しているであろうか？ 事実をみれば、まず米帝が米軍削減、「自衛隊」増強の方針をうち出し、それに「日帝」が従っているのである。場合によっては、「日帝」がイヤがっているのに肩代り押しつけられているし、立川への強行移駐、沖縄進駐などは明らかに米軍の強い圧力の下で行なわれたことである。しかも、「自衛隊」が米の指揮下にあることを考えれば、「圧倒している」はまったくのデタラメである。

ニクソン・ドクトリンとは結局、一定のエサを与えることによって日本軍国主義の侵略性をひきだし、米帝の勢力圏を「防衛」するため、米の核部隊、爆撃、武器+日本の経済力、地上兵力+かいらい軍を組み合せ、経済的負担を軽くし、「死体の色を変える」という米の反革命戦略である。米軍の日本、アジアでの任務を「自衛隊」が肩代りした（つまり、させられた）としても、日本人人民、アジア人民にとってやはり米帝は第一の敵であり、日本軍国主義はその手先であり、対米従属は一層増大させられるだけなのである。

さて、我々はずっと以前から、この軍事面における明らかに対米従属をもって、米帝が日本民族を支配していると主張してきた。すでに述べた通り、軍事の問題を中心にいて国家権力を分析するのはまったくマルクス主義にならなっているのである。経済面での問題も軍事面と基本的に対応している。ところで、経済面の一面的な分析をもって、これのみをもって革命の敵をあれこれいう人がいるが、

これがどういふことになるかの例を挙げておこう。

例えば、日本の六大財閥が「金融的に米帝に從属しているかどうか」で敵をうんぬんする人がいる。日本の場合は、この面からも對米從属は明らかである。しかし、以下のような場合もある。ロシア十月革命の対象であったロシア・ブルジョアジーは、レーニンが「この政府——現在の戦争の見地から見れば、本質上、数十億圓を支配する『イギリス・フランス』商会の番頭にすぎない」（「遠方からの手紙」）と指摘しているように、「金融的に」は全く英仏帝國主義に從属していた。しかし、十月革命は明らかに社会主義革命（勿論、の中には反英仏帝國の内容も含まれていたが）に他ならなかった。戦前の日本では外国資本が全資本の五〇％以上を占めていたといわれる。しかし、当時の日本革命の主要な任務は決して民族革命ではなかった。これらに対しては第二章でふれる。要は、「鉄砲」で政權を奪取する以上、「鉄砲」で敵を分析しなければならぬというのである。

政治面の對米從属について

政治面の分析は軍事面と切り離せない。日本の主權は大きくアメリカにじゅうりんされている。これについては、中日友好協会の徐明先生が、「アメリカが日本で享受している治外法權は、かつての中国での治外法權より大きい」と明確に指摘している通りである。

(1) 米帝國主義によって沖繩と本土が分断支配されている事実。これは沖繩ニセ返還によっても基本的に変わっておらず、沖繩は相變

らず米の極東最大の核基地、自由出撃基地、謀略基地である。これはきわめて大きな主權の侵犯である。日本帝國主義は米帝の指示に従い、米の極東戦略を肩代りするため、そして米からエサを分け与えてもらって自らの侵略の目的を達成するため、沖繩人民を売り渡し、アメリカの戦車に縛りつけている。

(2) 「安保」条約により、日本全土に米軍基地がおかれ、「地位協定」「刑法」などによって、この米軍基地が完全な治外法權を持つている事実。これも、誰も否定することのできない重大な主權の侵犯である。日本人民の土地を奪っている基地が、様々な面で日本人民の生活權を侵害しているのも明らかである。

(3) 「地位協定」によって、日本において米軍は各種の特殊權益を享受している事実。例えば、着陸料、入港料、道路使用料、税関検査、関税、税金などは一切課されない等々。又、「民事等別法」によれば、米軍が日本人に損害を与えた場合、日本政府が全て賠償するのであり、米軍の為の経費は年額三〇〇億圓にのぼっている。

(4) 「地位協定」「特別措置法」「相互防衛協定」etc. によって、米軍は日本の領土、領空、領海、道路、土地、鉄道、通信、港、空港、建物などを占拠しており、また占拠していない部分も、米軍が望めば使用でき、日本政府はことわれないようになっていく事実。これはとりもなおさず、これらのものに対して米軍は日本の主權をじゅうりんしていることを示している。また、「自衛隊」の基地・施設は米軍が自由使用できるようになっていることも明らか。以上、米帝國主義による主權の侵犯はきわめて重大であることは

明らかである。しかるに一部の人は、「誰が握っているにせよ、とにかく日本人民が主權を握っていないのだから、主權うんぬんというのは誤り」という。とんでもない。誰が主權を握っているのか分析せずしてどうして人民の手に主權を奪取できよう／＼主權の問題は革命とは決して切り離せないのだ。

なお、外交面、文化面での對米從属はきわめてはつきりしているが、ここでは省略する。

経済面での對米從属について

さて、この経済面の分析は、いうまでもなく軍事・政治面の分析に対応しているものであるが、「日帝自立」を唱える諸君の論拠は「経済分析」からもたらされているわけであり、それとはつきり一線を画すためにも、少し詳しく分析していくことにする。なお、前に述べた通り、日本が独占資本主義國であることは前提である。

(1) 日本経済の生命源である原料・エネルギーの供給源と輸出市場を、大巾にアメリカとその勢力圏に依存させられている事実。日本は独占資本主義國なのに独自の勢力圏を持っておらず、米の勢力圏に依存せざるをえないでいる。南朝鮮、台湾は米日共同の勢力圏とされ、主要には米の勢力圏である。一九七〇年においては、日本の輸出総額の三〇、七％が米本土へであり、その他、東アジア、中南米etc.の米の勢力圏を合せれば実に輸出総額の六五％にのぼっている。輸入において、米独占体からの輸入の占める割合は五〇％を越えている。しかもこの内容において、對米依存度の大きい輸

出品は、陶磁器（全輸出額の六六、六％が對米）、板ガラス（五四、一％）、がん具（五五、二％）、鉄鋼（三三、五％）、金属製品（四六、四％）、非鉄金属（三一、三％）、マシン（四四、六％）、テレビ（七四、七％）、ラジオ（五八、二％）、自動車（三四、四％）、精密機械（三二、六％）などであり、消費財、耐久消費財がほとんどを占めている。すなわち、これらの輸入が止ったからといって米経済は深刻な打撃をうけることはないが、日本経済にとってこうした中心産業の輸出が止れば大打撃となる。繊維、ドル・ショックを見よ。一方、對米依存度の大きい輸入品は、小麦（四四、四％）、飼料とうもろこし（七〇、一％）、鉄くず（七五、九％）、原料炭（五五、七％）、化学製品（四二、五％）、電気機械（七〇、五％）、輸送機械（六九、五％）、航空機（九六、九％）などであり、また、石油（八〇％）を始めとしてウラン、アルミニウム、ニッケル、銅、亜鉛、木材の大部分は米國際独占体からの輸入である。すなわち、原料、エネルギー源、食糧、発達した機械類がほとんどを占めている。これらの輸入が止まれば日本経済はどうなるか。例えば、石油の備蓄量は四五日分であり、たちまちギブアップである。したがって、内容的にみれば對米從属は一層明らかなのである。ところが、この内容を見て、日本は先進國型、米は後進國型だ、だから日本は米を圧倒している、としか分析しえない人がいる。これはブルジョアジーの自慢と同じじろものにはすぎない。米が日本の輸出のため苦況に陥っている。これは事実である。しかし、日本と米との關係を帝國主義と植民地との關係にあてはめて見ることは絶

対に出来ない。帝国主義国からは製品、植民地からは原料——この場合は「帝国主義は植民地に従属している」などとは決して言わない（もともと、帝国主義にとって植民地は生命線だ）。しかし、日本の相手は自らの植民地、勢力圏ではなく帝国主義である。日本経済は米帝の意志であり、つまり、日本経済は米帝に生命線を握られていることは明らか。だから、「日米経済戦争」においても、米帝が圧倒的ヘゲモニーを握っているのである。

日本独占資本の一部はこうした状況に甘んずることに反発し、中国に色目を使い、ソ修との結託を謀り、又西欧への輸出を伸ばしているが、米とその勢力圏に代る市場は存在しない。結局、日本独占資本は米帝に屈服し、エサを分け与えてもらうためアジア侵略に向う以外に道はないのである。

(2) 米帝は資本の面からも日本経済を牛耳っている事実。「財政金融統計用報」（大蔵省）によれば、一九五〇年～七〇年の外資導入額は一三九億五五〇万ドル（五〇～六五年度、四六億五、一九〇万ドル、六六～七〇年度、九二億五、三六〇万ドル）にのぼっている。内訳は、株式持分五七億八、三五〇万ドル（市場経由、四八億八、七三〇万ドル、経営参加、五億三、九二〇万ドル）、貸付金債権六六億八、四四〇万ドル（世界銀行八億六、二九〇万ドル、ワシントン輸出入銀行一〇億三、七五〇万ドル）、外資債その他一四億三、七六〇万ドル、となっている。ところで、日本企業の使用総資本が約一、三〇〇億ドルであり、これと外資の一三九億ドルを比べてもらいたい。さらに、日本企業の自己資本比率は一

資本を従属させており、日本人民の収奪を強めていることをはっきり示している。又、日本独占資本の海外投資は急増しているが、そのほとんどは米の勢力圏内へである。いわば、米の投げるエサに食いついているのであり、米への依存を一層増すことになっているのである。

(3) 米帝は工業技術の面でも日本経済を従属させている事実。第二次大戦後、中国革命の勝利に直面した米帝は日本を「極東の軍需工場」にしようとする目論み、そのため兵器産業のみでなく、兵器産業の基盤である一般産業、とりわけ重化学工業の技術水準と生産力をあげる必要に迫られ、米は大いに技術導入を開始した。日本経済の奇形的発展はここに始められるわけであり、その中心は米の資本と技術が占めているのである。一九六八年までに日本に対して五五億ドルの技術援助がなされ、うち三三億ドルが米からの技術援助である。七一年三月末現在、外国技術導入件数は八、三二四件、うち機械四、五二〇件、化学一、三四七件、金属六九三件、電機機械三三〇件（テレビ一〇〇〇、ラジオ七三〇）、鉄鋼二三〇、石油化学五〇〇、合成繊維五〇〇、合成樹脂三〇〇などのぼっている。さらに「未来産業」といわれる原子力、航空宇宙、エレクトロニクス産業の技術はほとんど米の技術で占められている。米の技術は巨額の特許料、利子を吸いあげると共に日本経済の対米従属を強めさせている。七二年二月二五日の読売新聞には、プロ文革後、電機業界最大の对中国輸出として注目されていた日立製作

八、九％（通産省四六年度版「世界企業の経営分析」：なお米は五四、六％）という脆弱さであり、外資（八〇％は米資）は基幹産業に集中していることを考え合わせれば、一〇％強を外資が占めているのは重大なことであり、この数字は決して小さくないことがわかる。とりわけ石油精製、石油化学においては米独占体との合併会社が大比率を占め、合併会社以外の「出光」なども米独占に金融的に従属している。アルミニウム産業においては米独占との合併会社が生産を独占している。現在、米資は大挙日本上陸を狙っており、電力会社、電機、自動車、一般機械、電算機、兵器、原子力産業のみにとどまらず、食料品、化粧品、日用品などの分野、農業の分野にまで進出しており、日本の労働者階級、そして農民、小ブルジョア階級、中小資本家と米独占との矛盾はますます強まっている。なお、日本資本の対米投資残額は九億ドル強であり、しかもそのほとんどが販売業ではない。

これに対し、以上のような関係は「資本の国際的連携の緊密さ」を示すのみで、従属関係を示すものではない、という人がいる。これはマルクス主義ではなくブルジョア経済学の見方である。独占資本同士の矛盾は敵対的なものではないだろうか？資本の提携は収奪と被収奪、支配と被支配の関係をつくり出さないだろうか？資本とは労働者の搾取なくしてありえないのではないだろうか？「金融資本は：一頭の牛から二枚の皮をとる」「最大の「便宜」と最大の利益」（「帝国主義論」）をひき出すというのは間違いないのだろうか？事実上、米帝が金融的にも日本経済の中核をおさえ、日本独占

所の発電用ガス、タービンの商談が、調印まぎわになって製造提携先の米GE（ゼネラル・エレクトリック）社の強硬な反対申し入れで中断、事実上ご破算になったことがのっている。GE社自らが対中輸出に乗り出すことを狙ったもので、「わが国企業の多くは米社との技術導入契約などにしぼられているだけに、こうしたケースが続出することが予想される」（読売）。明らかに、米の技術は日本経済を従属させているのである。「一頭の牛から二枚の皮をとる」という意味で、技術は資本と同じ役割を果している。

(4) 日本は食糧を自給できず、大巾に米本国とその勢力圏に依存させられている事実。七〇年において日本の食糧自給率は金額において七〇％、エネルギーに換算して五〇％でしかない。「経済の真の基礎——それは食糧予備である」「これをもたなかったならば、国家権力はゼロである」（レーニン）。日本農業は、第一に米農業ブルジョアジーの強要（日本はアメリカにとって最大の農産物輸出市場）によって、第二に日本独占資本の「高度成長政策」（これ自体、米帝に中核を握られたものであるが）による労働力確保の政策で破壊されている。日本人の生命を保たせる食糧を大巾に米帝に依存させられているという事は極めて重大なことである。すでに(1)で述べたが、かつての英帝のように自らの植民地に食糧を依存しているのとは、全く訳が違うのである。食糧を米帝に依存しているという事は、食糧は重要な戦略物資であるが故に、米帝に逆えない仕組になっているということである。米日反動派はこの傾向を増大させており、米帝への依存は増大している。これは対米従属の重要

な一環をなすものである。

(5) 日本経済はアメリカの侵略戦争によるポロもうけにたよって「高度成長」してきた事実。「朝鮮特需」で日本経済が立ち直ったのは誰でも知っていることであり、「ベトナム特需」は一〇〇億ドルを越えている。戦争に需要のはけ口を求め、これを重要な資本源としてきたことは、日本経済の構造を戦争がないと成長できない性質にしてしまっている。米は資本と技術を導入し、戦争の需要のおこぼれを与えて日本独占を奇形的に太らせてきた。日本経済にとって米の侵略戦争は麻薬中毒患者の麻薬のようなものである。

(6) 日本はドル圏に組み込まれている事実。円の価値が高まったといっても、世界的に円が通用していかないことは度々指摘されている通りであり、実際日本の貿易取引においては九〇%がドル建て決済であり、円建ては一%（残りはポンド・etc.）にすぎない。ちなみに、西独では八〇%がマルク建て決済である。通貨圏に組み込むというやり方は、その国に対して抑圧的な金融政策をするための帝国主義の支配の一つである。例えば、戦前の大恐慌の際、英・仏はブロック体制を組み、各々の通貨圏をつくらせて恐慌の乗り切りを謀った。敗戦後は日本自体がアメリカの勢力圏に組み込まれているのである。

(7) 軍事産業の対米従属の事実。すでに技術のところでは述べたが、日本の兵器産業はアメリカの侵略戦争の需要を満たすため、アメリカによって復活させられ、育成されてきたのである。また、「自衛隊」の兵器体系は米軍のそれと同じであり、米の政策決定の後で日

本の軍備拡張がなされているのも事実である。とりわけ、エレクトロニクス兵器などの最新鋭兵器の開発、生産は完全に米独占の下請化している。すなわち、日本の産軍複合体（軍事独占資本と「防衛庁」幹部）は米の産軍複合体に完全に従属しているというところであり、つまりは日本軍国主義の対米従属をはっきり示すものに他ならない。

結論

以上の軍事、政治、経済面での事実から、我々は、日本は米帝に支配された（従属した）軍国主義国である、と規定しているのである。これに反対してうんぬん云う人は、是非事実をあげて反論してもらいたい。「新左翼」の悪いくせは、批判しようとする相手の文章をよく読まず、事実にもとづかずデッチ上げをやって、無責任かつ好き勝手な「批判」——実は中傷にすぎないのだが——をして自己満足することである。我々に対しては「日本が帝国主義国であることを否定している。」アメリカと日本との関係を帝国主義と植民地の関係にひき写しにしている。などという「批判」がなされるのが常である。こういうやり方はマルクス主義にまったく反するものである。どうか、よく読んで事実にもとづいて反論して下さい。

さて、高度に発達し、他国を侵略している帝国主義が、他の帝国主義に支配されているという点に、「日帝自立」派の諸君はカチンとくるようだが、これはマルクス主義に反しているのだろうか？

や、これこそマルクス主義なのである。これについては「真の革命路線をかちとるために——ブント諸君を批判する」でも触れられているので、述べるのは少ししておく。

「カウツキーの定義はこうである。

「帝国主義は高度に発展した産業資本主義の産物である。帝国主義は、そこにどんな民族が住んでいるのかにはかわりなく、ますます大きな農業地域（傍点はカウツキー）を隷属させ併合しようという、あらゆる産業資本主義的民族の志向である」

…カウツキーの定義のなかの誤りは明白である。帝国主義にとって特徴的なものは、まさに産業資本ではなく、金融資本である。…帝国主義にとって特徴的なのは、まさに、農業地域だけではなく、もっとも工業化された地域すら併合しようとする志向（ベルギーにたいするドイツの欲望、ロレーヌに対するフランスの欲望）である

「カウツキーの定義は、まちがって非マルクス主義的であるというだけではない。その定義は、マルクス主義理論ともマルクス主義的実践ともあらゆる面で縁のない見解の一体系の基礎となっている」（以上、レーニン「帝国主義論」）

地球上に社会主義国が一つも生まれていない一九一〇年代においてさえ、レーニンはこのように分析しているのである。いわんや、現在は強大な社会主義国（中国、アルバニア、朝鮮、ベトナム・etc.）がそり立つと共に、「帝国主義が全面的に崩壊し、社会主義が全世界的に勝利」している時代である。一九一〇年代に比べて、「どんな土地でも手をださなければならぬ」志向は、帝国主義

にとつて百倍も強まっている。なにものにもまして貪欲な米帝が、一度手に入れた日本という従属国をどうして手離したりしようか？米帝は平和的に占領国を手離すほどお人好しではないのだ。米帝の支配は形を変えただけで、実質的には何倍も強まっているのである。「日帝自立」は米日反動派のベテンにまんまとひっかかってしまっているものであり、その意味では米日反動派を大いに助けている。

なお、米軍支配と軍国主義復活の歴史の分析についてはここでは省略する。ただ、次の点を述べておこう。

占領期における米帝の日本支配には三つの目的があった。一つは日本を米の勢力圏に組み込み、日本民族を抑圧・収奪すること、二つは日本を「反共の防波堤」とし、アジア侵略の一大基地、「極東の軍需工場」とすること、三つは軍国主義勢力（独占資本中心）を育成して、日本人民支配、アジア侵略の先鋒にすること、であった。

この目的はその後、サンフランシスコ体制、「安保」体制、アジア核「安保」体制と形は変わっても、実質的には全く変わっていないのである。「日帝自立」論は、このうち日本独占資本の復活（五〇年代後半）、「自衛隊」の強大化、日本独占資本のアジア進出のみを一面にとらえた、極めて自然発生的な主張である。たしかに、これらは重大な事実であり、我々もこれを重視する。しかし、これらを米帝のヘゲモニー抜きで語ることはできない。日本軍国主義の侵略戦争準備がますます本格化している現在、これを、米帝はますます手をひいている、「日帝」の独自性は増している、と分析するのは米帝を喜ばせるのみである。帝国主義、とりわけ米帝国主義と

はそんな甘いものではない。米帝が軍国主義勢力をけしかけ侵略の前面におし出そうとしている現状こそ、サンフランシスコ条約以来のアメリカの対日支配政策の全面開花に他ならない。米帝はまさにこのために、独占資本にエサを与えて肥え太らせて（しかも奇形的に）きたのである。米の侵略戦争に対して、基地を提供させられ、「軍需工場」として協力させられるにとどまらず、米の勢力圏「防衛」のため日本人が「肉弾」「弾よけ」として狩り出され、経済的にも肩代りさせられるのが、米帝による日本民族支配の強化でなく、一体何であるるか。逆に、米帝の支配を認めるものこそ、日本軍国主義の侵略性、狂暴性を真に理解できるのである。

〔注〕 我々が「日本帝国主義」と呼ばず、日本軍国主義と呼ぶのは、北京 c t c のマネをしているわけではない。我々は六七年頃から軍国主義と規定しており、北京が軍国主義復活を指摘する以前からである。ただし、考え方は北京や平壤と同じである。日本は独占資本主義が支配し、アジア侵略をしている点で帝国主義国には違いないが、決して「自立」しておらず、米帝に支配され、その手先となっているのであり、米帝と同格の「自立」した帝国主義を意味する（少なくとも、「新左翼」の間ではこうなっている）。「日本帝国主義」という呼び方は全く適当ではない。断固として軍国主義と規定すべきである。

第二章 反米愛国路線の基本問題

第一章で述べた、日本は米帝に支配された軍国主義国である、という日本社会の特殊性——これが反米愛国路線のよりどころ、出発点である。ここに、やはり「鉄砲」の観点を中心とするマルクス・レーニン主義の分析の方法を適用することによって、反米愛国路線の基本問題が規定されるのである。

革命の対象、任務、原動力、性質、転化について

毛沢東同志は「中国革命と中国共産党」において、革命の基本問題分析にすぐれた典型を示している。「新左翼」諸君による、日本は高度に発達した資本主義国—社会主義革命—敵はブルジョアジー、味方はプロレタリアート などという、分析にも何にもなっていない「分析」が未だ横行しているが故に、「中国革命と中国共産党」のマルクス・レーニン主義的分析をしつかり学ばなければならぬ。毛沢東同志の分析に従って、その順序に従って（この順序が極めて重要）、日本革命を分析していく。ここでは少しのあいまいさも許されない。

(a) 日本革命の対象：アメリカ帝国主義と日本軍国主義、(米日反动派)

「現在の中国社会の性質が植民地・半植民地・封建制のものである以上、中国革命の現段階の主要な対象あるいは主要な敵はいったいだれであろうか。それはほかでもなく、帝国主義と封建主義、つまり帝国主義国のブルジョア階級と自国の地主階級である。なぜなら、現段階の中国社会の発展をおさえ、はばんでいる主要なものはほかでもなく、この二つだからである。この二つはたがいに結託して中国人民を抑圧しているが、帝国主義の民族的抑圧が最大の抑圧であり、したがって、帝国主義は中国人民の第一の、そして最も凶悪な敵である。」（「中国革命と中国共産党」）

〔注〕 この論文は抗日戦争中のものであり、日帝の敗北後の中国社会は「半植民地・半封建」、革命の対象は「帝国主義、封建主義、官僚資本主義」である。

日本社会の性質が米帝に支配された軍国主義国であるから、日本革命の現段階の主要な対象は米帝国主義と日本軍国主義である。これの経済的基盤はアメリカの独占ブルジョア階級と日本の独占ブルジョア階級であり、ブルジョア階級一般ではない。日本の国家権力（「鉄砲」）を米軍、「自衛隊」警察として独占し、民主主義を独占し、人民に独裁を行っているのはこの二つの敵である。この二つの敵の関係は、官本一味がいうように超帝国主義的な関係ではなく、互いに結託もし反撃もしているが、米帝のヘゲモニーは圧倒的であり米帝は第一の敵である。日本軍国主義は独自性をもちつつも

主要には従属し、米帝の手先となっている。また、この二つの敵を一つずつ打倒することは不可能であり、一つの革命で二つの敵を打倒する以外にない。なお、主要でない敵とは、例えばソ連社会帝国主義のことである。

(b) 日本革命の任務：民族革命と民主主義革命（民族民主革命）

「現段階での中国革命の敵が主として帝国主義と封建主義である以上、現段階での中国革命の任務は何か。それは疑いもなく、主として二つの敵を打倒すること、すなわち、対外的には帝国主義の抑圧をくつがえす民族革命、対内的には封建的地主の抑圧をくつがえす民主主義革命であって、そのもっとも主要な任務は帝国主義をうちたおす民族革命である。中国革命の二大任務はたがいに関連している。帝国主義は封建的地主階級の主要な支持者であるから、もし帝国主義の支配をくつがえさなければ、封建的地主階級の支配をくつがえすことはできない。反対にまた、封建的地主階級の支配をくつがえさなければ、中国革命の強大な隊列を組織して帝国主義の支配をくつがえすことはできない。したがって、民族革命と民主主義革命という二つの基本的任務は、たがいに区別されるときにも、たがいに統一されている。」（同）

日本革命においては米帝国主義と日本軍国主義を打倒するのが任務であるから、つまり日本人が民族解放と民主主義をかちとることが革命の任務である。すなわち対外的には民族革命、対内的には

民主主義革命であり、このうち民族革命が第一の任務（反米革命自体、民主主義革命であるが）である。米帝は軍国主義の第一の支持者であり、推進者であるから米帝を打倒せずして軍国主義は打倒できず、軍国主義の経済的基盤である独占資本主義は米帝の日本支配の社会的基盤であるから、独占を打倒せずして米帝の日本支配はくつがえせない。日本革命においても、「二つの基本的任務は、たがいに区別されるとともに、たがいに統一されている」のである。このことは実践的にみても、日本人民の反米闘争は必ず反軍国主義闘争にもなっていること（必ず官憲の弾圧があることはその一例）、また反軍国主義闘争は必ず反米闘争に結びついていること（例えば反四次防衛闘争は米帝の極東戦略への闘いでもある）などで極めて明らかである。当面の段階においては、第一の敵・米帝に焦点を合わせ、親米的独占資本、軍国主義軍閥を売国奴としてとらえる「反米愛国」が、革命の任務をもっとも鮮明にするスローガンである。

「反米愛国」については後で述べる。

(c) 日本革命の原動力：プロレタリア階級、農民階級、小ブルジョア階級、中小零細ブルジョア階級

「現段階の中国社会の性質、中国革命の対象、中国革命の任務についての分析と規定によると、中国革命の原動力はなにか。

中国社会の植民地・半植民地・半封建の社会であり、中国革命の対象が主として中国における外国帝国主義の支配と国内の封建主義であり、中国革命の任務がこの二つの抑圧者をうちたおすことである以上、中国社会の各階級、各階層のなかで、どんな階級、どんな

階層が帝国主義および封建主義とたたかう力になりうるのか。これが現段階における中国革命の原動力の問題である」(同)

革命の対象とたたかう力になりうる階級、階層が革命の原動力である——これはあたりまえである。ところが日本革命的左翼の主張をみれば全くあたりまえになっていないのである。日本では社会主義革命の敵はブルジョアジー、味方はプロレタリアート、というまるっきり逆転したものばかりだからである。例えば、中国革命においては民族ブルジョアジー（中層ブルジョアジー）を味方につけたことに対して、「中国は後進国だから」というのが極めて多い。とんでもない。そんなバカな話はない。中国では「たたかう力」になりえたらに他ならない。

「民族ブルジョア階級は政治的にひじょうに軟弱で動揺している階級である。しかし、かれらの大多数は、やはり、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の迫害と束縛をうけているため、人民民主主義革命に参加するが、あるいは革命にたいして中立をまもることができる。かれらは人民大衆の一部ではあるが、人民大衆の主体ではなく、革命の性質を決定する力でもない。しかし、かれらが経済面で重要性をもっているため、また、反米反蔣の闘争に参加するか、あるいはその闘争のなかで中立の態度をとることができるとか、われわれはかれらと団結することが可能であり、必要でもある」(一九四八年、「民族ブルジョア階級と開明紳士の問題について」)

これで明らかであろう。先進国が後進国かで、どの階級が革命の原動力になるか決まるわけがない。事実の具体的分析の中からしか

規定できないのである。なお、我々に対して、民族ブルジョアジーを敵とした土地革命戦争（第二次国内革命戦争）の時期を見習うべきだ、という人もいるが、これについて毛沢東は次のようにいっている。

「民族ブルジョア階級は、かつて一九二四年から一九二七年までの革命運動に参加したが、一九二七年から一九三一年（九・一八事変以前）までは、かれらのうちのすくなくぬものが蔣介石の反動に追随した。だが、この点を理由に、われわれはあの時期にかれらを政治的に獲得すべきではなく、経済的に保護すべきではなかった、と考えたり、また、われわれがあの時期にとった民族ブルジョア階級にたいする極左的な政策は冒険主義的政策ではなかった、と考えたりしてはけつしてならない。それどころか、あのときのわれわれの政策は、やはり、主要な敵とのたかいた力を集中できるようにするため、かれらを保護し獲得することではなかった」

(同)

まさに、「見習うべき」ではないのである。「主要な敵とのたかいたに集中」する——これをマルクス主義の観点、「鉄砲」の観点として見習うべきなのである。

さて日本革命においては、敵が米日反动派——すなわち、日本は異民族帝国主義の支配下にあり、それと結託し従属しているのがブルジョア階級一般ではなく、独占ブルジョア階級——であることが明らかで、そして革命の任務が民族民主革命であることから、プロレタリア階級・半プロレタリア階級だけにどまらず農民一般、小ブルジ

ョア一般も革命に参加しうるし、中小零細ブルジョア階級も一定の味方になりうる。別の云い方をすれば、「鉄砲」を握らせる指導階級はプロレタリア階級であり、「鉄砲」を握る主力軍は労働階級であり、続いて小ブルジョア階級、また中小企業ブルジョア階級も一定程度握りうる可能性があるということである。

日本人民の革命闘争の経験もこの正しさを示している。三里塚闘争、北富士闘争その他全国各地の基地闘争においては、中農が主力となつて積極的な革命勢力になっている。小ブルジョア階級とりわけ学生、知識人は先頭に立って闘ってきている。中小企業ブルジョア階級も一定程度、反米反戦の気運をもち、実力闘争に一定の支持を与えてきた部分もあり、米帝の抑圧の増大につれて反撓力を増しており、日中友好運動においてもかなり重要な位置を占めている。

(d) 日本革命の性質：人民民主主義革命

「現段階の中国革命は、いったいどんな性質の革命であろうか、ブルジョア民主主義革命であろうか、それともプロレタリア社会主義革命であろうか。あきらかに後者ではなくて前者である。中国社会がまだ植民地・半植民地・半封建の社会である以上、中国革命の敵はまだ主として帝国主義と封建主義である以上、中国革命の任務がこの二つの主要な敵をうちたおす民族革命と民主主義革命である以上、しかも、この二つの敵をうちたおす革命にはブルジョア階級が参加することもあって、たとえ大ブルジョア階級が革命を裏切つて革命の敵になったとしても、革命のほこ先はやはり資本主義一般と資本主義的私有財産にむけられるのではなく、帝国主義と封建主

義にむけられる以上、現段階の中国革命の性質は、プロレタリア社会主義的なものではなくて、ブルジョア民主主義的なものである」

〔注〕「中国革命と中国共産党」

「毛沢東は一九四五年頃までは、主に「ブルジョア民主主義」といつているが、その後は「人民民主主義」と云っている。

また国際的にも「人民民主主義」が使われている。未だ社会主義ではないということで「ブルジョア民主主義」と云えるのであるが、この中には社会主義的要素も含まれており、また勝手に誤解する諸君もいるので「人民民主主義」とすべきであろう。すなわち、ロシア十月革命以降の、プロレタリア

トの指導する民主主義革命は人民民主主義革命である。ここで、社会の性質、革命の対象、任務、原動力の分析から、始めて革命の性質が規定されることと、革命の任務と性質をはっきり区別していることに注意すべきである。

「革命の性質を決定する力は、主要な敵と主要な革命勢力の双方である。こんにち、われわれの主要な敵は帝国主義、封建主義、官僚主義であり、敵とたたかっているわれわれの主要な力は、全人口の九〇パーセントをしめる、肉体労働と頭脳労働に従事するすべての人民である。このことが、われわれの現段階の革命の性質を、十月革命のような社会主義革命とは異なる、新民主主義的人民民主主義革命として決定づけているのである」

（「民族ブルジョア階級と開明紳士の問題について」）

問題はきわめてはつきりしているのだ。毛沢東は「後進国だから

勢力（統一戦線）によって構成される。つまり労働者階級、農民階級、小ブルジョア階級、中小企業ブルジョア階級の革命的な代表者によって構成される。当然ながら、この統一戦線（革命政府）の共同綱領が革命の最小限綱領そのものである。そして、これはプロレタリア階級の指導する革命的独裁であり、本質的にはプロレタリア独裁である。しかし、これはプロレタリア階級のみならず、革命的諸階級の連合独裁であり、すなわち人民民主主義独裁である。

同時に、かちとる民主主義はブルジョア民主主義ではなく、人民民主主義（本質的にプロレタリア民主主義）である。

(e) 日本革命の前途と転化：社会主義革命と社会主義建設

「中国革命の結果全体としては、一面では資本主義的要素の発展をみせ、もう一面では社会主義的要素の発展をみせる。この社会主義的要素とは何か。それは全国の政治勢力のなかでプロレタリア階級と共産党の比重が増大することであり、農民、知識人、都市小ブルジョア階級がプロレタリア階級と共産党の指導権をすでに認められたか、あるいはそれを認める可能性があることであり、民主共和国の国営経済と勤労人民の協同組合経済である。これらはすべて社会主義的要素である。そのうえ国際環境の有利なことがくわれば、中国のブルジョア民主主義革命が終局において資本主義の前途をさげ、社会主義の前途を実現するというきわめて大きな可能性がどうしてもうまれるようになる」

（「中国革命と中国共産党」）

事実、中国革命は一九四九年一〇月の人民民主主義独裁樹立をもって人民民主主義革命（新民主主義）の段階を基本的に終了し、連

人民民主主義革命」などという反マルクス主義的なことを言っているのではないのである。具体的な敵と味方の分析から、資本主義一般を打倒するの否かを基準として、中国革命は人民民主主義革命だとしているのである。「後進国」を裏返しにした「高度に発展した資本主義国だから社会主義革命」も全く反マルクス主義である。敵と味方の具体的分析なくして、革命の性質をあれこれ云う権利は全くないのである。日本が高度に発展した資本主義国であるという極めて一般的事実、人民による権力奪取後、急速に社会主義建設を達成しようということを規定するが、当面の革命の性質の規定には何らかかかわりのないことである。

我々は、当面の日本革命の敵が米日反動派であってブルジョア階級一般ではなく、主要な革命勢力がプロレタリア階級、農民階級、小ブルジョア階級、中小企業ブルジョア階級であってプロレタリア（大半プロレタリア）階級のみではない——まさにこのことから、当面の革命においては資本主義一般、私有財産一般を打倒しない（できない）のであり、したがって、プロレタリア社会主義革命ではなく人民民主主義革命である、と規定しているのである。革命戦争（闘争）に参加する、あるいは協力する、又は中立を保つ農民、小ブルジョアの私有財産は断固守られるし、同じく中小企業も一定の制限の下で所有権を認められる。しかし、この革命の中には、プロレタリア階級とその前衛党の指導、とりわけ人民軍隊に対する絶対的指導権、あるいは独占資本（米資も含む）の没収など社会主義的要素も多く、これが指導的な要素をなす。樹立する革命政府は革命

統的に社会主義革命の段階に転化した。そして社会主義が資本主義の闘争の中で、一九五六年までに社会主義社会が基本的に建設（全人民所有と集団所有）された。さらに、社会主義革命と社会主義建設の一層の発展のため、史上始めてプロレタリア文化大革命が闘われ、勝利したのである。

日本革命の前途も社会主義以外にありえず、人民民主主義独裁樹立をもって連続的に社会主義革命へ転化するのである。社会主義革命と社会主義建設の段階における階級闘争は勿論、プロレタリア階級とブルジョア階級の闘いであるが、その形態は主要には、資本主義に対する制限と反制限となるであろう。日本革命においては、プロレタリア階級が質量ともに大きな割合を占めること、経済が集中していること、独占資本を没収すること、さらに「現代は帝国主義が全面的に敗北し、社会主義が全世界的に勝利する時代」であることなどの条件が備っており、中国革命よりもはるかに転化の要因、社会主義建設の要因はどのっている。人民民主主義革命が社会主義革命に転化することには何の疑いもない。

人民民主主義革命か、社会主義革命か

以上により、日本革命の基本問題——反米愛国路線の骨子は明らかだと思ふ。しかし、革命の性質について論争が集中しており、混乱もかなりひどいので、特別にとりあげて少し詳しく述べることにする。勿論、他の基本問題と切り離して語ることは絶対できないのである。

(1) 革命の性質を規定するうえでマルクス・レーニン主義の観点とは、プロレタリア独裁の観点とは何であるか。これはすでに述べた通り、「革命の性質を決定する力は、主要な敵と主要な革命勢力の雙方である」ということである。革命の性質を分析するには、社会の特殊性を分析したうえで、敵と革命勢力——誰が人民に「鉄砲」を向けているのか、誰が革命の「鉄砲」を握ることができのるか——を具体的に分析する以外にないのである。そして、敵がブルジョア階級一般、革命勢力(統一戦線)がプロレタリア階級(および半プロレタリア階級)のみであれば、この革命の性質はまぎれもなくプロレタリア社会主義革命である。敵が外国帝国主義、独占ブルジョア階級、封建主義など(すなわち、ブルジョア階級一般ではないということ)で、革命勢力がプロレタリア階級、農民階級一般、小ブルジョア階級一般e.t.c.によって構成される場合、この革命は人民民主主義革命である。

これ以外の規定の仕方は全て間違っており、こじつけ、観念論、「鉄砲」の観点なし、反マルクス主義などと云われても全く仕方のないところである。「社会主義革命」をあくまで云いはる諸君、君らがどうしても、当面する革命は社会主義革命だといはりたいのであれば、そして君らが本当に真面目にマルクス・レーニン主義者たらんと欲しているのであれば、何としても次のことを具体的事実をもって証明しなければならない。すなわち、日本革命の敵は独占ブルジョア階級のみではなくブルジョア階級一般であって、中小企業ブルジョア階級も必ず反革命の側にまわり、プロレタリアート

「プロレタリアートは、ブルジョアジーの改良主義に『しぼられ』ないで、ブルジョア民主主義革命を、最後まで遂行しなければならぬ。ブルジョア革命のさいの諸勢力の階級の相互関係を、ボリシエウイキはこう定式化した。すなわち、プロレタリアートは、農民を味方につけて、自由主義的ブルジョアジーを中立化し、君主制、中世的制度、地主的土地所有を徹底的に破壊する、と。」

農民一般とプロレタリアートの同盟こそ、革命のブルジョアの性格が現われている。なぜなら、農民一般は、商品生産を基盤とする小生産者だからである。さらに当時、ボリシエウイキは補足して言った、——プロレタリアートは半プロレタリアート全体(すべての被搾取労働者)を味方につけて、中農を中立化し、ブルジョアジーを倒す。ここに、ブルジョア民主主義革命とは違った社会主義革命がある、と。

「われわれが、全体としての農民といっしょにすすんでいる。いまだ、われわれの革命はブルジョア革命である。われわれは、これをこのうえなくはつきり自覚して、一九〇五年いらい何百回、何千回も語ってきたし、また歴史過程のこの必然的な段階をとびこえようとしたり、布告によってこれを廃止しようとしたことはかつてなかった」

「結果は、われわれの言ったとおりになった。革命の進行過程は、われわれの考え方が正しかったことを確証した。はじめは「すべて」農民とともに、君主制に反対し、地主に反対し、中世的制度に反対する(そして、このかぎりでは革命はなおブルジョア革命、プ

と半プロレタリアート(貧農など)が革命勢力になるだけで、中農はせいぜい中立にしかなりえない、ということ、である。これを「鉄砲」の観点から、現実の闘争の教訓から、マルクス・レーニン主義的に分析したまえ、少なくともこのような方法がとられねば論争にならない。「とにかく社会主義革命だ」「社会主義革命だから敵はブルジョアジー、味方はプロレタリアートだ」——何という観念論//これでマルクス主義者のつもりなのだから笑止千万。君らは次のような江戸小咄を知っていますか?

「瀬戸物屋へ来た太郎が、ひっくり返して置いてあった茶碗を見て、「あれっ、この茶碗、口があいてねえや。」「ひっくり返してみて、「なんだ。底が抜けていやがる。」「

何とも馬鹿馬鹿しい話だが、君らは何を隠そう、同じことをやっているのだ。当面の革命の逆の方から見ると、「社会主義革命でなければならぬ」といい、それからひっくり返して「社会主義革命だから敵はブルジョアジー、味方はプロレタリアートだ」と云っているのが君達なのである。何という与太郎的思考方法//早く目をさまして欲しいものである。

(2) 「毛沢東は間違っている」という人がいるだろうが、それならレーニンを引用しよう。それも十月革命以降の著作から。何故なら、中核派などは「レーニンは『四月テーゼ』で二段階革命論を自己批判し、一段階革命論の立場に立った」などという恥も外聞もないこじつけをやっているからである。しかし、いくらツラの皮の厚い誰かさんでも次の引用文にはガタガタ云えないだろう。

ブルジョア民主主義革命である)。つぎに、貧農とともに、半プロレタリアートとともに、すべての被搾取者とともに、農村の金持、富農、投機者をふくむ資本主義に反対する。そして、このかぎりでは、革命は社会主義革命となる。前者と後者のあいだに人為的な万里の長城をきざぎざ、プロレタリアートの準備の程度と、プロレタリアートと貧農との団結の程度以外のものによって両者を区別しようと企てることは、マルクス主義をはなだしく歪曲し、俗悪化し、自由主義とすりかえることである」

以上の「背教者カウツキー」(一九一八年)からの引用文によって、我々こそレーニンの観点を堅持していることがはつきりするであろう。疑いもなく、農民一般が味方なら民主主義革命、半プロレタリアートが味方で中農が中立なら社会主義革命なのである。なお、「プロレタリアートの準備の程度」とは、プロレタリアートが直接社会主義革命にとりかかれる条件があるのか、それともまず民主主義革命を勝ちとらねばその条件が生まれないのか、という違いのことである。「プロレタリアートと貧農との団結の程度」とは、貧農が農民の一部分としてプロレタリアートと団結するのか、それとも農村の階級分化がおこって半プロレタリアートとしてプロレタリアートと団結するのか、という違いのことである。官本一味も「新左翼」も、万里の長城をきざいでいる。

〔注〕 貧農とは、「他人の労働を搾取せず、自分の労働力のすくなくとも一部分を常時売らないわけにはいかない農民」(レーニン)のことであり、中農とは、基本的に他人の労働を

搾取せず、自分の労働力も売らない農民のこと。したがって貧農は「商品生産を基盤とする小生産者」、すなわち急進ブルジョアジーとしての側面を持つとともに、富農（農村ブルジョアジー）に搾取されているのでプロレタリアートとしての側面も持つ。つまり半プロレタリアートである。

(3) 以上のように、真面目にマルクス、レーニン、毛沢東の本を読めば明々白々な真理を、わざわざネジ曲げて恥も外聞もなく高言する人が多いのはまったくあきれてしまうのである。真理に忠実であろうとせず、自分の偏見と主観に忠実であろうとするから、せっかく米日反動派が日本革命の敵であると理解できても、ひどいデタラメをやっている人もいる。

第一のデタラメ。米帝が敵→民族革命、独占（軍国主義）が敵→民主主義革命、で民族民主革命⇨人民民主主義革命という考え。いわゆる「毛派」の多くの部分、又木下一派がこの考え方をしている。彼らは「毛沢東思想万才」をいいながら偉大な武装闘争に反対している、日本民族の面よごしまたいな連中である。ただ我々自身、本格的武装闘争の提起に至るまで、木下が残っていたこのデタラメを全体としては完全に克服できてはいなかった。これは、あの敗北の総括につながる革命理論軽視の一つの表われに他ならず、自己批判するものである。

第二のデタラメ。米帝が敵→民族革命、独占（軍国主義）が敵→社会主義革命、で民族解放社会主義革命という考え。反米社会主義革命あるいは反米反軍（帝）社会主義革命という考えも基本的に同

じである。「毛派」の一部はこう考えており、また武闘派の同志の中にもこう考えている人がいる。これは、いわば「修正日帝自立論」である。

この二通りの考え方と、前述のレーニン、毛沢東の文を比べてみれば、そのデタラメさかげんは全く明らかであろう。すなわち、革命勢力（統一戦線）を全く問題にせずに革命の性質をあれこれ言っているのであり、これは致命的な誤りである。そして革命の原動力を全く考慮せずに「革命の性質」を「規定」しているから、革命の任務という基本的な異っている問題をごちゃまぜにしてしまっているのである。また、米帝に対する日本人民の闘いと軍国主義に対する日本人民の闘いを観念的に切り離してしまっているのである。ちよつと実践的に考えてみれば、米帝国主義に対する闘いと日本軍国主義に対する闘いをブラスしたものが日本人民の革命闘争だ、とは決して云えないはずである。例えば、米軍基地に対する闘いは日本軍国主義に対する闘いになっていないだろうか。「自衛隊」に対する闘いは米帝に対する闘いになっていないだろうか。革命の性質（革命の任務の場合は別）を分析するにあたっては、米日反動派⇨日本人民と統一的にとらえる以外ないのである。

〔注〕 民族民主革命から社会主義革命へ転化する、としても正しい。しかし、現在は革命の原動力を無視したデタラメな規定が横行しているので、我々は極めて厳密でなければならぬと思う。すなわち、革命の任務と性質をはっきり区別することである。

(4) それでは、この二つの考え方に対する批判をじっくり進めてみよう。

一般には、反独占資本主義の革命は社会主義革命である。なぜなら、一般的に革命の対象が自国の独占資本主義のみである場合には、すなわち、自国の独占ブルジョア階級のみが反革命の権力の座にいつている場合、革命の任務には反独占資本のみではなく反資本主義一般も含まれ、革命勢力はプロレタリア階級、半プロレタリア階級（貧農など）、その他（革命的知識人など）によって構成され、これ以外には革命勢力は決して拡大しないからである。中農や小ブルジョア分子などは、せいぜい中立になるだけであり、これはプロレタリア社会主義革命以外の何ものでもないからである。

また、反独占資本主義革命には民主主義をかちとる任務がつきものであるが、この革命において民主主義をかちとるのはプロレタリア階級（大半プロレタリア階級）であり、したがってこれは人民民主主義ではなく、狭義のプロレタリア民主主義に他ならない。同様に樹立する革命権力は狭義のプロレタリア（階級）独裁である。現在のアメリカ革命はこの第一の例である。人種差別徹底を始めて民主主義をかちとる任務は、アメリカ人民にとって非常に大きな任務となっているが、これはアメリカ独占資本主義打倒・プロレタリア独裁樹立の社会主義革命の中に含まれるものである。すなわちアメリカプロレタリア階級（有色人種も白人も）による社会主義革命が当面する革命であり、この中でしか人種差別徹底などはかちとることができない。

(5) しかし、場合によっては、反独占革命が社会主義革命とならず、人民民主主義革命の性質をもつこともありうる。

「アメリカ合衆国では、巨大独占体のもつ、もつとも本格的な独裁が支配している。他のブルジョア諸国でも、独占資本独裁の本格的要素が発展している。この独裁に反対する闘争がすべての民主主義的進歩勢力にとつてますます緊迫した問題になっていることは明白である。一定の条件の下では、帝国主義的ブルジョアジーの政策に反対する人民民主主義的運動が民主主義的革命的革命になることもあるだろう。この革命は、巨大独占体の独裁の転覆を目的とする限り、反独占的なものである。別な言葉でいえば、民主主義的人民革命である」（スターリン、「レーニン主義の基礎」）

〔注〕 マルクス・レーニン主義者であれば当然のことであるが、我々はスターリンを偉大なマルクス・レーニン主義者として少なくとも七〇パーセント評価する。トロツキーは勿論、全面的に否定。

偉大な指導者であったスターリンの見通しは適中した。例をあげると、一九四五年のドイツ東部革命は社会主義革命ではなく、「ドイツ民主共和国」（今ではソ連に支配された修正主義国だが）を生み出した人民民主主義革命であった。ドイツは明らかに先進帝国主義国であったし、他国の帝国主義の支配下にあったわけでもなかったが人民民主主義革命であった。なぜか？それは、独占資本主義一般、ブルジョア独裁一般がドイツ人民の敵だったのではなく、ナチズムという、いわば極端なファシズムが革命の対象であり、ナチス

の非常なる凶暴性、長期の侵略戦争、敗戦という条件によってファシズムと反ファシズムの矛盾が拡大し、そのため農民一般、小ブルジョア一般、ブルジョア左派までが反ファシズムの革命勢力に参加したからである。

この革命の場合、スターリンの云う「一定の条件」とは、ヒトラーのファッショ独裁体制である。すなわち、高度に発展した資本主義国においても「一定の条件」がある場合には、革命の敵がブルジョア階級一般ではなく、革命勢力・統一戦線に参加する階級、階層の巾が広がり、人民民主主義革命となりうることもあるということである。

(6) 一方民族革命の任務があっても人民民主主義革命とはならず、社会主義革命となる場合もある。

すでに第一章でロシア十月革命の例を述べてあり、また、現在のイギリス、フランスはこのいい例である。金融面から一面的にみた場合、ロシア十月革命の対象であったブルジョア政府、そして現在のイギリス、フランスはいずれも他の帝国主義に支配されているといえる。米独占体の英仏に対する資本投下は日本へのそれをはるかに越えている。(米独占体は英の自動車工業の五〇%以上、石油製品、電算機の四〇%以上などを支配。また仏の電子装置、電信、電話の四〇%以上、計算機の七五%、石油製品の二〇%以上などを支配。これは古い統計だから今ではもっとずっと増大している)。したがって、英仏人民には反米民族革命の任務がある。別の言葉でいえば米独占体と闘う任務がある。これを否定するものは米資に対す

る闘いを否定するものであり、革命家ではない。

しかし、これらのいずれの例も人民民主主義革命ではなく社会主義革命に他ならない。なぜなら、政治・軍事とわけ軍事の観点からみれば、外国帝国主義が主要な敵ではなく、自国のブルジョア独裁が主要な敵だからである。経済面でも、英仏は日本とは違って独自の勢力圏を持っている。それで、革命勢力が人民民主主義的統一戦線とはならず、プロレタリア階級(十半プロレタリア階級)だけで構成されるからである。すなわち、統一戦線の巾を広げる「一定の条件」には、外国帝国主義の支配がなっていないからである。

これらの革命は、狭義のプロレタリア独裁樹立の社会主義革命であり、その中に副次的なものとして他の任務も含むのである。例えば、ロシア十月社会主義革命においては、英仏帝国主義、独帝国主義に対する闘争も含まれていたことは明らか事実である。

(7) 以上の(4)、(5)、(6)により、主要な革命勢力を考慮せず、革命の任務と性質を同一視し、まったく観念的にも反米民族革命、反軍国主義Ⅱ民主主義革命で人民民主主義革命、あるいは反米Ⅱ民族革命、反軍国主義Ⅱ社会主義革命で反米社会主義革命などと規定することは、はなはだしくマルクス・レーニン主義を歪曲するものであることが極めてはつきりするのである。こんなデータラメな規定の仕方では(4)、(5)、(6)の例を分析することは不可能である。そして、あの複雑きわまりなかった一九一七—一八年のロシア革命の転化を分析することもできないであろう。

唯一正しいのは、「革命の性質を決定する力は、主要な敵(反革命の「鉄砲」を握っているもの)と主要な革命勢力(革命の「鉄砲」を握れるもの)の雙方」であって、この分析からのみ規定することができるということである。ブルジョア階級一般(独占ブルジョア階級も中小零細ブルジョア階級も)が敵で、都市と農村の半プロレタリア階級のみがプロレタリア階級の同盟者であれば、社会主義革命。ブルジョア階級一般が敵ではなく、農民一般(貧農と中農e t c.)、その他がプロレタリア階級の同盟者であれば、人民民主主義革命。これがマルクス主義である。

日本革命の場合、米帝の支配は明らかに「一定の条件」となっている。異民族支配のため、米帝とそれに従属した軍国主義反動派の抑圧と収奪、そして戦争政策のため、日本の農民一般、小ブルジョア階級一般、中小零細ブルジョア階級は反米反軍国主義、反米反戦(すなわち反米愛国)の革命性をもっているのである。

(8) 興味深いことに、我々の知っている範囲では、革マル派を除いて、農民と同盟するのだといわない「新左翼」はいない。そのいもそろって「社会主義革命だ」と云っているくせに貧農だけと同盟するという「新左翼」はいないし、少なくとも中農は同盟者であるという考えは圧倒的になつていっている。すなわち、実際問題として三里塚に見られる如く、農民はまさしく農民一般として決起している。だから、革命派であれば決してこの事実を否定できないわけである。だから、とにかく革命的左翼は農民との同盟を云っている。これは正しく、我々もこれを断固支持する。ということとは、一体どう

なるのか?

レーニンによれば、「農民一般とプロレタリアートの同盟こそ、革命のブルジョア的性格が現われている」(前述の引用文より)といっている。そして「半プロレタリアート全体を味方につけて、中農を中立化し、ブルジョア階級を倒す」(同)のが社会主義革命であるといっている。さあ、困った、さあどうする? 諸君。レーニンがおかしいのか、「社会主義革命論」の諸君がおかしいのか。それとも、レーニンの規定はもう時代遅れなのか。日本の農民は「商品生産を基盤とする小生産者」ではないのだろうか。イヤイヤ、そうではない。現段階においては中農は同盟者である。その通り。だから、だからこそ社会主義革命ではなく人民民主主義革命なのだ。日本革命の実践は、人民民主主義革命であることをはっきり示しているのである。「社会主義革命論」のデータラメさは「新左翼」自ら暴露しているわけである。

すると、またここで我々を「追随だ」という人が出てくる。中農や小ブルジョアに「追随」するのではなく、「社会主義にひきよせらるべきだ」というのだ。この問題は、マルクス主義の立場から中農や小ブルが社会主義革命の原動力となりうるか否か、という点にある。これはマルクス主義のイロハであって明らかに否。プロレタリア独裁の樹立後、社会主義建設に中農を協力させることは可能であるし、そうしなければならぬが、これは中農が原動力になりうることはわけが違ふ。(「ロシア共産党(ボ)第八回大会」を参照して欲しい)。中農や小ブルを「社会主義にひきよせる」のだ。

て？それは磁石で木片をひきよせようとするようなものである。中小企業ブルジョアに至っては陽極で陽極をひきよせようとするものである。我々はプロレタリア階級の指導のもとで、農民、小ブルジョア、中小零細ブルジョアと同盟し、統一戦線を結成し、人民民主主義独裁をめざすと共に、人民民主主義的・社会・経済政策を実行するのである。

(付) 反米愛国のスローガンについて

以上の内容をもつ政治路線を我々は反米愛国路線と呼ぶのである。一部の諸君は「愛国」とか「民族」とかいうとすぐアレルギーをおこす。まず、レーニンの引用をしておこう。

「民族的誇りの感情は、われわれ、大ロシアの階級意識であるプロレタリアートにとって縁のないものであるか？もちろん、そうではない。われわれは自分たちの国語と自分たちの祖国を愛する。我々は、祖国の勤労大衆（すなわち、祖国の人口の十分の九）を人民主義者や、社会主義者の意識的な生活にまでひきあげるために、なによりも多く活動している。ツァーリの死刑執行人、貴族および資本家どもが、われわれのうるわしい祖国を、どのような暴力、抑圧、愚弄のもとにさらしているかを目撃し、感知することは、我々にとっては何よりも心のいたむことである」（「大ロシア人の民族的誇りについて」）

「自決権からは、祖国擁護が派生するという理由で、自決権を排するならば全くこっけいだということは、いうまでもない。マル

クス主義が戦争における祖国擁護の承認、たとえば、ヨーロッパのフランス大革命の諸戦争、またはガリバルディの諸戦争における祖国擁護の承認をみちびきたすばあには、同じく又、一九一四—一六年の帝国主義戦争における祖国擁護の否定をみちびきたすばあには、それを個々の各戦争の具体的な歴史的な特殊性の分析からみちびきたさなければならぬのであって、「一般原則」のようなものが個々の綱領的条項などからみちびきたすのではない」（「社会主義革命と民族自決権」）

「一九一五年三月のベルン会議で採用され、そして「祖国擁護のスローガンについて」という表題をもっているわが党の決議は、「現在の戦争の実際の本質」はなにににのうちに「ふくまれている」という言葉をもってはじまっている。…ベ・キエフスキーは「祖国擁護」のスローガンを「裏切的」と呼んでいる。われわれはおだやかに次のように説きつけてよいだろう。あらゆるスローガンは、それを機械的に反復し、その意義を理解せず、事柄を深く考えず、その意味を分析することなしに、ただ記憶するだけにとどまる人々にとつては「裏切的なもの」である。又、将来もつねにそうであろう。…個々の戦争の意義および意味を歴史的に考究する。戦争がなんのために、どういう階級によつて、どんな政治的目的のためにあるか？」（「マルクス主義の漫画および帝国主義的経済主義について」）

民族アレルギーの諸君。自分の祖国を愛せないものは革命家ではないのですよ。「高度に発展した資本主義国」だから、民族や愛国

は問題にならないのですよ。侵略を擁護するという理由で民族の問題を排するのは「全くこっけい」なことなのです。マルクス主義者は決して機械的「分析」に陥ってはならず、「具体的歴史的な特殊性の分析」からみちびきたさなければならぬのですよ。民族とか愛国といったスローガンは、「それを機械的に反復し、その意義を理解せず、事柄を深く考えず、その意味を分析することなしに、ただ記憶するだけにとどまる」一部の諸君にとつては「裏切的なもの」で、アレルギーをおこすものである。問題は、日本軍国主義の侵略準備の「意義および意味を歴史的に考究する」ことであり、なんのために、どういう階級によつて、どんな政治目的のためにあるか」を分析することである。

さて、我々の「反米愛国」とは反米反軍国主義ということであり、人民民主主義独裁を樹立するということである。すでに述べたように、米帝は最も主要な敵であり、軍国主義勢力（親米的独占資本と軍閥）は日本を米帝に売り渡しているのであり、米帝は日本民族支配、日本反動派は親米売国である。したがって、これと闘う人民は、これに真向から対決する。反米愛国のスローガンを掲げなければならぬ。すなわち、反米愛国とは、反米、反軍国主義、反戦、反ファシズム、反独占（独立、平和、民主、中立、繁栄）の内容、つまり日本革命の内容を集中的に表わしたスローガンである。

日本は侵略国であるから、「愛国」を掲げるのは排外主義になるという人がいるが、以上の上で立つて具体的に考えてみれば極めてはっきりしているのである。例えば、第一次大戦中のロシアでは「

帝国主義戦争を内乱へ」であり、つまりはツァーリ打倒であつて、ここでは「愛国」のスローガンはツァーリに真向から対決するスローガンではなく、侵略を擁護するスローガンとなつてしまふ。戦前の日本でも同様である。しかし、現在の日本ではどうであろうか。日本は独立した帝国主義国ではなく、米帝に支配された軍国主義国である。ということは、日本軍国主義の侵略戦争も当然、米帝の支配の下で、対米従属下で行なわれるということである。米の勢力圏を「防衛」するため、軍力と経済の肩代りのためエサをちらつかせて日本軍国主義を手先とし、日本人を狩り出そうとしているのである。日本独占資本もこれに従わねばならない必然性がある。（米帝のヘゲモニーを認めない諸君。それなら、日本軍国主義は何のため侵略するのか具体的に述べたまえ！米帝とアジアの勢力圏を争うためか？それとも、米帝は進んで勢力圏を譲ってくれるとでもいうのか？アジアの勢力圏のうち、「日帝」の割り込めるスキがどこにある？そもそも、「日帝」が「自衛隊」を自由に使えるとでもいうのであろうか？）

だからこそ、我々は「米日反動派の侵略戦争を革命戦争で打ち破れ！」といっているのである。勿論、この中には現在の米帝の侵略戦争も含まれる。アメリカの「利益」のために、日本人が狩り出されようとしている侵略準備は、明らかに対米従属であり、日本軍国主義は親米売国であり、侵略戦争は一層対米従属を増大させるものであるから、やはり、反米愛国こそ、これに真向から対決するスローガンなのである。そして、「米日反動派の侵略戦争を革命戦争で

うち破れノ」は、米日反動派打倒、人民民主主義独裁樹立と切っても切り離せないものである。米帝に支配されている日本においては、「愛国」は決して排外的スローガンとはならず、革命的なスローガンである。勿論、この愛国は反米と切り離せないものである。

なお、「反米愛国」「米日反動派の侵略戦争を革命戦争でうち破れノ」は、日本人の最もプロレタリア国際主義的スローガンである。なぜなら、世界人民の最大の敵は米帝であり、アジア人民の共通かつ最大の任務は、米日反動派の侵略戦争を打ち破ることだからである。やたらに「世界」を云えば国際主義の立場に立つというものではないのである。

第三章

人民遊撃戦争路線について

それでは次に、米日反動派を打倒して人民民主主義独裁を樹立する偉大な政治目的を達成するために、どのような闘争形態、闘争方法でなければならぬかという問題について分析していこう。「平和革命」とか「議会で多数を得て」などは論外であるが、一部の人は「先進国」か「後進国」かで分けようとする。すなわち、「先進国」では「ロシア型」の「ゼネスト」都市での「一齋蜂起」、「後進国」では「中国型」の「人民戦争」ゲリラなどと。このような考えは実践の中で、大分影が薄れているが、これは「日帝自立」論と対応している。しかし、こんなやり方がマルクス主義といえるであろうか。必勝不敗の戦略・戦術がかけられるであろうか。

人民遊撃戦争の客観条件

レーニンは、「バルチザン戦争」（一九〇六年）の中で、マルクス主義者が闘争形態の問題を考究するうえでの「指針としなければならぬ、二つの基本的命題」をあげている。

「第一に、マルクス主義は、多種多様な闘争形態をみとめるもの

であるが、そのさい、それらの形態を「頭で考えだす」のではなく、運動の過程でおのずから発生する、革命的諸階級の闘争形態を普遍化し、組織化し、それに意識性をあたえるにすぎない」

「第二に、マルクス主義は、闘争形態の問題を、かならず歴史的に考察することを要求する。具体的な歴史的情勢をよそにしてこの問題を提起するのは、弁証法のイロハがかわっていないことを意味する」

すなわち、「先進国：」「後進国：」など、マルクス主義のイロハさえわかっていることを暴露するものに他ならない。そもそも、先進国・後進国とは相対的なものであり、これが闘争形態を決定する主要な条件にならざるわけがない。我々は「頭で考えだす」のではなく、まず、現実の革命闘争（日本および世界）が生み出している闘争形態に学び、しっかりと分析しなくてはならない。そして、そのような闘争形態を生み出している歴史的條件を分析し、さらに、日本、世界の敵の味方のそれぞれの力量と動向を分析しなければならぬ。これらの具体的分析をおこなってこそ、日本革命の必勝不敗の闘争形態、闘争方法を確立することができるのである。

(1) 日本ですべてに武装闘争が発生していること、これは明らかである。この建軍武装闘争は急速に広まり大衆的になる条件の下には、今のところないが、確実に聞われ発展することも明らかである。建軍武装闘争の時代であることはすでに逆うことのできない趨勢であり、これをめぐる態度によって革命派か、中間派か、反革命派かが明らかとなっている。すなわち、建軍武装闘争こそ、日本人民の革

命闘争の最大の特徴であり、主要な形態であり、中心をなすものである。そして、これは突如として現われてきたものではなく、宮本一味の六全協の裏切り以降、実力デモンストラション→実力闘争（石、ゲバ棒、火炎ビン）と発展してきた日本人民の闘争が、必然的に、全く望まれて、生み出したものであることも明らかである。

〔注〕 武装闘争と建軍闘争は切り離すことができず、建軍なき武装闘争の敗北は必至なので、そして主要な任務が武装闘争、主要な闘争形態が建軍であるから、我々は建軍武装闘争と呼ぶのである。未だ、大衆組織と区別のない戦闘団主義が克服されないで、このように呼ぶべきと考える。

木下一派はこれに対して、「労働人民がまだ立ち上っていない」なる理由をもって否定し、反対する。現に人民が犠牲を乗り越えて闘っているのに、闘っているのは「人民ではない」というのだ。これはロシア革命の裏切者、一九〇五年のモスクワ蜂起に対して「銃をとるべきではなかった」と云ったブレハノーフ以下である。ブレハノーフでさえ、「銃をとったのは人民ではない」などとは云わなかった。木下派の諸君、人民とは何ですか？最も先進的に闘っているのは人民（人民の一部、それも最も進んだ）ではないのですか？君らにとっては、立ち上っていないものが「人民」なのだ。君らは、常に典型を見つけてそれを普遍化する毛沢東（およびマルクス・レーニン主義者）のやり方は無縁のものらしい。赤色根拠地に始って、近くは人民公社、「工業は大慶に学ぼう」、「農業は大寨に学ぼう」、革命委員会まで、全てこのようにして毛沢東は中国人民

を指導してきたのが見えぬらしい。イヤ、自分に不利なものわざと無視するのだらう。

(2) また、資本主義国における武装闘争は日本のみではなく、アメリカ、北アイルランド、西ドイツ、フランス、カナダ：において、すでに普遍的闘争形態として闘われているのも事実である。武装闘争は、今では決して「後進国」(つまり、植民地、半植民地)特有のものではなく、なっているというものであり、世界的な階級関係、歴史的情勢から必然的に発生しているものであるということである。これは決して、「世界共通の」「はねあがり分子が」、条件もないのに闘っているのではない。それはブルジョア階級と修正主義者の見方である。

現在までの歴史をふりかえってみれば、資本主義国において遊撃戦争が闘われ、発展した例はいくつかある。最もいい例は、第二次大戦中のフランス、イタリアなどにおけるバルチザン闘争である。この両国では勝利の後、革命政権の樹立が可能だったにもかかわらず、共産党指導部の修正主義化のため成果を帝国主義者に奪われてしまった。さて、このバルチザン闘争の条件は以下である。第一にファシズム(仏の場合は異民族の)の支配、第二に、それに対する広範な人民の統一戦線、第三に、人民の武装、第四に、プロレタリア階級の党の指導、第五に、国際的反ファシズム統一戦線の支援と連帯、の五つである。これがバルチザン闘争を発生させ、発展させたのである。毛沢東が「遊撃戦争の可能性はきわめて少なく、皆無でさえある」(一九三八年、「抗日遊撃戦争の戦略問題」と指摘

したベルギーでもバルチザン闘争は闘われた。これは毛沢東が間違ったのではなく、一九三八年にはなかった条件(主にヒトラーの占領)が新しく備わったからに他ならない。すなわち、一定の世界的条件の下で、ファシズム支配があり、それに対して人民が広範に決起している国では、地理的条件が備わっていないくても、植民地、半植民地でなくとも、遊撃戦争を闘い、発展させ、勝利させることは可能であるということである。そして、勝利の保証は、プロレタリア階級の党、広範な統一戦線(各国、世界の)である。

(3) それでは、現代はこの一定の世界的条件はどうであろうか。疑いもなく存在しており、過去の如何なる時代よりもこの条件は整っている。現代は「自由」資本主義の発展期ではない。帝国主義戦争の時代でもない。また、生まれたばかりの社会主義国が帝国主義に包囲されている時代でもない。「現代は帝国主義が全面的に崩壊し、社会主義が全世界的に勝利する時代」であり、「戦争が革命をひきおこすか、革命が戦争をおしとどめるか」という時代である。すなわち、社会主義勢力が帝国主義勢力を圧倒しているという力関係の下で、帝国主義、社会帝国主義の侵略戦争が絶えず存在し、それに対する人民の革命闘争が、これまた絶えず存在し、ますます帝国主義、社会帝国主義を追いつめている時代である。この闘いの主戦場はインドシナ三国であり、アジア、アフリカ、ラテンアメリカであるが、武装闘争の火は帝国主義国、資本主義国にも飛火している。

したがって、資本主義国人民が世界恐慌の危機に一齋蜂起したり、

帝国主義戦争の危機を内乱へ、という時代とは時代が違うのである。資本主義国人民は「一齋蜂起」のチャンスがくるまでジッと待つ必要など毛頭なく、世界人民の武装闘争と呼応すべきなのであり、遊撃戦争によって帝国主義、社会帝国主義を追いつめ、その中で全人民的蜂起の条件を闘い、つてゆくべきなのである。このような侵略戦争と革命戦争の時代に、それと積極的に呼応しないのは明らかに誤りである。

「新しい世界大戦の危機は依然として存在しており、各国人民はかならず備えがなければならない。だが、当面の世界のおもな傾向は革命である。…弱国は強国をうち負かすことができ、小国は大国をうち負かすことができる。小国の人民が敢然と闘争にたちあがり、敢然と武器を手にとり、自分の国の運命にぎりさえすれば、かならず大国の侵略にうち勝つことができる。これは歴史の法則である」(毛沢東、一九〇七年「五・二〇声明」)

(4) 「資本主義諸国では、ファシズムも戦争もない時期においては、そこでの条件は、国内的には封建制度がなくなり、ブルジョア階級の民主制度があるということ、外部的には民族的抑圧をうけてはおらず、自分の民族が他の民族を抑圧しているということである。これらの特徴にもとづいて、資本主義諸国のプロレタリア政党の任務は、長期の合法闘争をつうじて労働者を教育し、力をのばし、資本主義を最終的にくつがえす準備をすることである」(毛沢東、「戦争と戦略の問題」)

一部の人はこれを引用して、日本では「長期の合法闘争—一齋蜂

起」でなくてはならないと云う。冗談ではない。一体、真面目に読んでいいのか//日本は米帝に支配されており、軍国主義が復活しており、ファシズムはあり、侵略戦争に加担し、又準備しているではないか//この「条件」はまるっきりあてはまらないのである。「このような敵をまえにしていることから、中国革命の長期性と残酷性がうまれてくる。われわれの敵が異常に強大であるため、革命勢力は長い期間をかけなければ、最終的に敵にうち勝つだけの力をたくわえることも、きたえあげることもできない。」(「中国革命と中国共産党」)

「このような敵をまえにしていることから、中国革命の主要な方法、中国革命の主要な形態は平和的なものではなく、武力的なものでなければならぬこともきまってくる」(同)

「このことからわかるように、革命を農村と都市とともに勝利させるには、人民にたちむかう敵の主要な道具、すなわち敵の軍隊を破壊しなければ、それはやはり不可能である」(同)

それでは、日本革命の敵である米日反動派はどのような勢力であろうか?軍事力の面では米軍、「自衛隊」である。しかもすでに述べたように、在日米軍のみではなく太平洋統合軍が相手であり、いふまでもなく、異常に強大である。「自衛隊」は練度と装備では世界のトップクラスといわれ、現在は一〇数万だが、将校と兵士の割合からいって短期間に一〇〇万人にすることが可能とされている。また、日本は非常に警察力が強く、発達した交通機関、マスコミと相まって末端に至るまで発達している。警察官は一六万五千人(う

ち、警視庁(四万)で、これを二〇数万とする計画がある。こうしてみると、訓練され、整備がよく、残虐な百数十万(次々に補充されるから、最低二〇〇万位か?)の軍隊、警察を消滅しない限り、日本革命の勝利はありえないことがわかる。しかも米日反動派は、強大な軍力を持っているだけでなく、きわめてずるがしこい敵である。武器所持の一切の禁止、労働貴族の買収、修正主義の育成と利用、一定の「民主主義」のペール、排外主義イデオロギー、墮落文化……例えば、ロシア十月革命で打倒された帝國主義ブルジョアジイとは、全くその質が違っている。そして、米日反動派は極めて巨大な生産力を背景としていて、現在、米日反動派はアジア全面侵略戦争の準備をしているのであり、彼らの狂暴さ、巧妙さは最高度に發揮されるであろう。勿論、こうした異常な強大さ、ずるがしこさは本質的に彼らの弱さ、孤立のあらわれである。

したがって、日本革命は武力による革命以外ではありえず、強大な革命軍がなくては勝利はない——なぜなら、敵は異常に強大な軍力をもっており、これの消滅なくして勝利はないからである。日本革命は一挙に勝利しえず、長期的な、何回かのジグザグの道をたどらざるをえない——なぜなら、敵は異常に強大であり、かつ極めて巧妙であるからである。

(5) 日本人民の側はどうであろうか? 当面の革命における人民とは、プロレタリア階級を指導階級とし、農民、小ブルジョア階級を基本勢力とし、中小零細ブルジョア階級を一定の味方とするものである。日本の革命勢力は人民の特徴は以下である。第一に、非常に

題である。これら、主流と逆流をとりまわることが出来ることは絶対許されない。日本人民の闘争は多くの困難を解決しなければならず、幾多のジグザグを繰り返さざるをえないし、一步一步前進せざるをえない(武闘は)が、必ず発展するし、必ず勝利するのである。また、悪いことはよいことに変わるのであって、不利な面も有利な面に変えることができる。例えば、敵の強大さ——これは、日本人民を比類なくうちたええるに達しない。修正主義の影響——これは、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の立場をはっきりさせ、党をきたえてであろう。武装がゼロ——これは、「鉄砲」の重要性を何もにも増して人民に教えるものである。勿論、敵——大、味方——小はあくまでも戦術的であって、戦略的には敵——小、味方——大である。

人民遊撃戦争の基本問題

以上の、日本革命闘争をとりまく客観条件により、次のような原則が明らかとなる。

(a) 米軍、「自衛隊」、警察をきれいさっぱり消滅しなければ日本革命の勝利はなく、そのためには強大な人民軍を建設して、武装闘争を展開しなければならぬ。

(b) 異常に強大な敵、発達した治安網、巧妙な敵、人民に対する修正主義の影響などの条件により、この武装闘争は「一瞬の蜂起」ではありえず、短期間の内戦でもありえず、何回かのジグザグ、残酷な弾圧、を経る極めて長期的な闘いとならざるをえない。

広範なものであること。日本人のうち、親米独占資本と軍国主義軍閥以外は全て革命勢力となりうるし、少なくとも中立にはなりうる。第二に、最も抑圧され、最も集中し、最も人数の多いのはプロレタリア階級であり、これは指導階級であり、主力でもある。第三に、人民は完全に武装解除されていて、人民の武装はほとんどゼロに等しいこと。第四に、米日反動派の巧妙さ、米帝に支配されつつもアジア人民に対しては抑圧民族とされていること、などを反映して、人民総体に一定の小ブル的気運があり、修正主義、社会民主主義がかなりの勢力を占めていること。第五に、日本人民のあらゆる反政府闘争を指導する、プロレタリア階級の党が未だかちとられていないこと。第六に、人民の闘いは統一されておらず、未だ意識的反米愛国統一戦線がかちとられていないこと。第七に、日本人民は実力闘争の豊富な経験を持ち、一定の武装闘争も闘いとられ、武装闘争が望まれていること。

これらの特徴のうち、日本人民の闘いは、発展し、教訓を積み、団結の方向に向い、広範になってきていること、これが主流面である。だからこそ、武装闘争を中心とする革命闘争は大いに発展と勝利があるのである。なぜなら、武装闘争は階級関係の中から生まれたものであり、その勝利の保証も統一戦線と党に求めるものだからである。日本人民総体の小ブル的気運、修正主義の影響、武装がゼロ、意識的統一戦線なし、党が未だかちとられていない、などは消極的側面であり、日本人民の革命闘争を不利にしているが、これは副次的側面である。つまり逆流であって、闘いの中で必ず解決しうる問

(c) この武装闘争(建軍武装闘争)の勝利の保証は、主に統一戦線と党の指導に求めねばならず、日本では地理的条件が不足な分だけ統一戦線に依拠しなければならない。

そして、これらの原則から、我々は人民遊撃戦争戦略・戦術をかちとっているのである。人民遊撃戦争の基本問題は以下のようになる。(「解放の旗」二二号参照)。

I 強大な敵と闘う弱小な革命勢力の武装闘争の基本路線は、後進国であれ先進国であれ、山岳(農村)ゲリラであれ都市ゲリラであれ、全く同じである。

「毎日の戦いで優勢な兵力を集中し、一律に戦役上戦闘上の外線作戦をとり、敵を包囲して消滅し、全部は包囲できないまでもその一部を包囲し、包囲した敵の全部は消滅できないまでもその一部を消滅し、包囲した敵を大量にいけどることはできないまでもそれを大量に殺傷する。このような殲滅戦をたくさんつかさねたばかりにはじめて、敵と味方の形勢を逆転させ、敵の戦略的な包囲すなわち敵の外線作戦の方針を根本からうち破り、……」(「抗日遊撃戦争の戦略問題」)

すなわち、米日反動派の軍隊、警察に対し、持久的に確実に小さな(最初のうちは、どんなに小さくてもよい)殲滅戦をかちとり、このような何千回もの勝利をつみ重ねることによって、少しずつ敵を「かじり」、又このような勝利をつみ重ねることによって、確実に人民軍を強大にし、人民を武装させていく。これによって始めて、敵味方の力関係を転化させることが出来、そして戦略的反攻(全人民

的蜂起、内戦、勝利)をかちとることができるのである。敵の内部崩壊も、国際的援助も、この中でこそ実現される。

II 「遊撃戦争はもともと分散的なものであるから、いたるところにひろがる遊撃隊になるのである」(同)

「遊撃隊の作戦では、できるだけ多くの兵力を集中し、秘密で迅速な行動をとり、敵の意表に出て襲撃し、すみやかに戦闘をかたづけることが要求され、消極的防御を極力いましめ、時間の長びくのを極力いましめ、戦いにのぞんで兵力を分散させることを極力いましめなければならない」(同)

日本の場合も、武装闘争の形態は、分散した、いたるところにひろがる遊撃隊であり、人民軍は遊撃隊、遊撃軍の形態となる(戦略的反攻以前は)。

〔注〕 プント日向派などは、火炎ビンの実力闘争を「遊撃隊」だといっているが、ここには武装のブの字もなく、戦争のセの字もないことは言うまでもない。「ゲリラ」型(カッコをつけるのは、ゲリラ型にもなっていないから)実力カンパニア闘争とも呼ぶのが適当である。無論、実力闘争として支持する。

すなわち、遊撃隊においては、「できるだけ多くの兵力」(当面の段階では、二、三名、多くて十数名)を集中し、「秘密で迅速な行動をとり、敵の意表に出て襲撃し、すみやかに戦闘をかたづける(通常は、数分以内)」ことが要求される。主要な任務である敵の消滅の場合は、このようにできるだけ遊撃隊を集中する。しかし、

破壊、攪乱、牽制などの任務の場合には、遊撃隊を分散する。ただし、この集中、分散は相対的なものである。この遊撃隊は少数精鋭(敵消滅の武闘を闘ったもののみを正式の隊員とする)に徹しなければならず、弾圧に対抗するため、ピラミッド型の組織形態をとる。完全な地下軍とし、通常はできるだけ分散させておかなければならない。水ぶくれ「軍」などもってのほか。

III 「革命戦争は大衆の戦争であり、大衆を動員してはじめて戦争ができるのであり、大衆にたよってはじめて戦争ができるからである」

「武装闘争を、労働者の闘争、農民の闘争(…)、青年、婦人などすべての人民の闘争、権力のための闘争、経済戦線での闘争、奸徒爾清戦線での闘争、思想戦線での闘争などといった闘争形態と、全国的範囲で直接あるいは間接に呼応させた…。このような武装闘争の全般的概念が、当面においては遊撃戦争である」(「共産党人」発刊のことば)

「武装闘争に重点をおくことは、他の形態の闘争を放棄してもよいということではない。反対に、武装闘争以外のさまざまな形態の闘争の呼応がなければ、武装闘争は勝利を得ることができない」(「中国革命と中国共産党」)

日本の現段階においては、建軍武装闘争は確実に燃え続けるが、一気に燃え広がる条件はない。革命は何千万大衆の事業である以上、革命戦争は大衆の戦争である以上、武装闘争の形態が少数精鋭の建軍遊撃隊である以上、これ以外の大衆闘争(政治闘争、経済闘争、

支援闘争 etc.)を大胆に闘い、呼応させることは前提である。

人民大衆の偉大な力は組織化し、武装化してこそ發揮できるのであり、すなわち統一戦線に組織することである。建軍遊撃隊は統一戦線に依拠してこそ、闘い、發展できるのであり、武装闘争を大衆化(水ぶくれ軍にするという意味ではない)できるのである。地理的条件の少ない日本では、この、武装闘争を中心に全ゆる闘争を結集する広範な統一戦線をかちとるか否か、これに依拠するか否かは、武装闘争の命運を決定するものである。これらの全般的概念が人民遊撃戦争である。

IV 人民軍単独(支援はうけるが)の作戦では、遊撃隊を展開するのであるが、統一戦線が一定の發展をなし、人民の組織化と武装化が一定程度かちとられた時、人民軍と大衆が共同しての蜂起をかちとる条件が生まれる。これは断固として闘いとり、一層遊撃戦争を發展させるべきである。ただし、この蜂起は地域や建物の占拠と保持を目的にしたものであってはならず(そうすれば敗北は必然)、敵軍の消滅と人民の決起、組織化を主要な目的とした遊撃的なものとしなければならない。また、人民軍の闘争においても、「一か八かの武闘」など固くつしまなければならぬ。「勝てるなら闘い、勝てないなら去る」である。そして、敵味方の力関係が転化し、全人民的蜂起の条件が整った時、全力をあげて全人民的蜂起をするのである。

〔注〕 大菩薩闘争も、むしろ闘われていたとしても、大規模な遊撃(自然発生的な)であって、蜂起とはならない。

V 「この軍隊は、勇往邁進の精神を備えている。この軍隊は全ゆる敵を圧倒するのであり決して敵に屈服するようなことはない。いかなる艱難辛苦の状態にあっても、生き残っているものが一人でもいる限り、闘い続けるのである。」(毛沢東)

これを我々は「銃の質」と呼ぶ。敵消滅の中心的武器は銃火器であり、人民軍は「銃の質」を持たねばならず、絶対このレベルを下させてはならない。ただし、警察力が強く發展しているという当面の条件の下では、量的には爆弾闘争が武装闘争の主体とならざるをえない。すなわち、銃撃戦を量的にも主体として闘えるまでには、遊撃隊にとって機動の余地がないためである。例えば、北アイルランドにはカトリック・ゲッターが存在している。勿論、警察力の發展の主要な武装闘争の立ち遅れであり、これは克服することが全く可能である。人民の闘いに対抗するため、警察力を集中せざるをえなくなり、少人数パトロールや夜間パトロールも出来なくなった時、銃撃戦は中心的に闘われうるであろう。

また、当然ながら、現在までの日本人の武装闘争も、全く以上の原則の正しさを示している(「解放の旗」二一号参照。ここでは略)。

「全世界のプロレタリア階級と被抑圧人民、被抑圧民族は、武器をもたない状態から、武器をもつようになり、戦争のやり方を知らない状態から、戦争のやり方を学ぶようになるであろう」(中国三紙誌共同論文、「プロレタリア階級独裁の勝利万才」)

日本人も同様であり、現にI~Vの鉄則は血と汗と涙の中で勝

ちとってきたものである。武装闘争は開始以前は、我々は何一つわかっていなかったのである。

反米愛国路線と建軍武装闘争

現在の日本においては、自然発生的武装闘争とは、水ぶくれ軍主義的、一カ所に集中する半合法主義的、戦闘団主義的な「武装闘争」(代表的なものは日大グループ、赤衛軍グループなど)であり、これの政治上への反映が「日帝自立、社会主義」路線、軍事上への反映が「蜂起」路線である。革命理論、政治路線を軽視すれば必ずこれに陥ってしまう。現にあればどの血の教訓をもっていた革命左派一部旧指導部さえ、まふまふと陥ってしまった。二、一七闘争以降の彼らの実践は絶好な反面教師である。

①五月(六月頃)、軍は山へ集中、②六月〇大会後、半合法部分を除いて「予備軍」として集中、③一二月、半合法部分、中京安保共闘も集中、④同じ頃赤軍派中央軍も集中。事實は水ぶくれ軍、集中主義がますますひどくなっていき、敗北と誤りにめり込んでいったことをはつきり示している。そして、これと正比例して政治・思想の軽視、せまい経験主義第一に傾斜していったのである。これは逆に、政治・思想で団結しなかつたため意志統一が出来ず、集中することによって団結をはかろうとしたためである。つまり、政治・思想の軽視と水ぶくれ軍、集中主義は弁証法的関係にあるのである。また、この両者に正比例して、内部矛盾がひどくなり、脱落者が出るなどしたため、新たな遊撃戦が闘えなかつたのである。

集中主義と政治・思想の無視によって内部矛盾がひどくなり、そのため転々とアジトを変えざるをえず、そのため新たな武闘が闘えず(作戦が困難だったためではない)、そのため新たな武闘が闘えずた支持者を組織することができず、そのため敵に追いつめられ、あの最悪の事態にのめり込んだのである。敗北と誤りは、恐ろしくらい必然的な、「発展」(自然発生性への拜跪)の結果であった。我々はこのような事態を全く知らず、むしろ逆の報告をうけていたのであるが、とりわけ七月の「統一赤軍」結成を知ってから、政治・思想と建軍武闘との弁証法的関係について何回も指摘し、警告してきた。事実が判明(完全ではないが)した今、我々の指摘の正しさをはつきり確信せざるをえないでいる。これについて、改めて述べておこう。

「あらゆる軍事行動の指導原則は、できるだけ自己の力を保存し、敵の力を消滅するという基本原則にもとづいている。この原則は、革命戦争においては基本的な政治原則と直接につながっている」(「抗日遊撃戦の戦略問題」)

(1) 政治路線と武闘路線は不可分の関係にある。敵味方のはつきりしていない武闘路線などありえない。

(2) 我々の軍隊は、我々の政治路線に奉仕するための軍隊である。敵が明らかでなかつたら、敵の消滅などやれるはずがない。

「人民の軍隊がなければ、人民の全てはない。」

「軍隊があれば権力がある」(「戦争と戦略の問題」)

「われわれの原則は党が鉄砲を指揮することであって、鉄砲が党

を指揮するのをけっしてゆるさない。

(3) 軍は我々の生命であり、党とともに我々のもっとも大切な組織である。軍に対する、我々の政治路線の絶対的指導権を失なうことは、権力を放棄することである。

「軍隊の基礎は兵士であって、進歩的な政治精神を軍隊にそそぎこまなければ、それをそそぎこむための進歩的な政治工作がなければ、将校と兵士とのあいだの真の一致を達成できず、将兵の抗戦の熱情を最大限に燃え立たせることはできず、すべての技術や戦術もそれにふさわしい効力を發揮する最良の基礎はえられなくなる」(「持久戦について」)

(4) 反米愛国路線こそ武装闘争の原動力である。反米愛国路線を軍隊にそそぎこまなければ、武闘に全てをささげるような熱情は生まれぬ。真の規律も生まれぬ。

「軍隊の政治工作の三大原則は、第一が将兵一致であり、第二が軍民一致であり、第三が敵軍瓦解である。これらの原則を効果的に実行するには、兵士の尊重、人民の尊重、すでに武器を放棄した敵軍の捕虜の人格の尊重という根本的な態度から出発しなければならぬ」(同)

「われわれは、抗日戦争の政治目的では、将兵ともに一致している。この点にすべての抗日軍隊の政治工作の基礎がある」(同)「けっして二度と敵に一手をとられてはならず、反対に、この政治動員の一手を大いに發揮して敵に勝ちを制する必要がある。この一手は関係するところがきわめて大きい。武器その他が敵におとっ

ているのは二のつぎで、この一手がなによりもいちばん重要である

(同)

「政治的動員とはなにか。それは、第一に、戦争の政治目的を軍隊と人民におしえることである。兵士と人民の一人ひとりに、なぜ戦わなければならないか、戦争はかれらとどんな関係があるかをせひわからせることである。」(同)

(5) 将兵一致の原則の基礎は正しい政治路線である。軍隊で一定の民主制度を實行し、将兵が苦楽をともにすることによって、このうえもなく戦闘力は増大する。

(6) 軍民一致の原則の基礎は正しい政治路線である。「戦争の偉力のもっとも深い根源は民衆のなか」にあり、軍民一致が保証されなくては地下軍が孤立する。

(7) 敵軍瓦解の原則の基礎は正しい政治路線である。すなわち、反米愛国路線は建軍武装闘争の第一の保証であり、これで強力に統帥しなければならないということである。

反米愛国統一戦線について

米日反動派の侵略戦争を革命戦争でうち破り、米日反動派を打倒して人民民主主義独裁を樹立する偉大な政治目的を達成するために、武装闘争と共に統一戦線はきわめて重要な武器である。統一戦線という武器は、何百万千万人の人民大衆、同盟軍を組織し、結集し、武装化してその偉大な力を思い切って發揮させ、主要な敵を孤立させ、主要な敵にむかって前進し、攻撃し、殲滅するものである。このような統一戦線がなければ革命の勝利はない。とりわけ、日本革命においてはすでに述べてきたように、武装闘争の發展は統一戦線にかかっている。したがって、なおさら重視しなければならぬのである。

日本人民の戦線は長い間、分裂し、離合集散をくり返し、内ゲバを発生させてきた。あの「肅清」はその最たるものであった。このような戦線の不統一と内ゲバがどれくらい敵を喜ばせ、革命的な人民を犠牲にし、心ある人々を離れさせ、革命闘争を遅らせてきたことだろう。我々は、総括と自己批判の中心の一つとして、統一戦線をかちとれなかったことをあげている。政治・思想の重視は、とりも

なおさず統一戦線の結成と發展の形であられるのであり、真剣にとりくまなければならない。

反米愛国統一戦線の基本問題

現在、とくに統一戦線結成が重視されなければならないのは、第一に、米日反動派の侵略戦争準備、ファッショ治安体制構築が急速に行なわれていること、第二に、日本人民の闘いが武装闘争の段階に到達していること、という情勢の中におかれているからである。この二つの基本的事実が、統一戦線戦術の出発点である。何百万千万の人民大衆を組織し、武装闘争を中心として全ゆる反政府闘争を發展させることこそ、唯一、侵略戦争をうち破り、米日反動派を打倒できるものである。すなわち、武装闘争を大衆的に闘い、發展させる以外、侵略戦争をうち破ることはできず、武装闘争を發展させるには、広範な人民を組織し、武装化すること、つまり統一戦線に結集させる以外ないのである。このことからわかるように、統一戦線戦術は政治路線（反米愛国路線）、武装闘争と不可分なものである。

さて、それでは反米愛国統一戦線戦術の基本問題はどのようになるであろうか。

(1) 「同志諸君、統一戦線の道理と閉鎖主義の道理とは、いったいどちらが正しいのか。マルクス・レーニン主義は、いったいどちらに賛成するのか。統一戦線に賛成し、閉鎖主義に反対すると、わたしはきっぱり答える。統一戦線の戦術だけが、マルクス・レー

ニン主義の戦術である」(「日本帝国主义に反対する戦術について」)

「どんな過程にも、もし多くの矛盾が存在しているとすれば、そのなかの一つはかならず主要なものであって、指導的な、決定的な作用をおこし、その他は副次的、従属的な地位におかれる。したがって、どんな過程を研究するにも、それが二つ以上の矛盾の存在する複雑な過程であるならば、全力をあげてその主要な矛盾を見い出さなければならぬ。この主要な矛盾をつかめば、すべての問題はたやすく解決できる」(「矛盾論」)

反米愛国路線によれば、日本革命の主要な敵は米帝国主義、日本軍国主義であり、そのうち最も主要な敵は米帝国主義である。すなわち、現段階における主要矛盾は、米帝国主義および親米売国勢力(軍国主義者)と日本人民との間の矛盾である。したがって、マルクス・レーニン主義者は「矛盾を利用し、少数に反対し、多数を獲得し、各個に撃破する」ため、米帝国主義に焦点を合わせ、それに追隨する親米独占資本、軍国主義軍閥etc.を売国奴として孤立させ、プロレタリア階級の指導の下、プロレタリア階級、農民階級、小ブルジョア階級を基本勢力とし、その他、米帝に反対する可能性のあるすべての階級、階層を結集させる戦術を駆使しなければならぬ。この統一戦線は、米帝と親米売国分子に反対するのであるから、反米愛国統一戦線に他ならない。

(2) 「われわれは国際革命運動が激烈なこんにち、この機会をのがすことなく祖国光復のために、民族を救出するために、党派(革

命団体)、宗教、階級(無産、有産)、地方別、性別、年令をとわず、無条件に大同団結し、連合し、一致共同してたちあがり、わが民族の敵である日本帝国主义を朝鮮から駆逐し、朝鮮の独立、民族の自由獲得に努力するであろう。富めるものは金を出し、食糧のある人は食糧をだし、技能と力のある人は力と技能をだして二千万三千万全民族がうって一丸となり、行動をもって反日祖国光復戦線に参加するならば、祖国の独立、解放は必ずや成就されるであろう。」(「祖国光復会創立宣言」)

米帝と売国分子に反対する全ての階級、階層を結集すること、これは別の見方をすれば、反米、反軍国主義、反「安保」、反独占、反戦、反侵略、反ファッショ(独立、平和、民主、中立、繁栄)の全ての闘争(中心は建軍武装闘争)を結集することであり、これを闘い、これに協力する全ゆる党派、団体、個人を結集することである。すなわち、共同の利益のもと(共同綱領と規約のもと)、男女、年令、地方別、宗教、党派、団体、階級をとわず無条件に大同団結させ、力のあるものは力をだし、金のあるものは金をだし、武器のあるものは武器をだし、知識と技能のあるものは知識と技能をだすという具合に全人民の力を最大限に發揮させることである。

(3) 「階級闘争の利益は、抗日戦争の利益に従うべきであって、抗日戦争の利益にそむいてはならない。だが、階級と階級闘争の存在は事実である。一部の人は、この事実を否定し、階級闘争の存在を否定するが、これはあやまりである。階級闘争の存在を否定しようとする理論は完全にあやまった理論である。われわれは、そ

れを否定するのではなく、それを調整するのである。われわれの提唱する互助互譲の政策は、政党的關係に適用されるばかりでなく、階級關係にも適用される」(「民族戦争における中国共産党の地位」)

「民族ブルジョア階級が帝国主義反対の統一戦線に参加するならば、労働者階級と民族ブルジョア階級は共通の利益關係をもつことになる。ブルジョア民主主義革命の時代において、人民共和国は、非帝国主義的、非封建主義的な私有財産は廃止せず、民族ブルジョア階級の工業は没収しないばかりか、これらの工業の発展を奨励する。民主主義革命の段階では、労働者の闘争には限度がある。人民共和国の労働法は労働者の利益を保護するが、民族資本家の金もうけにも反対しない」(「日本帝国主義に反対する戦術について」)

「これらの人びとを人民共和国の政府に参加させるのは、危険ではないのか。危険ではない。われわれの綱領の重要な部分は、労働資本家の利益を保護するものでなければならぬ。人民共和国政府のなかで労働基本大衆の代表が大多数をしめること、共産党がこの政府のなかで指導と活動をおこなうことによって、かれらはいってきても危険でないように保障される」(同)

現段階の日本革命においては、米日反動派を打倒することに全力を尽くすのであり、この利益に従わなければならない。プロレタリア階級と中小零細ブルジョア階級の矛盾、貧農と富農の矛盾 etc. が日本人民と米日反動派の矛盾が占める地位によってかわることは

ないし、主観的によってかわらせようとするのは「左」翼日和見主義である。人民民主主義革命の勝利後、プロレタリア階級とブルジョア階級の矛盾が主要なものとなる。したがって、これらの副次的矛盾は調整しなければならぬ。このような調整、妥協は労働者の闘いをおしとどめるものではなく、まったく逆に米日反動派への闘いにますます決起させることになる。なぜなら、修正主義者、社民

が労働者におしつける「妥協」は、米日反動派に屈し、その「ゲモノ」の下で労働者を屈服させ、階級矛盾をおい隠し、経済闘争さえ聞かせないで選挙のため利用するものである。我々の主張する妥協は、プロレタリア階級の「ゲモノ」の下で労働者を大胆に決起させ、大いに経済闘争を闘わせ、階級矛盾の存在を明らかにし、中小零細資本家を妥協(統一戦線への参加を条件)に追い込み、労働者の力と地位を認めさせ、そして、もっとも主要な敵に対する闘い(武闘が中心)に全力を集中させるものである。プロレタリア階級の正しい指導、労働大衆が圧倒的多数を占めること、人民軍が中心となすこと、により、中小資本家の参加は危険なものとはならない。

(4) 「帝国主義に反対するいくつかの階級が連合して共同で独裁する新民主主義的国家である。こんにちの中国では、このような新民主主義的国家形態が、抗日統一戦線の形態である。それは、抗日するためのもの、帝国主義に反対するためのものであり、またいくつかの革命的階級が連合したもの、統一戦線のものである」(「新民主主義論」)

「われわれが主張するのは、日本侵略者を徹底的にうちやぶったわたすすべての地区を奪回するために戦うことができ、そして最後の勝利をたたかいたることができるからである」(「持久戦について」)

「われわれの主張する新民主主義の政治とは、外部からの民族的抑圧をくつがえし、国内の封建主義的、ファッショ的抑圧をとりのぞくことであり、また、これらのものをくつがえし、とりのぞいたのちに、旧民主主義の政治制度を樹立するのではなくて、すべての民主的階級の連合する、統一戦線の政治制度を樹立することである」(同)

反米愛国統一戦線は人民民主主義独裁へ発展するものである。逆に、人民民主主義独裁の現段階における形態が、反米愛国統一戦線である。よく、統一戦線と革命的独裁(プロレタリア独裁)を切り離して考える人がいるが、そういう人は統一戦線について何一つ知っておらず、せまい一党派の利益でしか考えていない人である。「抗日戦争の根本政策は抗日民族統一戦線」(「青年運動の方向」)であり、我々の根本政策は反米愛国統一戦線である。また、各党派各団体、各個人、各階級、各階層の革命的代表者によって構成される中央機関は、人民政府へと発展するものである。

(5) 「すべての活動において、抗日民族統一戦線の全般的方針を堅持すべきである。なぜなら、この方針によってのみ、抗戦を堅持し、持久戦を堅持することができ、将兵關係、軍民關係を広く深く改善することができ、全軍隊、全人民のすべての積極性をふるいたたせ、まだうしなわれていないすべての地区を防衛し、すでにうしな

すでに何回も述べてきたように、武装闘争と統一戦線は切っても切り離せない關係にある。武装闘争を主要な闘争形態とし、これを中心におくことなくして広範な反米愛国統一戦線をかちとることはできないし、逆に、広範な反米愛国統一戦線なくして、これに依拠せずして、武装闘争の堅持と発展、大衆化は絶対ありえない。統一戦線は、少数精鋭の遊撃隊にあらゆる便宜を与え、自由自在に建軍遊撃戦を闘えるよう保証すると共に、あらゆる反政府闘争(武闘も含む)を大胆に闘い、建軍遊撃戦に呼応しなければならぬ。そして、その中において、人民軍への参加者を育成し、人民軍以外の各種の武装部隊を建設し、武装闘争を一步一步大衆化し、全人民の武装をめざさなければならない。

(6) 「國際的援助は現代のあらゆる国、あらゆる民族の革命闘争にとって必要である。すべて、正義の戦争はたがいなたすけあうものであり、不正義の戦争は正義の戦争に転化させなければならぬものである。これがレーニン主義の路線である」(「日本帝国主義に反対する戦術について」)

「日本侵略者にうち勝つには、主として自己の力によるべきであるが、外国からの援助も欠くことができない。孤立政策は敵を有利にするものである」(「日本の進取とたたかう方針、方法および前途」)

「どのような条件のもとで、中国は日本帝国主義の武力にうち勝ち、これを消滅することができるのでしょうか。三つの条件が必要です。第一は中国抗日統一戦線の達成、第二は国際抗日統一戦線の達成、第三は日本国内の人民と日本の植民地の人民の革命運動のありがります。」（「スノウとの談話」）

日本人民の反米愛国統一戦線は、世界人民の反米反ソ統一戦線、アジア人民の反米抗日統一戦線の一部、それも重要な一部をしめるものである。日本人民は自力更生で闘うと共に、アジアの社会主義国、被抑圧民族と固く連帯し、援助し合わねばならない。

反米愛国統一戦線の原則について

「われわれが国民党およびその他のいかなる政党とむすぶ統一戦線も、一定の綱領を実行することを基礎とした統一戦線である。この基礎をはなれてはどんな統一戦線もありえず、そういう協力は無原則的な行動となるのであって、投降主義のあらわれである」（上海、大原陥落後の抗日戦争の情勢と任務）

我々は、無原則的な「統一戦線」を許してしまつた貴重な経験をもっている。これがどのように大きな害をなすか、身にしみて感じている。一言でいうなら、参加する階級、階層、党派、団体、個人の利益と発展を損なう統一戦線に断固として反対しなければならぬ。

我々と赤軍派の団結の気運は全く必然的なものであった。これは両者共「二が分れて二となる」発展をし、我々は「宣伝の武闘」路

線を清算し、赤軍派は「蜂起」路線を清算し、「敵消滅、味方保存」の建軍遊撃戦を闘うという一致をかちとつたからであり、このことと不可分一対のこととして、日本革命の主要な敵が米帝国主義と

日本軍国主義である、という一致をかちとつたからである。このように、反米愛国統一戦線戦術を始めて実現できる時、実現しなければならぬ時、一部旧指導部は原則を放棄し、団結の気運の自然発生の前に拝跪してしまつた。すなわち、両者共、政治路線を無視し、大衆闘争を切り捨て、日本人民を結集することを放棄し、水ぶくれ軍団のみの「合同」をしてしまつたのである。これが、七一年七月の「統一赤軍」結成であり、これが行きつくところまで行つたのが、一二月の完全な合同、「新党」、「肅清」、敗北である。ここでは、七月よりも大巾な後退を見せ、「銃の武闘」、「共産主義」のみで「一致」させてしまつたのであった。

世の中の事物は全て、同じところに留まることはありえず、発展するか後退するかである。我々と赤軍派にとつても、大きく飛躍できるか、共だおれになるか、二つの道しかなかったたのであり、結果は共だおれ（勿論、一時的なものである）になつてしまつた。では、一体どこが間違つていて、どうすればよかつたのだろうか。

①、「抗日には充実した統一戦線が必要で、そのためには、全国人民を立ちあがらせて、統一戦線に参加させなければならない。抗日には強固な統一戦線が必要で、そのためには共同綱領が必要である。共同綱領は、この統一戦線の行動方針であり、また、この統一戦線にとつての一種の制約でもあって、それは一本のつなでしる

ように、各党、各派、各界、各軍など、統一戦線に参加したすべての団体と個人をかたく制約する。それでこそ強固な団結といえるのである。」（「国共合作後のさしせまつた任務」）

すなわち、共同綱領（及び規約）のない統一戦線は疑いもなく、無原則的なものである。共同綱領は、各党派の政治路線を調整してかちとるものであり、つまりは最小限綱領そのものである。したがって、これを無視することは政治路線を無視することであり、マルクス・レーニン主義の革命理論を無視することであり、各党派の独立自主を無視することであり、当面の革命の具体的内容について一切無視することである。事実そうなつた。両者はまず、何よりも共同綱領と規約をかちとるべきだつたのである。しかし、彼らは再三の批判も無視した。

②、「抗日民族統一戦線は、国民党と共産党という二つの政党にかざられるものであろうか。そうではなく、それは全人民の統一戦線であつて、二つの党はこの統一戦線の一部にすぎない。抗日民族統一戦線は、各党、各派、各界、各軍の統一戦線であり、労働者、農民、兵士、知識層、商工業者などすべての愛国的同胞の統一戦線である」（同）

「抗日民族統一戦線は、けつしていくつかの政党の本部や党員たちだけの統一戦線ではなく、全軍隊、全人民の統一戦線である。全軍隊、全人民を統一戦線に参加させることこそ、抗日民族統一戦線結成の根本目的である」（「持久戦について」）

ところが旧指導部は、我々と赤軍派のみに、そのうえ、水ぶくれ

軍団のみに限つてしまつた。全革命派、全人民を参加させるという「根本目的」を無視し、自らの影響下の大衆闘争も切り捨て、旧指導部と水ぶくれ軍団のみの「統一戦線」を作つてしまつたのである。

現在の日本の条件下では、武闘派を中心とする党派、団体、個人、階級、階層の統一戦線という形態とならざるをえないのであり、軍および軍事組織の共同（連合軍）は、この中の一環——中心的一環——となるのである。すなわち、連合軍は中心であるけれども、統一戦線の一部にすぎないのである。現在は、武装闘争を中心にするべき闘争（サークル活動も含む）を結集することによつて、米日反動派を追いつめ、一億人民を決起させねばならない。

この①と②は結局のところ、政治・思想の無視、革命理論の無視という同じ根から出たものである。第二章で述べたが、統一戦線の中（労半プロカ、労半農十〇か）によつて革命の性質は決定されるのであり、当然これは共同綱領にあらわれる。そして、革命の性質をめぐる論争は、我々と「日帝自立」派の論争の中心となつていくことは明らかであり、これの決着も、統一戦線の実践による以外にない。したがつて、あらゆる革命派を結集するという問題（どの階級、階層が革命の原動力になるか）と、いかなる共同綱領になるかという問題は、極めて重大な問題として、反米愛国路線に直接かかってくる問題としてあるのである。だから、この無視はイコール反米愛国路線の無視となり、党の解消になつていったのは当然なのである。

〔注〕 日本帝国主義支配下の朝鮮においては、ブルジョア階級

の党さえ許されず、党派はほとんど存在していなかった。したがって、「祖国光復会」は各党派を中心とする統一戦線とはならず、人民革命軍を中心とする中央集権的な単一の大衆組織の形態をとった。

現在、武闘派を中心として全人民を結集する条件は存在しており、当面の重要な課題となっており、この統一戦線をかちとることが、敗北と誤りの克服の重要な内容である。我々は無原則的な「統一」を反面教師として、何よりも正しい共同綱領をかちとり、その下に、軍事組織の共闘を中心に、あらゆる段階の、あらゆる反政府闘争を結集しなければならない。

共同綱領と規約について

我々は赤軍派と共同綱領をかちとることによって武闘派をひきつけ、さらに全革命派、全人民を結集させるべきである。今のところ、我々と最も近い赤軍派とも、政治路線上でかなりの違いがある。米帝国主義のとりえ方、中小零細ブルジョア階級のとりえ方、当面の革命の性格については、一部の赤軍派の同志を除いてまだ一致をかちとれていない。しかし、革命の敵、味方、目的について基本的な点での一致がある以上、統一戦線の共同綱領をかちとることができ。不一致の点は、共同対敵の闘争の中で検証していけばよい。

○敵について、——米帝国主義、日本軍国主義の二つを敵とする。

すなわち打倒の対象を、米日独占資本（国家資本も含む）、米軍、「自衛隊」、警察、高級官僚およびその手先とし、これ以外は打倒

の対象とはしない。

○味方について——全人民を味方とする。人民とは、米帝国主義、日本軍国主義に反対するもの、彼らに加担しないもの全てのことであり、指導階級はプロレタリア階級、基本勢力はプロレタリア階級、農民階級、小ブルジョア階級であり、その他のものについては、闘争の中で検証していく。

○目的について——米帝国主義、日本軍国主義を打倒し、侵略戦争を阻止（「安保」体制の打破）し、真の人民政府を樹立する。統一戦線がこの政府の母体。

○革命軍隊の建設を掲げる。こうすれば、代々木およびその垂流とはおのずから区別がつく。

このような調整を十分考慮のうえで、我々は次の十項目を統一戦線の共同綱領として提起する。

(一)、日本人民を総動員し、広範な統一戦線を実現することによって米帝国主義と日本軍国主義の支配を転覆させ、真の日本政府を樹立する。

(二)、アジア人民と親密に連帯し、「安保」体制を打破してアジア侵略戦争を阻止する。

(三)、米軍、「自衛隊」、警察およびその手先の武装を解除し、日本の解放のために闘う真の革命軍隊を組織する。（当面は各武装部隊の共闘）

(四)、米帝国主義、日本軍国主義およびその手先が所有するすべての銀行、企業、航空、鉄道、船舶、土地、建物など全財産を没

収し、革命闘争と人民のための費用とする。

(五)、米帝国主義、日本軍国主義およびその手先の、人民に対する債権、税金、専売制度を廃止し、人民の生活を改善し、人民の工業、農業、商業を發展させる。

(六)、ファッショ治安体制に反対し、軍国主義イデオロギーに反対し、言論、出版、集会、結社などの民主的権利を完全に闘いと、一切の政治犯を釈放する。

(七)、男女、民族、宗教、部落などの差別を徹廃し、婦人の社会的待遇を高め、女性の人格を尊重する。

(八)、軍国主義教育に反対し、真の民主的教育を実施する。

(九)、労働者、農民、小ブルジョアの経済的要求を実現する。「公害」の徹廃。

(十)、一切の軍事条約、不平等条約を破棄し、日本人民の革命闘争に対して支持を表明する国家、民族、人民と親密に連帯し、善意と中立を表明する国家、民族、人民と親善を維持する。

この共同綱領は、豊富な実践の中でより明確にしていかなければならない。とりわけ、(九)の人民の経済的要求の具体的内容を明らかにしていくことは、当面の革命の性質を明らかにすることと直接つながっているのである。

共同綱領と切り離せないものとして規約がある。我々はこの二つを定めることによって、一部旧指導部のような勝手なことをする連中を許さないようにしなければならない。中でも、現在の日本の条件下では、広範な諸階級、諸階層の統一戦線を実現するために、各

党派の共闘がかなめとなるが故、革命派が未だ政治路線の一致をかちとっておらず早急な党の合流が不可能であるが故、そして一部旧指導部がこの点で誤ったが故、統一戦線における各党派の独立自主の問題、相互援助の問題は最も大切である。

「長期にわたる協力によって長期の戦争をささえること、すなわち階級闘争をこんにちの抗日の民族闘争に従わせること、これが統一戦線の根本原則である。この原則のもとで政党と階級の独立性をたもち、統一戦線における独立自主をたもつこと、協力と統一のために政党と階級の必要な権利を犠牲にするのではなくて、反対に、政党と階級の一定限度の権利をかたくまもること、こうしてはじめて協力にとって有利となり、協力というものもなりたつのである」

(一)「統一戦線における独立自主の問題」

「統一戦線に参加する政党は、それが国民党であろうと、共産党であろうと、その他の政党であろうと、いずれの政党も、思想上、政治上、組織上での独立性をたもたなければならない」(「民族戦争における中国共産党の位置」)

「長期の協力のために、統一戦線内の各政党が相互援助、相互護歩を实行することは必要であるが、それは消極的でなく、積極的でなければならない。われわれはわが党、わが軍を強化し拡大しなければならぬし、同時に友党、友軍の強化と拡大にも賛助しなければならない」(「統一戦線における独立自主の問題」)

「おたがいに足場のくずしあいせず、おたがいに相手の党、政府、軍隊内に秘密細胞をつくらぬことである」(同)

★ようやくここに『人民独裁に向けて』——日本共産党(革命左派)基本文献集』を讀者の手許に届けることができる。予定よりかなり遅れてしまったことを獄中の川島豪、渡辺正則同志、そして革命左派の諸同志、さらに全ての革命戦争派の諸同志に対し謝罪する。

★われわれが、こうした文献集を『序章』臨時増刊号という形で発行することに對してはさまざまな物言いがつくであろう。しかし、この間、一貫して行なってきた「連赤事件」以後の革命戦争派再生に向けての総括作業のための材料としてこうした文献集は不可欠のものである、とわれわれは考えるのである。

★ようやく「連赤」公判が開始されたが、その過程で被告同志たちは多くの有益な総括を提起するであろう。われわれは、そうした総括を踏まえ、さらに再生へと向かう展望を提起する作業を続行するだろう。次号(第十号)に

おいては、現実運動の中で個別に運動展開を行なっている戦線と革命戦争派との間隙と接点とを明確にすることに、戦線の再編・確立の方向模索にとりかかりたいと考えている。(雅)

★ 小社出版物講読について

★小社出版物は、取次店(柳原書店)經由による委託店と左記特定書店(京阪神・東京地区は省略)とで取り扱っていたのであります。

日進堂(釧路)アテネ書房駅前店・富貴堂・北大生協・紀伊国屋(札幌)久保庄書店(盛岡)アイエ書店・八重洲書房(仙台)星火書房(宇都宮)ルビコン書房・栄松堂・関東学院大生協・慶大生協(横浜)ノア書房(静岡)星野書房(甲府)新潟大生協・富山大生協・金沢大生協・ふじ書房(金沢)福井大生協、名古屋ウニタ・ちくさ正文館・大学館書房(名古屋)岡山大共済会、広島丸善・広大生協・平和書房(広島)九大生協・西南学院生協・金修

堂(福岡)金栄堂(北九州)長大生協熊大生協、晃星堂・書肆幻邑堂(大分)★書店でお求めにくい方は当社あて直接お申込み下さい。郵送料当社負担。年間(四号分)予約は一八〇〇円。振替(京都二六二六〇)を利用下さい。

序章 臨時増刊 人民独裁に向けて

昭和四十七年十一月二十日発行 定価四五十円

編集 日本共産党(革命左派) 神奈川県常任編集委員会

発行者 大塚雅也 発行所 序章社

京都市左京区聖護院蓮華藏町27青木ビル 電話 〇七五(七六一)〇八一九 振替 京都 一六二二六〇

印刷 イカロス工房

チ リ サン うた 智異山 パルチザンの詩 (全四卷)

ホ・ウオンテック (許元沢) 著 各巻八五〇円

第二部 都市ゲリラ 一月刊

第三部 農村・山岳ゲリラ 三月刊

第四部 朝鮮戦争前夜 五月刊

似而非物語 (えせものがたり)

池田浩士評論集

既刊 B6判 二八二頁 七八〇円

既刊第一部 解放そして暗転

日帝敗北後、米帝と傀儡政権の本質を見抜いた人民は、共産主義者の指導により、闘いの環を広げて行く、町で、村で、そして留置場の中で。共産主義者は如何に組織し、如何に闘い、そしてその「死」はどのようなものか。熾烈なゲリラ戦を闘い抜く戦士の形成を解放直後の朝鮮の動乱を舞台に描く序曲。

六九年、京大闘争の渦中、故高橋和巳や滝田修氏らとともに過渡期の困難を自ら背負った著者が大学と知識人を、自己と他者を、闘争と表現を、革命と反革命を、憤激と諷刺と諧謔を込めて喝破する異色処女評論集。

三六年前にわたる日帝の苛酷な支配から解放された朝鮮人民は、新たな支配者、アメリカ帝国主義と傀儡政権に抗して立ち上がった。朝鮮戦争前夜までの数年間、要衝智異山(チリサン)を中心として南朝鮮各地にパルチザンによる闘いが展開され、不屈の朝鮮人民の歴史に反逆のページが書き加えられた。南北朝鮮統一の民族的偉業を前に、秘匿された朝鮮現代史を著者自身のゲリラ戦参加の体験と困難な中で集められた豊富な資料をもとに描く激動する歴史と戦闘の長篇革命的ロマン。

掲載内容

発刊にあたって（神奈川県常任委員会）

声明文 銃撃戦と「粛清」問題についての

総括と自己批判・闘争宣言

（神奈川県常任委員会）

我々の基本路線について（川島豪）

軍の統一問題について（川島豪）

手記（坂口弘）

武装闘争清算路線に断固反対する（渡辺正則）

反米愛国路線こそ勝利への保証である

（川島豪）

無原則的「新党」建設を批判する（神奈川県

県常任委員会）

真の革命路線をかちとるために（川島豪）

革命的行動綱領をかちとるために（渡辺正則）